御所市文化財調査報告書　第30集

奈良県御所市

巨勢山古墳群 Ⅵ

平成19年（2007年）1月

御所市教育委員会

例　言

1．本書は、土砂採取事業に伴う事前調査として、御所興産株式会社の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市室1114－２ほかに所在する巨勢山456～466号墳の古墳と、同地の下層遺跡に当たる巨勢山境谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．現地調査は、Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区の３地区に区分して実施した。各地区の調査担当者及び調査期間は以下の通りである。なお、現地調査および整理作業を通じて藤田和尊（御所市教育委員会）の協力があった。

	調査担当者		調査期間
Ａ地区	御所市教育委員会嘱託（当時）	阪本晋道	平成13年６月５日～平成13年11月１日
Ｂ地区	同	同	平成13年７月25日～平成13年11月１日
Ｃ地区	御所市教育委員会技術職員	木許　守	平成14年１月７日～平成14年７月９日

3．調査補助員として以下の諸氏が参加した。
岡田圭司・東野茂樹・青木美香・歌房芙未子・濱　慎一・廣瀬一郎・刀谷公子・石丸敦史・井上美奈子・藤井浩子

4．本書の作成にかかる整理作業には、濱・青木・歌房・刀谷のほか、藤村藤子・尾上昌子・楳原静代・中久美子・森香奈子・米田祐貴子・梅崎由梨が参加した。

5．本書の執筆は、木許・青木・東野が行ない、担当箇所は目次に明記した。本文末尾の遺物観察表の作成も対応する本文執筆担当者が行った。ただし、出土埴輪観察表の胎土の項目に限っては木許が記入した。また、本書の編集は木許が担当した。

6．遺物の製図については、埴輪に関しては青木が担当し、その他を藤村が行った。遺構および墳丘測量図などその他の製図は、木許がアドビ社イラストレーターを用いて、デジタルトレースした。

7．写真撮影は、遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は木許が行った。

8．出土遺物のうち、土器・埴輪については観察表を本文末に付した。遺物番号は、本文・挿図・図版・観察表のそれを統一した。

9．引用・参考文献は、第１章の遺跡分布図のうち、本文中で触れ、番号を付した遺跡に関わる文献を同章末尾に掲げ、その他本書を通じては、第７章「まとめ」の末尾に一括して掲げた。補註に関しては、文献註とは区別して各項末尾に記し、文責を明確にした。

10．本書では特に断らない限り、須恵器の編年は田辺昭三氏の、円筒埴輪の編年と内・外面の調整技法の分類は川西宏幸氏の、円筒埴輪のその他各項目の分類は上田睦氏の、弥生土器の編年は藤田三郎氏らの、それぞれ下に掲げる研究成果によった。

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』（『研究論集』第10号　平安学園考古学クラブ）
川西宏幸　1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号
上田　睦　1997　「出土埴輪から見た古市古墳群の構成」『堅田直先生古稀記念論文集』
　　2002　「巨勢山419号墳の埴輪の特徴とその位置づけ」『巨勢山古墳群』Ⅲ　御所市教育委員会
藤田三郎・松本洋明　1989　「大和地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
藤田三郎・豆谷和之　2003　「奈良県における土器編年」『奈良県の弥生土器集成』（『橿原考古学研究所研究成果』第６冊）

11．本書で用いた「北」は「座標北」である。

12．現地調査および本書刊行にかかる費用は、御所興産株式会社がすべて負担した。関係各位にご理解・ご協力をいただいたことを記し、深謝します。

本文　目次

例言
第１章　位置と環境 ……（木許）…… 1
第２章　調査の契機と経過 ……（木許）…… 6
第３章　Ａ地区の調査
　第１節　巨勢山４５６号墳 ……（木許）…… 8
　　１．位置と墳丘 …… 8
　　２．出土遺物 …… 12
　第２節　巨勢山４５７号墳 ……（木許）…… 13
　　１．位置と墳丘 …… 13
　第３節　巨勢山４５８号墳 …… 13
　　１．既往の調査 ……（木許）…… 13
　　２．位置と墳丘 ……（木許）…… 16
　　３．出土遺物（埴輪）……（青木）…… 20
　第４節　巨勢山４６１号墳 …… 23
　　１．位置と墳丘 ……（木許）…… 23
　　２．遺物出土状態 ……（青木）…… 25
　　３．出土遺物（埴輪）……（青木）…… 27
　第５節　巨勢山４６２号墳 …… 32
　　１．位置と墳丘 ……（木許）…… 32
　　２．出土遺物（埴輪）……（青木）…… 34
　第６節　古墳時代以外の遺構と遺物 ……（木許）…… 38
第４章　Ｂ地区の調査
　第１節　巨勢山４５９号墳 ……（東野）…… 40
　　１．位置と墳丘 …… 40
　　２．出体部１ …… 43
　　３．主体部２ …… 43
　　４．出土遺物 …… 46
　第２節　巨勢山４６０号墳 …… 47
　　１．位置と墳丘 ……（東野）…… 47
　　２．出土遺物（埴輪）……（青木）…… 48
　第３節　古墳時代以外の遺構と遺物 ……（木許）…… 60
　　１．遺構 …… 60
　　２．出土遺物 …… 68
第５章　Ｃ地区の調査
　第１節　巨勢山４６３号墳 ……（木許）…… 70
　　１．位置と墳丘・墓道 …… 70
　　２．墳丘周辺の出土遺物 …… 75
　　①遺物出土状態 …… 75

②出土遺物…… 77
3．主体部１ …… 80
①形状…… 80
②遺物出土状態…… 80
③出土遺物…… 85
4．主体部２ …… 88
①形状…… 88
第２節　巨勢山４６４号墳 …… 90
1．位置と墳丘 ……（東野）…… 90
2．墳丘周辺の出土遺物 ……（青木）…… 91
3．主体部１ ……（東野）…… 93
①形状…… 93
②遺物出土状態…… 95
③出土遺物…… 96
4．主体部２ ……（東野）…… 98
①形状…… 98
②出土遺物…… 98
第３節　巨勢山４６５号墳 ……（木許）…… 98
1．位置と墳丘・墓道 …… 98
2．主体部１ ……104
3．出土遺物 ……105
4．土壙墓１ ……106
①形状……106
②遺物出土状態……108
③出土遺物……108
第４節　巨勢山４６６号墳 ……（木許）……108
1．位置と墳丘 ……108
2．墳丘周辺の出土遺物 ……111
第５節　古墳時代以外の遺構と遺物 ……（木許）……112
1．遺構 ……112
2．遺物 ……118
第６章　巨勢山境谷遺跡 ……（木許）……126
第１節　位置と既往の調査 ……126
第２節　遺構 ……128
1．溝１ ……128
2．土坑１ ……129
3．土器棺墓１ ……130
第３節　出土遺物 ……132
第７章　まとめ ……（木許）……139
参考文献……144

挿図目次

図 1　巨勢山古墳群と周辺の遺跡（S.＝1/50,000）…… 3～4
図 2　調査地位置図（S.＝1/7,000）…… 7
図 3　巨勢山456号墳・457号墳　地形測量図（S.＝1/400）…… 9
図 4　巨勢山456号墳　墳丘南北断面土層図（S.＝1/100）…… 11
図 5　巨勢山456号墳　墳丘流土出土遺物（S.＝1/3）…… 12
図 6　巨勢山458号墳　墳丘測量図（S.＝1/200）…… 14
図 7　巨勢山458号墳（境谷10号墳）　小形横穴式石室（S.＝1/50）…… 15
図 8　巨勢山458号墳　墳丘断面図（S.＝1/100）…… 17～18
図 9　巨勢山458号墳　出土埴輪（S.＝1/4）…… 21
図10　巨勢山461号墳　墳丘測量図・墳丘断面図（S.＝1/200）…… 24
図11　巨勢山461号墳　埴輪出土状態（S.＝1/40）…… 26
図12　巨勢山461号墳　出土埴輪 1（S.＝1/4）…… 28
図13　巨勢山461号墳　出土埴輪 2（S.＝1/4）…… 30
図14　巨勢山462号墳　トレンチ配置図（S.＝1/200）・墳丘断面図（S.＝1/120）…… 33
図15　巨勢山462号墳　出土埴輪 1（S.＝1/4）…… 35
図16　巨勢山462号墳　出土埴輪 2（S.＝1/4）…… 37
図17　A地区　古墳時代以外の遺物 …… 39
図18　巨勢山459号墳　墳丘測量図（S.＝1/200）…… 41
図19　巨勢山459号墳　墳丘断面図（S.＝1/120）…… 42
図20　巨勢山459号墳　主体部 1　平面・断面図（S.＝1/25）…… 44
図21　巨勢山459号墳　主体部 2　平面・断面図（S.＝1/25）…… 45
図22　巨勢山459号墳　出土遺物（S.＝1/3）…… 47
図23　巨勢山460号墳　墳丘測量図（S.＝1/200）…… 48
図24　巨勢山460号墳　墳丘断面図（S.＝1/120）…… 49
図25　巨勢山460号墳　出土埴輪 1（S.＝1/4）…… 51
図26　巨勢山460号墳　出土埴輪 2（S.＝1/4）…… 52
図27　巨勢山460号墳　出土埴輪 3（S.＝1/4）…… 53
図28　巨勢山460号墳　出土埴輪 4（S.＝1/4）…… 57
図29　巨勢山460号墳　出土埴輪 5（S.＝1/4）…… 59
図30　B地区　古墳時代以外の遺構の名称と配置 …… 61
図31　B地区　古墳時代以外の遺構 1（S.＝1/40）…… 62
図32　B地区　古墳時代以外の遺構 2（S.＝1/40）…… 64
図33　B地区　古墳時代以外の遺構 3（S.＝1/40）…… 65
図34　B地区　古墳時代以外の遺構 4（S.＝1/40）…… 66
図35　B地区　古墳時代以外の遺構 5（S.＝1/40）…… 67

図36　B地区　古墳時代以外の遺物（S.＝1/4）…… 69
図37　巨勢山463号墳　墳丘測量図（S.＝1/200）…… 71
図38　巨勢山463号墳　墳丘断面図（S.＝1/100）…… 73
図39　巨勢山463号墳　焼土坑　平面・断面図（S.＝1/40）…… 74
図40　巨勢山463号墳墳頂部　土器出土状態（S.＝1/15）…… 76
図41　巨勢山463号墳墳頂部　出土遺物（S.＝1/4）…… 78
図42　巨勢山463号墳　墳丘周辺　出土遺物（S.＝1/3）…… 79
図43　巨勢山463号墳　主体部1　平面・立面図（S.＝1/30）…… 81
図44　巨勢山463号墳　主体部１　断面図（S.＝1/50）…… 82
図45　巨勢山463号墳　主体部1棺外　遺物出土状態（S.＝1/15）…… 83
図46　巨勢山463号墳　主体部１　出土遺物１（S.＝1/3）…… 86
図47　巨勢山463号墳　主体部１　出土遺物２（S.＝1/3）…… 87
図48　巨勢山463号墳　主体部2　平面・断面図（S.＝1/30）…… 89
図49　巨勢山464号墳　墳丘測量図（S.＝1/200）…… 91
図50　巨勢山464号墳　墳丘断面図（S.＝1/100）…… 92
図51　巨勢山464号墳　墳丘周辺　出土遺物 …… 93
図52　巨勢山464号墳　主体部１　平面・断面図（S.＝1/30）…… 94
図53　巨勢山464号墳　主体部１　出土遺物（S.＝1/3）…… 97
図54　巨勢山464号墳　主体部2　出土遺物（S.＝1/3）…… 98
図55　巨勢山464号墳　主体部2　平面・断面図（S.＝1/30）…… 99
図56　巨勢山465号墳　墳丘測量図（S.＝1/200）……100
図57　巨勢山465号墳　墳丘断面図（S.＝1/100）……101
図58　巨勢山465号墳　東裾部　溝状遺構断面図（S.＝1/40）……103
図59　巨勢山465号墳　主体部　平面・断面図（S.＝1/40）……105
図60　巨勢山465号墳　盗掘坑ほか　出土遺物（S.＝1/3）……106
図61　巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓　平面・立面・断面図（S.＝1/20）……107
図62　巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓　出土遺物（S.＝1/3）……108
図63　巨勢山466号墳　墳丘測量図（S.＝1/200）……109
図64　巨勢山466号墳　墳丘断面図（S.＝1/100）……110
図65　巨勢山466号墳　南周溝　出土遺物（S.＝1/3）……111
図66　C地区　古墳時代以外の遺構の名称と配置 ……113
図67　C地区　土坑１　平面・断面図（S.＝1/15）……114
図68　C地区　土坑２　平面・断面図（S.＝1/20）……115
図69　C地区　土坑３　平面・断面図（S.＝1/20）……116
図70　C地区　土坑４・土坑５　平面・断面図（S.＝1/20）……117
図71　C地区土坑1出土土師器皿の法量分布……118
図72　土師器皿の分類 ……119

図73　C地区　土坑１　出土遺物１（S.＝1/3）……121
図74　C地区　土坑１　出土遺物２（S.＝1/3）……122
図75　C地区　土坑１　出土遺物３（S.＝1/3）……123
図76　C地区　古墳時代以外の遺物　……125
図77　巨勢山境谷遺跡　遺構の配置１（巨勢山458号墳付近）（S.＝1/200）　……127
図78　巨勢山境谷遺跡　土坑１　平面・断面図（S.＝1/80）　……129
図79　巨勢山境谷遺跡　遺構の配置２（巨勢山465号墳付近）（S.＝1/200）　……130
図80　巨勢山境谷遺跡　土器棺　平面・断面図（S.＝1/20）……131
図81　巨勢山境谷遺跡　溝１　出土土器１（S.＝1/4）……133
図82　巨勢山境谷遺跡　溝１　出土土器２（S.＝1/4）……135
図83　巨勢山境谷遺跡　出土土器棺（S.＝1/4）　……137
図84　巨勢山境谷遺跡出土　土製品・石器　……138

別添図　調査区地形測量図（S.＝1/400）

表目次

表１　B地区　古墳時代以外の遺構　計測表　……62
表２　出土埴輪観察表　……145
表３　出土須恵器・土師器観察表　……155
表４　C地区　土坑１　出土土師器皿　観察表　……166
表５　巨勢山境谷遺跡　弥生土器　観察表　……170

図版目次

図版１　A・B地区　全景　東上空から
　　A・B地区　全景　真上から
図版２　巨勢山456号墳　南周溝　東から
　　巨勢山458号墳　南周溝　東から
図版３　巨勢山461号墳（手前）と462号墳
　　巨勢山461号墳　埴輪出土状態　東から
図版４　巨勢山461号墳　埴輪出土状態２　据付け穴埋土除去後
　　巨勢山462号墳　墳丘南東部の立上がり
図版５　B地区　全景　南上空から
　　B地区　全景　西から
図版６　巨勢山459号墳　主体部１（手前）と主体部２
　　巨勢山459号墳　主体部１　北から
図版７　巨勢山459号墳　主体部２　北から
　　巨勢山460号墳　西周溝　南西部遺物出土状態

図版８　Ｂ地区　溝１　南から
Ｂ地区　石組み遺構１　東から
図版９　Ｂ地区　石組み遺構３（手前）と石組み遺構２　東から
Ｂ地区　土坑３
図版10　Ｂ地区　土坑４・土坑７・ピット７
Ｂ地区　土坑４　北東部　銭出土状態
図版11　Ｃ地区　全景　北上空から
Ｃ地区　全景　南から
図版12　巨勢山463号墳　墳頂部　遺物出土状態
巨勢山463号墳　主体部１　北から
図版13　巨勢山463号墳　墓壙検出状況　北から
巨勢山463号墳　墓壙検出状況　南から
図版14　巨勢山463号墳　主体部１　遺物出土状態１
巨勢山463号墳　主体部１　遺物出土状態２
図版15　巨勢山463号墳　主体部２　北から
巨勢山463号墳　南周溝　西から
図版16　巨勢山463号墳　南周溝部　焼土坑
巨勢山463号墳　西裾部　墓道
図版17　巨勢山464号墳　主体部１　東から
巨勢山464号墳　主体部１　遺物出土状態
図版18　巨勢山464号墳　主体部２　南から
巨勢山464号墳　南周溝　東から
図版19　巨勢山465号墳　主体部　北から
巨勢山465号墳　東裾部　墓道
図版20　巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓１　南西から
巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓１　遺物出土状態
図版21　巨勢山466号墳　南周溝　東から
Ｃ地区　土坑１
図版22　Ｃ地区　土坑２
Ｃ地区　土坑３
図版23　Ｃ地区　土坑４
Ｃ地区　土坑５
図版24　巨勢山境谷遺跡　土坑１
巨勢山境谷遺跡　土器棺
図版25　巨勢山456号墳　墳丘流出土出土遺物（S.≒1/3）
巨勢山458号墳　出土埴輪（S.≒1/4）
図版26　巨勢山461号墳　出土埴輪（S.≒1/4）

図版27　巨勢山462号墳　出土埴輪（S.≒1/4）
　　A地区　古墳時代以外の遺物１（S.≒1/3）
図版28　A地区　古墳時代以外の遺物２
　　巨勢山459号墳　出土遺物（S.≒1/3）
図版29　巨勢山460号墳　出土埴輪１（S.≒1/4）
図版30　巨勢山460号墳　出土埴輪２（S.≒1/4）
図版31　巨勢山460号墳　出土埴輪３（S.≒1/4）
　　B地区　土坑４東側　出土遺物（S.≒1/2）
　　B地区　土坑７　出土遺物（S.≒1/2）
　　B地区　土坑７　出土遺物（S.≒1/4）
　　B地区　石組み遺構１　出土遺物（S.≒1/4）
図版32　巨勢山463号墳　墳頂部　出土遺物
　　巨勢山463号墳　墳丘周辺　出土遺物（S.≒1/3）
図版33　巨勢山463号墳　主体部１　出土遺物１（S.≒1/3）
図版34　巨勢山463号墳　主体部１　出土遺物２（S.≒1/3）
　　巨勢山464号墳　墳丘周辺出土遺物（S.≒1/3）
　　巨勢山464号墳　主体部１　出土遺物１（S.≒1/3）
図版35　巨勢山464号墳　主体部１　出土遺物２（S.≒1/3）
　　巨勢山464号墳　主体部２　出土遺物（S.≒1/3）
　　巨勢山464号墳　盗掘坑ほか　出土遺物１（S.≒1/3）
図版36　巨勢山464号墳　盗掘坑ほか　出土遺物２（S.≒1/3）
　　巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓　出土遺物（S.≒1/3）
　　巨勢山466号墳　南周溝　出土遺物（S.≒1/3）
　　C地区　土坑１　出土遺物１（S.≒1/3）
図版37　C地区　土坑１　出土遺物２（S.≒1/3）
図版38　C地区　土坑１　出土遺物３（S.≒1/3）
図版39　C地区　土坑１　出土遺物４（S.≒1/3）
　　C地区　土坑３　出土遺物（S.≒1/3）
　　C地区　土坑４　出土遺物（S.≒1/3）
　　C地区　土坑５　出土遺物（S.≒1/3）
　　巨勢山465号墳　南斜面流土　出土遺物（S.≒1/3）
図版40　巨勢山境谷遺跡　出土遺物１（S.≒1/3）
図版41　巨勢山境谷遺跡　出土遺物２（S.≒1/3）
図版42　巨勢山境谷遺跡　出土遺物３（S.≒1/3）
図版43　巨勢山境谷遺跡　出土遺物４（S.≒1/3）

本　文

第1章　位置と環境

御所市は、奈良盆地の南西部端に位置する。大きく分ければ、市域の北半は低平な盆地部を形成し、南半は丘陵地となっている。西側の市境は、葛城山から金剛山に連なる山地となって、大阪府域と接している。南は、風の森峠を介して、西流して紀淡海峡に注ぐ吉野川に貫かれる五條市域と接している。

このような地理的な環境から、御所市域は、古代から、大和から河内や紀伊に至るルート上の一つとして重要な位置を占めてきた。現在は市域のほぼ中央を東西に国道309号線が、南北に国道24号線が整備され、それぞれ大阪方面、五條・吉野・和歌山方面への交通の便に供している。現在のこれらの国道の位置が、厳密に古代の道そのものに重なるのではないが、これらに平行したルートが古い時期の街道として利用されていたことは間違いない。

その意味で、この国道309号線と国道24号線の交差点付近は、古代以来現在もなお交通の要衝にあたるが、今回報告する巨勢山古墳群は、まさにこの交差点の南東に広がる巨勢山丘陵上に占地する群集墳である。

さて、御所市域を中心とする歴史的環境については、これまでも御所市文化財調査報告書においても繰り返し記述されてきた。ここでは、巨勢山古墳群を巡る古墳の分布状況を整理しておきたい。以下、古墳名称末尾に付した番号は、図1「巨勢山古墳群と周辺の遺跡」の番号に一致する。

御所市域における前期の古墳としては、西浦古墳（2）やオサカケ古墳（3）が知られており、最近では巨勢山419号墳（4）が調査された。また、近辺地域においては旧新庄町域の寺口和田13号墳（5）も前期古墳として知られていた。しかしこれらの古墳には、特に早い時期に調査されたものがあり、また総じて墳丘規模もあまり大きいものでは無かったことから、南葛城は前期古墳の希薄な地域であると概括されてきた。

そのような状況のなかで、平成12年（2000年）に鴨都波1号墳（6）の発掘調査が行われた。鴨都波1号墳は、その上層の堆積土が整地されて水田として利用されていため、古墳の痕跡が地表面に現れず、その存在自体がまったく知られていなかった。当該地が弥生時代の拠点的大集落として著名な鴨都波遺跡の範囲内にあたるため、開発行為に伴う発掘調査を実施したところ、はじめてその存在が明らかになった。

鴨都波1号墳の墳丘は、長辺20m、短辺16m程の小規模な方墳であったが、粘土槨を主体部とする埋葬施設から豊富な副葬品が出土した。木棺内では三角縁神獣鏡1・漆塗り杖状木製品1・緑色凝灰岩製紡錘車形石製品1・鉄剣1・玉類があり、木棺外では、三角縁神獣鏡3・方形板革綴短甲1・碧玉製大形紡錘車形石製品1のほか、漆塗り靫・鉄鏃・鉄槍・鉄刀・鉄剣・鉄斧・鉇などが出土した。鴨都波1号墳の築造時期については、このような副葬品や墳で出土した土器から総合的に考え、前期中葉とみている。

この鴨都波1号墳を含む鴨都波遺跡第15次調査を契機にして、この近辺に弥生時代以来連綿として継続する墓域の存在を想定できるようになった（木許2001）。古墳時代に関しては、鴨都波1号墳に先行するとみられる山本山古墳や、後続するとみられる西浦古墳を位置づけることができるようになり、さらに、検出された包含層出土の遺物から、その後も後期に至るまでこの近辺に古墳群が営まれたと想定している。

さて、このような前期の状況に対して、中期前葉に、視覚的には墳丘規模において隔絶する室宮山古墳（7）が築造される。室宮山古墳は、巨勢山丘陵の北辺に位置し、この丘陵から延びてきた尾根の端部を切断して墳丘を形成するものである。墳丘規模238 mの威容を誇る。

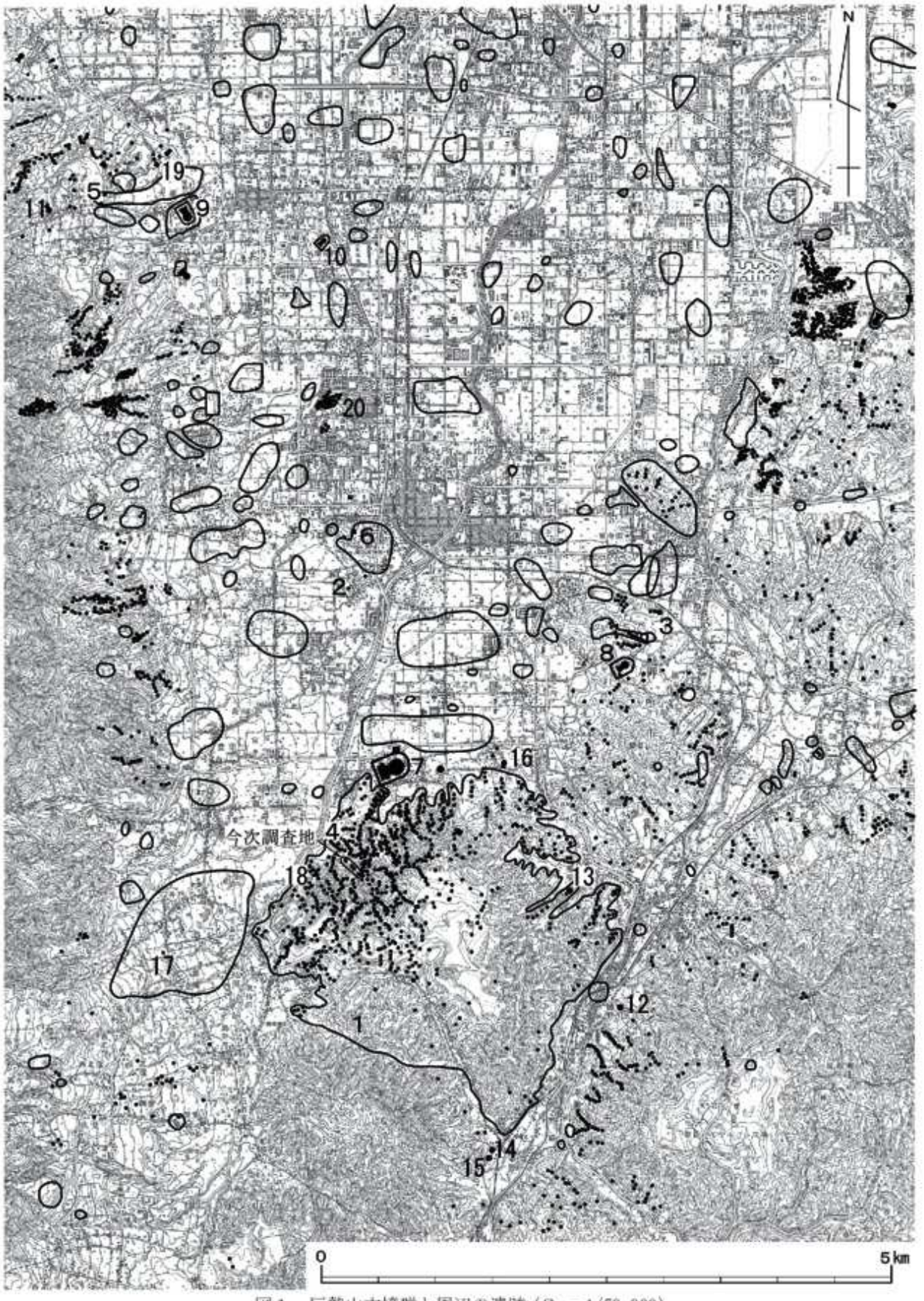
大形前方後円墳は、その後やや規模を縮小させながらも、掖上鑵子塚古墳（8）が築造され、旧新庄町域には、屋敷山古墳（9）、北花内大塚（飯豊陵）古墳（10）、二塚古墳（11）が中期から後期に引き続いて系譜的に築造されている。

御所市域では、このような流れとは別に、樋野権現堂古墳（12）、新宮山古墳（13）、水泥北古墳（14）、水泥南古墳（15）が、巨石を用いた横穴式石室墳として、巨勢谷に築造される。また、地形的にはこの谷には含まれないが、巨大な石室の存在が再確認された條ウル神古墳（16）は、やはり巨勢谷の勢力と関連する可能性が高く、注目される。

このような大形横穴式石室墳の系譜とは、さらにまた一線を画した状況で、終末期古墳も散見される。金剛山東麓のハカナベ古墳（17）や、巨勢山古墳群に含まれる巨勢山323号墳（18）を挙げることができる。また、葛城山や二上山の東麓地域には、旧新庄町域の神明神社古墳（19）、旧當麻町域の兵家古墳、鳥谷口古墳などがある。これらの古墳の周辺には、先行する群集墳などが存在する場合も多いが、これらの主体部が切石造りの横穴式石室もしくは横口式石槨で特に精巧な造りになっている場合が多く、一般的な群集墳から継続・発展して築造されたとも考えにくい。これらの古墳は集団墓の1基との位置づけではなく、先行する古墳群と切り離して、個々の古墳が個別の事情でその所在地を選地したと考えられることが多い。

一方、中期後半から後期を中心とする首長墳の上のような動向の元に、この地域においても群集墳が盛んに造営される。本書で報告する古墳が含まれる巨勢山古墳群（1）は、総数700基に及ぶ大形群集墳である。室宮山古墳の南背後の丘陵に造営される地理的な位置から、巨勢山古墳群の造営が開始する背景にはこの大形前方後円墳との間に有機的な関連が想定されている（白石1973）。

群集墳はこのほか、独立丘陵上に占地する石光山古墳群（20）のほか、葛城山・金剛山の東麓に、御所市域から旧新庄・當麻町域の一部に至るまで、多くの群集墳が築造されている。それらは、当然ながら、古墳群によって造営開始の時期や古墳築造のピークになる時期が異なっており、埋葬施設のあり方も一様ではない。この地域に所在する、群集墳の分析は、その造営集団に直結する問題を含んでおり、今後に向けて重要な課題となっている。



1．巨勢山古墳群
2．西浦古墳
3．オサカケ古墳
4．巨勢山 419 号墳
5．寺口和田 13 号墳
6．鴨都波 1 号墳
7．室宮山古墳
8．掖上鑵子塚古墳
9．新庄屋敷山古墳
10．北花内大塚（飯豊陵）古墳
11．二塚古墳
12．樋野権現堂古墳
13．新宮山古墳
14．水泥北古墳
15．水泥南古墳
16．條ウル神古墳
17．ハカナベ古墳
18．巨勢山 323 号墳
19．神明神社古墳
20．石光山古墳群

図１　巨勢山古墳群と周辺の遺跡（S．＝1/50,000）

図1　文献註

1．網干善教「小殿古墳」(『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編)』第3集、1960年)
網干善教「御所市小殿第2号墳」(『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編)』第4集、1961年)
久野邦雄『大和巨勢山古墳群（境谷支群）－昭和48年度発掘調査概報－』、1974年、奈良県教育委員会
千賀　久・田中一広「巨勢山古墳群(ミノヤマ支群)発掘調査概要Ⅰ」(『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)　1982年度』、1983年)
田中一広「奈良県御所市巨勢山古墳群調査概要Ⅱ」(『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1983年度』、1984　年)
田中一広「巨勢山古墳群（タケノクチ支群）発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1983年度』、1984年)
藤田和尊『奈良県御所市室　巨勢山境谷10号墳発掘調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第4集、1985年)
藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅱ』(『御所市文化財調査報告書』第6集、1987年)
藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅲ』(『御所市文化財調査報告書』第25集、2002年)
木許　守・藤田和尊『巨勢山古墳群Ⅳ』(『御所市文化財調査報告書』第26集、2002年)
木許　守『御所山古墳群Ⅴ』(『御所市文化財調査報告書』第27集、2005年)
2．梅原末治「大和御所町付近の遺跡」(『歴史地理』第39巻第4号、1922年)
3．島本　一「琴柱形石製品の新例」(『考古学雑誌』第28巻第6号、1938年)
4．藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅲ』(『御所市文化財調査報告書』第25集、2002年)
5．島本　一「金鋳山古墳に就いて－埴輪に関する資料－」(『大和志』第4巻第5号、1937年)
伊藤勇輔「寺口和田古墳群第2次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報（第1分冊）1980年度』、1982年)
6．御所市教育委員会『鴨都波1号墳調査概報』、2001年、学生社
7．梅原末治「大和御所町付近の遺跡」(『歴史地理』第39巻第4号、1922年)
秋山日出雄・網干善教『室大墓』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1959年)
泉森　皎・河上邦彦「室大墓古墳前方部裾出部の調査」(『書陵』No 18、1971年)
関川尚功「御所市室大墓古墳外堤」(『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1988年度』、1989年)
木許　守・藤田和尊『室宮山古墳範囲確認調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第20集、1996年)
藤田和尊・木許　守『台風7号被害による室宮山古墳出土遺物』(『御所市文化財調査報告書』第24集、1999　年)
8．網干善教「鑵子塚古墳」(『御所市史』、1965年)
楠本哲夫「御所市鑵子塚　前方部墳濠発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1978年)
南葛城地域の古墳文化研究会『奈良県御所市掖上鑵子塚古墳測量調査報告』、1986年
木許　守『掖上鑵子塚古墳第2次発掘調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第14集、1992年)
9．菅谷文則・久保哲正・大山真充『新庄屋敷山古墳』、1975年
10．河上邦彦「新庄町飯豊陵外堤の調査」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』(『奈良県文化財調査報告書』第30集、　1978年)
土生田純之「埴口丘陵外堤の調査」(『書陵部紀要』第32号、1980年)
11．上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森浩一『大和二塚古墳』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第21冊、　1962年)
12．佐藤小吉「権現堂古墳」(『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第3回、1916年)
河上邦彦『後・終末期古墳の研究』、1995年、雄山閣
13．天沼俊一「稲宿の石棺及石槨」(『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第1回、1913年)
奈良県教育委員会「新宮山古墳」(『奈良県指定文化財』昭和54年度版、1979年)
14．網干善教「水泥蓮華文石棺古墳及び水泥塚穴古墳の調査」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14冊、　1961年)
河上邦彦「水泥塚穴古墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』(『奈良県文化財調査報告書』第30集、1978年)
15．網干善教「水泥蓮華文石棺古墳及び水泥塚穴古墳の調査」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14冊、　1961年)
16．御所市教育委員会『巨勢山古墳群範囲確認調査－現地説明会資料－』(2002年)
御所市教育委員会編『古代葛城とヤマト政権』(2003年、学生社)
17．坂　靖編『南郷遺跡群Ⅰ』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第69冊、1996年)
18．藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅱ』(『御所市文化財調査報告書』第6集、1987年)
19．泉森　皎ほか「新庄町　寺口千塚・新池支群　発掘調査報告－付　神明神社古墳発掘調査概要－」(『奈良　県遺跡調査概報(第1分冊)1981年度』、1983年)
20．白石太一郎・河上邦彦編『葛城・石光山古墳群』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊、1976年)

第２章　調査の契機と経過

平成13年６月４日、御所市室所在の御所興産株式会社から、御所市大字室字1114－２外９筆における土砂採取を目的とした発掘届が提出された。

当該地には、巨勢山456号墳～466号墳にいたる11基の古墳が遺跡地図に登録され、また、1980年代までの発掘調査によって弥生時代の高地性集落である境谷遺跡などが存在することも明らかになっている。ただし、古墳については、遺跡地図には、その内の６基までが過去の土砂採取工事や自然崩落によって消滅ないしは消滅に近い、または半壊したとされていた。一方、現状の踏査による限りは、それらの破壊の程度や状態を判断することはもとより、地図上にドットされた古墳が現地のどの地点に相当するのかすらも、尾根の西側半分が大きく削り取られている現地形から、見極めにくい箇所を含んでいた。このことは遺跡地図に記されている以上に遺跡の破壊が進行していることを窺わせることではあったが、踏査だけではそれらが全く消滅してしまっているとも言えない状況でもあった。

このような状況を踏まえて当市教育委員会は、奈良県教育委員会に、開発予定地全体に対する事前の発掘調査が必要との意見書を付して、この発掘届を進達した。一方で、遺跡の保護や発掘調査の方法を巡って事業者と協議を重ねた。その後、発掘届出に対しては、平成13年６月22日付けで奈良県教育委員会から工事着手前に発掘調査を行う旨を記した「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」の文書があった。

事業者との協議では、対象古墳の約半数がすでに消滅または半壊状態であるとの現状もあり、工事の性格上、遺跡の現状保存は困難であるとの結論に最終的に至った。そして、その場合には当然発掘調査が必要になるが、消滅・半壊とされるものについても、その程度を確認する必要があるので対象地全体の面的な発掘調査を実施すること、現地調査に要する費用および報告書刊行にかかる整理費用についても事業者が負担することが合意・確認された。

事業者とのこのような協議を経て、また奈良県教育委員会からの先の通知文書を受けて、当市教育委員会は、奈良県教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出した。また、事業者との間には発掘調査にかかる受託契約を締結するなど、各種手続きを行った。部内的には担当者の配置などを含む発掘調査の体制を整えた。

対象地は、図２に示したように、対象地全体をＡ地区・Ｂ地区・Ｃ地区の３地区に区分した。例言にも記したように、Ａ・Ｂ地区を阪本晋通が担当し、Ｃ地区を木許守が担当して順次調査を進めた。ただし、後述するようにＡ地区の一部に木許が調査を行った箇所がある。

Ａ地区の調査は、平成13年６月５日に着手した。Ａ地区の調査が一定程度進捗した７月25日にＢ地区の調査も開始したので、Ａ・Ｂ地区の調査は８月頃から同時並行して進行し、11月１日に終了した。

その後約２ヶ月の中断期間をおき、Ｃ地区の調査は、翌平成 14 年１月７日に着手した。ところが、この日木許が現地に赴いた所、調査が終了しているはずのＡ地区において、表土掘削もなされないまま放置されている一角があることに気が付いた。直ちにＡ地区担当者の阪本に確認したところ、何らかの事務連絡上の手違いがあったらしく、当該地が調査対象地ではないとの錯誤があったらしいことが判ってきた。また、冒頭にも記したように、調査着手前の現状踏査だけでは遺跡地図にドットされた古墳が現地のどの地点に相当するのかすらよく判らない状態であった。そのような当初の段階では、古墳築造期から大きく周辺地形が改変されていて、古墳状にも見えなかった当該地が調査の初期段階で対象地から外されたことも無理からぬことでもあった。

しかし、消滅・半壊した古墳であってもその程度を確認するために面的な発掘調査を行うとの当初の合意の趣旨からすれば、当該地を放置するわけにはいかなかった。また、Ｃ地区の調査開始時点では、当該地を除く周辺部については表土と流土が除去された段階で、改めてこの地点の現地表を子細に観察すると、元は古墳であって墳丘土が相当流出している状態であるかにも考えられた。

図２　調査地位置図　（S.＝1/7,000）

そこで当該地については、C地区に割り当てられた調査費・日程を割いて木許が担当して調査を実施した。結果、ここに円筒形の埴輪の基底部が元位置を保った状態で検出されたことや、周溝の一部が検出されたことで、元は古墳であったことが判明し、その位置からすれば、巨勢山461墳として登録されていたものであることが明らかになった。

さて、この地点を含めてC地区の調査は、平成14年7月9日に終了した。A・B・C地区に要した総計の調査日数は、実働179日であった。

また、現地調査終了後、直ちに報告書刊行に向けた整理作業を開始した。しかし、平成13年度末をもって阪本が退職したために、A・B地区の整理作業は木許が引き継いだ。本書においては、同地区に関する遺構の記述は木許が中心になって担当し、一部を当時補助員として現地調査に参加した東野が行った。現地調査を担当した者が報告書を作成することが最も望ましいのは自明のことであるが、現状では、少なくとも残された図面と写真を公に開示することが最優先であるために採った措置である。A・B地区の報告に際しては、現地調査時の意を十分に尽くし得ない点があるかもしれないが、このような趣旨であること諒解されたい。

第3章　A地区の調査

第1節　巨勢山４５６号墳

1．位置と墳丘

巨勢山456号墳は、A地区の最南端・最高所に立地している。現状では、今次調査地の西側は早い時期の土砂採取によって尾根が削り取られ崖面を露わにしている。このため旧地形が判りにくくなっているが、本来、本墳は巨勢山の主稜線から幾筋も北に延びる尾根の一つに立地している。このような尾根は、起伏を繰り返しつつ、つまり複数の鞍部を形成しつつ北に向けて徐々に標高を下げている。本墳の南側はそのような鞍部になっているので、結果的に本墳は周辺部では一際高い位置に当たっている。また、現在は西側の状態が判らないが、南から北に延びてきた尾根はこの地点で北東方向と北西方向に分れている。本墳はそのような尾根の分岐点に占地している。

さて、本墳は分布調査報告書（田中1984）には、当時の状況として「消滅　半壊」と記されている。また「盗掘穴」の存在が確認されており、本墳の主体部が木棺直葬である可能性が指摘されている。しかし現状では、そのような盗掘穴と思しきものを見ることはできなかった。また墳頂部の一部とみられる最高所においても最終的に埋葬施設は全く検出されなかった。西側崖面の崩落が、1984年以降も徐々に進行していたのであろう。このために、墳頂部の中心付近は、すでにその1/2以上を失っているものとみられる。

また一方で、本墳が立地する地点は、後述する巨勢山457号墳などとともに、尾根の東側も急斜面になっている。この急斜面は人為的なものではないが、自然の土砂流出が著しいこの斜面に、

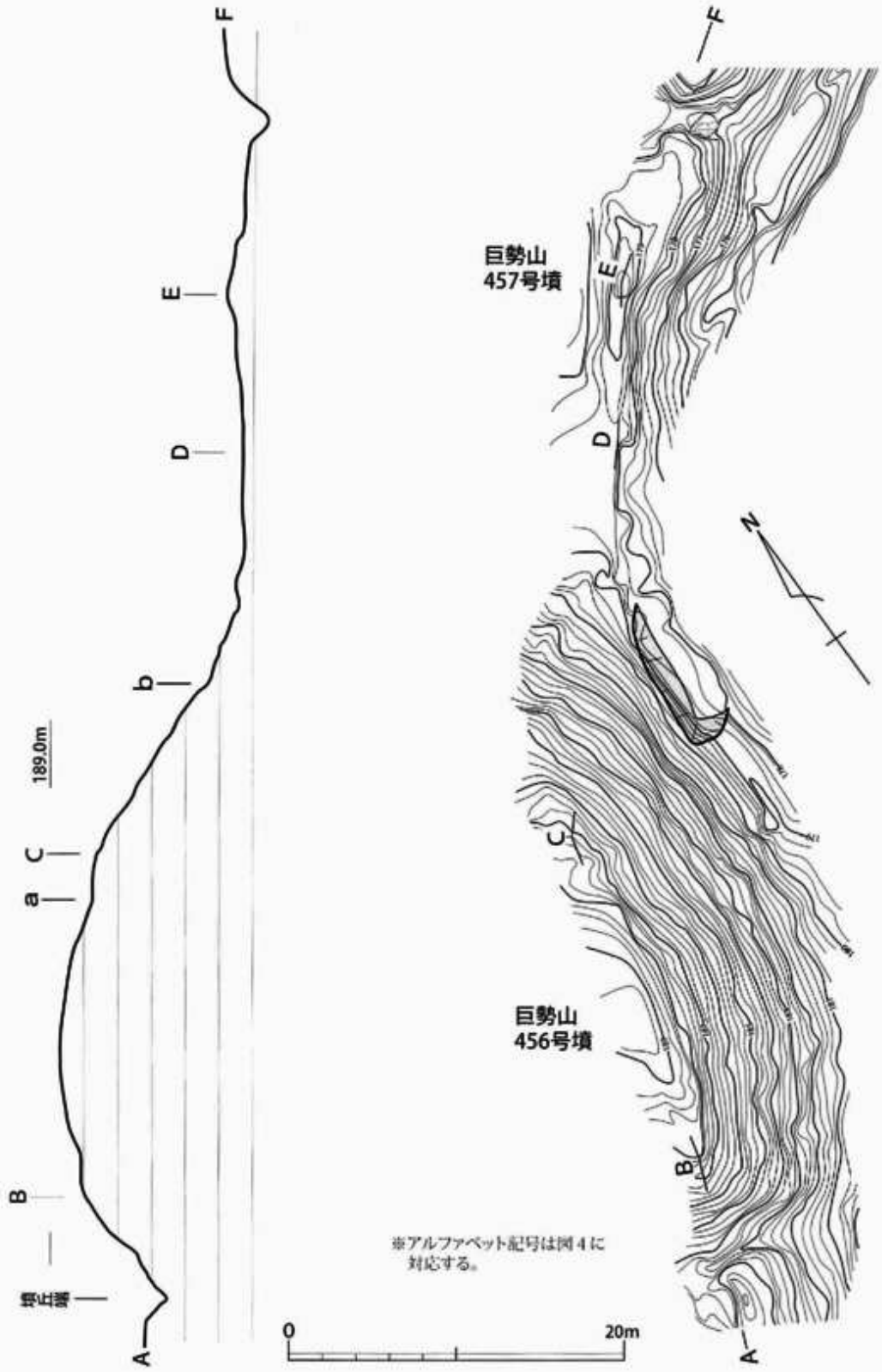


図3　巨勢山456号墳・457号墳　地形測量図　（S.＝1/400）

古墳築造当初において墳丘端などが意識されて造られたものか、疑わしい。いずれにせよ、本墳の場合には、一定程度旧状を残していた東側斜面についても、古墳築造以後にも土砂流出が相当あったとみられ、この傾斜面に墳丘端などの古墳に関わる痕跡は何ら残っていなかった。

このような状態であるので、本墳の墳丘規模等を復原するのは困難である。現状での尾根筋を観察すると、古墳の最高所には標高 189.25 mのコンターラインが巡り、ここから南に向けては標高を下げ、約６ｍ下った地点が断面がＶ字形をする溝状の地形になっている。この地点は、古墳の南端を示す周溝の一部とみられる。また、この部分に古墳の基底の形状が僅かに残っているとみられ、これが円弧を描くことから、本墳の墳形は円墳であると考えられる。

この南側の墳丘端に対応する北東側の墳丘端は、同じ高さではその痕跡を認めることができない。しかし、図３の墳丘測量図および断面図を観察すれば、断面図にａ・ｂと記した２箇所に、傾斜変換点を見ることができる。ａ地点は標高 187.75 m付近で、ｂ地点は 181.25 m付近でそれぞれコンターラインの間隔が、それより上位より広くなっている。この２地点のいずれかが元は古墳の墳丘端であった可能性も考えられる。

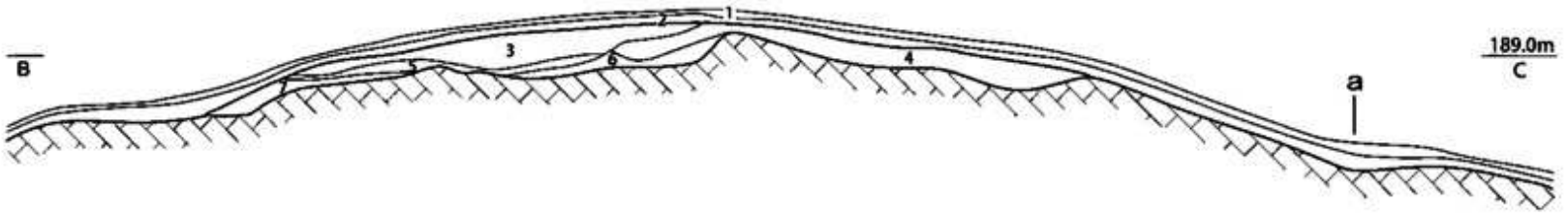
南側の溝状の遺構を古墳の南端を画する溝として、そこからａ・ｂそれぞれまでの距離を測ると、ａ地点までは 24 m、ｂ地点までは 36.8 mの数値が得られる。だたし、墳丘は、上記のようにすでにその 1/2 以上が西側の崖として崩落しているとみられるので、これらの２点間の距離は墳丘の中心を貫く直径ではない。もし、このａ・ｂのいずれかの地点が墳丘端の一部を示すとしても、古墳の直径はさらに大きくなって、ａ地点の場合には 30 m弱、ｂ地点の場合には 40 m強の墳丘規模を想定しなければならなくなる。

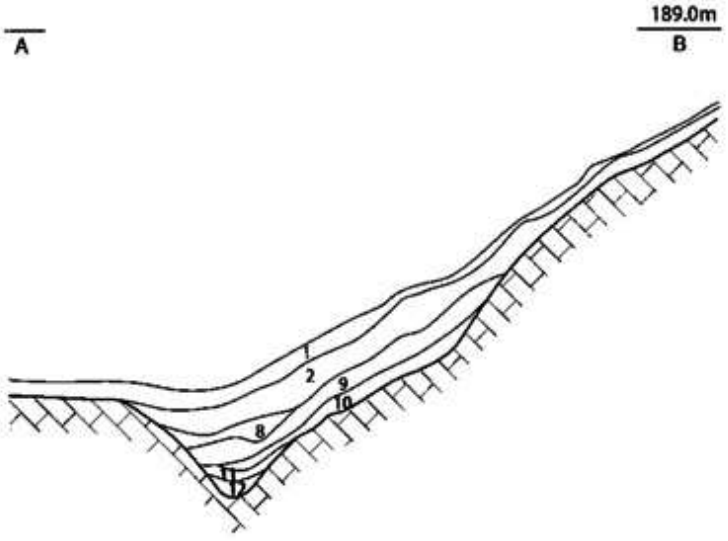
巨勢山古墳群の通例からみれば、40 m強の円墳は大きすぎ想定しにくい。ここでは、いずれにせよ根拠薄弱ながら、ａ地点を一方の墳丘端と考える。ただし、その場合でも、30 m弱の墳丘規模は巨勢山古墳群中では最大級である。このことについては、本墳が周囲より一際高い好立地を占めていることを併せ考えると、なお首肯できるとも考える。

さて、墳丘は、残存部分においても、盛土が確認された。図４－３～７層がそれで、残存した盛土の最大の厚さは 60cm 程になる。墳頂部付近にのみ盛土が行われて、墳丘の下半は地山削り出しによって成形されている。図４にも明らかなように、墳丘頂部付近は、地山の形状が一様ではなく凹凸になっているので、ここでの盛土は墳丘の形状をより精美にする役割もあったとみられる。

墳丘周囲からの出土遺物は数少ない。このうち、古墳に関わるとみられるものは、墳丘流土出土の須恵器杯蓋（５－１）・（５－２）と、南周溝の埋土出土の鉄滓１点（５－５）がある。このほか、図５に示した（５－３）・（５－４）は用途不詳の鉄環であるが、それぞれ墳丘の東斜面流土・北斜面流土中から出土した。

古墳の築造期については、このように遺構に伴う出土遺物がないために不分明である。しかし、後述するように、この須恵器杯蓋（５－１）・（５－２）が、ＭＴ 15 型式およびＴＫ 10 型式を示





1. 表土
2. 黄褐色砂礫土
3. 灰褐色礫砂土
4. 黄褐色砂質土
5. 黄褐色砂礫
6. 黄褐色砂質土
7. 褐色砂質土

（3～7：墳丘盛土）

8. 明黄褐色砂礫
9. 明橙褐色砂礫
（地山起因の砂礫土を含む）
10. 明黄褐色砂礫土
11. 明褐色砂礫土
12. 明褐色砂質土（堅く締まる）

※アルファベット記号は図3に対応する。

0　10m

図4　巨勢山456号墳　墳丘南北断面土層図　（S.＝1/100）

すことから、それぞれが、古墳築造期および追葬の時期に対応するとすれば、本墳は、おおよそ後期前半のうちに築造されたとみられよう。

2．出土遺物

図5に456号墳の墳丘周囲で検出した遺物を掲げた。いずれも墳丘流土からの出土であるが、（5－4）は墳丘の北斜面で、（5－5）は南周溝の埋土中で検出した。それら以外の（5－1～3）は墳丘東斜面の流土中出土である。このうち須恵器（5－1・2）の形態や調整・法量を始めとする詳細は観察表（155頁）に記したので参照されたい。

須恵器杯蓋は2個体を検出したが、細部の特徴はやや異なっている。（5－1）は口縁端部が面をなし、端面には強いヨコナデが及んでいて凹線状に窪んで段を形成している。天井部と口縁部の境界は外方にやや突出している。（5－2）は、やはり口縁端部にヨコナデが及んでいるが、（5－1）ほどには強くなく、内面の凹線状の窪みや段も鈍い。天井部と口縁部の境界となる稜も（5－1）に比べれば鈍く丸い。これらの特徴から、（5－1）はMT 15型式に、（5－2）はTK 10型式に相当しよう。

（5－5）は鉄滓である。最大長3.8cmを測る。現状での重量は22.6 gである。巨勢山古墳群ではこのような鉄滓がしばしば出土する（藤田編2002ほか）ので、この鉄滓についても、本来、この456号墳に伴っていたものと見なしうるであろう。

これらに対して、用途不詳の鉄製の円環（5－3・4）は、その所属時期についても不分明である。（5－3）は円環が完周して残存している。外径2.6～2.8cmを測る。断面形は方形を呈し、長辺6mm、短辺2.5mmを測る。重量は4.6 gである。（5－4）は、（5－3）と同様の鉄環であるがこれよりも一回り大きい。全体の1/4程を欠損している。現状での外径は最大3.9cmを測る。断面形はやはり方形を呈し、長辺8mm、短辺4mmを測る。現状での重量は8.9 gである。これら（5－3・4）と同様の鉄環は、今次調査地では後述するB地区の石組み遺構1の埋土中から出土している。図36に示した（36－14）である。石組み遺構1やその周辺からは、16世紀中頃のものとみられる瓦器擂鉢が出土しているので、この鉄環（36－14）も当該期のものである可能性が考えられる。456号墳では古墳墳丘の流土中からの出土であったので図5に掲げたが、この

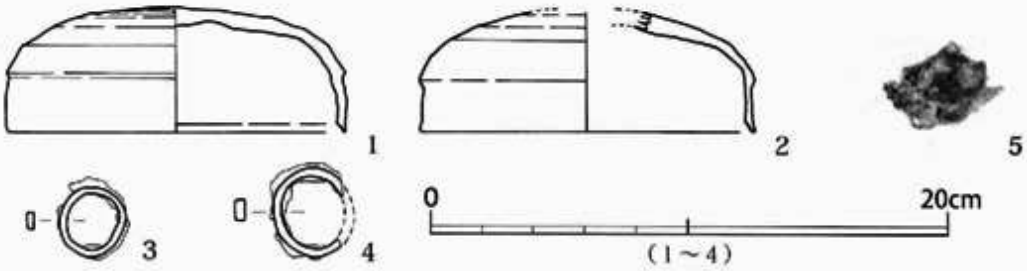


図5　巨勢山456号墳　墳丘流土出土遺物（1～4，S.=1/3）

A地区でも、図17に示したように古墳の裾部などからB地区の石組み遺構1などから出土するすり鉢と同型式のものが出土している。これらのことから（5－3・4）については、16世紀代にまで下る可能性が高い。

第2節　巨勢山457号墳

1．位置と墳丘

巨勢山457号墳は、巨勢山456号墳が所在する地点から北東方向に延びる尾根上に立地している。昭和47年度までの奈良県教育委員会による分布調査によれば径10mの円墳と記録され、古墳の形状などが観察可能な状態であったことが判る。しかし、昭和58年度の分布調査（田中1984）の時点では、すでに「消滅に近い」状態になっていた。456号墳と同様に、その後も西側崖面の崩落が進行したであろうから、現状は、古墳の残存状況がさらに悪化していると思われる。

図3に現状での地形測量図を示したが、西側の崖および東側の自然の土砂流出によって、尾根自体が非常に狭くなっているものの、E地点付近に本墳の現状での最高所を観察することができる。コンターラインでは179.50mの高さが見え、この地点から南北に向けてそれぞれ僅かながらも標高が低くなっているので、この地形がある程度は古墳の形状を反映したものと思われる。

しかし、本来の墳丘端がどのあたりであったのか全く定かではない。北接して、後述する巨勢山458号墳の南端を画するとみられる溝などの遺構があるので、457号墳の北の墳丘端はここまでは至らないであろう。また南端については、図3－D地点付近にやや幅広な平坦面があるが、周溝などの痕跡も認めることができない。しかしこの平坦面より南は再び標高が高くなるので、古墳の南端はこの地点より南にはならない。

上のような、僅かに読み取れる情報を総合して判断すれば、本墳の規模は20m弱の円墳と考えられよう。

なお、本墳の埋葬施設に関する痕跡は全く残されておらず、遺物の出土もなかった。

第3節　巨勢山458号墳

1．既往の調査

巨勢山458号墳は、「巨勢山境谷10号墳」とも呼ばれ、昭和59年度に、巨勢山古墳群保存のための基礎資料を収集する目的で発掘調査が実施された古墳である（以下、「昭和59年の調査」と称するものはこの発掘調査を指す）。本墳は、この当時すでに古墳の西側の半分以上が、既述の崖面になって崩落していた。崖の上端に半壊状態の古墳が取り残されたようになっており、つまり崖面の土砂流出の状況によってはいつ古墳が消滅するかも判らない状態で、このことが当時、本墳が発掘調査対象とされた理由でもある。

また、上のような目的の調査であったから、発掘調査は当時残存していた墳頂部を中心に、墳丘

には数箇所のトレンチが設定されたのみで、古墳の全面的な発掘には至っていないものであった。そして、調査後は検出された遺構およびトレンチも埋め戻されて、今次調査に至るまでそのままの状態で保存されてきた。

昭和59年の調査の内容は『御所市文化財調査報告書第4集』として刊行された『巨勢山境谷10号墳発掘調査報告』（藤田 1985）に詳細に記されている。この時の調査では、巨勢山458号墳に関する知見のほか、弥生時代の高地性集落である境谷遺跡に関する新知見も得られている。境谷遺跡に関することは後述（第6章）し、ここでは、巨勢山458号墳について、同書にしたがってすでに知られていることの概要をまとめておく。

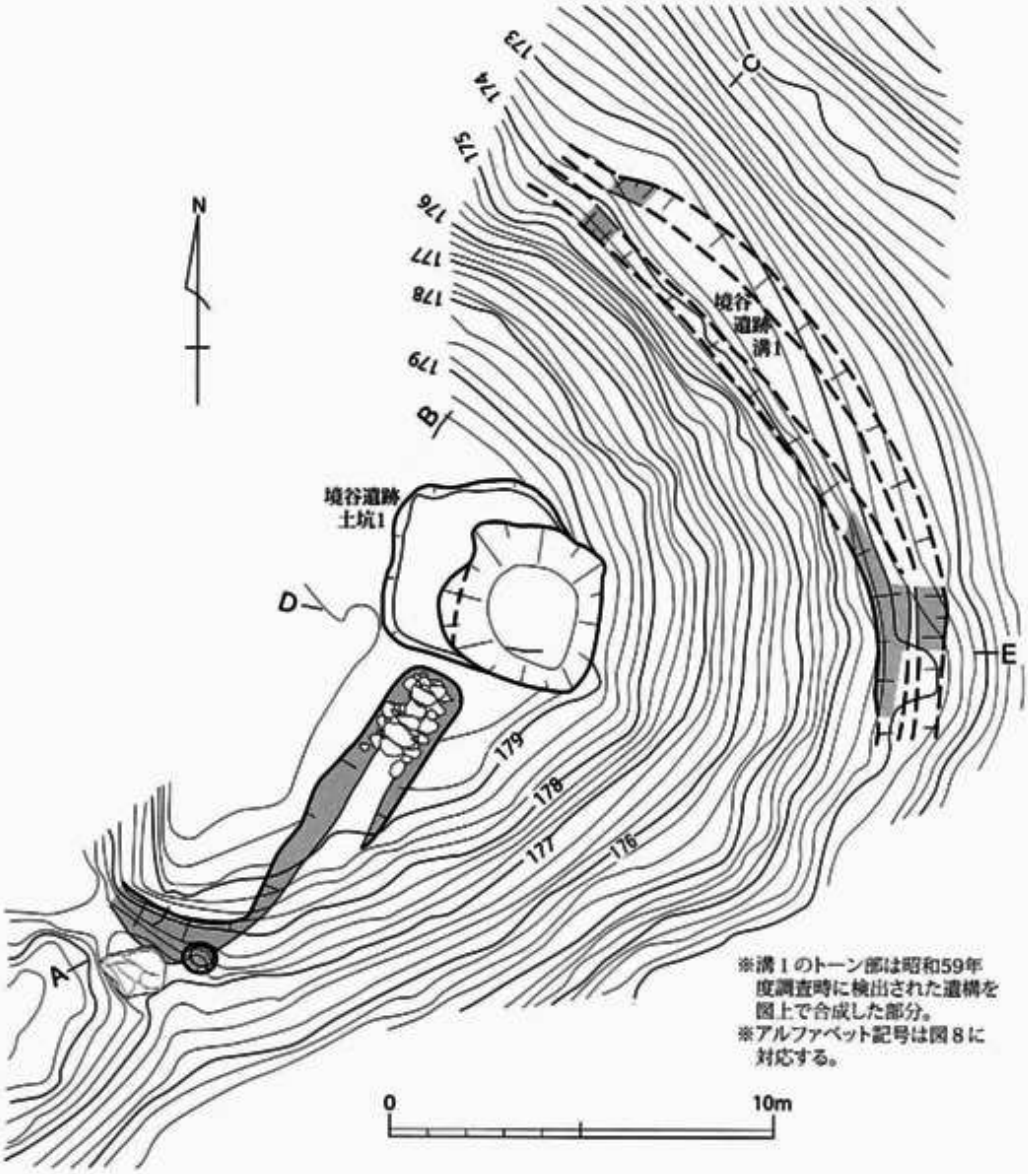


図6　巨勢山458号墳　墳丘測量図　（S.＝1/200）

墳丘は、北・東・南に設定されたトレンチによって、その規模および形状が把握された。特に墳頂部から墳丘裾部まで連続して設定された東トレンチでは、墳丘斜面の２箇所にテラス様の地形を認め、さらに墳丘裾に古墳の周溝が検出された。北トレンチにおいても下段テラスに連続するとみられる地形および周溝が検出された。これらの所見から、墳丘はテラス幅がやや狭いものの、少なくとも北・東方向からは三段築成の外観を呈していて、周溝は幅 1.5 ～ 2 m、深さ 0.3 ～ 1 mのものが古墳裾部を全周していると考えられた。そしてこのような墳丘端に関する所見から、古墳の墳丘規模については、南北 24 m、東西約 30 mのやや偏円形の円墳と推定できるとされた。

次に墳頂部においては、副次的な埋葬施設である横穴式石室のほか、西側中央部に本来存在したであろう中心主体に対する盗掘坑の一部とみられた浅い窪みが検出されている。また、「段状の地山整形の存在」が確認された。

横穴式石室（図７）は、石室内が完掘された。石室規模は、石室全長 2.2 m、奥壁幅 0.73 m、玄室中央部幅 0.86 m、開口部幅 0.7 m、奥壁高 0.5 m、玄室中央高 0.6 m、開口部 0.4 mを測る。比較的小規模な石室である。天井石は全体が完存した状態で検出された。石室の開口部から南に向

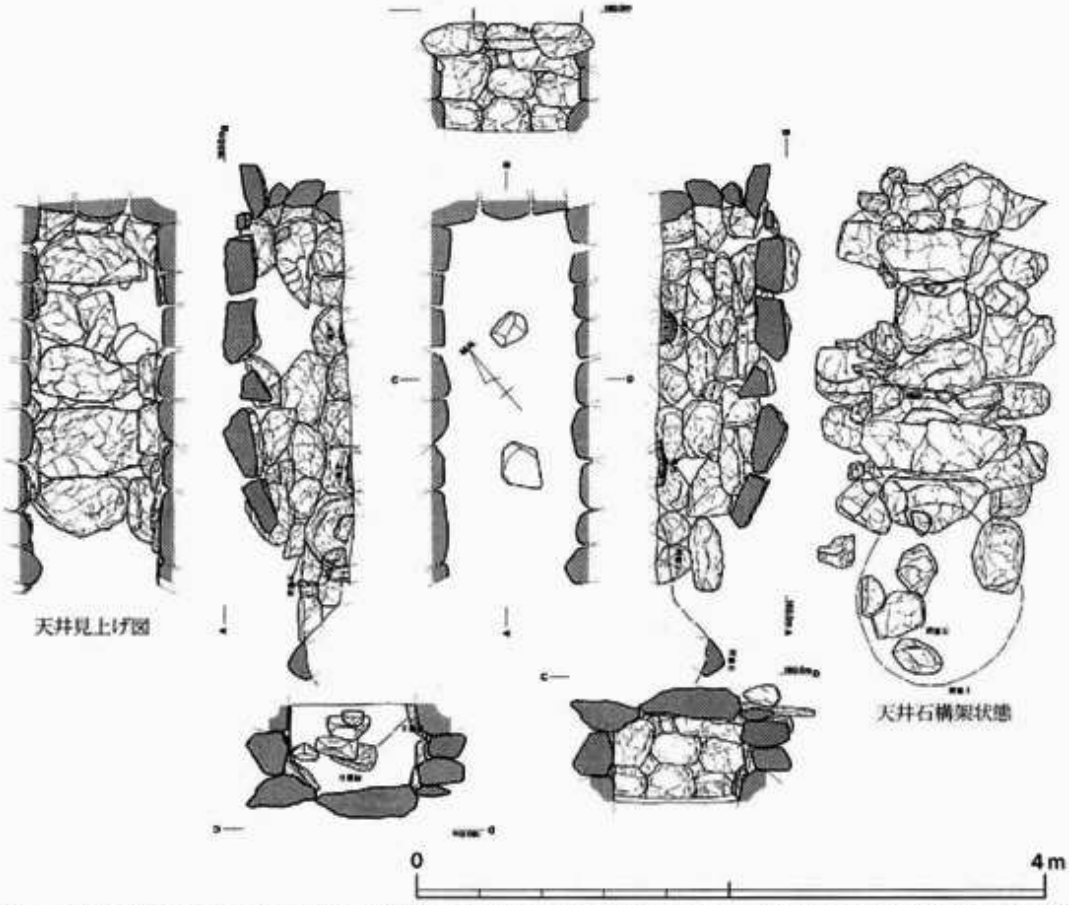


図７　巨勢山458号墳(境谷10号墳)　小形横穴式石室　（S.＝1/50）（藤田1985から引用のうえ、縮尺等改変）

けて墓道が検出され、南周溝に至っている。周溝に至る直前には小さな平坦部分とピットが検出され、1m前後の自然石が落とし込まれている状態で検出された。そして、報告書ではこの自然石については、周溝を渡る橋の様なものであるとの可能性が示された。

古墳の築造時期に関しては、川西編年Ⅳ期もしくはⅤ期前半の円筒埴輪が出土していることから当該期以降との目処が示された。また副次的な埋葬施設である横穴式石室に関しては、墳頂部の攪乱土内からＴＫ 209 型式の須恵器杯身が出土していることから、当該期の構築が考えられた。

以上が昭和 59 年の発掘調査によって明らかにされた事項のあらましであるが、全面発掘を行った今次調査の結果、さらに明確になった点も少なくない。

まず、後述するように、まず古墳裾部を完周するとみられた「周溝」については、必ずしも裾部を取り巻いて巡るものではないと考えられた。また、特にこの溝の埋土からは弥生土器が集中的に出土した。昭和 59 年の調査でも古墳盛土中のみならず「周溝」埋土からも多くの弥生土器片が出土して、本墳が立地する地点には、先行する弥生時代の高地性集落である境谷遺跡が存在することが明らかにされている。最終的にこの「周溝」は境谷遺跡に関係する遺構であると考えるに至った。

「周溝」関してそのように考えられたので、段築のテラス面とみられた地形については、その一つが古墳の裾部に当たるものと考えられる。ただし今次調査では、東斜面においても２箇所のテラス様の地形は追認されなかった。昭和 59 年の東トレンチで検出された、２段目のテラスに当てられた傾斜角度がやや緩やかな箇所は、部分的な特徴であったとも思われる。

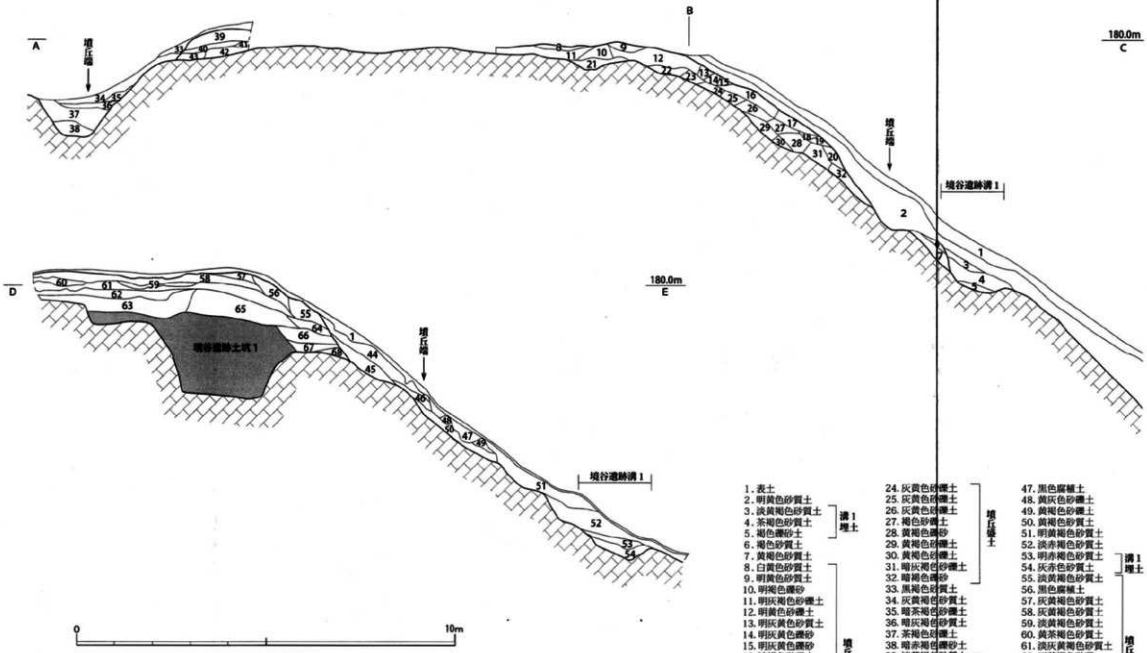
墳頂部で検出された「段状の地山整形」の痕跡は、今次調査でその形状の全容が明らかになった。後述するように、平面プランが方形の土坑として検出された。古墳盛土の下層に掘られたものであることから、やはり境谷遺跡に関わる遺構と考えられる。

しかし、昭和 59 年の調査で検出された、現状の墳頂部における西側、本来の中央部に位置する中心主体に対する盗掘坑の一部とみられた窪みについては、今次調査では追認されなかった。何故に再検出されなかったのか、遺憾ながら、不明と言わざるを得ない。

２．位置と墳丘

巨勢山 458 号墳は、今次調査地の南端最高所の巨勢山 456 号墳が立地する地点から北東方向に延びる尾根上に立地する。この尾根はまたこの地点で、東に支尾根が分れて派生している。東の支尾根上には、今次調査ではＢ地区として扱った、後述する巨勢山 459 号墳、460 号墳が築造されている。巨勢山 458 号墳は、そのような尾根の分岐点にも占地していることになる。

第１項の「既往の調査」でも述べたように、本墳の北東側には、昭和 59 年のトレンチ調査で溝状の遺構が検出され、古墳の裾を取巻く「周溝」であると考えられた。しかし、今次調査の結果、結論を先に述べると、この溝状の遺構は先行する弥生時代の高地性集落である境谷遺跡に関わる遺構であると考えられる。



※アルファベット記号は図6に対応している。

1. 表土
2. 明黄色砂質土
3. 淡黄褐色砂質土
4. 茶褐色砂質土
5. 褐色礫砂土
6. 褐色砂質土
7. 黄褐色砂質土
8. 白黄色砂質土
9. 明黄色砂質土
10. 明褐色礫砂
11. 明灰褐色砂礫土
12. 明黄色砂礫土
13. 明灰黄色砂質土
14. 明灰黄色礫砂
15. 明灰黄色礫砂
16. 淡褐色砂礫土
17. 淡褐色礫砂土
18. 淡黄褐色砂質土
19. 淡黄褐色砂質土
20. 黄褐色砂礫土
21. 明灰褐色砂礫土
22. 明黄褐色砂礫
23. 明黄褐色砂礫土
24. 灰黄色砂礫土
25. 灰黄色砂礫土
26. 灰黄色砂礫土
27. 褐色砂礫
28. 黄褐色礫砂
29. 黄褐色砂礫土
30. 黄褐色砂礫土
31. 暗灰褐色砂礫土
32. 暗褐色礫砂
33. 黒褐色砂質土
34. 灰黄褐色砂質土
35. 暗茶褐色砂礫土
36. 暗灰褐色砂質土
37. 茶褐色砂礫土
38. 暗赤褐色礫砂土
39. 淡茶褐色砂質土
40. 淡茶褐色砂質土
41. 茶褐色砂礫土
42. 茶褐色砂礫土
43. 黄褐色砂質土
44. 黄灰色砂礫土
45. 黄灰色礫砂土
46. 暗黄褐色砂質土
47. 黒色腐植土
48. 黄灰色砂礫土
49. 黄褐色砂礫土
50. 黄褐色砂質土
51. 明黄褐色砂質土
52. 淡赤褐色砂質土
53. 明赤褐色砂質土
54. 灰赤色砂質土
55. 淡黄褐色砂質土
56. 黒色腐植土
57. 灰黄褐色砂質土
58. 灰黄褐色砂質土
59. 淡黄褐色砂質土
60. 黄茶褐色砂質土
61. 淡灰黄褐色砂質土
62. 灰茶褐色砂礫
63. 暗灰色砂質土
64. 灰赤褐色砂質土
65. 黄褐色砂質土
66. 灰茶褐色砂礫
67. 灰黒褐色砂質土
68. 黄褐赤色砂礫土

溝1埋土
墳丘盛土
溝1埋土
墳丘盛土

図8　巨勢山458号墳　墳丘断面図(S.=1/100)

図６の地形測量図に「境谷遺跡溝１」とした遺構がそれである。図中トーンで示した箇所が昭和59年の発掘調査で検出された部分に当たる。この時の調査では、溝のそれぞれの上端・下端が検出されており、溝の底から立ち上がる斜面もそれぞれ検出されていた。ところが、今次調査においては、そのトレンチ間を結ぶ地点で溝の上端・下端の延長が検出されなかったばかりではなく、まず旧トレンチ内に存在したはずの遺構についてもその形状が再検出されなかった。その理由は不明であるが、今次調査の初期段階で遺憾ながら現地調査担当者の不手際があったと言わざるをえない。

しかし、最終的に地山面が露出した地形測量図（図６）をみると、かつてトレンチ内で検出された溝状遺構を結ぶ位置のコンターラインの間隔が広く、平坦な地形になっていることが判る。昭和59年の調査が、遺構の検出がトレンチ内のみであったとはいえ、それは平面と断面で確認されたものであるから、この点を踏まえれば、本来はこの位置にコンターラインに平行する方向の溝状遺構が存在したとみられる。

遺構としては明確に検出されなかったにもかかわらず、ここに溝状遺構の存在を考えるもう一つの根拠は、出土遺物の多さにある。この地点を中心にしてその上面を覆う位置から集中的に出土した土器片は、コンテナ４箱分がある。長さ15ｍ、幅３ｍ足らずの範囲内としては遺物密度はかなり高いものといえ、遺構埋土中の土器であったと考えるのが妥当な状況である。また、これらの土器が基本的に弥生土器で占められることから、当該遺構は、古墳に先行して存在した弥生時代の高地性集落に関わるものと考えられる。

このようなことで、溝１については、従前検出された遺構の一部を破線で繋ぐようにして、図６および図77にその想定される位置を示した。出土遺物から弥生時代の遺構とみられるので、その詳細は、章を改めて「第６章　巨勢山境谷遺跡」で記述する。

さて、このような観点から、改めて巨勢山458号墳の墳丘についてみてみよう。

図６の墳丘測量図を観察すると、残存する尾根筋でまず北側は、標高175.00ｍ付近のコンターラインを見れば、それより上位が間隔が狭く、それより下位が間隔が広がっている。なお、この地点は、昭和59年の調査報告書では段築に伴う地山整形を行ったと考えられた地点で、やはり当時においても地形の変換が認識されていた地点に相当する。この時に作成された土層断面図は、盛土の認識に関して、広範囲を調査した今次調査を優先して改変した上で、図８の上段図Ａ－Ｂ－Ｃ断面に合成して提示した。同図右寄りに「墳丘端」として示した地点がこれに当たっている。

一方、この北側墳丘端に対応する南側の墳丘端は、周溝の一部が残っていて比較的判りやすい。標高177.50ｍ付近で地形の変換点が明瞭に表れている。

これらに対して東斜面の墳丘端は不明瞭で判りにくい。しかし図６の地形測量図では標高176.75ｍ付近に傾斜変換点を辛うじて読み取ることができ、図８の下段図Ｄ－Ｅ断面にもその傾斜変換が表れているので、同図に「墳丘端」として示した。

以上のうち、現状に残る南北墳丘端の距離を測ると21 mの数値が得られるが、本墳の場合にも、それが古墳中心を貫く直径ではない。本来の古墳中軸は幾分西に寄るとみられるので、墳丘径はこれよりもやや大きくなり、25 m程度が想定できよう。東西方向は西側の崩落の程度が知り得ないために不明であるが、同様に現状の墳頂部西端よりやや西側に古墳の中軸を置くとして、東西10～15 m程の規模が想定できようか。この場合、本墳は南北に長い不整形な円墳であったとみられる。

本墳の埋葬施設については、既知の横穴式石室以外、築造期のものは今次調査においてもその痕跡も認めることができなかった。早い段階に西側土砂崩落部分として消滅していたものと思われる。

また、横穴式石室の墓道の先端部分で、古墳の南周溝に当たる位置に、昭和59年の調査でも注意された長さ1 m程の花崗岩石が落とし込まれるように置かれていた。そして、この石の北西寄りに長径90cm、短径70cm、深さ最大で25cm程度の不整円形の土坑が検出された。この土坑は昭和59年の調査ではその存在が認められていたものの、トレンチの隅で遺構の一部が検出されたもので、全体の形状などは明らかではなかったが、今次調査によって全体像が判明した。しかし、その性格についてはなお不分明である。周溝内に置かれたとみられる石が、横穴式石室の墓道に関連して橋のような機能を持っていたとすれば、この土坑は、例えばさらに板材や丸太材を渡したときの橋脚の据え付け穴であった可能性なども考えられるが、定かではない。

本墳の築造年代は、後述される出土埴輪の年代観から、中期中葉、ないしは後葉でも古い段階と考えられる。

3．出土遺物（埴輪）

遺物個々の詳細については、遺物実測図および出土埴輪観察表に記しているのでここでは出土遺物の特徴を総括的に述べる。

なお、例言に記した通り、本書では観察表および本文中で用いた円筒埴輪の各項目の分類は上田睦氏の分類（上田1997・2002）による。一方で、外面の調整技法に関しては詳細な分類が行われているが（一瀬1988）、今回出土した遺物については細片が多いこともあり、これらを分類することが困難である。したがって、そのような外面調整技法については従前通り川西宏幸氏「円筒埴輪総論」（川西1978）の分類に従うことにする。また時期区分についても川西氏の同論に従う。（補註1）

458号墳の埴輪はすべて現位置を保っていない破片資料である。古墳の西半分が削平されているが、遺物は墳丘の北斜面および東斜面の流出土中から検出され、合計20片があった。そのうち図化可能であった7個体を図9に掲げた。個々の詳細は出土遺物観察表（145頁）に記した。

図示した遺物は、それらの形状から円筒埴輪か朝顔形埴輪の一部分と考えられる。また、（9－5）は『巨勢山境谷10号墳発掘調査報告書』（藤田1985）で報告された同書図22－44の埴輪と接合したことによってこれと同一個体であることが判明したほか、（9－1）・（9－2）はそれぞれ同書図22－40・図22－41と口縁部の形状・口縁部の復原径・内外面の調整および胎土などが

同様とみられることから同一個体である可能性が高い。

図化した全ての個体で直径の復原をすることが可能であった。口縁部径の復原が可能であった（9－1～3）は、（9－1）が34.0cm、（9－2）と（9－3）がそれぞれ26.0cm・26.6cmで（9－1）はこれらより復原径がやや大きい。タガの部分では（9－4）の復原径が29.0cmあり、残存部分の傾斜角度から想定される口縁部径は、（9－1）に近いか、それ以上になるかもしれない。1段目が残っているものは、（9－5～7）の3個体で、底部径は20.6cmから21.8cmの範囲に入りいずれも小形品の範疇に入る。

円筒埴輪の口縁部の形態が判るものは、口縁部の形態は、逆L字状になり端部をつまみあげるⅠ類（9－2・3）と直立して端部を肥厚させるⅡ類（9－1）がある。

タガの断面形態が判るものは（9－4）のみで、断面台形で器壁の厚さと同じ2b類である。この（9－4）はスカシ孔の形状についても復原でき、不整形な円形であることが判る。

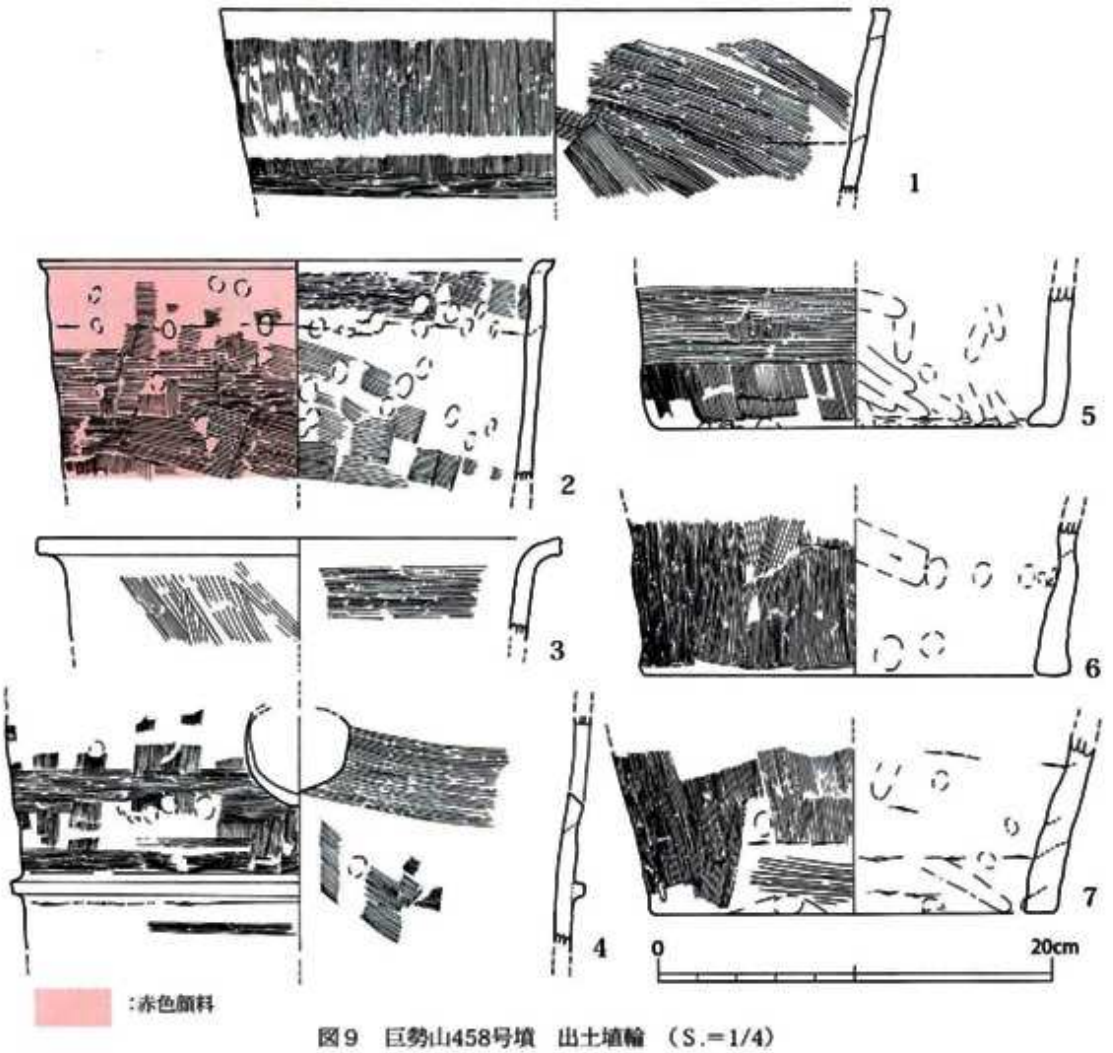


図9　巨勢山458号墳　出土埴輪　（S.＝1/4）

（9－7）は通常どおり粘土紐の輪積みによって形成されるが、その底部になる最下の粘土紐についてそれが輪状に形作られる際にその両端を接合した痕跡が底面で明瞭に確認できる。底部の形状は（9－5）が直立する1類、（9－6）が内彎した後外側に開く5類、（9－7）は外側に開く2類である。底端部は、（9－5）は内側に粘土がはみ出たb類、（9－6）は外内両方に粘土がはみ出て撥形になったa類、（9－7）はきれいに調整されているd類である。

外面調整は口縁部においては、（9－1・2）は1次調整としてのタテハケあるいはナナメハケの後、2次調整としてヨコハケが施されるものである。その2次調整のヨコハケは、静止痕のあるB種ヨコハケ（9－2）と静止痕のないC種ヨコハケ（9－1）がみられる。（9－3）も口縁部に当たるが、残存率が悪く、2次調整を行ったかどうかは判然としない。体部の外面調整については、（9－4）が観察できる。1次調整として、タテハケ、2次調整としてヨコハケが行われる。

このようにいずれの埴輪にも、外面調整としてハケメが見られるが、それらを注意深く観察すると、同一個体であっても、2種類以上のハケ原体が用いられることが判る場合がある。すなわち、（9－3）には7条/cmのやや粗いハケメと、10条/cmの細かいハケメがみられ、（9－4）には、スカシ孔付近においては、8条/cmのやや粗いハケメが、タガ周辺においては12条/cmの細かいハケメがみられる。この（9－4）のように、タガ周辺とそれ以外の部分の調整に異なるハケ原体を用いる例は、巨勢山460号墳出土の埴輪（25－1・2）・（26－25）においても見られる。

内面調整は、（9－1～3）の口縁部はそれぞれナナメハケやヨコハケが行われている。また、（9－4）の体部では、スカシ孔の高さ付近にヨコハケがみられる。（9－5～7）の底部には指頭圧痕が見られる。

1段目の調整は主としてタテハケのみであるが、（9－5）のようにヨコハケを行うものもある。「底部の調整」（上田 1997）は、いずれもナデるア類であるが、（9－7）は部分的にヨコハケで調整が行われている箇所が見られる。

焼成は、堅緻で赤褐色のもの（9－1・2・4）と、やや軟質で黄褐色のもの（9－3・5・6・7）が混在している。しかし、いずれも黒斑が見られないため窖窯で焼成していることが考えられる。

以上、458号墳から出土した埴輪の特徴を整理すると、川西編年第Ⅳ期に該当すると考えられる。

（補註1）

近年、円筒埴輪の研究史上において長く用いられてきた「タガ」の用語を廃して、「突帯」と呼び替えている論文ないし報告が散見される。鐘方正樹氏は、「タガ」を廃する理由を端的に示した。すなわち、鐘方氏は、箍の字義として『広辞苑』を引きつつ「竹を割ってたがねた輪。おけ・たるその他の器具などにはめて、外側を堅く締め固めるのに用いる」ものであるとし、一方で、円筒埴輪が器台から仮器化，特殊化していく過程で生まれたことを勘案すれば、従前の「タガ」は「突帯」と呼ぶ方が適切であると述べた（鐘方 2003）。

しかし、この考えに対しては、次の2点の理由から首肯しがたい。第1に、このような理由で「タガ」を廃するのであれば、例えば、円筒埴輪の器壁の調整に用いられる「ハケ」の用語は残しておいてもよいのだろうか。筆者には、「タガ」を廃し「ハケ」を残すことの不合理が理解しがたい。第2に、日本考古学の通例として、元の語に別の特別な意味を与えた上で、元の語とは区別して片仮名で表記したものが術語として認識され適用していることがある。例えば、上の「ハケ」もその好例であるが、「クニ」・「ムラ」の類も同様であろうと考える。「タガ」は、桶や樽の「箍」を離れて、円筒埴輪の部位を意味する用語としてすでに定着している。

このようなことで、「タガ」を廃することに積極的な意義を見いだすことができない。むしろ、次の理由から筆者は「タガ」

の語をなお変更するべきではないと考える。

第1に、学史を重んじる立場である。円筒埴輪研究史上において川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」(川西 1978) が画期的な位置を占めていることは周知されている。川西氏はこの論文において円筒埴輪の各部に関する網羅的な分類およびその成果からなる編年案を示した。ここで使われた用語は「タガ」であった。

川西論文以前にも、これが「突帯」や「凸帯」などと呼ばれることもあったが、「タガ」については川西氏の造語でもなく、それ以前からも用いられていた（都出 1971、吉田 1973 など)。つまり、この段階までは研究者によって用語の不統一が見られる状況があった。「タガ」に関してはこのような状況に対して、関川尚功氏が、すでに 1976 年に、上記の鍾方氏と同様の趣旨を述べて「凸帯」と呼称するべきと主張した（関川 1976）ことは承知する。しかしながら、円筒埴輪の各部の形態や製作手法に関する研究は、1978 年の川西論文以後はその分類を細分する方向で進んだとみられ、少なくとも川西氏の研究を批判的に継承・発展してきたものであった。

実際、川西氏の研究を踏まえて「タガ」の断面形態の細分を行った上田睦氏が当初に提示した分類案（上田 1997）では、「タガ」を用いている。このような学史を踏まえるのならば、術語の安易な呼び替えは、混乱を招くだけであると考える。

第2に、円筒埴輪の体部を完周する「突帯」を特に「タガ」と呼ぶことで、都合の良いこともある。例えば、基底部下端付近を完周する「低位置突帯」や口縁部付近を完周する「口縁部突帯」、またタガ間を縦に貼り付ける「縦位突帯」などと、「タガ」とは区別して呼び分ければ判りやすい。すなわち、従前の呼称法を踏襲すれば、同じ突帯でも円筒埴輪に普遍的にある「タガ」とそれ以外の「突帯」を呼び分けることができ、現在そのような呼称がすでに通用している。逆に言えば「タガ」を廃すれば、このような呼び分けができなくなる。

筆者も、学史的に通用してきた用語といえども、合理的に考えて不都合な場合は変更するべきと考えている。しかし、「タガ」に関してはこれを廃する積極的な理由が見いだせず、むしろ、変更することで却って不都合を生じると考えるので、ここでは、従前の研究どおり「タガ」を用いる。

なお、「タガ」だけではなく、その他の部位や製作手法の呼び名についても、用語の変更が提唱されている場合がある（安村 2000）が、現状では、川西氏が提示した名称やそれに基づいて発展的に継承された名称が、本書で扱う範疇においては不都合であるとも考えないので、本書ではそれらを採用し使用した。

また、円筒埴輪の「大型」・「中型」・「小型」などの底部径の分類は、上田睦氏（上田 2002）に拠っている。しかし、埴輪はその大きさによって、古墳ごとや、または同一古墳の場合でも樹立場所ごとに使い分けられているとみられ、すなわち、埴輪の法量差には、各々の埴輪がもつ機能差が反映していると考える。つまり埴輪の大・中・小などの別は「型式」差ではなく、「形式」差と考えるので、ここでは上田氏分類の「型」を「形」と読み替えて使用する。

第4節　巨勢山４６１号墳

1．位置と墳丘

巨勢山 458 号墳が立地する地点は、北東方向に延びてきた尾根が東方向にも支尾根が派生する分岐点にも当たるが、巨勢山 461 号墳は北東方向に延びる主尾根上に立地する。平面的には巨勢山 458 号墳に北接するが、現状での墳頂部の標高を比較すると 11 m以上の比高差がある。このような比高差からは 458 号墳とは隔絶しているかに見える。一方で、現状での墳頂部の標高での比較では、後述する 462 号墳との間にも 5 m以上の比高差があるが、462 号墳の場合には本来の墳頂部はさらに高かったことが想定できるので、その差は現状ほどにはなかったとみられる。また、461 号墳の北側墳丘端は、462 号墳の南側後背斜面のカット面上端に近接しており、隣接した古墳との感が強い。これらのことから、461 号墳と 462 号墳は 2 基の古墳で小支群を形成しているとみることもできよう。

巨勢山 461 号墳の墳丘は、西側の崖面のみならず東側も土砂の自然流出によって急斜面になっていて、相当を失っている。現状の墳頂部もほとんど平坦面がなく、墳丘斜面も歪な感じなっている。墳丘の西側が 1/2 以上が崩落しているうえに、残った墳丘もかなり土砂の流出があって、古墳の形状が変形しているらしい。このため、埋葬施設そのものはその痕跡すら見いだすことができなかったほか、盛土も認められなかった。

古墳に関わる遺構としては、南側斜面の地山に対するカット面を検出した。背後の尾根上の斜面を削り出して墳丘を区画するためのもので、高さ 1.5 m程度、下端の長さは 7 m程度が検出できた。

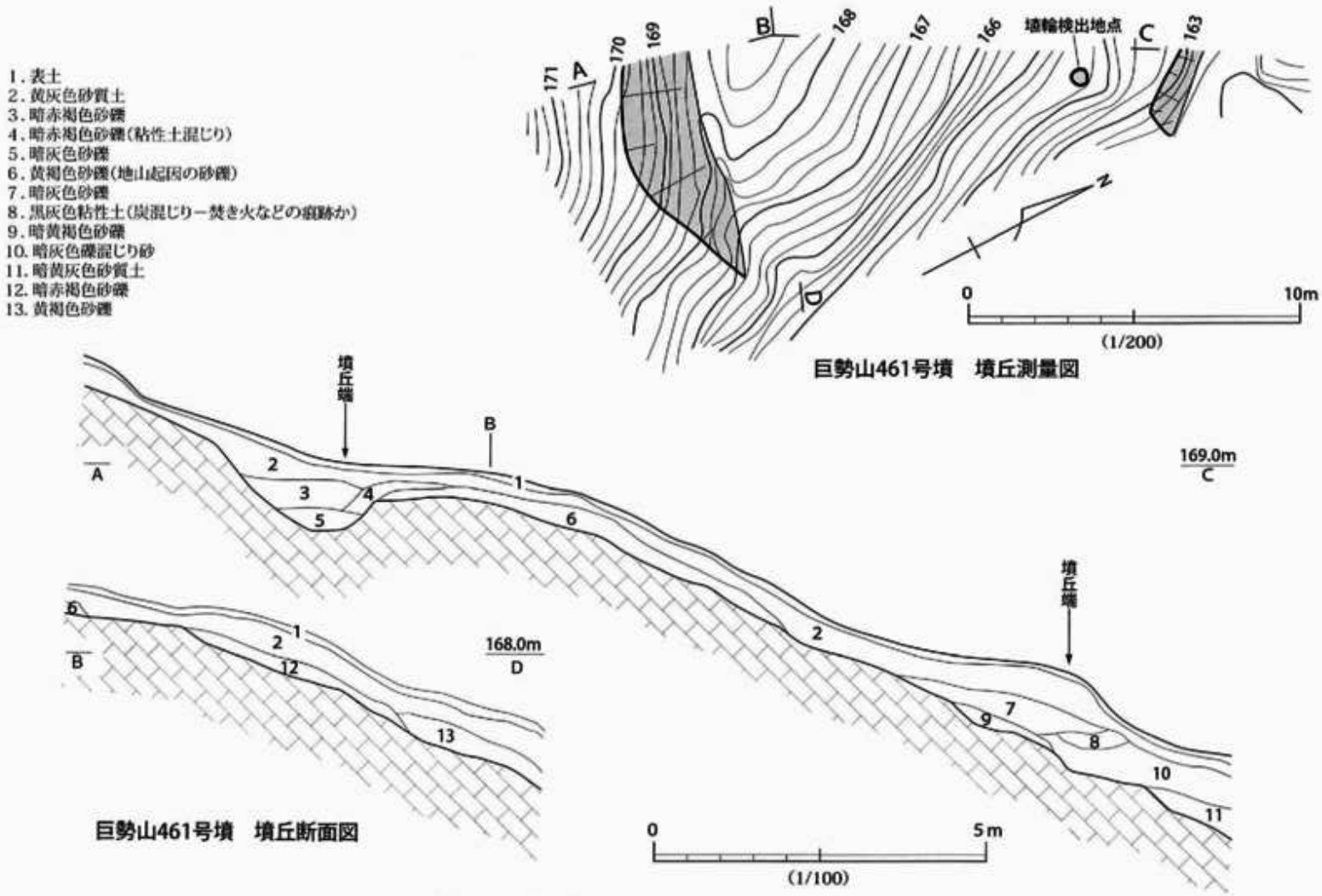


図10　巨勢山461号墳　墳丘測量図・墳丘断面図　(S.=1/200・1/100)

このカット面と対向する古墳南斜面の下端が、南側墳丘端の一部に相当する。すなわち、図10上段の墳丘測量図を見ると、標高168.00 m付近のコンターラインに傾斜変換点のあることが判る。

一方、北側の墳丘端は標高164.50 m付近に傾斜変換点がある。この地点の外側には、幅1 m程の平坦面があって、「遺物出土状態」の項で後述するように、ここに円筒形の埴輪の基底部が元位置を保った状態で検出された。そしてこの平坦面のさらに北側は30～35cm程の段差になっていて、標高164.00 mのコンターライン付近が再び傾斜変換点になっている。この2箇所の傾斜変換点のうち、いずれかが墳丘端に当たるものと思われる。つまり、埴輪が出土した平坦面を、墳丘の内側とみるか外側とみるかよって、墳丘端の位置が異なり墳丘規模にも若干の相違が生じる。

このことを考えるためには、墳丘の東西でその形状を多く失っている現状では不分明な点も多いが、出土した埴輪についてはその周辺部に同様のものが認められず1個体のみの出土であったことが留意される。仮に流出したものがあったとしても、少なくともこのような埴輪がこの位置に列を成して墳丘下端を取巻いて並んでいた訳ではなさそうである。1個体ないし多くとも数個体程度の埴輪が尾根線上に据えられたものとみられる。そうであれば、埴輪を立てた平坦面はこの位置の部分的な特徴であることになろう。そのような平坦面の規模によっては「方形の張出部」などとの評価も可能であろうが、本例の場合、現状からはごく小規模なものと想定され、尾根線上の墳丘の外側に1個体ないしは数個体程度の埴輪を立てるスペースを確保するための整地が行われた程度のことと考えるのが実態に近いように思われる。

そのようなことで、古墳の全景のイメージが描きにくい現状ではあるが、ここでは、埴輪検出地点の南側、標高164.50 mのコンターライン付近の傾斜変換点を北側墳丘端と考える。その位置は、図10の下段図A－B－C断面には、右寄りに「墳丘端」として示した。

このように考えた南北の墳丘端間の距離を測ると10.9 mとなる。しかし、本墳の場合も、墳頂部に主体部の痕跡も残らない程に西側が崩落しているので、これが墳丘中心を貫く直径ではないことは明らかである。本来の墳丘規模はこれよりもやや大きく10数mとなろう。

また、墳形については、測量図に僅かに読み取れる地形や、従前の分布調査の成果から、円墳であったと考えられる。

2．遺物出土状態

461号墳の墳丘北端の平坦面で、円筒形の埴輪が据え置かれた状態で検出された（図11）。図12の（12－4）がそれで、3段目のごく一部までが残存している。

据え付け穴の平面形は長径51cm、短径42cmの不整形な円形を呈する。深さは12cm程あった。図11の断面図に示したように、この埴輪は据え付け穴の底に一旦置き土(図11－4層)をしてから、その上に置かれている。埴輪と据え付け穴の間に生じた隙間には黄灰色砂礫（図11－3層）が埋め戻されているが、同図に見えるように現状では埋め戻し土が据え付け穴の掘り込み面の高さより

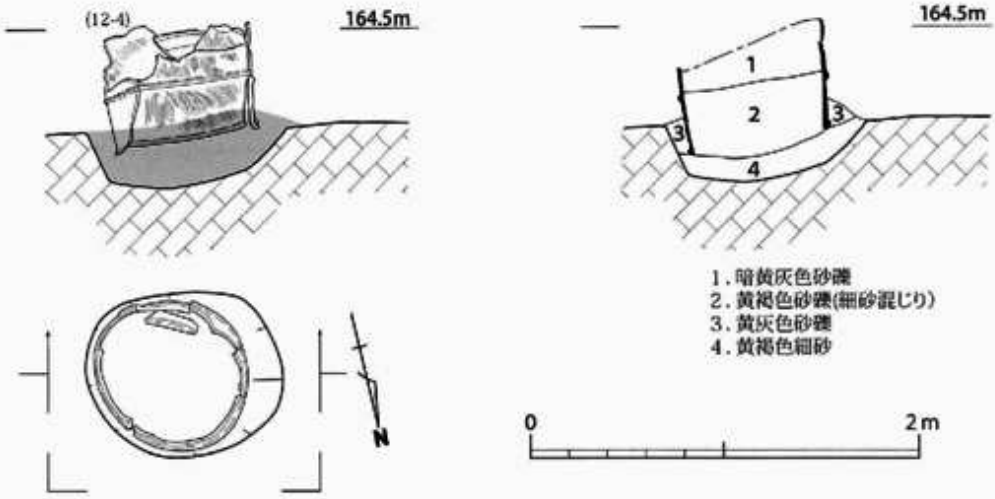


図11　巨勢山461号墳　埴輪出土状態　（S.＝1/40）

も盛り上がっている。これはおそらく、周囲の地形自体が土砂の流出によって下がっているためと考えられる。どの程度の高さが流出したかは不明であるが、埴輪の内側には据え付けられた時に1段目のタガの高さまで土が入れられている（図11－2層）ので、外側についても同様であったとすれば、元は埴輪の1段目は据え付け穴の中に収まっていたとみられよう。

この埴輪が検出された地点は、東西1.5 m、南北1.3 mの狭小な平坦面になっている（図10 墳丘測量図）が、既述のように東西は土砂採取の崖面や自然流出によって削り取られているものである。原位置を保った埴輪は、本来複数以上で列をなしていたものかどうか、注意深く精査したが、平坦面はわずかに西には0.82 m、東には0.22 m検出しえたのみで、少なくともこの部分には埴輪の据え付け穴等が存在する兆候は全く見られなかった。また、検出した据え付け穴も溝状の布堀りではなかったことから、埴輪が列をなしていたのではなく、単独かもしくは非常にまばらな状態で尾根線部付近にのみ立てられたと考えられよう。

なお、埴輪のスカシ孔の配置は、対向する2箇所のスカシ孔を結んだ線がおおよそ尾根線に平行する方向になっている。この埴輪に関しては、次項の「出土遺物（埴輪）」で述べるように形象埴輪の基部である可能性が考えられる。その場合には、埴輪の正面がどの方向を向いていたかが問題になるが、もし尾根筋を辿って古墳に登る道があったとすれば、円筒部に関しては真正面にスカシ孔が見える配置となっている。但し、現状では尾根そのものが改変されており、実態は不明である。

また出土埴輪のうち、比較的残存状況がよいものとして、1段目が完周して残っていた（13－5）がある。その出土位置は、（12－4）が出土した平坦面より1.3 m北側の地点で、層位的には地山より55cm上位になる流出土（図10－10）層に含まれていた。墳丘から転落した状態を示しており底部を北に向けた横位での出土であった。

このような状況から（13－5）は元は461号墳の墳丘北側の、（12－4）よりは上位位置に樹

立されていたであろうと考えられる。

3．出土遺物（埴輪）

461 号墳出土埴輪として図 12・13 に実測図を掲げた。このなかには、今次調査地では唯一原位置を保って検出されたことで残存状況も比較的良好であった（12－4）のほか、流土（図 10－10 層）中の出土ながら、やはり残存状況が良好な（13－5）が含まれている。この 2 個体以外では墳丘の北斜面や東斜面の流土出土の破片 18 片があり、このうち 7 個体分が図化可能であった。結果的に実測図は合計 9 個体を提示できた。

出土埴輪は、図化不能であったものも含めて、円筒もしくは朝顔形の破片が大部分であるが、後述するように、（13－9）は形象埴輪の一部で、（12－4）も形象埴輪の基部の可能性が考えられる。なお、（12－1・4）は、胎土、タガの形状などが同一個体とも思われるほど似ているが、（12－4）の残存部分の傾斜角度から想定される口径が（12－1）の復原径とは合わないことから別個体であると考えた。個々の詳細は出土埴輪観察表（145～146 頁）に記したので参照されたい。

（12－4）は、1 段目が完周し、2 段目の大部分および 2 段目の上位に付くタガの一部と 3 段目のごく一部までが残存している。底部は、径 33.0～34.7cm を計測し、大形品の範疇に入る。

この埴輪に関して最も特徴的なのは、底部端の外周面に低位置突帯が貼り付けられていることである。底部付近に低位置突帯をもつ埴輪は、時期が古い段階から認められ、大阪府茨木市の将軍山古墳（若杉 2005）・奈良県奈良市の日葉酢媛陵古墳（石田 1967、宮内庁書陵部 2003）などにみられる。また、6 世紀代に入ると大阪府堺市の日置荘遺跡などの埴輪窯で生産された円筒埴輪（十河 1992・森屋 1995 ほか）にも認められる。形象埴輪では、石見型盾形埴輪（末永 1932、楠元・長谷川 1985 ほか）や井辺八幡山古墳などでみられる人物埴輪（森編 1972）の基部などにも認められる。このように低位置突帯は円筒埴輪・形象埴輪いずれにも認められるのである。しかし、大多数の円筒埴輪には、低位置突帯はつかない。仮にこれがもし円筒埴輪であるとすれば、やはり希少な事例ではある。

一方、隣接する 462 号墳の南周溝および 1 トレンチ（図 14）から盾形埴輪片（16－16・17）を検出している。462 号墳出土のもののうち、この位置から出土した埴輪は、461 号墳から転落したものが含まれている可能性もある。また（12－4）は「遺物出土状態」の項で前述したように、墳丘裾部付近の尾根上に単体、もしくは少数がまばらに立てられていた状況であったと考えられ、通有の円筒埴輪の配置とも異なっている。このようなことから、（12－4）は、形象埴輪、とくに盾形埴輪の基部であった可能性も考えられよう。

さて、この（12－4）の各部の詳細を見ると、タガの断面形は台形で器壁の厚さと同じ厚みである 2 b 類である。タガの間隔は 13.8～14.8cm を計測し、1 段目高は 14.3～15.2cm を計測した。底部の形状は、上記のように突帯が貼り付けられているため、厳密には既存の分類にあてはまらな

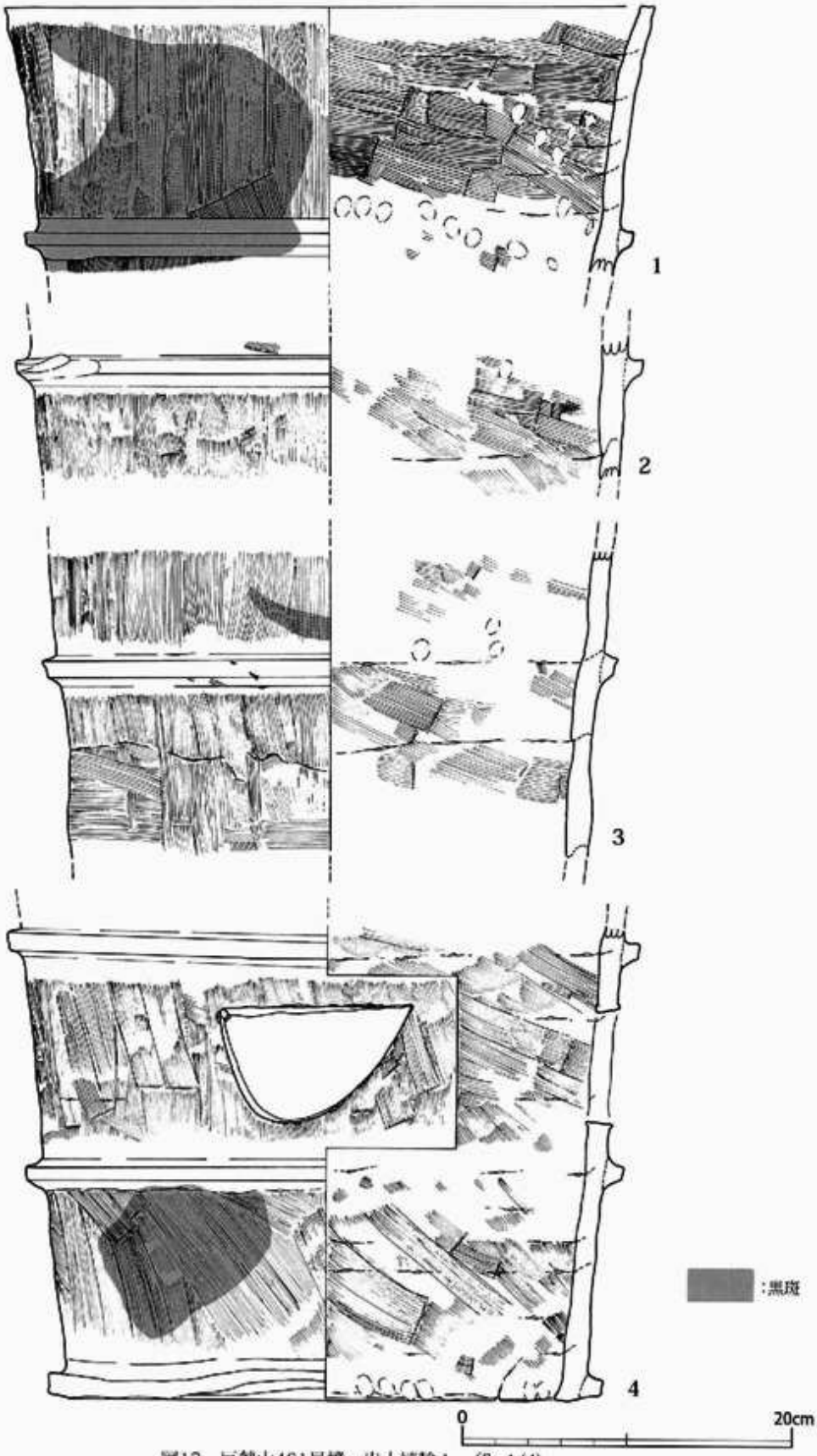


図12　巨勢山461号墳　出土埴輪1　(S.=1/4)

い。しかし底端部に関しては、内面をみると内側に粘土がはみ出しているｃ類であることが判る。

２段目には、半円形のスカシ孔が穿たれている。２段目は大部分が残存しているが、このスカシ孔のちょうど対向する側は、その上位が欠損している。このため、この位置にあるスカシ孔は完存しないが、残存部にはスカシ孔下半の円弧が見える。これが円形であるとして円周を復原すると、円の上端は２段目上位のタガの高さを超えてしまうことになるので、ここに穿たれたスカシ孔は現に残っているスカシ孔と同様に半円形であったことが判る。このような半円形のスカシ孔がある埴輪は、状況が異なるけれども室宮山古墳で認められる（関川 1985）ことは留意される。

なお、このスカシ孔の切り口を観察すると、砂粒が図示状態において右から左に移動していることが判る。加えて、左上に粘土がスカシ孔の上辺を超えて、切り込まれている部分がある。これは刀子等により、スカシ孔を穿つに際して勢いがあまり、刃部が上辺を超えてしまった痕跡と考えられる。これらの状況は、右利きの人物によってこのスカシ孔が穿たれたことの証左である。

外面調整は１次調整のタテハケのみで、２次調整はみられない。タガの剥離部分には、そのタテハケが観察され部分的には横方向のナデも見られる。このナデは、タガを貼り付ける際に器壁を平滑にするためか、ないしは粘土の接合に必要な水分補給をする目的でなされたものかもしれない。

内面調整は静止痕のあるナナメハケがみられる。このような器壁の調整は内面全体に及んでいるが、タガおよびその下端付近においての内面は、タガを貼り付ける際の指頭押圧によって、そのナナメハケが消されている。

（13－5）は、墳丘から転落した状況で出土したものである。１段目は完周し、２段目も大部分が残存している。底部の状態を見ると、通常通り正円形を想定して製作されたとみられるが、一部が歪にゆがんでいる。現状では長径 21.0cm、短径 17.2cm を測るが、元の底部径は 20.0cm 程であったとみられ、小形品の範疇に入る。

タガの断面形は、台形で器壁の厚さと同じ厚みである２ｂ類である。タガの間隔は 13.5 ～ 13.9cm、１段目高は、14.8 ～ 15.2cm を計測する。底部の形状は、直立した後、外側に開く５類である。底部は、倒立した状態でケズリを施す「底部の調整」（上田 1997）ウ類であるが、正置した時に再び自重で底部がつぶれたらしく、底端部の形態は内側に粘土がはみ出ているＣ類になっている。

なお、スカシ孔は、２段目が 2/3 以上が残存しているにも関わらず、そこにはない。すなわち（13－5）は、少なくとも２段目までには対向する２箇所のスカシ孔が穿たれなかったものである。

外面調整は、１次調整として主としてタテハケが施されているが、２次調整は行われていない。ただ、２段目上位に、図示したような横方向のナデがみられる。革などが強く押し当てられたとみられるナデであるが、部分的な特徴である。切り合い関係から１次調整の後に施されたことが判るが、２次調整として行われたものではなく、器表面の部分的な修正の目的を持ったものであろう。

内面調整は、静止痕のあるヨコハケが主体で、２段目では部分的に縦方向の板ナデが観察でき

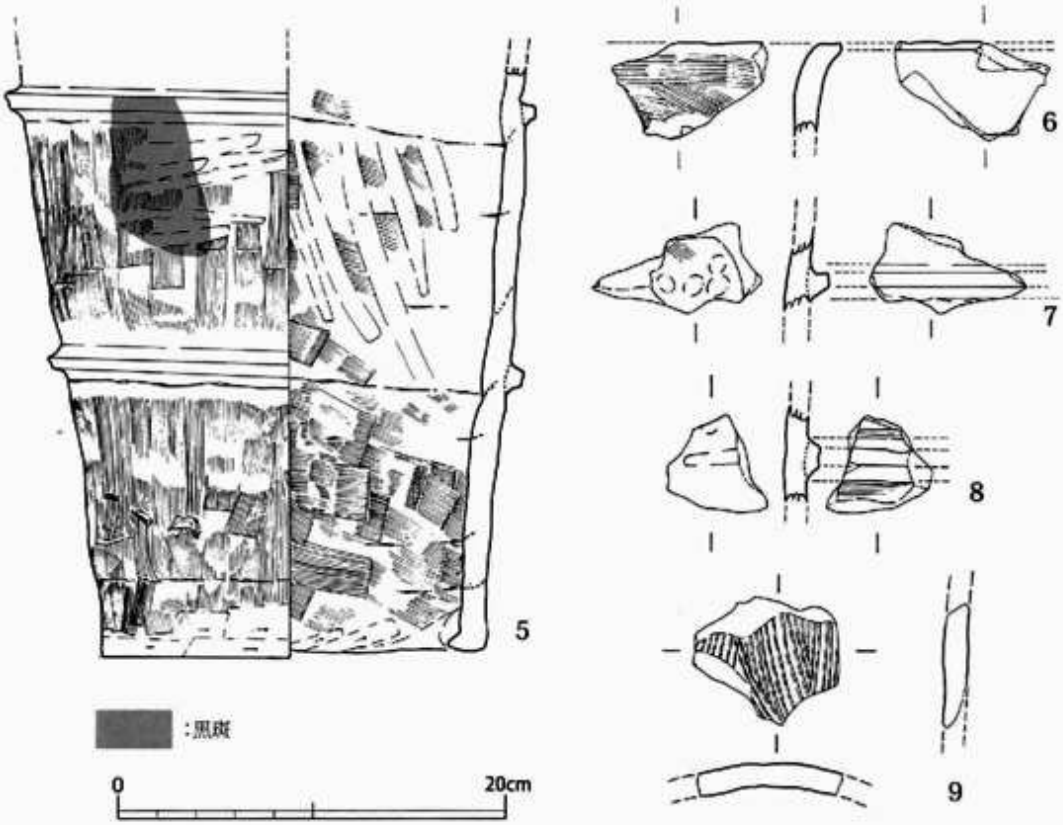


図13　巨勢山461号墳　出土埴輪２　(S.=1/4)

る。このような器壁の調整は内面全体に及んでいるが、粘土の接合痕を消すことはあまり意識されなかったらしく、それが明瞭に残っている。この粘土接合痕から輪積みの単位および粘土の乾燥単位を抽出できるが、このことについては後述する。

次にこれら２個体以外のものも含めて見ていこう。(12－1～4)・(13－5) は、その直径が判るか復原が可能なものである。前述の (12－4) は底部径が径 33.0～34.7cm の大形品、(13－5) は 17.2～21.0cm の小形品である。完周しない個体 (12－1～3) については、それぞれ復原最大径 39.4cm (口縁部)・38.6cm (タガ部分)・35.0cm (タガ部分) を測る。これらは底部径は不明であるが残存部の器壁の傾斜角度からみれば、(12－4) と共に大形品の範疇に入るであろう。そうであればこの５個体のうち(13－5)は小形品であるが、その他は同一規格の製品であったと考えられる。この場合 (12－4) が形象埴輪の基部であったとしても、円筒埴輪の規格を踏襲していた可能性も考えられるのかもしれない。

各部位の詳細について見ていくと、口縁部の形状は逆Ｌ字状になり端部をつまみあげるⅠ類 (13－6) と直立して端部をなでるだけのⅣ類 (12－1) がある。

また、タガの断面形態が判るものは、(12－1・2)・(13－7) は、(12－4)・(13－5) と

同様の断面が台形で、厚みが器壁の厚さと同じ２ｂ類であるが、（12－3）・（13－8）は断面がM字形で高さがやや低い３ｃ類に分類されよう。外面調整は、（12－4）（13－5）でもそうであったように１次調整のみで２次調整のヨコハケはみられない。なお、（12－3）には、ヨコハケがみられるが、調整の切り合い関係から、タテハケの前に、ヨコハケが施されていることが判る。

内面調整は、静止痕のあるヨコハケが主として行われており、成形の段階における指頭押圧も確認できる。また、（12－2～4）の体部においては、静止痕のあるナナメハケが下から上方向に行われていることが確認でき、いずれもタガ下端部の内面において顕著にみられる。また、内面には調整が行われているのにも関わらず、粘土の輪積みによる接合痕が観察できるので、前述の（13－5）と同様に接合痕を消すことをあまり意識しなかったものと考えられる。

さて、以上の円筒埴輪のうち、破片が比較的大きい（12－1）～（13－5）の５個体については粘土の輪積みの状態が観察できる。また（12－2）以外ではその粘土紐の１単位の幅が判る場合もある。すなわち、（12－1）は２cmと一定の幅を示している。（12－3）は、一箇所でその幅が観察できるのみであるが、4.5cmの数値が得られる。（12－4）は不明瞭ながら２～３cmで粘土の接合痕が見える。（13－5）では約2.5または約５cmの幅の粘土紐が視認できるが、おそらく2.5cmを１単位とする粘土紐であったのであろう。

ところで、これらの粘土紐の接合痕には、特にその箇所で器壁のラインに変化点が生じ、上位から粘土が塗り込められた状態になっているものがある。これはある程度粘土を乾燥させてからさらに粘土を積み上げていくために生じるもので、ここからいわゆる乾燥単位（赤塚 1979）を抽出することが可能である。（12－2）の下端近くに、（12－3）のタガの下位に、（12－4）の１段目中央付近・１段目タガ付近・２段目スカシ上位付近に、（13－5）の１段目および２段目のタガ付近に、それぞれ見える接合痕は、この乾燥単位での接合である。これによれば乾燥単位の粘土帯の幅は（12－4）では約６～約９cm、（13－5）では約13cmを測る。なお、（12－4）の１段目タガ付近の乾燥単位での接合痕は特にナデによって消えている。これは、このような接合痕を意識的に消そうとしたものかもしれないが、外面にタガを貼り付ける際に内面から器壁を支持する目的もあって、結果的に内面のこの箇所が平滑になったとも考えられようか。また、（13－5）では、内面に残る乾燥単位の接合痕を境に内面の調整技法が変化している様子が観察できる。

次に、これらのほか形象埴輪の一部分と考えられる破片が１点あった。（13－9）であるが、外面に粗いハケメがみられ、このハケメが鳥形埴輪もしくは水鳥形埴輪の羽を表現している可能性も考えられる。ただ、残存している部分が少ないため部位の特定は難しい。

さて、以上の円筒埴輪及び形象埴輪について、その焼成をみると、いずれも概ね良好で（12－1）・（12－3）・（12－4）・（13－5）には黒斑が観察できる。他の破片については、それが認められないが、それは残存した部分によることで、本来はやはり黒斑を有していると思われる。

埴輪の時期については、タガの断面などの形態をみると室宮山古墳のそれ（木許・藤田 1996、

藤田・木許 1999）と近似しており、川西編年第Ⅲ期併行とみられる。ただ、外面調整が１次調整のタテハケが主体で、新しい要素であるヨコハケが顕著にみられない。この点では第Ⅲ期の特徴に該当しないが、群集墳中の古墳であるという状況を鑑みると、古い段階の埴輪であっても、２次調整が省略される場合もあると考えられないだろうか。ここでは、出土埴輪は、有黒斑であることと、上記のタガの断面形態、（12－4）のスカシ孔の共通点などから、室宮山古墳と併行するとして、川西第Ⅲ期併行と考える。

第５節　巨勢山４６２号墳

１．位置と墳丘

巨勢山 462 号墳が立地している地点は、ことのほか旧地形の崩落や土砂流出が著しく、現状での尾根線上は幅１～ 1.5 m程の狭い平坦面があるのみである。このため、古墳の大部分はすでに消滅していることが自明であったので、トレンチを設定することで、残存状態を確認するとの調査方針が立てられた。

巨勢山 462 号墳は、461 号墳に北接して立地している。現状での両墳の墳頂部の比高差は５m以上あるが、本墳の本来の墳頂部はさらに高かったことが想定できるので、その差は現状ほどにはなかったとみられる。一方で、北側に所在する 463 号墳との間にはやや直線距離をおき、463 号墳がその南側斜面に高さ３m程のカット面を造って墳丘を区画していることもあって、463 号墳とは隔絶した景観を成している。このようなことで、巨勢山 462 号墳と 461 号墳は、２基の古墳で小支群を形成しているともみえる分布状態になっている。

さて、本墳の墳丘は、前記のようにそのほとんどが失われている。結果的に埋葬施設の痕跡や、盛土についても全く検出されなかった。461 号墳に近い南端部は、より旧地形を残しているといえるが、それでも、現状での尾根上で幅３m程の範囲に限られる。しかし、ここに、墳丘の南側の尾根上背後斜面に対するカット面を検出した。墳丘の区画を意図した周溝に繋がるものである。高さは１m弱であったが、下端での長さは 2.8 mが残っていた。図 14 上段のトレンチ配置図にはトーンを入れて示している。また 461 号墳との位置関係は図 10 上段図を参照されたい。

このカット面の北側で、墳丘の南端を画する傾斜変換点がみられる。すなわち図 14 上段のトレンチ配置図に示したコンターラインを見ると、標高 162.25 m付近より北側は傾斜がやや急になって立ち上がっている。これが墳丘の立上がりであると理解される。これに対応する北側の墳丘端は、図 14 中段の墳丘断面図によって観察できる。地山の起伏を辿っていくと、Ｂ－Ｃ間の中間付近に南から下ってきた斜面の傾斜が緩やかになるポイントがある。この地点を北側の墳丘端とすると、上段図の地形測量図に僅かに見えるコンターラインの流れとも矛盾しない。

図 14 下段の墳丘断面図に示した「墳丘端」間の距離を測ると、約 11 mとなる。本墳は特に西側の大部分が崩落しているので、本来の墳丘径はこれよりもさらに大きいものになる。どれほどの

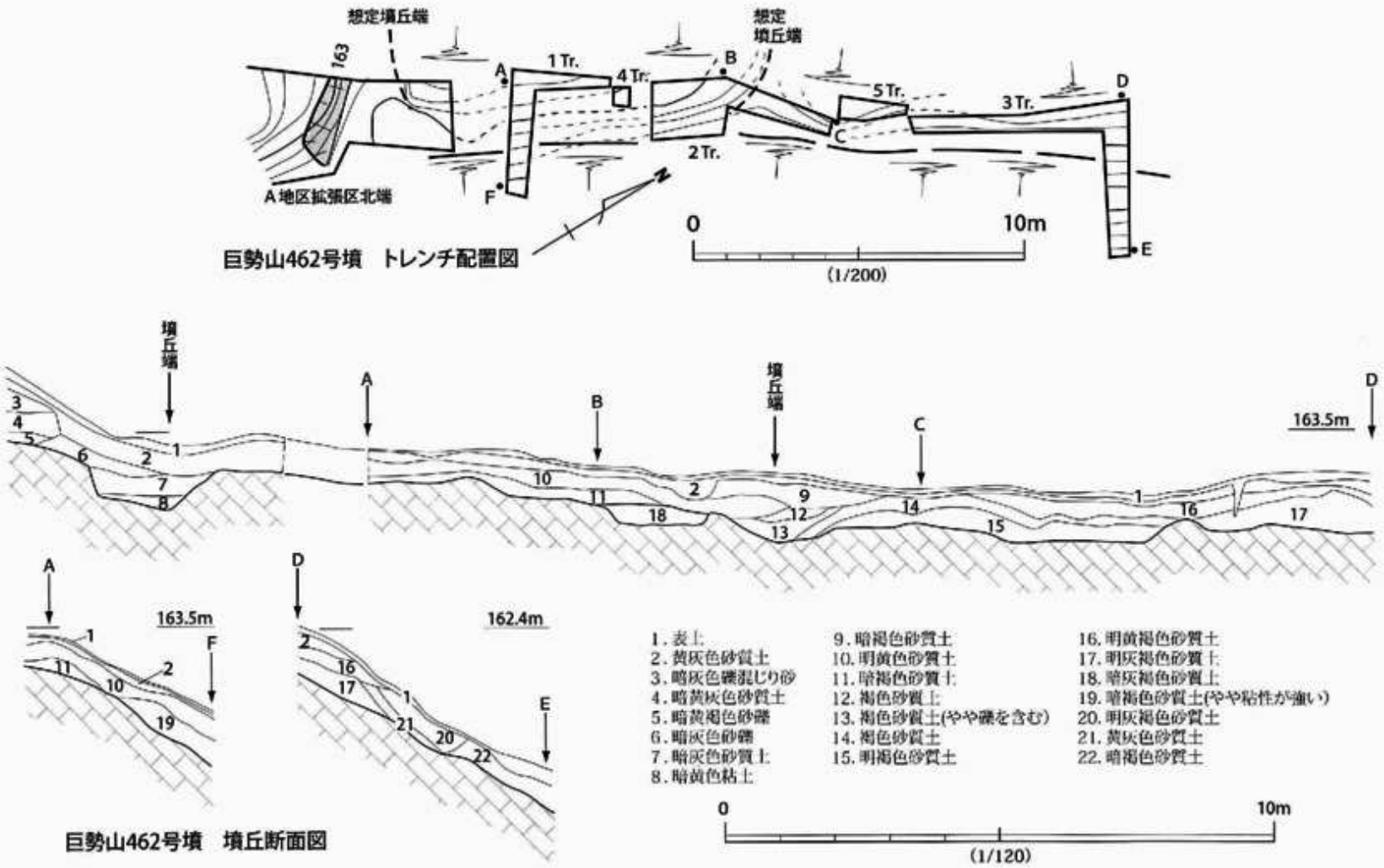


図14　巨勢山462号墳　トレンチ配置図(S.=1/200)・墳丘断面図(S.=1/120)

崩落があったのかによるが、本墳は、本来南北径は10数m強の円墳であったと考えられる。

なお、図14下段の墳丘断面図で、B地点のすぐ左側に、地山面に掘られたとみられる不自然な落ち込みがある。これについては、旧地形自体の残存状況がきわめて悪いなどの条件もあって、遺憾ながら平面では検出されなかった。断面図から判断すれば、古墳の本来あった盛土下に掘られた可能性もある。そうであれば、この尾根上に存在した弥生時代の高地性集落である巨勢山境谷遺跡に関わる何らかの遺構であった可能性もあるが、実態は明らかにならなかった。

2．出土遺物（埴輪）

巨勢山462号墳出土埴輪の実測図は図15・16に掲げた。いずれも墳丘流出土中からの出土で主に南周溝・第1トレンチ・第2トレンチ（図14）で検出した。これらは、原位置を保っていない破片資料でその多くは細片化している。462号墳の南側のやや高所に461号墳が隣接しているので本来は461号墳のものであったものが含まれている可能性も考えられる。出土埴輪の総数は、破片を1点と考えると130点ある。なお、実測図に掲げた遺物の個々の詳細については出土埴輪観察表（146～148頁）に記載しているので参照されたい。

（15－1・2）は朝顔形埴輪片であろう。（15－1）は口縁端部とみられる。（15－2）は肩部にあたる。（15－1）の外面調整は器表面の摩滅のため内外面の調整は不明確である。（15－2）の外面にはタテ方向のハケメがある。内面は調整が行われておらず、接合痕跡が明瞭に残っている。また、（15－2）は器壁の厚み1.5cmに対して、突帯の高さは1.8cmを測り、（15－6）を除く他の個体に比較しても突帯の突出度が高い特徴を見て取れる。この部位が通有のタガとは異なっている所以でもある。なお、（15－6）は、体部のタガの部位に相当し、（15－2）の肩部の突帯とは異なるが突出度が高い。この2点は、胎土、焼成、色調が類似している点に加えて、内面が調整されていないことからみても同一個体の可能性がある。ただ、それぞれの残存部分からの復原径が異なるのでここでは別個体として扱ったが、同一器種である可能性はなお考えられよう。

円筒埴輪の口縁部の形状が判るものは（15－3～5）で逆L字状であるⅠ類と直立しているⅣ類の2種類がみられる。

タガの断面形態が判るものは（15－6～13）で、断面がM字形でタガの高さが器壁より厚い3a（15－6）・断面が方形で器壁の厚さと同じ1b（15－8～10）・タガの高さが器壁の厚さと同じ2b類（15－7・11・12）がみられ、1b類の割合が高い。前述したように（15－6）についてのみタガの突出度が高く、3a類である。

（15－6～12）についての外面調整は、残存部分が少ないため不明瞭であるが概ねタテハケが主体で2次調整が行われた個体は見出せない。但し、（15－9）はスカシ孔下端付近にヨコハケが見られるが、詳細は不明瞭である。内面調整は、（15－7）では静止痕のあるナナメハケがみられるが（15－6）は、粘土紐の接合痕跡が明瞭に観察でき、少なくとも残存部分に関しては調整が

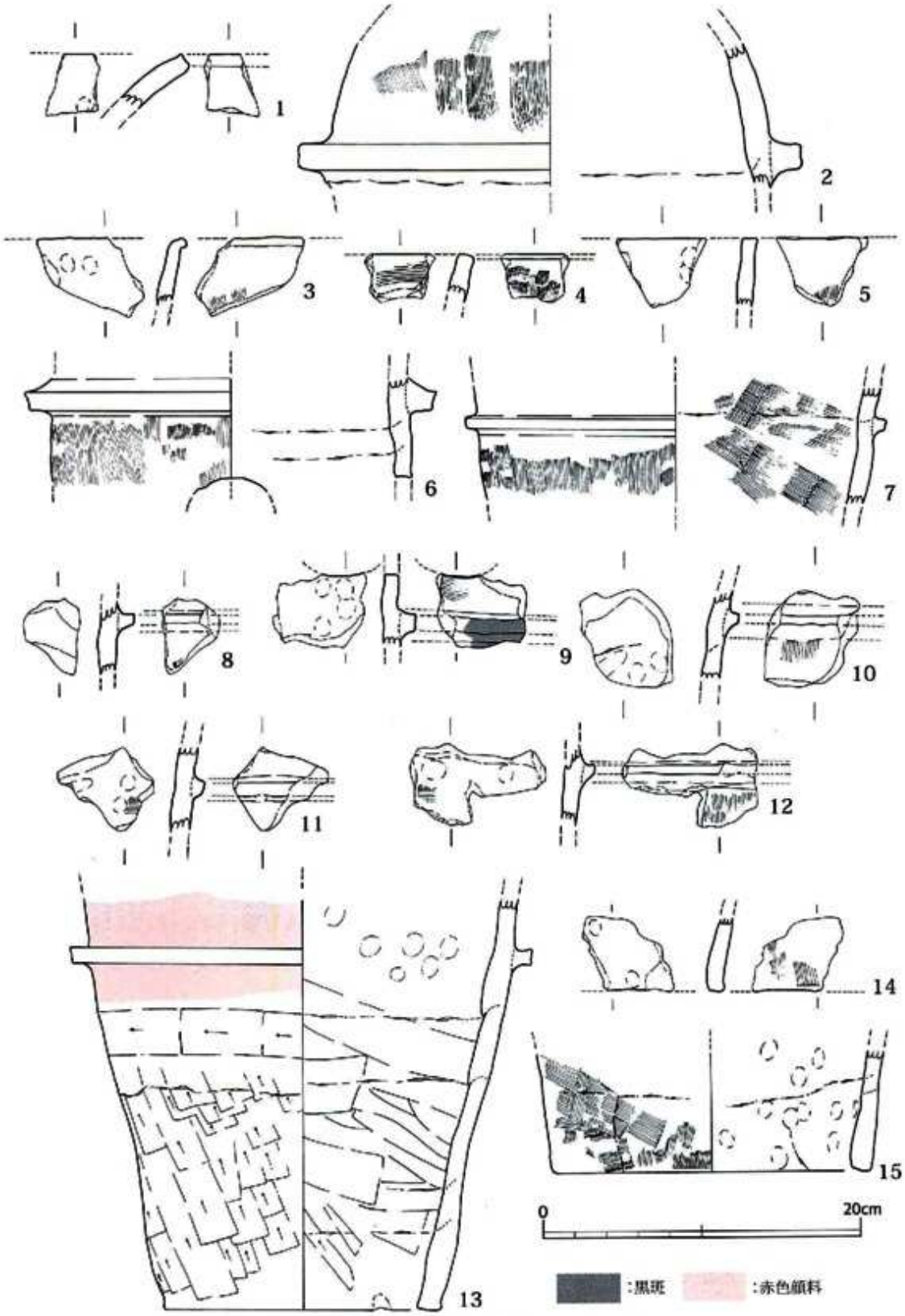


図15　巨勢山462号墳　出土埴輪 1　(S.=1/4)

行われていない。前述したように、この点は（15－2）においても同じことが言える。スカシ孔は（15－6・9）でみられ、それぞれ3.3cm・5.4cmの直径が復原でき、いずれも円形であると思われる。

底部の形状が判るものは（15－13～15）である。

（15－13）は、底部は完周せず1/6が残存するのみであるが、1段目および2段目のごく一部が残存している。1段目の高さは23.4cmを測る。1段目上部から2段目残存部に赤色顔料が確認できる。外面調整は1段目においては板ナデが行われており、上部ではヨコ方向に、下部ではナナメ方向で行われている。また、底部から14cm付近においてはこの調整が繰り返されている箇所がある。この付近には乾燥単位（赤塚1979）に当たる粘土帯の接合痕跡が残っている。その一方で内面には下半部は板状工具を使用して粘土をかきとった痕跡が認められる。この調整は砂粒の動きから原則として下から上方向に行われていることが判る。内外面とも工具幅が確認でき、いずれも2.9cmである。またタガ付近より上位には指頭圧痕が見られる。この個体の粘土の輪積みを観察すると、1段目においては内外面とも調整が丁寧に行われているため不明瞭な点も多いが先述したように底部から14cmの外面に明瞭な接合痕跡が見え、これが乾燥単位の一つであると考えられる。ただ、内面を観察していくとその単位の4cm上位にも深い接合痕跡が見える。これも間隔は短いとはいえ、乾燥単位の一つであろう。

（15－15）の外面調整は主にタテハケが行われている。（15－15）の内外面には、底部から3.4cmの高さで、縦方向に粘土の接合痕が見えている。一般に円筒埴輪は、粘土紐の輪積みによって形成されるが、この縦方向間の接合痕は、最下の粘土紐が輪状に形作られる際にその両端を接合した際に生じたものである。また、その接合痕跡付近には静止痕のあるナナメハケが行われているが、これはこの痕跡を消す意識が働いたものと考えられる。

底部の形態はいずれも外側に開く2類であるが、底端部は（15－13）は外内両方に粘土がはみ出て撥形になっているa類、（15－14）は外側に粘土がはみ出ているb類、（15－15）はきれいに調整されているd類で個体差がある。底部径は（15－13）が17.4cm、（15－15）が20.0cmを測りいずれも小型品である。

（16－16～23）は形象埴輪片である。

（16－16・17）はいずれも盾形埴輪の盾面にあたる。（16－16）は断面図示状態左端に剥離面が見え、ここに円筒部が接合されていたと考えられる。盾面には残存部に5本の沈線が確認できる。上の2本と中の2本はそれぞれ一対になって1組の沈線を成している。この状況から、下の1本も元はやはり2本1組になっていたのであろう。各組の2本は平行線とみられるが、中の2本は図示状態左側の幅がやや狭くなっており、必ずしも平行ではない。残存部が狭小で部分的な特徴であるとも思えるが、定かではない。また、上と中の2組の沈線同士は平行しておらず、下の1本もまたこれらとは平行しないで斜め方向に刻まれている。

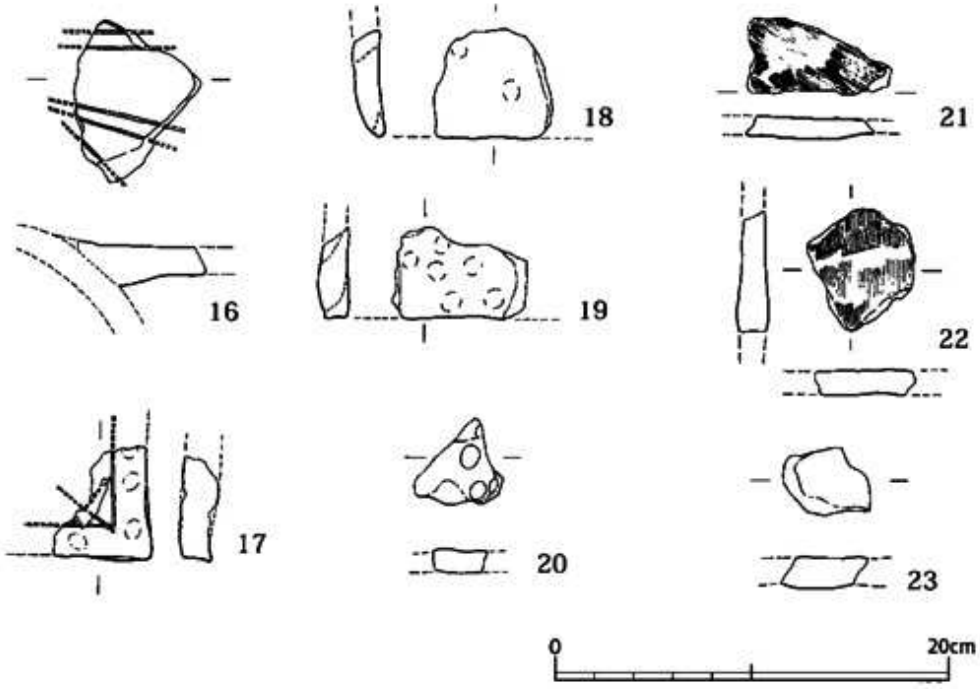


図16　巨勢山462号墳　出土埴輪2　（S.＝1/4）

（16－17）は盾面の右下隅にあたる。縦方向と横方向に内区と外区を分ける沈線があり、その外側に、側辺には幅 1.6cm、下辺には幅 1.5cm の無文帯が存在している。内区には、内外区を分ける沈線の交点を通って、斜め方向の沈線が刻まれている。裏面には下辺から 1.2cm 付近に円筒部分から剥離したとみられる痕跡が確認できる。なお、外面の無文帯に見られる指頭圧痕はその接合の際に生じたものであろう。

（16－18・19）は家形埴輪の屋根の軒先部分であろうか。いずれも外面は平らになるが、裏面は丸みを帯びている。表面には指頭圧痕が見られるが、裏面は調整されていない。

（16－20～23）は板状の破片で、器種の特定が難しい形象埴輪片である。（16－21・22）は表面にハケメが見られる。

以上の円筒・朝顔形・形象埴輪の焼成についてみると、堅緻なものと軟質なものにわけられるが形象埴輪の焼成は概ね良好である。また（15－9）の外面には黒斑がみられる。他の破片については、それが認められないが、それは残存した部分による点が大きく、本来は黒斑を有していたと考えられる。

これらの埴輪の時期であるが、個体差はあるもののタガの断面形態が 461 号墳・室宮山古墳のそれ（木許・藤田 1996、藤田・木許 1999）と近似している点や、有黒斑である点から川西編年第Ⅲ期併行とみられる。ただ、外面調整が 1 次調整のタテハケが主体で、新しい要素であるヨコハケが顕著にみられない点で古い様相を示している。しかし、461 号墳の出土遺物の項でも前述し

たように、群集墳中の古墳であることを考えると、新しい段階の埴輪であっても、２次調整が省略された可能性も考えられよう。

さて、これらの埴輪は冒頭で前述したように、破片が小さいため全体像が判りにくい場合が多いが、（15－7）のように外面調整など461号墳の埴輪と同様の特徴を示すものがあって、これらは古墳の位置関係からみても461号墳から転落したものかもしれない。特に、尾根を掘込んだ南周溝にでは、その可能性が高いことは考慮しておく必要があるだろう。ただ、今回462号墳出土遺物として掲げた埴輪の検出地点を見ると461号墳とは反対側の墳丘北東斜面にあたる第２トレンチからの出土もあること、そして朝顔形とみられる（15－1・2・6）のような特徴を持つ埴輪は461号墳では見られないことから、462号墳についても本来埴輪を樹立していたとみられる。

第６節　古墳時代以外の遺構と遺物

Ａ地区では、巨勢山456号墳の北東裾付近の斜面で、幅1.2～1.5ｍ程の平坦面が検出された。図３の地形測量図にトーンで示した箇所がこれに当たる。

この地点の表土および斜面上位からの流出土を除去すると、炭化物混じりの土層が、厚みは薄いながらもある程度の広がりがあることが見え始めた。また、この炭化物混じりの土層を除去するとの下層堆積土中から図17に掲げた（17－1～13）などの土師器や瓦器などが出土した。しかしこのような遺物はいずれも平坦面の直上にあるものではなく、上位の堆積土中に含まれるもので、一括性の高いものでもない。炭化物混じりの土層を認めた時点から、何らかの遺構が存在することが予想されたので、特に注意して精査したが、測量図にも見えるように周辺部が急な斜面になっていて土砂流出が相当あったらしいことも影響して、結果的に遺構の性格を必ずしも明確にしえたとは言えない。

図３の測量図に示した遺構の形状をみると、平坦面の南側が１ｍ弱の段になって高くなっている。この段のさらに南側は、コンターラインに見られるようにやはり細長い平坦面になっている。一方、北側についても、コンターラインがやや乱れるものの、やはりその幅が広くなっている様子が看取される。調査地区自体の幅が狭く旧地形を留めている面積も狭い状態で、平坦面のさらに南北方向の延長は不明であるが、ここではこのような状態から、この平坦面はこの部分に地山をカットして形成された「道」の一部分が残存したものと考える。その場合平坦面の南側に見える段は、比高差のある山道を削り出していく時に、何らかの事情によりスロープではなく階段状の段差になったものであろうか。埋土上位にある炭化物混じり層についてはなお解釈が難しいが、平坦面が埋没してから後に堆積したものであるから、平坦面と関連のあるものでもないだろう。だた、この地点は、急な斜面地にありながらも、一旦平坦面が形成された部分に土砂が堆積したものであるから、幾分傾斜が緩やかにはなっている。このような傾斜の変換地を利用して焚き火などが行われたのであろうか。その実態は不明とせざるを得ない。

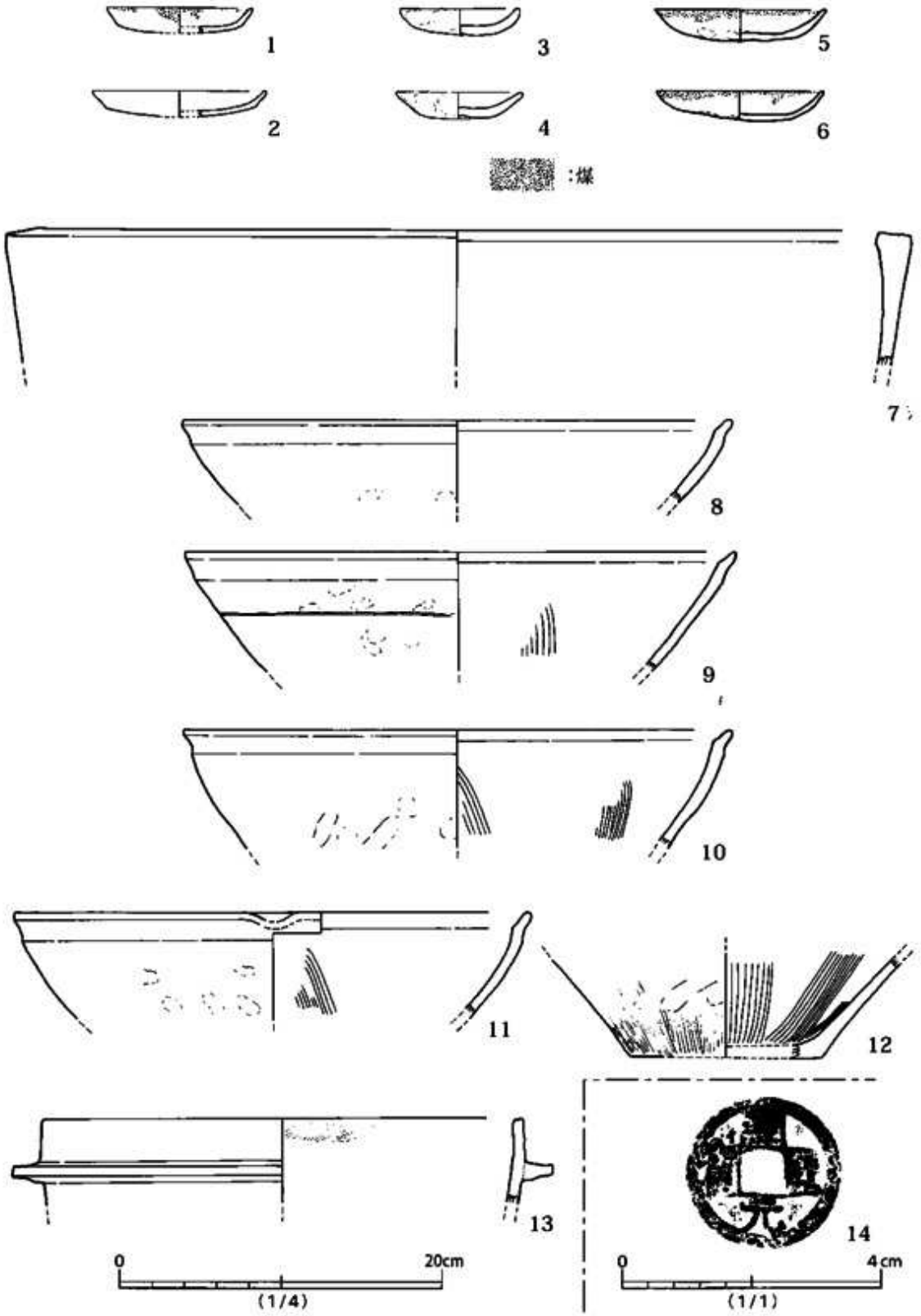


図17　A地区　古墳時代以外の遺物　（S.=1/4・1/1）

出土遺物は、図17に掲げた。

（17－1～6）は土師器小皿である。（17－3・6）が完形であるほか、（17－1・5）は1/2程から、（17－2・4）は1/4程から口径を復原図化した。口径は（17－3）が7.6cm、（17－4）が8.0cmとやや小さいが、他は概ね10cm前後である。口径の小さい（17－3）と（17－4）は底部が僅かに上げ底状になっており、また（17－1・5・6）の口縁部の内外には煤が付着している。このようなことから、口径の差は器種の差に対応していると思われる。

（17－7）は瓦器甕もしくは釜であろうか。口縁部の1/7が残存しており、それからの復原口径は52.2cmになる。（17－8～12）は瓦器擂鉢である。残存率はあまり良くなく、（17－8）は口縁部の1/12程、その他は1/5～1/6程から口径ないし底径を復原図化した。復原口径はいずれも32～34cm程になる。口縁部の形態がわかるものは、いずれも口縁端部付近に強いヨコナデが施されて、その部分で屈曲して外反している。（17－13）は土師器釜である。口縁部の約1/12から口径を復原図化した。復原口径は30.0cmである。

以上の出土遺物のうち、土師器小皿などは型式変遷があまり著しくないので特定の時期に絞り込むのは難しい。瓦器擂鉢の口縁部に注目すると、おおよそ16世紀中頃のものとみられよう。また、少数ながら土師器皿や瓦器擂鉢など、器種ごとの型式差はほとんどない見受けられないので、小皿、釜なども、この擂鉢と併行するほぼ一時期を示していると見なしえよう。

これらの遺物は、上記のように地山を削り出した平坦面の直上にあったのではなく、平坦面の上位堆積土中から出土したものである。したがって、厳密にはこれらの遺物が平坦面の形成時期を示すものとは言えない。しかし、一方でこのような急傾斜地にあっては、上方からの土砂の流入が絶えず起こっているのであろうから、平坦面の形成後に長期間にわたって土砂が堆積しない状態が続くとも思えない。すなわち、これらの遺物は平坦面のおおよその形成時期を示していると考えて大過ないだろう。

また、以上の平坦面上の堆積土中以外の遺物として、巨勢山456号墳東斜面で開元通寶（17－14）が出土した。直径2.4cmを測る。重量は1.9ｇである。

第４章　Ｂ地区の調査

第１節　巨勢山４５９号墳

１．位置と墳丘

巨勢山458号墳が位置する地点から派生して東方向へ伸びる尾根に459号墳、460号墳が築造されている。458号墳を含めた支群とは急な斜面で隔されており、それらと区別されて小支群をなしている。現地調査において、458号墳から459号墳へ下る斜面の部分が高さ１ｍ程しか検出されなかったのは遺憾であるが、458号墳の裾から標高を10ｍ程下げたところに直径8m程の平

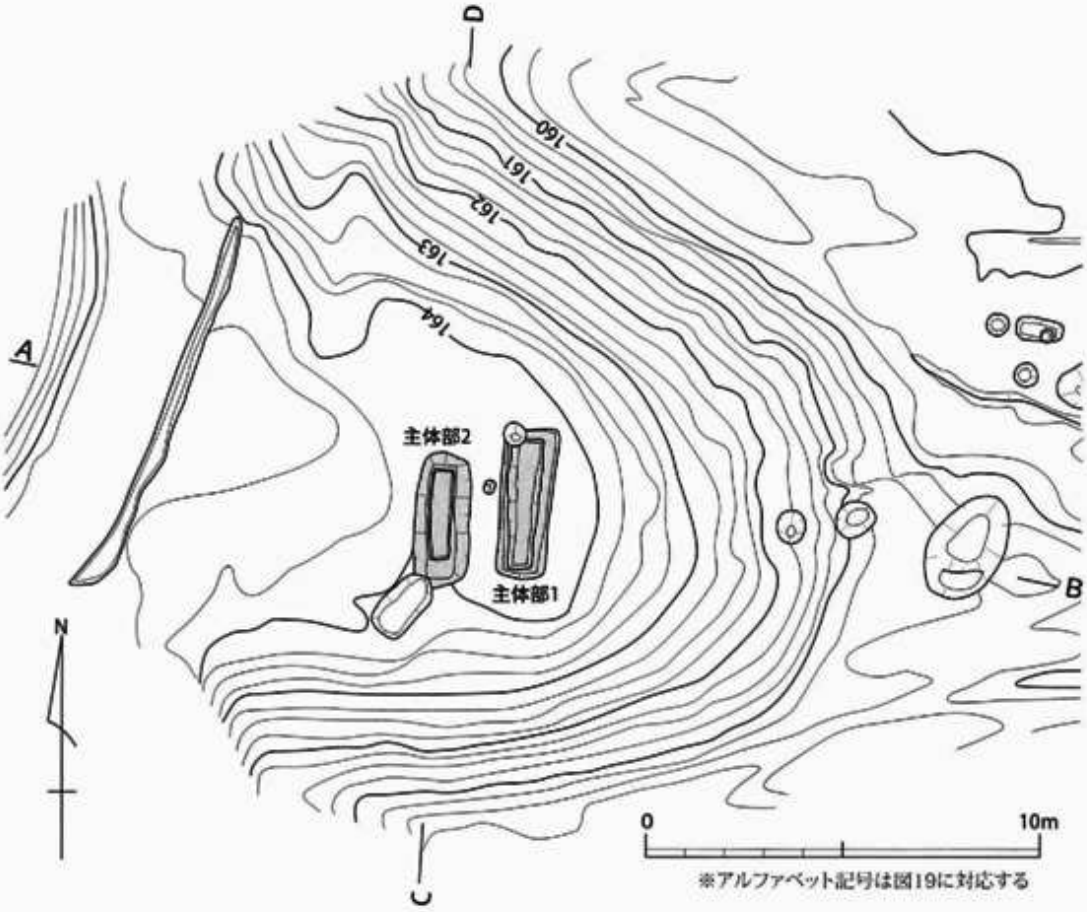
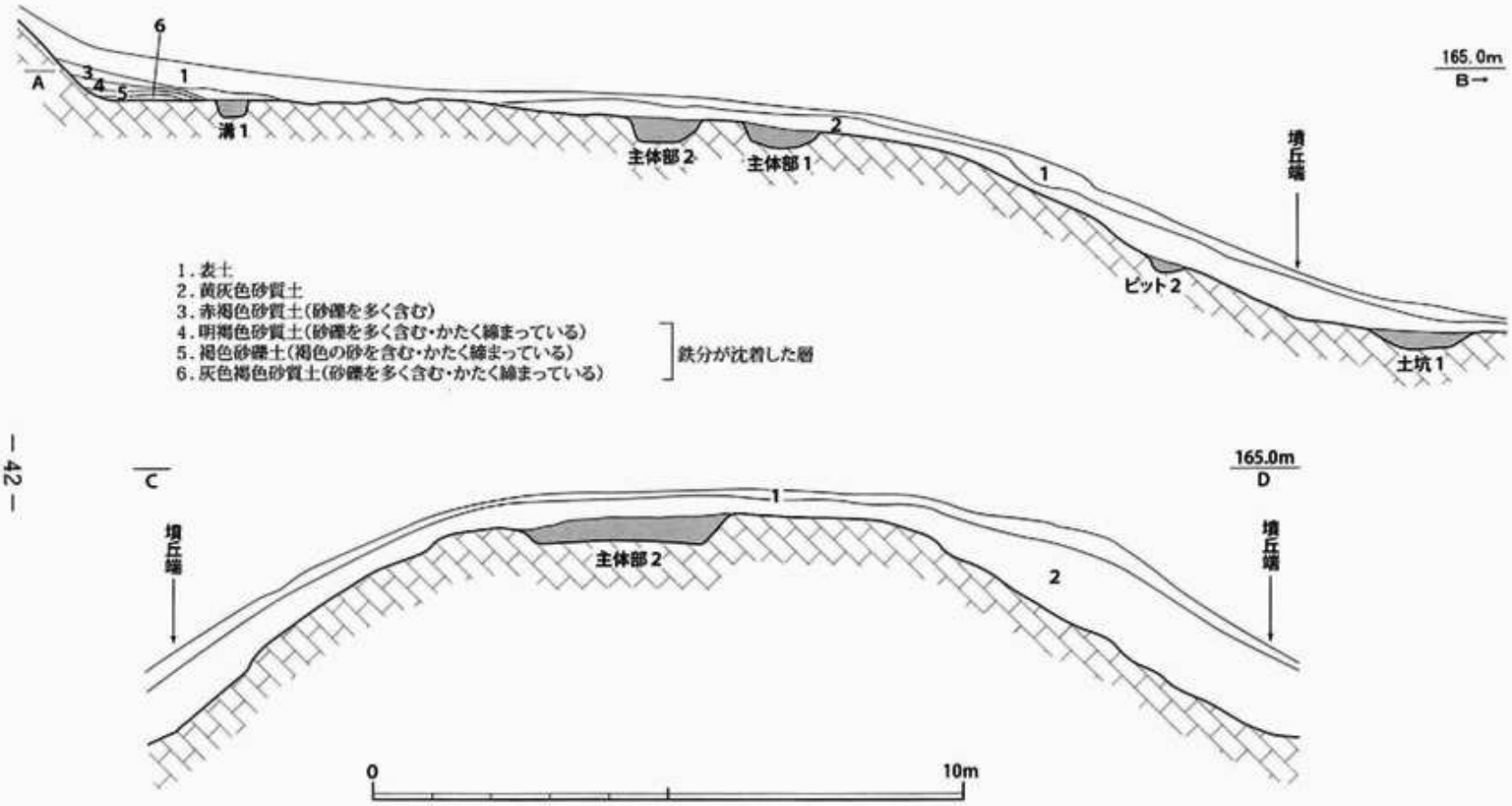


図18　巨勢山459号墳　墳丘測量図　（S.＝1/200）

坦面が見られ、それが 459 号墳の現状での墳頂部となっている。

図 18 の墳丘測量図に示しているように、墳丘東側は 160.75 mあたりで傾斜の変換がみられ、墳丘端であると判断できる。墳丘の南北斜面については急な斜面になっているため墳丘の一部が流れており、流土が厚く堆積していた。それを除去したところ地山面が現れ、墳丘北側では標高 160.00m 付近、墳丘南側では 160.50m 付近で傾斜変換点が確認できた。それらがいずれも墳丘端を示していると考えられる。墳丘西側は上記のように 458 号墳から下る急斜面になっているが、その下端は通有のように周溝になっていない。この部分には中世に溝 1 が掘られており、その時点までに周辺部が削平されていたことが判る。そうであれば本来ここにあった古墳の周溝はやはりこの時に削られたのであろうか。ただ 164.00 mや 164.25 mのコンターラインに表れているように、墳丘北西側や南西側で僅かながら谷地形がみられ、これらを手がかりに周溝の存在を想定することができる。また、古墳の墳形については墳丘東側のコンターラインが弧を描いていることから円墳であると判る。墳丘の南北両側のコンターラインは直線的であるが、これは地形の制約を受けたためであると見ることができる。それらを考え合わせると、459 号墳は直径約 17m の円墳であった



※アルファベット記号は、図18に対応する

図19　巨勢山459号墳　墳丘断面図　(S.=1/120)

と判断できる。

図19の墳丘断面図のとおり流土を除去した時点で地山に掘り込まれた主体部が現れ、この古墳の盛土は確認できなかった。先述したように中世までに墳丘が削平されていることから、盛土もその際に削られたものと思われる。

主体部は墳頂部のほぼ中央に2基並んで築かれており、いずれも主軸を南北方向に向けている。両者の位置関係から主体部はあらかじめ2基築かれることを想定して墳丘を成形していたものと思われる。どちらの主体部が先行するものか、あるいは同時に築かれたものかは現状では判然としない。ただ、後述するように主体部1が主体部2に比べて規模の大きいことや赤色顔料が用いられていること、木棺の形式が当該期としては比較的希少例である割竹形であることなどから、主体部1が中心主体であった可能性が高い。

巨勢山459号墳の築造時期については決定づける遺物は確認できていない。しかしこの古墳の流土から須恵器蓋杯片が出土しており、ＴＫ10型式期を下らない時期に築造されたものと考えられる。

2．主体部1

墳頂部に2基ある主体部のうち、東側に築造されたものである。図18の墳丘測量図にも示しているように、主体部の主軸はほぼ南北方向を向いている。

主体部1の墓壙の上端は墳丘削平後に堆積した流土を除去した時点で検出した。墓壙はその上部が削平されており、北西隅は後世にピット3が掘られたことにより破壊されている。残存している墓壙は最大で長さ3.8 m、幅1.4 m、深さ0.3 mを測り、主軸方向における底のレベルはほぼ同一である。

割竹形木棺を直接埋葬したものとみられる。図20の横断面図にも示しているように木棺痕跡の形態が円弧を描いており、また木棺を据え付けるために墓壙の中央を掘り込んでいることから割竹形と判断した。巨勢山古墳群において割竹形木棺を直葬した例は巨勢山409号墳主体部1（木許2005）などがあるが、あまり一般的ではない。棺の主軸はＮ－2度30分－Ｅを向いている。棺の規模は検出上面で長さ3.35 m、幅は北小口部が0.80 m、南小口部が0.60mを測る。棺底部では長さ2.55m、幅は北小口部で0.55 m、南小口部で0.38mとなっており北小口部の方が広い。

また、図20の主体部平面図のとおり、両小口部周辺に赤色顔料が検出された。顔料は棺底から検出されていることから、棺底に塗布されたものと思われる。棺の北小口部が広いことや、赤色顔料が北小口部に多く分布している状況から、被葬者の頭部は北側に向けていたものと思われる。

3．主体部2

墳頂部に2基ある主体部のうち西側に築造されたものである。図18の墳丘測量図にも示してい

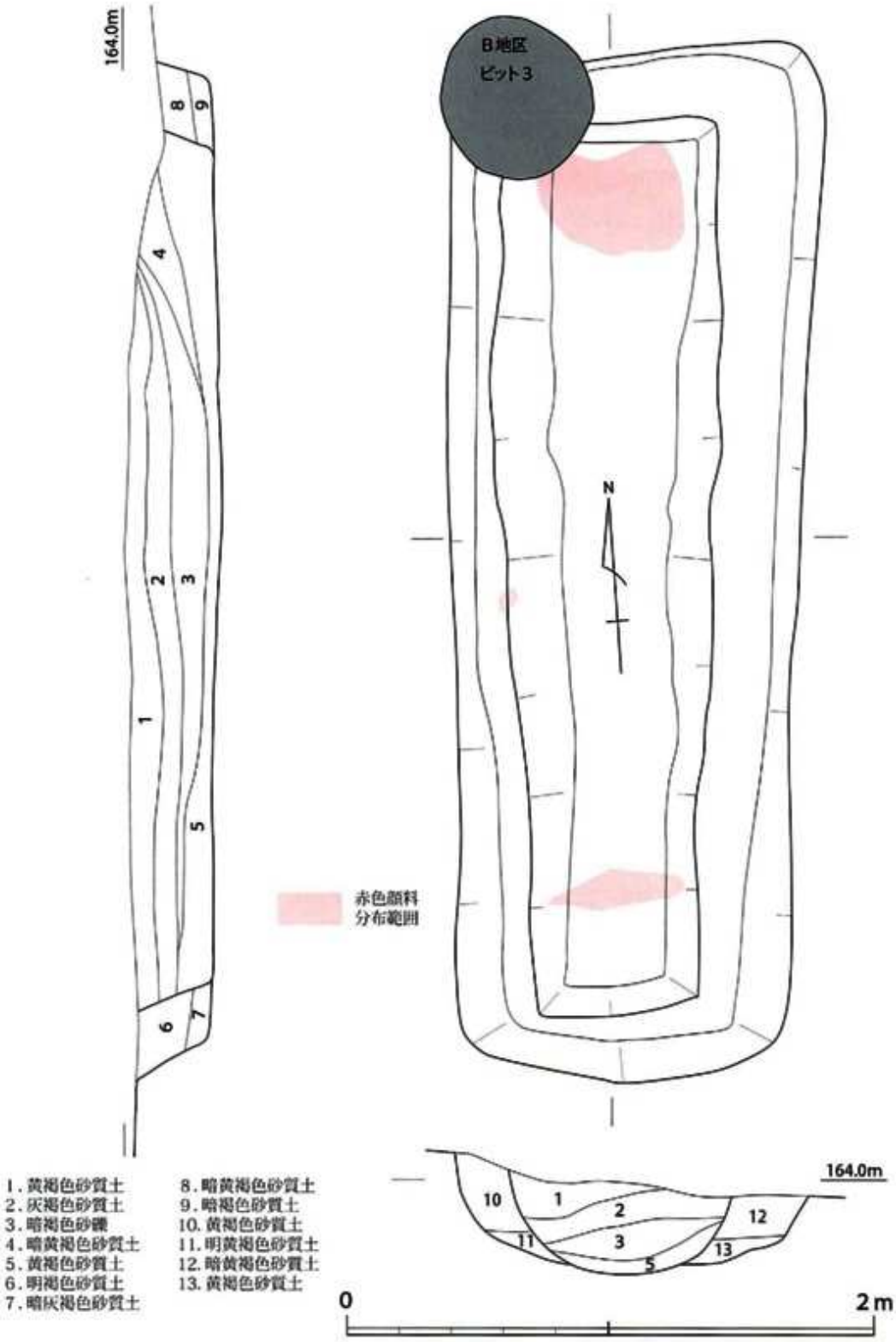
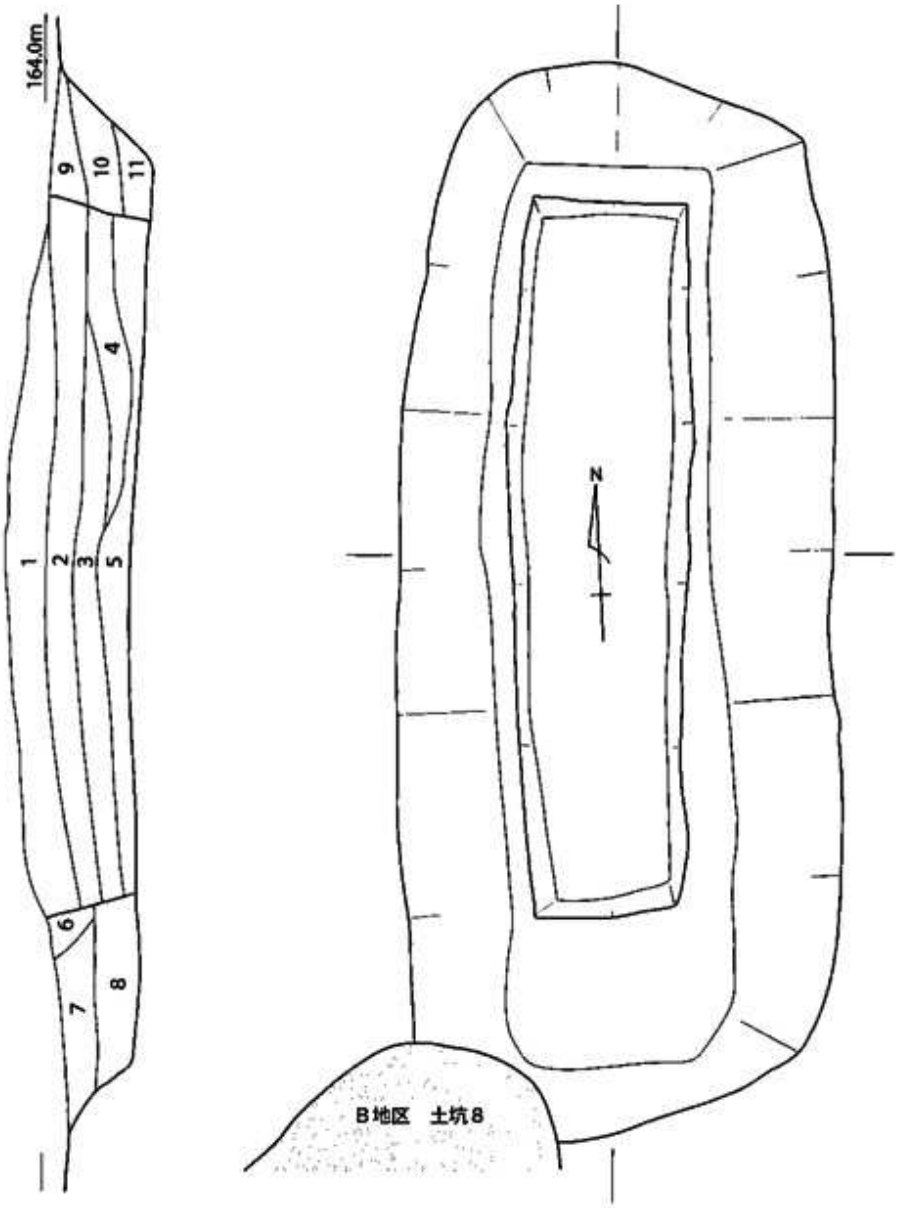


図20　巨勢山459号墳　主体部1　平面・断面図　（S.＝1/25）



1. 黄褐色砂質土
2. 黄褐色砂質土
3. 明褐色砂質土
4. 黄褐色砂礫
5. 黄褐色砂質土
6. 暗灰褐色砂質土
7. 暗褐色砂質土
8. 暗灰褐色砂質土
9. 暗灰褐色砂質土
10. 暗灰褐色砂質土
11. 暗黄褐色砂質土
12. 暗褐色砂質土
13. 暗灰褐色砂
14. 暗灰褐色砂質土
15. 暗灰褐色砂質土
16. 暗灰褐色砂礫土
17. 暗灰褐色砂質土
18. 明黄褐色砂質土
19. 暗褐色砂質土

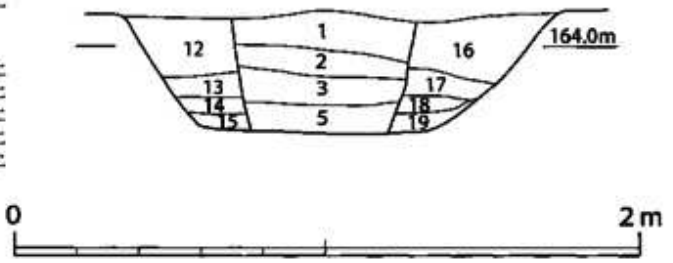


図21　巨勢山459号墳　主体部2　平面・断面図　（S.＝1/25）

るように、この主体部の主軸はほぼ南北方向を向いている。

主体部２の墓壙の上端は主体部１と同様、墳丘削平後に堆積した流土を除去した時点で検出した。墓壙はその上部が削平されており、南西隅は後世に土坑８が掘られたことにより破壊されている。残存している墓壙は最大で長さ 3.5 m、幅 1.4 m、深さ 0.4 mを測り、底のレベルはほぼ同一で平坦である。棺の主軸はＮ－３度－Ｅに向けている。棺の規模は検出上面で長さ 2.30m、幅は北小口部が 0.53 m、南小口部が 0.48m を測る。棺底部では長さ 2.20m、幅は北小口部で 0.43 m、南小口部で 0.38m となっており、北小口部の方が広い。北小口部には僅かながら棺材が残存していた。最も残っている部分で厚さ 3mm 程度と極薄い木片となっており図示できる状態ではなかったが、木目が横方向に入ることが観察できた。棺材単体で取り上げることはできなかったため周囲の土とともに採取した。

また、図 21 の断面図に示したとおり、小口部の棺の痕跡がほぼ垂直に近い角度で立ち上がっている。これは板材の残存状況を観察しても齟齬はない。巨勢山古墳群で多く見られる舟形木棺は小口板および側板が斜めに立ち上がる形状であり、この主体部の木棺の形状とは異なる。また先述のとおり、小口部には木目が横方向に入る板材が使用されていることからも主体部２は組合式箱形木棺を直接埋葬したものであったと判断できる。棺材の組み合わせの構造については、釘等の出土がなかったことから側板が内側に倒れこまないように両側板が小口板を挟む構造であったと思われる。ただし、その詳細は調査では確認できなかった。

木棺の北側がやや広めに作られていること、墓壙の北寄りに木棺が据えられていることなどから、被葬者の頭位については北向きであった可能性が高い。

４．出土遺物

棺内から検出された遺物は主体部１の鉄製刀子（22－３）、主体部２の鉄製品の破片（22－４）のみである。（22－３）は主体部１棺内南側小口の赤色顔料付近の棺底面よりやや上で出土している。鋒と茎の先端はいずれも欠損しており残存長は 8.1cm、刃部は最大で幅 1.5cm となっている。関の形状は刃部側が直線でつながり、もう一方が直角の段を有する片関である。出土状況から棺上に置かれたものが落ち込んだものとみられる。

（22－４）は断面の形態から刀子の刃部と思われる。鋒と茎の先端はいずれも欠損しており残存長は 3.3cm、幅 1.3cm となっている。主体部２棺内南小口付近の棺底面で出土している。埋葬時の原位置を保っていると考えられる。

墳丘の流土からは須恵器蓋杯（22－１・２）、鉄鏃（22－５）、刀子（22－６）、鉄鎌（22－７）、留金具（22－８）が検出されている。

須恵器蓋杯（22－１・２）については形態・調整・法量などの詳細を 155 頁の観察表に示しているので参照されたい。杯蓋（22－１）は復原口径が 14.2cm、口縁部は外方に開きつつ下方に

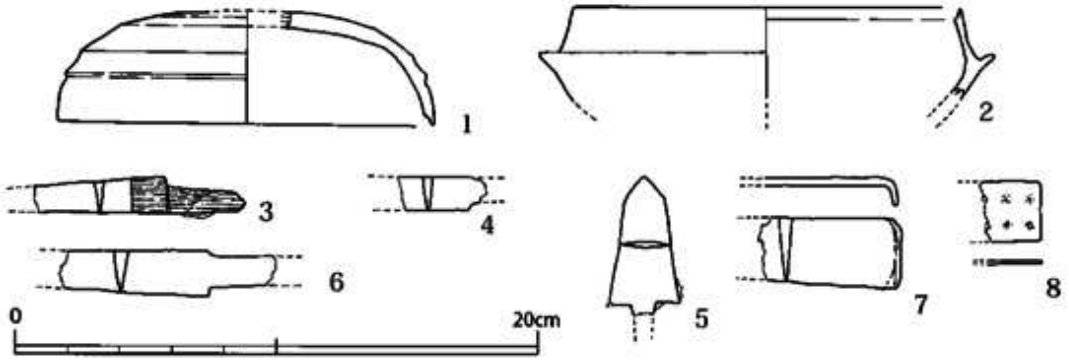


図22　巨勢山459号墳　出土遺物　（S.＝1/3）

伸びている。口縁端部は丸くおさめられ、端部内面にごく弱い段がある。天井部と口縁部の境界は僅かに突出して稜線を形成するが突出度は高くなく、下方に凹線を巡らせている。天井部の形態は扁平である。杯身（22－2）は復原口径が14.6cm、たちあがりはほぼ直線的に内上方に伸びる。口縁端部は内傾する面をなすが、その両端は丸くやや鈍い。端面の中央はごく浅い凹線になっていて窪んでいる。受け部は外上方に広がり上面は平らになっている。これらの土器を須恵器編年に照らし合わせるとＴＫ10型式期に併行するものと考えられる。

鉄鏃（22－5）は墳丘北側の流土から検出された。鏃身のみが残っており、長三角形式で断面は両丸造となっている。鏃身の大きさは幅3.0cm、長さ5.0cmであり、現状での重量は6.7gとなっている。刀子（22－6）も墳丘北側の流土から検出された。鋒および茎の先端が欠損している。関の形状は両関でそれぞれ直角の段を有する。刃部は最大幅が1.8cm、残存長が8.4cmとなっている。鉄鏃（22－7）は459号墳の東側、460号墳の間の流出土から検出された。先端を欠損しており残存長は5.4cm、背幅は4.5mmを測る。基部は約8mmを直角に折り曲げている。基部付近に木質などの遺存は観察できない。留金具と思われる鉄製品（22－8）は墳丘西側流出土から出土している。一方が欠損している。幅は2.4cm、残存長は2.4cm、厚さは約2mmである。現状では6箇所に鋲穴が通っていることが確認できる。

第２節　巨勢山４６０号墳

１．位置と墳丘

巨勢山460号墳は458号墳が位置する地点から派生して東方向へ伸びる尾根上、459号墳の東に隣接して築造されている。458号墳とこの尾根には標高差があり、隔絶した位置にあることから459と460号墳が小支群を成しているようである。別添図に示しているように459号墳の30m東側に位置しており、現状での墳頂部の比高差は4.5m程となっている。459号墳同様、墳丘の南北両側の裾は土砂の流出が著しく判然としない。墳丘北西部は後述されるように中世の遺構が築か

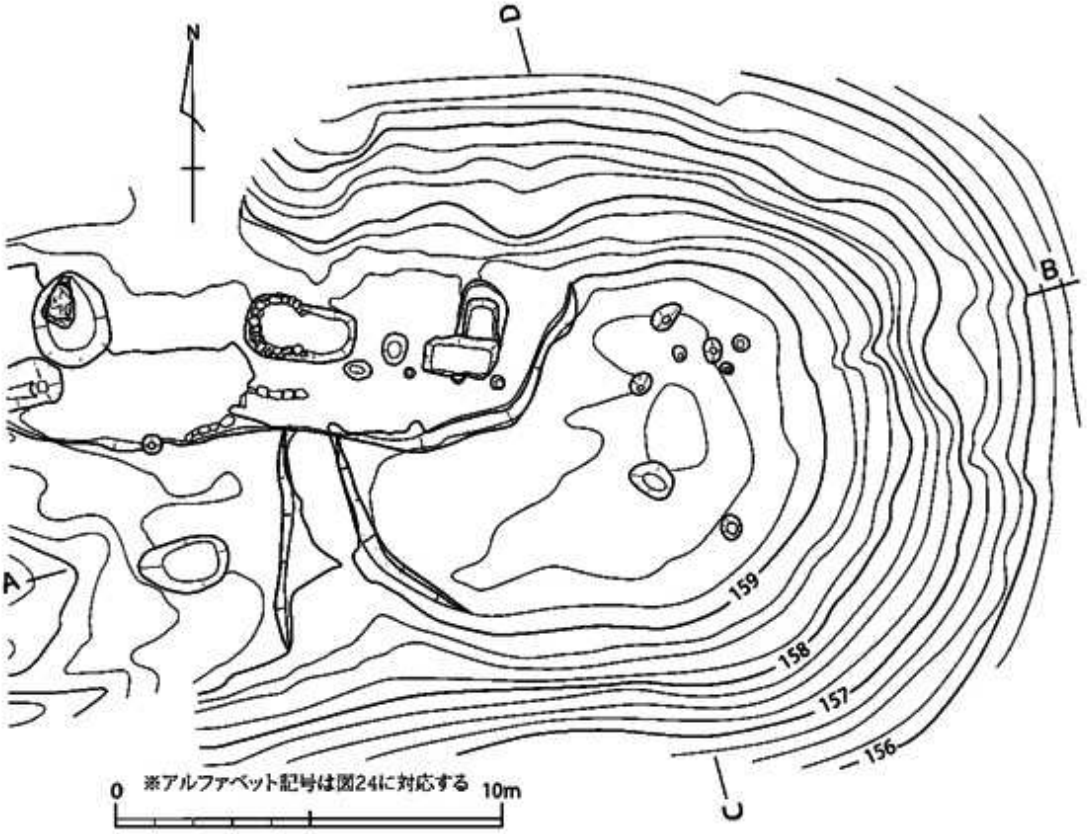


図23　巨勢山460号墳　墳丘測量図　（S.＝1/200）

れた際に削平を受けていたが、南西部では幅 2m、長さ 5.8m、現状での深さ 0.4m 程の周溝が検出できた。459 号墳から続く斜面をこの周溝によって区画している。墳丘の東側は標高 157.00m あたりでコンターラインの間隔が広くなっており、その地点を墳丘端と判断できる。

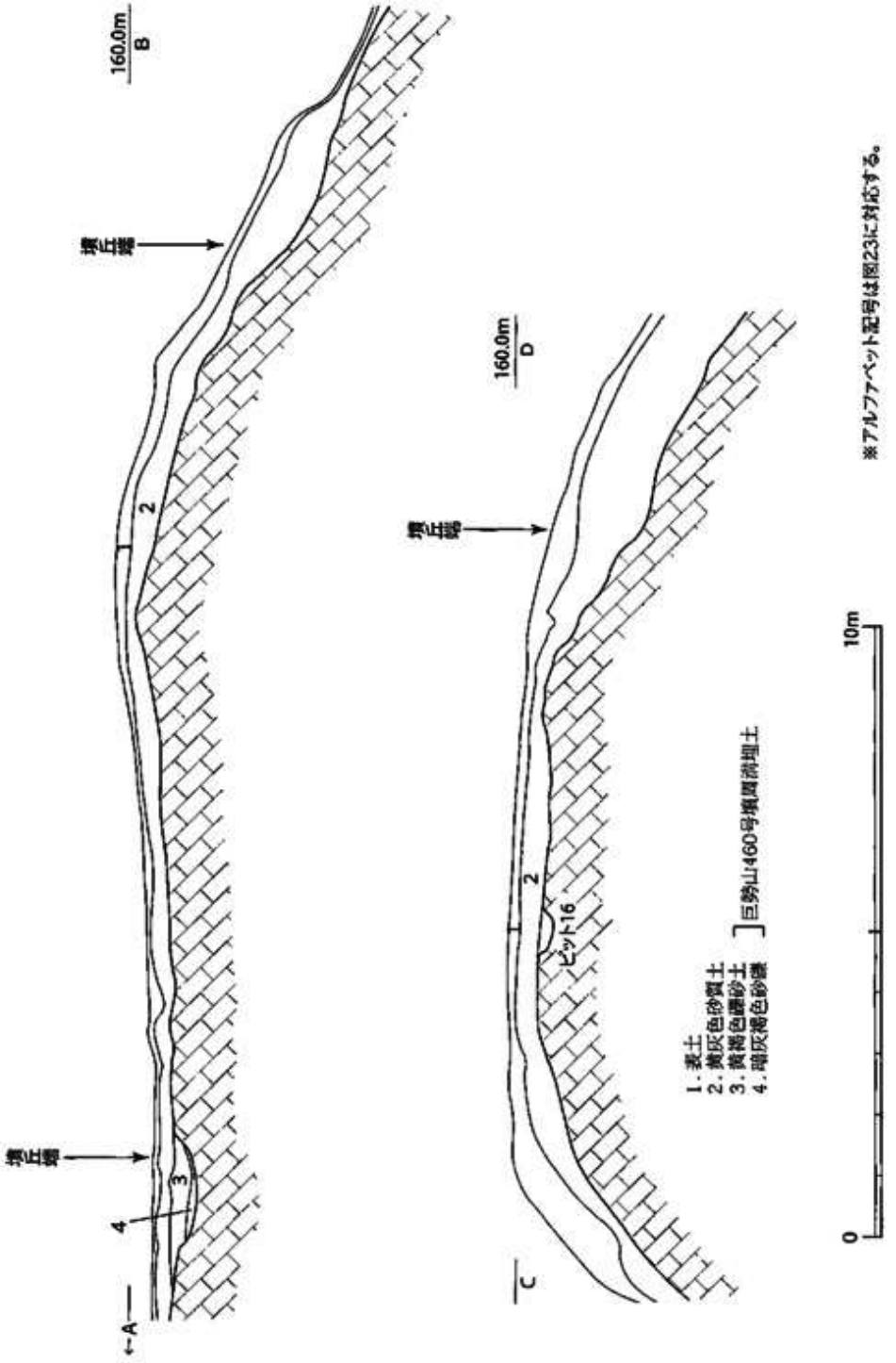
周溝は墳丘の西側から南側にかけて円弧を描いており、対応する東側のコンターラインの形状とも対応することから、復原的に考えて 460 号墳は直径約 15m の円墳であったとみることができる。

図 24 の墳丘断面図にも示しているように、墳頂部は広い平坦面をなしており西側裾部とはほとんど比高差がないほどになっている。墳丘は中世の遺構が形成された際に盛土が残存しないほどに削平されていたものと考えられる。墳頂部にあたる表土直下の地山面を精査したが埋葬施設等を検出することができなかった。

2．出土遺物（埴輪）

墳丘斜面上流土を中心に、埴輪片が比較的多く出土した。出土総数は、破片を 1 点と数えると 392 点あり、コンテナ 3 箱分にのぼるが、そのうち 69 点を図化して図 25 ～図 29 に掲げた。

埴輪は完形資料がないばかりか、むしろ細片化しているものが多い。器種は、朝顔形埴輪（25－1～4）・円筒埴輪（25－5）～（28－52）・形象埴輪（28－53）～（29－69）が見られる。



※アルファベット記号は図23に対応する。

図24　巨勢山460号墳　墳丘断面図　（S.＝1/120）

形象埴輪については、その多くは器種の特定も困難な破片ではあるが、なかには家形、人物形などの特定が可能なものもある。

それらの出土位置は、原位置を保っていたものはない。多くは墳丘斜面上に堆積した流土中に含

まれていたものである。そのうち特に北斜面の流土から出土したものは全392点中211点あって、最も出土点数が多い。そのことは、元の埴輪が墳丘のどの地点に置かれていたかを一定程度示唆するが、墳丘自体は主体部の痕跡も残していない程で、特に墳丘の北西部は後世の遺構が造られるなど削平の程度が甚だしい。このため埴輪の原位置を復原的に推測することも困難な状態になっている。このほか、西周溝から出土したものは、75点あって墳丘北斜面流土に次いでいる。この西周溝出土の埴輪には、(25－5)・(26－25・26)・(27－39)・(28－53・54) など、円筒埴輪・形象埴輪の、破片が比較的大きいものが含まれている。このことは、北斜面流土出土のものに比べると、これらが本来の原位置により近かったことを示しているだろう。

以下に図25～29に従って出土埴輪について述べるが、個々の詳細については出土埴輪観察表(148～154頁) にも記載しているので参照されたい。

(25－1～4) は朝顔形埴輪の口縁部である。口縁部の傾斜の形態が判るものについては、あまり広がらないもの (25－1) とゆるやかに広がるもの (25－2) がある。またこの2個体については、いずれも外面に赤色顔料が塗布されている。

外面調整はいずれもヨコハケを用いるがいずれも2種類以上のハケ原体が使用されたことが観察できる。(25－1) は突帯上位に条数の少ないハケ原体を、(25－2) は突帯下部に条数が多いハケ原体を用いている。後述する (26－25) や巨勢山458号墳出土の埴輪 (9－3・4) にもタガ周辺に異なるハケ原体を用いていることが確認できている。内面調整は、(25－1) が横方向のケズリを、また (25－2) はヨコハケとユビナデが行われている。

(25－5)～(28－52)は円筒埴輪である。このうち口縁部径が復原できるものは(25－5～9)・(26－16～19) である。(26－17) の復原径が26.2cm、(25－9) の復原径が35.0cmであるほかは、おおよそ30cm前後である。底部に関しては、その高さについて完存したものがないが、(27－39) や (27－42) では少なくとも、11cm以上があったことが判る。底部径が復原できるものは (27－36～44)・(28－46～49) である。その復原径は、(27－42) が16.7cmで極小形品、(27－40) が24.6cmで中形品、そのほかはおおよそ20cm前後を測り小形品である。ここでは埴輪の大きさについての個体差は少ないといえ、一定の規格が存在したことも推測できる。

タガ間隔が判るものは (25－5)・(26－25) である。(25－5) は口縁部の高さが5.5cm、上から2段目の間隔が7.7cmを測る。(26－25) は上段が7.9cm、下段が7.4cmを測る。このように2個体のタガ間隔も同様の数値を示していて、このことからも規格の存在が窺える。

さて、次に円筒埴輪について残存する部位ごとに各部の詳細をみていこう。

口縁部の形態がある程度判るものは、(25－5) ～ (26－22) である。口縁端部の形態はわずかに個体差はあるがいずれも端部を肥厚させるだけのⅡa類に分類される。なお、口縁部外面には赤色顔料を塗布するもの (25－5・11・12・14・16) がある。

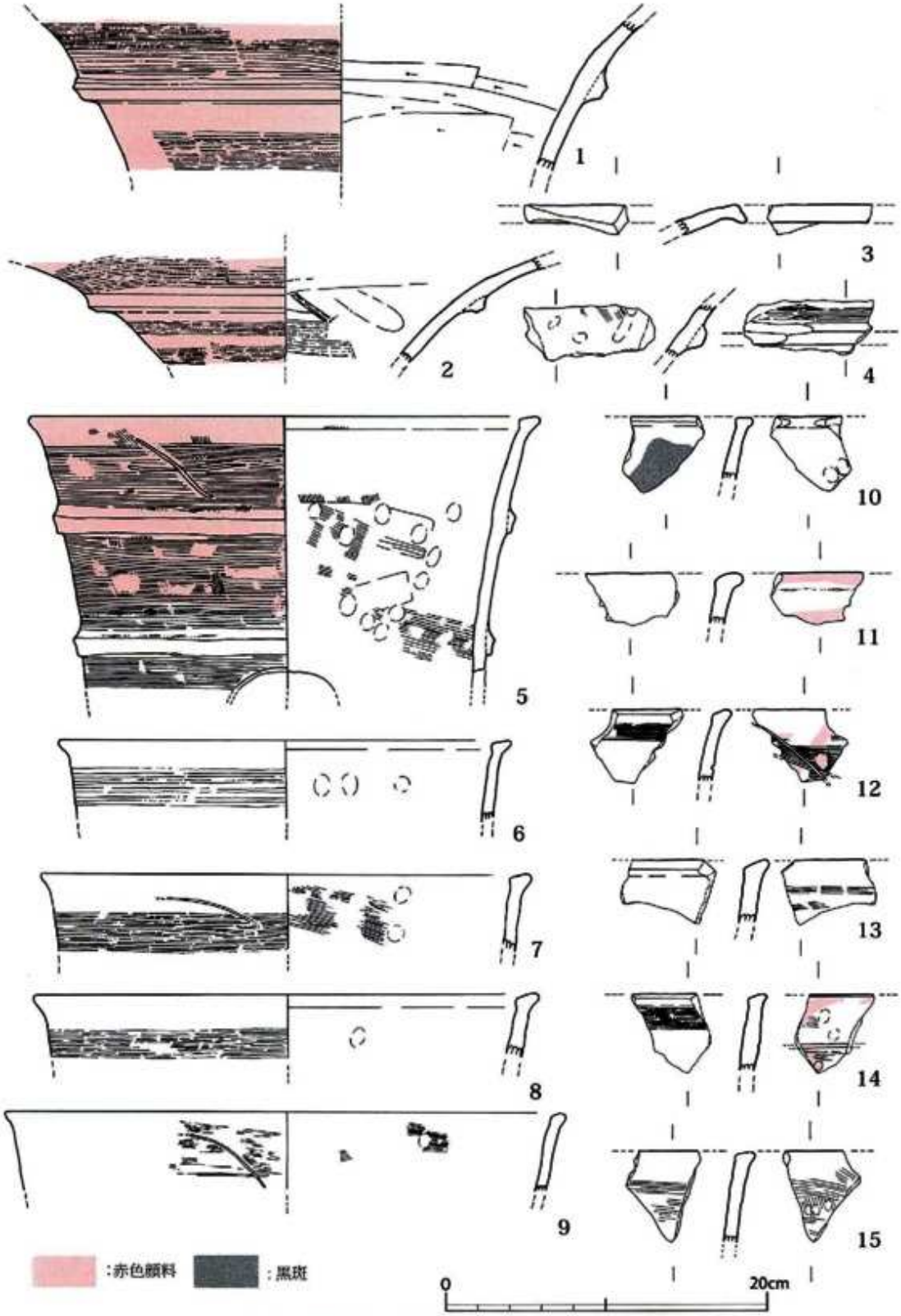


図25　巨勢山460号墳　出土埴輪１　（S.＝1/4）

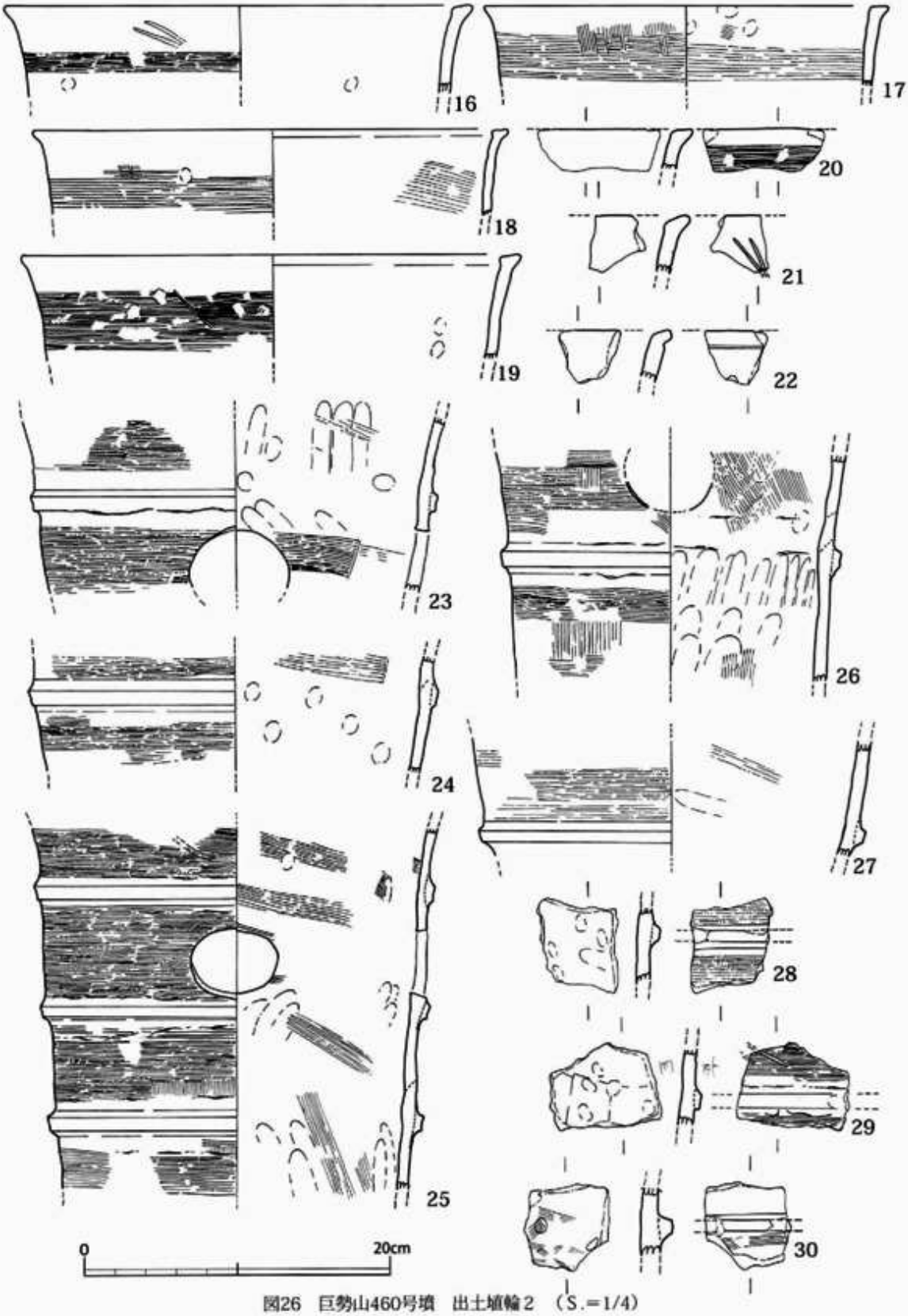


図26　巨勢山460号墳　出土埴輪2　（S.=1/4）

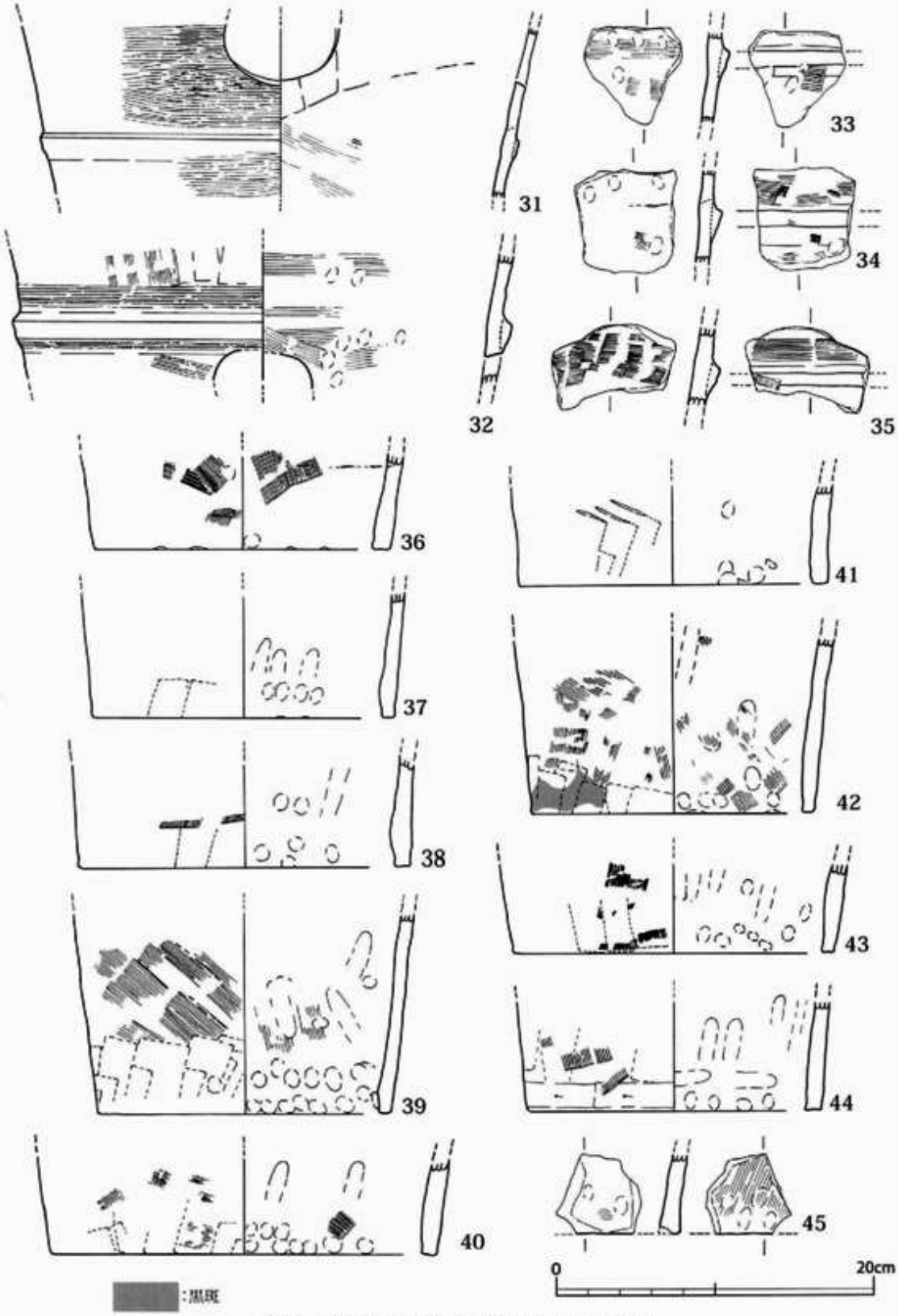


図27　巨勢山460号墳　出土埴輪3　（S.＝1/4）

タガの断面形態が判るものは、(25－5)・(26－23)～(27－35)である。いずれもタガの突出度は低く、断面形態が台形を呈する2c類・断面の形態がM字形を呈する3c類に分類できる。

スカシ孔が残存している個体は(25－5)・(26－23・25・26)・(27－31・32)である。その配置については、残存状況の悪さから復原することができないが、形状はいずれも円形であることが判る。ただし、特に(25－5)・(26－25)・(27－32)は残存部分の形状から不整形な楕円形であることが想定される。

1段目が残存しているものは、(27－36)～(28－49)である。底部の形態は、直立する1類・外側に開く2類・内彎する3類・直立もしくは内彎した後、外側に開く5類に分類でき、個体差が認められる。底部の形態が多様なのはそれぞれの底部に調整が行われたためで、その調整は、円筒埴輪を倒立させ、底部付近の外面に板状工具を当て、内面に指を当てて押圧する、「底部調整」(川西1978)が(27－37～43)で観察できるほか、上田氏の言うより古い段階の埴輪に認められる技法である「底部の調整」(上田1997)が(28－47・49)と(27－44)・(28－46)にみられ、それぞれナデるア類・ケズリを施すウ類に分類される。また、底端部は、概ね「底部調整」(川西1978)によって器壁が平滑になっているので、きれいに調整されているd類に分類できるが、(28－48)に関しては、外内両方に粘土がはみ出て撥形になっているa類である。

器壁の内外面の調整については以上の円筒埴輪片全体を通じて見てもおおよそ共通している。すなわち、外面調整は口縁部や体部では、概ね1次調整のタテハケのあとに、2次調整として静止痕がないC種ヨコハケが見られる。(26－25)は、前述した(25－1・2)と同様に2種類以上のハケ原体の使用が認めらる。すなわち、タガの上下端付近では5条/cmの粗いハケメが見え、それ以外の部分では10条/cmの細かいハケメが確認できる。なお、タガの上下端付近のハケメは、その原体幅が判る部分があり、幅9mmの狭いものを用いている。口縁端部付近は、端部を成形する際にナデが行われるが(25－5)などは革のようなものを用いた痕跡が観察できる。1段目には、外面は概ね1次調整のみで、タテハケおよびナナメハケが行われている。また、底部付近では前述したように「底部調整」(川西1978)が行われている。

内面調整は口縁部付近において、ナデが行われるほかに指頭押圧するものとヨコハケが行われるものがある。体部はヨコハケやナナメハケを主体とした調整が行われるほか、それに加えて板ナデや指頭圧痕が見られる個体もある。また底部付近においては「底部調整」(川西1978)に伴う指頭圧痕が見られる。

また、口縁部が残存している個体の中にはヘラ記号が見られるものが相当数ある。しかし、これらの多くは一部を欠いており、全体の形状を復原することは難しい。

そのような中で、(25－5)は完全な状態で残存しており、「X」字状を呈している。(28－50・51)のヘラ記号もこのような「X」字状の一部であろうか。このような形状とは別に(25－9)は現状では、2本の沈線がみられ、下位の沈線が横方向にのび、上位の沈線が上方に円弧を描

くようにしてふくらんでいる。沈線の右端付近でこの２本が交差しており、左半が残存していないが、おそらく全形は左側にも対称的な図形になっていたであろう。そうであれば、(25－7)・(28－52) のヘラ記号も一部が残るのみであるが、これと同様の形状を呈していたとみられる。このほか、(25－12)・(26－16・21・29) には２本の沈線が、(25－14)・(26－19・25) には１本の沈線が描かれているが全形は不明である。

(28－53) ～ (29－69) は形象埴輪の一部分である。

(28－53～62) は人物形埴輪片とみられ、そのうち (28－53・54) は腕部にあたる。(28－53) は、残存長 12.1cm を測り、横断の径は図示状態右端で最大となって 4.1cm を測る。残存した指は親指とみられ、その形状から、これが左腕を表現したと考えられる。成形の手順は、まず、厚み 1.2 ～ 1.7cm の粘土板を丸めて中空の筒状をつくっている。その際の粘土板の接合痕は、横断面図に示したようによく確認でき、内面にはシボリメが観察できる。このようにして腕部を成形した後に、長さ 3 cm 程、中央部付近での径 1.2cm の親指を接合している。外面の調整は全体がユビナデで仕上げられているが、指の接合部付近もそれが丁寧に行われており、このためその接合痕跡は外面に残されていない。

なお、(28－53) には下図の中央下部の外面に、長径 10mm、短径 7 mm 程の不整形な円形の窪みがある(図版31)。この窪みは外周付近が深くて中心部が浅くなっており、竹管文状を呈するが、竹管文のように明確な同心円を描いてない。中央部の窪まない箇所の形状は歪な楕円形で、一点が外周に接している。外周部の窪みも深さが一様ではなく、0.5 ～ 3 mm を測る。例えば、径 10mm 程の竹を折り取って破断面を整えない状態で押しつけたとすれば、このような状態になるだろうか。もしそのような棒状のものを想定することができるとすれば、この痕跡は、その位置からみて、製作過程で自重で腕が下がることを防ぐために一時的に支柱を使用した痕跡と考えられるかもしれない。

(28－54) は残存長は 13.4cm を測り、横断面形は、長径 4.0cm　短径 3.5cm を測るがほぼ正円に近い。成形の手順は、(28－53) と同様とみられ、厚さ 1.3cm の粘土板を丸めて中空の筒状をつくっている。破断面や内面にはやはり粘土板の接合痕が観察できる。内面にはシボリメが確認できた。外面全体はユビナデ調整によって仕上げられている。図の右側には腕と胴体部の接合部付近の縦断面図を示した。同図右端の端部は内傾する面をなし、端部付近の外面は全周が剥離面になっている。このような状態から、別個に作った胴体部に対して、腕部を挿入して接合していたことが判る。

(28－55～62) は沈線によって構成された文様や破片の残存状況から人物埴輪の一部分とも考えられるものである。実測図は原則として左側に内面（裏面）を、右側には外面（表面）を図示した。

(28－55・56) のトーン部分は剥離痕跡を示している。剥離痕はいずれも円弧になっているこ

とから、ここには円柱状のものが接合されていたと思われる。それらの直径を復原すると（28－55）は8.0cm、（28－56）は4.6cmになる。

これらが人物埴輪であるとすれば、（28－55）には首の部分が接合されていたとみられ、この部位は肩にあたることになる。（28－55）の外面には、数条の沈線で描いた斜格子とその上部にそれとは方向が異なる図上横方向などの沈線が見える。これらの沈線は衣服などを表現したのだろうか。（28－56）は、外面側の左上半は接合面になっている。ここには数条の幅の太い沈線が観察できる。これは（28－67）などで後述するように粘土の接合をしやすくするためのものと考えられよう。

なお、（28－56）の剥離痕の復原径4.6cmは（28－53・54）の腕の横断の径に近いことから、ここには腕が接合していたとみられる。ただし、（28－54）の胎土を（28－56）と比較すると、観察表で詳細を示したように（28－56）は角閃石・チャートが非常に少ないのに対して、（28－54）は角閃石・チャートが目立つことから別個体であると思われる。一方、（28－53）については、長石や石英がやや大きく雲母がやや小さいとの違いが認識されるが、各鉱物の比率が似ており、同一個体である可能性も考えられる。

（28－57）は図示状態縦方向に内彎している。外面には静止痕のあるハケメがみられる。また外面図上の左半には、不整形な楕円形とみられる剥離痕がある。

（28－58）は、図示状態縦方向に内彎している。外面には図上左半に方形を描くとみられる3条の沈線と、その右下隅角に接して斜め方向に延びる沈線が見える。文様の状態から衣装の一部分を表現したものと思われ、もしそうであれば、巫女形埴輪の褶の部分などが当てられようか。なお、外面には一部に赤色顔料が観察される。内面には指頭圧痕が多数みられる。

（29－59）は図示状態縦方向にわずかに内彎している。外面には斜交する8条以上の沈線が施されている。ここに見える沈線は、他の個体と比べると深く、太さも太いことが特徴的である。しかしながら破片が小さいためにこの沈線が描き出す文様の全体像は不明である。

（28－60）は、図示状態縦方向に内彎している。外面は中央付近で厚くなって下半は縦方向にやや粗いハケメが施されている。外面の上半は、円筒状に丸みを帯びた窪みになっている。この部分は現状の観察からは判断が難しいが、図示したように剥離痕であるとみられる。剥離痕であれば、本来ここに接合されたものは円筒形であって、人物埴輪の腕部や脚部などが想起されるが、小破片であるために接合後の全体的な形状を含めて具体的な部位を想定することは難しい。

（28－61）は現状でほぼ平らな板状を呈している。両面ともにナデ調整されているが外面に比べて内面の調整は粗い。図示状態下半には直径3.0cmに復原される円形のスカシ孔がある。人物埴輪の胴体腕下部に穿たれたスカシ孔部などが想定されよう。

（28－62）は図示状態右側面は破断面であるがそれ以外は端面である。両面は指頭圧痕によって成形されていて板状を呈する。髷の先端部分などであろうか。

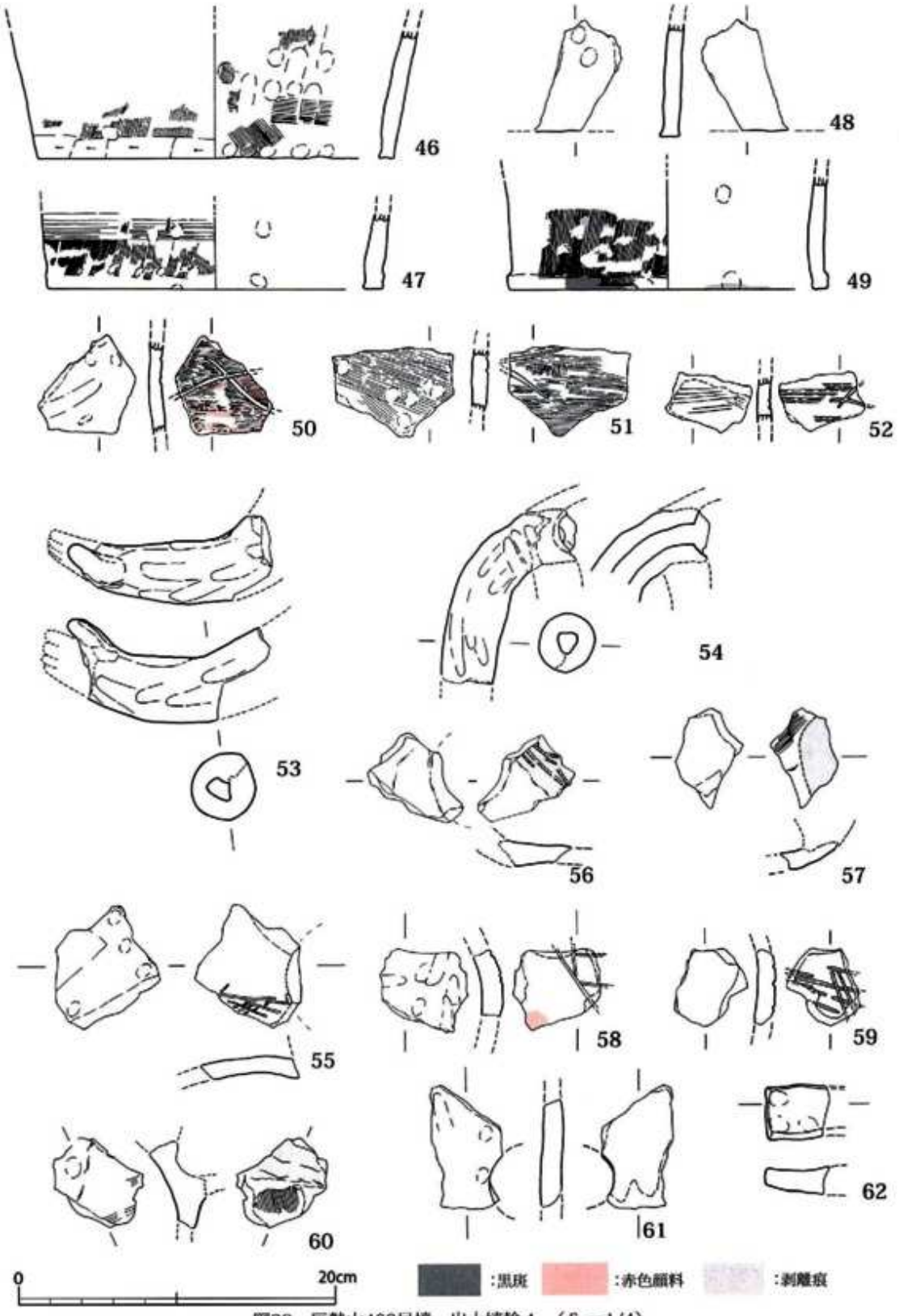


図28　巨勢山460号墳　出土埴輪4　（S.＝1/4）

次に図29には、人物形埴輪以外の形象埴輪を示した。

（29－63）は、家形埴輪の壁体部であったとみられる。外面はタテ方向のハケで調整され、内面は指頭による押圧ないしナデで仕上げられている。厚さは1.2～1.7cmある。右側の外面図にトーンで示した剥離痕は、裾廻り突帯が剥離したものと考えられる。その部分には突帯位置設定のための浅い沈線が認められる。外面図の左上位は、現状では逆L字形の切り込みが見える。また、左辺の下半は、裾廻り突帯と考えた剥離痕の上端より下が端部として生きている。すなわち、この2箇所はスカシ孔の一部であることが判る。上下2箇所のスカシ孔の全形は折り返して線対称になるとすれば、上のスカシは方形になろう。下のスカシは残存部分が垂直に下ったあと「く」字状に屈曲して広がっている。屈曲して広がった部分は直線状というよりもわずかに円弧を描くことから、このスカシの元の形状は、半円に近い三角形の上に長方形が連続した形を想定復原できよう。このような形状は特異であり、他の類例に当てはめることも難しい。家形埴輪の壁体部であれば、導水施設を表現するスカシ孔などであったとも想像されるが、なお全体像は窺い知れない。

ところで、上記の剥離痕を裾廻り突帯が剥がれた部分とすれば、器壁の厚みに対してその幅がやや広いようにも感じられる。おそらく、器壁と同程度の厚みの板状粘土を接合したあと、接合部を支えるための粘土を接ぎ足して補強したものであろう。このため、本体建物と接合部付近の厚みが増して、剥離痕跡としては幅広のものになったと思われる。また、前記の下半部のスカシの方形部分のすぐ横にまで剥離痕があり、裾廻り突帯は、このスカシ部分で途切れていたとも思われるが、定かではない。

（29－64）は板状の破片である。厚さ1.3cmを測る。内外面ともナデ調整されているが、外面に比べて内面のナデはやや粗い。右側の外面図示状態左辺は端部として生きている。下端で屈曲する形状から方形のスカシ孔の一部であると考えられる。家形埴輪の壁体部の破片であろう。

（29－65）は板状の破片であるが、図示状態下端付近で内側に屈曲するらしい。外面には剥離痕跡が認められ縦方向幅3cmの範囲内に横位の沈線が6条見られる。この沈線は、接合の位置を設定する目的だけではなく、粘土同士の接合をしやすくするための役割もあったかもしれない。家形埴輪の壁体部と裾廻り突帯の接合部分などが考えられる。

（29－66）は、上下の両端が端面として生きている。外面とみられる左図の右半には指頭圧痕が多数残っているが全体はナデで仕上げられている。断面図右側面に剥離痕がみえ、ここに屋根部が接続すれば、家形埴輪の切妻の破風とも思われる。しかし、その場合には下端面と側面の角度からみれば、破風がむしろ屋根側に傾斜してしまうことや、屋根部から突出する部分の長さが極端に短い箇所があることなどからこの部位にあてることは難しい。この他馬形埴輪の鞍、水鳥形埴輪の翼部分、人物埴輪の裾部分なども考えられるが、いずれも剥離面の状況からうまく合致しない。現状では、（29－66）の器種を復原的に理解することは難しい。

（29－67）は両面に突帯が見られるが形態に差異がある。右図の突帯は直線であるが、左図の

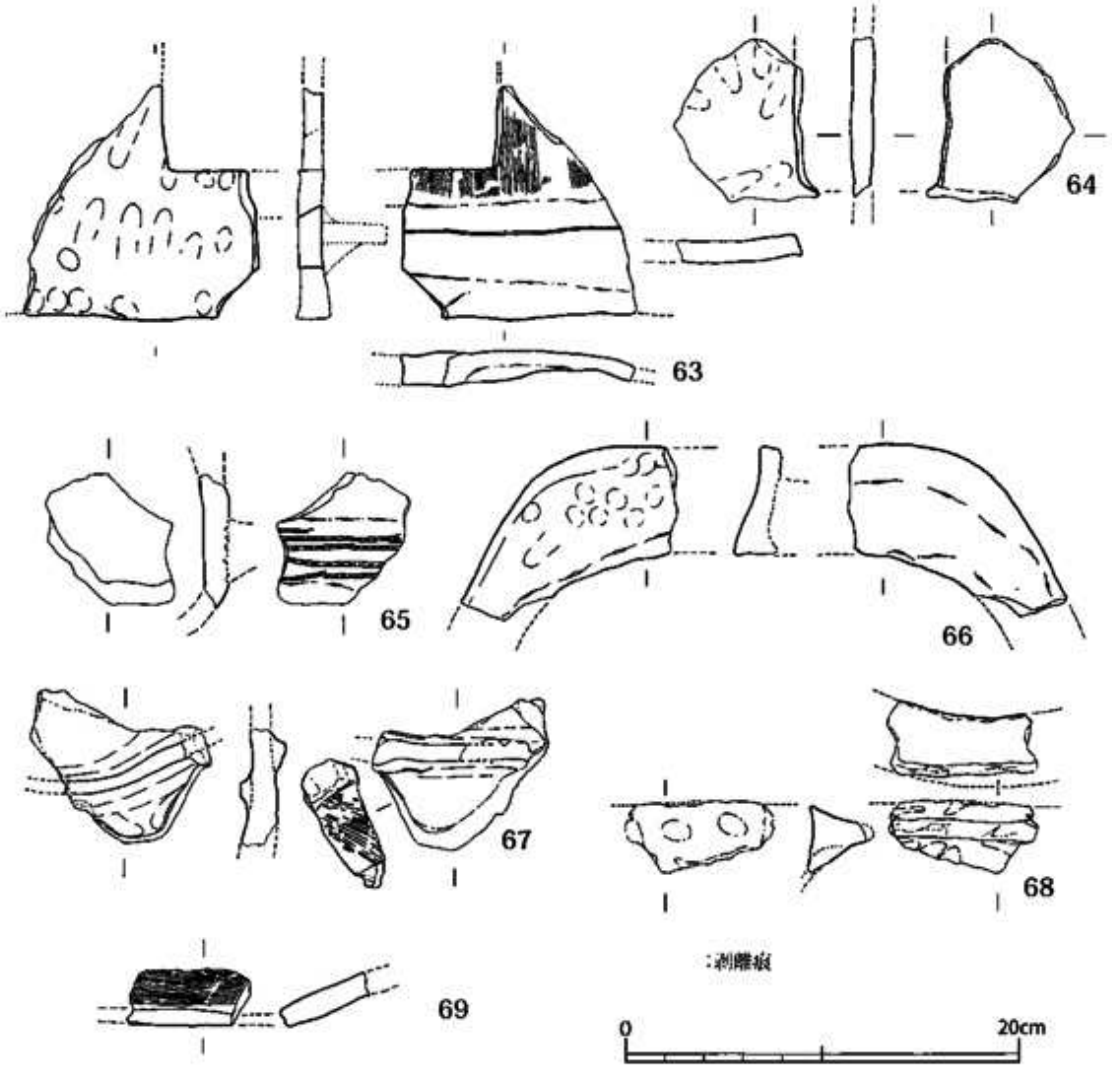


図29　巨勢山460号墳　出土埴輪5　（S.＝1/4）

それはわずかに屈曲している。器表面は全体にナデによって調整されているが、その仕上げはやや粗い。また図中、中央の右には残存部の側面図を示した。上部は端部として生きている。トーン部分は、剥離面で、そこには沈線が刻まれている。これは、粘土の接合をしやすくするためのものであろうか。このような形状から蓋形埴輪の飾り板受部などの可能性が考えられる。

（29－68）は突帯状の破片である。右上の上面図に見えるように、内面は円弧を描いており直径は27.6cmに復原できる。また断面図にも示したような外面が突出する形状から、蓋形埴輪の笠部の外縁部とも考えられる。しかし、左側図の内面として表現した面が剥離面とも見えず、また右側図の外面の突出部の一部分が端部として生きている部分があって、蓋形埴輪のその部位を想定すると短すぎることなどから、現状では器種を特定することは困難である。

（29－69）は元は円盤状を呈するものの破片で、外縁部を基準にしてこれが水平になるように

置けば中心部にむけて約18度の角度で立ち上がっている。外縁部の円弧から直径を復原すると15.2cmの数値が得られた。外面は外縁部と同心円を描くやや粗いハケメが見え、残存部にそのハケメの切合いが観察できる。内面および外縁部の端面の調整はナデによるが、特に外縁部の端面には強いヨコナデが施されている。破片のこのような形状から蓋形埴輪の笠部である可能性などが考えられる。

以上の朝顔形・円筒埴輪及び形象埴輪について焼成をみると、概ねやや不良でなかには有黒斑のものがある。

これらの埴輪の時期は、底部調整（川西 1978）が見られる点から川西編年第Ⅴ期に併行すると考えられる。ただし、当該埴輪に黒斑があることや外面2次調整が行われていることなどは、川西氏が挙げた第Ⅴ期の特徴とは合致しない。

外面に黒斑を有する点については、窯の導入が遅れた地域、もしくは群集墳中で使用されるような埴輪に関しては依然として野焼きが行われていた可能性も考えられる。また、窖窯の場合であっても大阪府羽曳野市野々上埴輪窯跡のように焼成の加減によっては黒斑がつくことも指摘されており（積山 1989）、岡山県赤磐市の土井遺跡の埴輪窯で焼成された埴輪の中には黒斑がついていることが確認されている（重根 2005）。

また、Ⅴ期併行の埴輪で外面2次調整が行われるものは、奈良県下では盆地南部の群集墳中の古墳に多く（鐘方 1991）、橿原市新沢166号墳（斎藤 1988）新沢175号墳（久野 1981）・高取町イノヲク5・6号墳（松永 1990ほか）・イノヲク12号墳（中川 1992）・清水谷1号墳（楠元 1976）・葛城市寺口忍海H－19号墳（千賀・藤川 1988）・御所市石光山20号墳（疋田 1976）などでみられる。このような埴輪を鐘方正樹氏はⅣ群系と位置づけた（鐘方 1997）。460号墳はこれらとは地理的にも近い位置に存在しており、当該地のⅣ群系の埴輪に一例を加えたといえよう。なお、これらⅣ群系の埴輪の時期は、列記した古墳で共伴する須恵器の型式から見るとＴＫ47～ＴＫ43型式までの幅がある。そのなかで、この460号墳の埴輪を含めて、各古墳の出土埴輪を比較しても顕著な差異は見出せない。したがって、460号墳の埴輪の時期はおおよそ6世紀代の内に考えることができるが、さらに細分して特定することは現状では困難である。

第3節　古墳時代以外の遺構と遺物

1．遺構

今次調査地全体を通じて、古墳時代以降の遺構・遺物が散見されたが、B地区においては、そのあり方が顕著で、古墳の一部を切り崩しつつ平坦面を確保して、遺構が形成されていた。遺構の密集する度合いも調査区全体を通じてみても、このB地区が高い。平坦面は、図30の遺構の配置図にも示したように、巨勢山459号墳と460号墳の中間部分に当り、460号墳の北西の一角で、南北5m、東西19m程の範囲が削り出しによって造成されている。このようなことで平坦面の東辺

と南辺は現状でも段差になっていて、その高さは25～30cm程である。また、460号墳は、前述したように主体部が残存していなかったが、その分墳頂部の高さが低くなっており、その現状はほぼ平らである。そして、この部分にも、ピットなどの遺構が北西部の平坦面と同様に存在したので、460号墳墳頂部の削平や造成はこれらの遺構が形成された時期に行われた可能性があり、古墳の形状は、少なくともその時期までに現状に見るような状態になっていたと考えられよう。

このようにB地区の土坑やピットなどの遺構は、元の地形を造成しつつ一定の広がりをもって形成されていることが判る。しかし、これらの遺構の個々の性格については不明な点が多い。多くの土坑やピットはその用途さえ明確ではない。ここではまず土坑・ピットの規模を表1に掲げて、その他特徴的な事柄につ

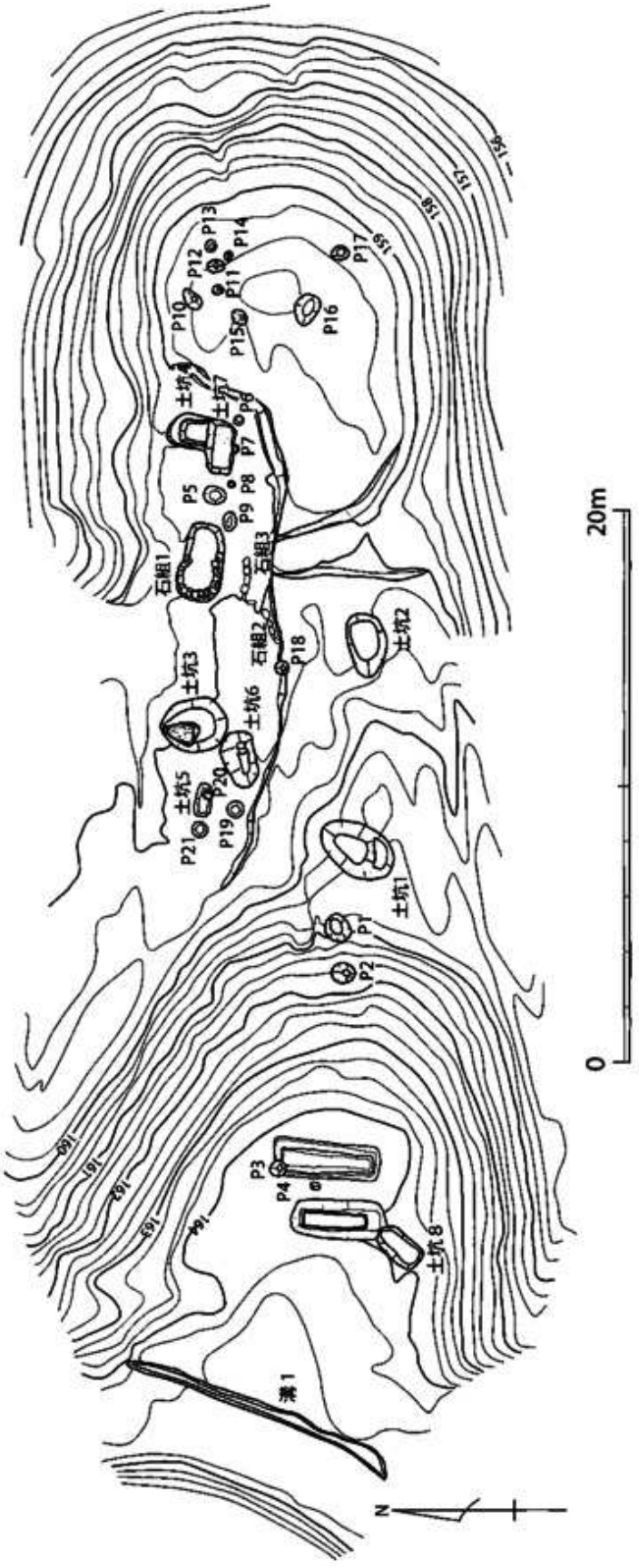


図30　B地区　古墳時代以外の遺構の名称と配置

表1　B地区　古墳時代以外の遺構　計測表

遺構	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	遺構（cm）	長径（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）
ピット1	100	90	56	ピット16	116	84	76
ピット2	84	72	52	ピット17	64	50	28
ピット3	60	60	40	ピット18	25	24	48
ピット4	36	28	36	ピット19	31	30	28
ピット5	80	63	32	ピット20	17	16	64
ピット6	44	44	28	ピット21	31	28	58
ピット7	47	45	62	土坑1	290	186	66
ピット8	26	26	12	土坑2	232	140	53
ピット9	71	50	28	土坑3	232	190	50
ピット10	84	54	80	土坑4	148以上	60	73
ピット11	40	34	10	土坑5	120	62	34
ピット12	62	46	20	土坑6	204	120	66
ピット13	44	40	24	土坑7	200	100	69
ピット14	34	28	14	土坑8	180	96	24
ピット15	66	48	20				

いて記述を進める。各遺構の埋土の状態については図31～35を参照されたい。

これらの遺構は同一の遺構面に存在するもので、おおむね一時期に形成されたと思われるが、土坑4・土坑7・ピット7にはそれぞれ切合い関係が見られた。このことから、遺構のなかには多少の時期差があったことが判る。（補註2）

また、遺構全体を通じてみても埋土中からの出土遺物が少ない状態で、この面からも遺構の性格

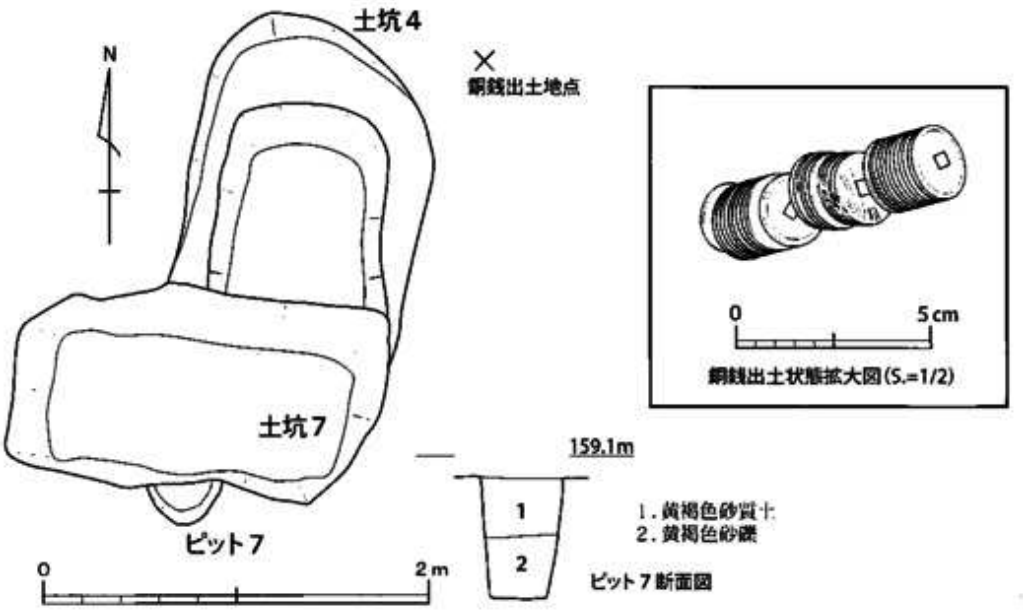


図31　B地区　古墳時代以外の遺構1　（S.=1/40）

を考えることは難しい。そうした中で、土坑7については、図36に示したように土師器小皿（36－4・5）・瓦器擂鉢（36－6）・鉄釘（36－7）が出土し、土坑4の北東隅の40cm外側で、合計35枚の銅銭が重ねられた緡銭の状態になって出土した。それぞれが錆着して表面の観察ができないものがほとんどであるが、それが可能であった4枚はいずれも天聖元寶と読める。層位的には土坑4の上面を覆う「黄褐色砂質土」中で検出されたものである。

土坑4の形状は南半部の状態が不明であるが、検出上端での長さは148cm以上で、幅60cmを測る。遺構底までの深さは73cmあるが、図31の平面図に示したように、上端の段差約10cm程で2段掘りになっている。

上のような銅銭の出土状態を見れば、土坑4を埋め戻した後に、遺構のやや外側に銅銭の一塊を添え、さらに全体を覆うように土を被せたものと考えられる。その土が最終的にどの程度の高さまで盛られたのかは、調査時までに上面が削平を受けているので定かではないが、銅銭の出土位置が地山の直上であることから、土坑4の掘込み面の高さに関しては、その後の削平などを受けておらず遺構形成時の状況を保っていると考えられよう。土坑4は土坑7に南半を壊されているためにその長さが不明であるが、最大の場合には元は2m程度の長さがあったともみられる。このように、不確定な要素が多いものの、土坑4の形状やそこに添えられた銅銭のあり方からみて、土坑4は墓壙であった可能性が考えられる。

そうであれば、土坑7についてはどのように考えられるだろうか。その平面プランは、長さ2m、幅1mの長方形を呈し、深さ約70cmを測る。また、土坑7からは、僅かながら出土遺物があり、その中に鉄釘片（36－7）が含まれている。木棺などの痕跡は検出されなかったが、土坑4が墓壙である可能性を踏まえれば、土坑7の場合にもその形状からみて、やはり墓壙の可能性が考えられる。この場合鉄釘はあるいは木棺に使用されたことも考えられるが定かではない。土坑7の形成時期は、出土瓦器擂鉢の年代観から、16世紀中頃とみられる。

さて、これらの土坑のほか、溝1条を検出した。図30の遺構配置図に示したように、巨勢山459号墳の西側で、西から下ってくる急な傾斜面の裾付近に尾根に直交する方向で、幅40cm、深さ20～30cmを測る直線的な溝である。長さは9.5mを検出した。当初、この溝は、巨勢山459号墳に伴ってその西端を画するものとも考えられた。しかし、この溝から出土遺物があった訳ではないが、古墳の周溝としては巨勢山古墳群の通例とは全く様相が異なること、459号墳は北・東・南面ではコンターラインなども円弧を描くがこの溝は直線的であることなどから、古墳に伴うものではないと判断した。むしろ、459号墳の墳頂部にも後世のピットや土坑などの遺構があって、墳頂平坦面が古墳とは別の時期に利用されていることから、この溝に関しては、この時に尾根づたいに流れてくる雨水などを南北の谷に排水するために掘られたと考えるのが妥当であろう。

また、このほかB地区における特徴的な遺構として、石組み遺構1～3がある。その位置は、図30の遺構配置図に示したように460号墳北西部に形成された平坦面のほぼ中央付近に当たってい

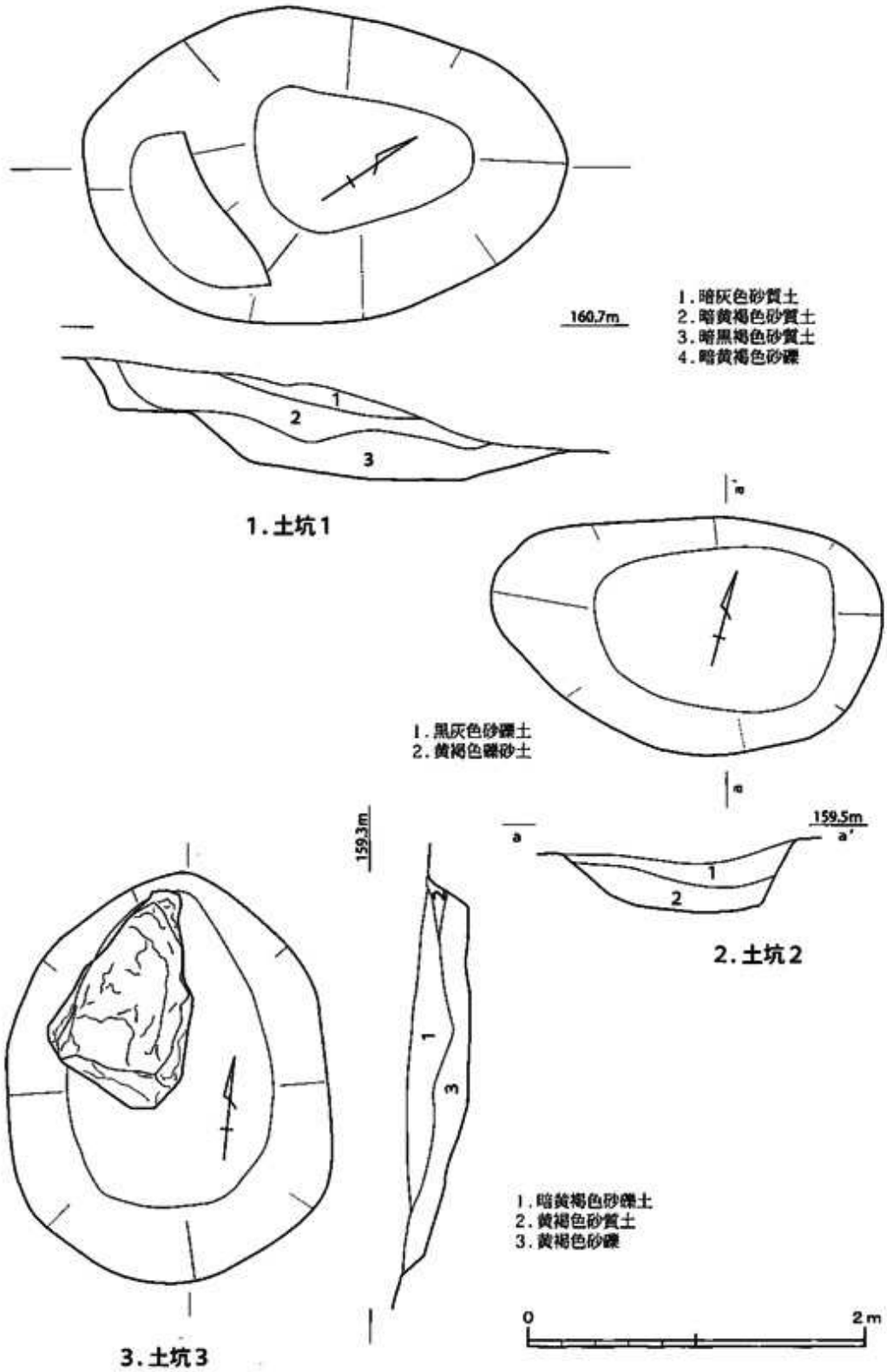


図32　B地区　古墳時代以外の遺構2　（S＝1/40）

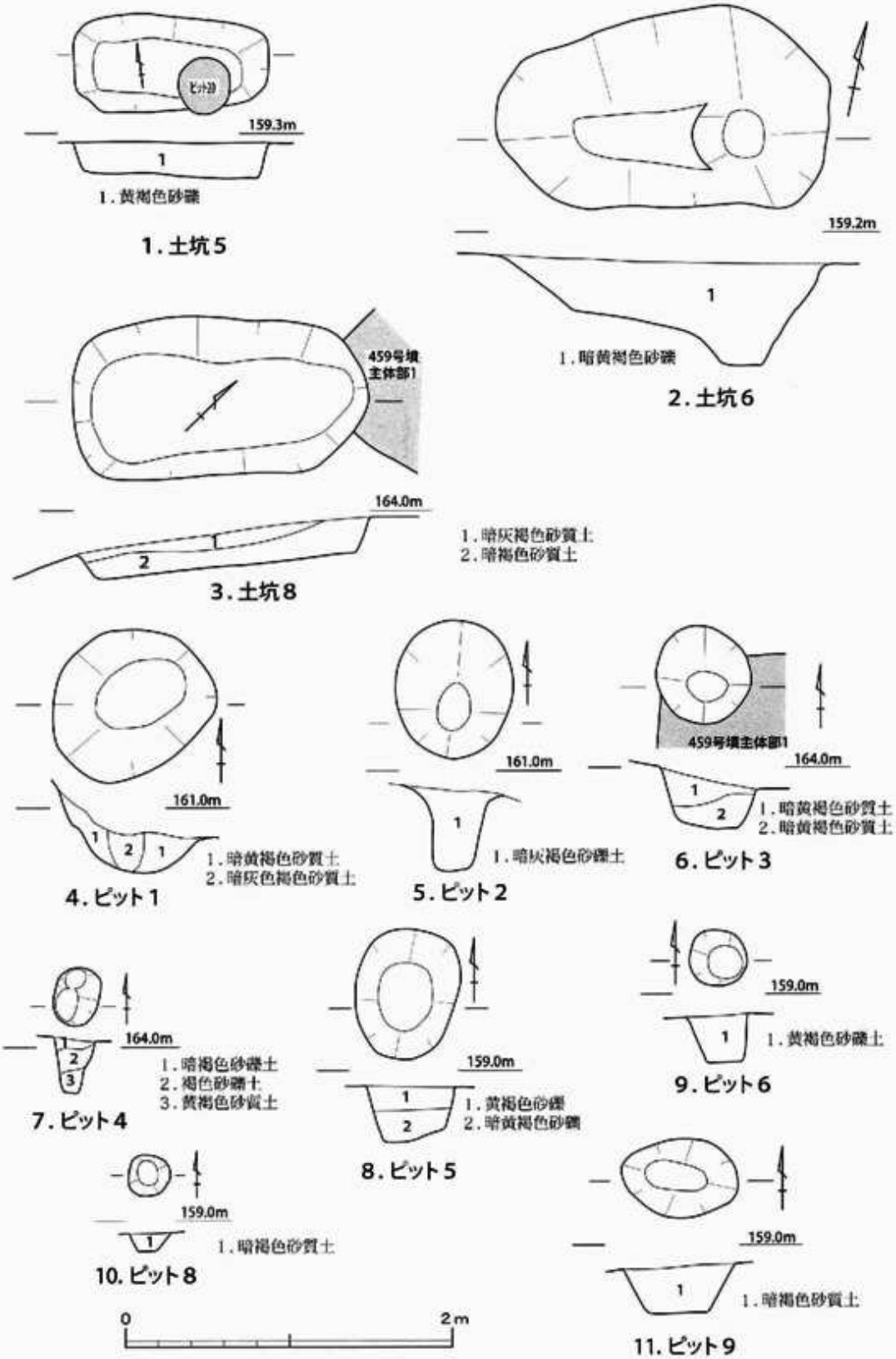


図33　B地区　古墳時代以外の遺構3　（S.＝1/40）

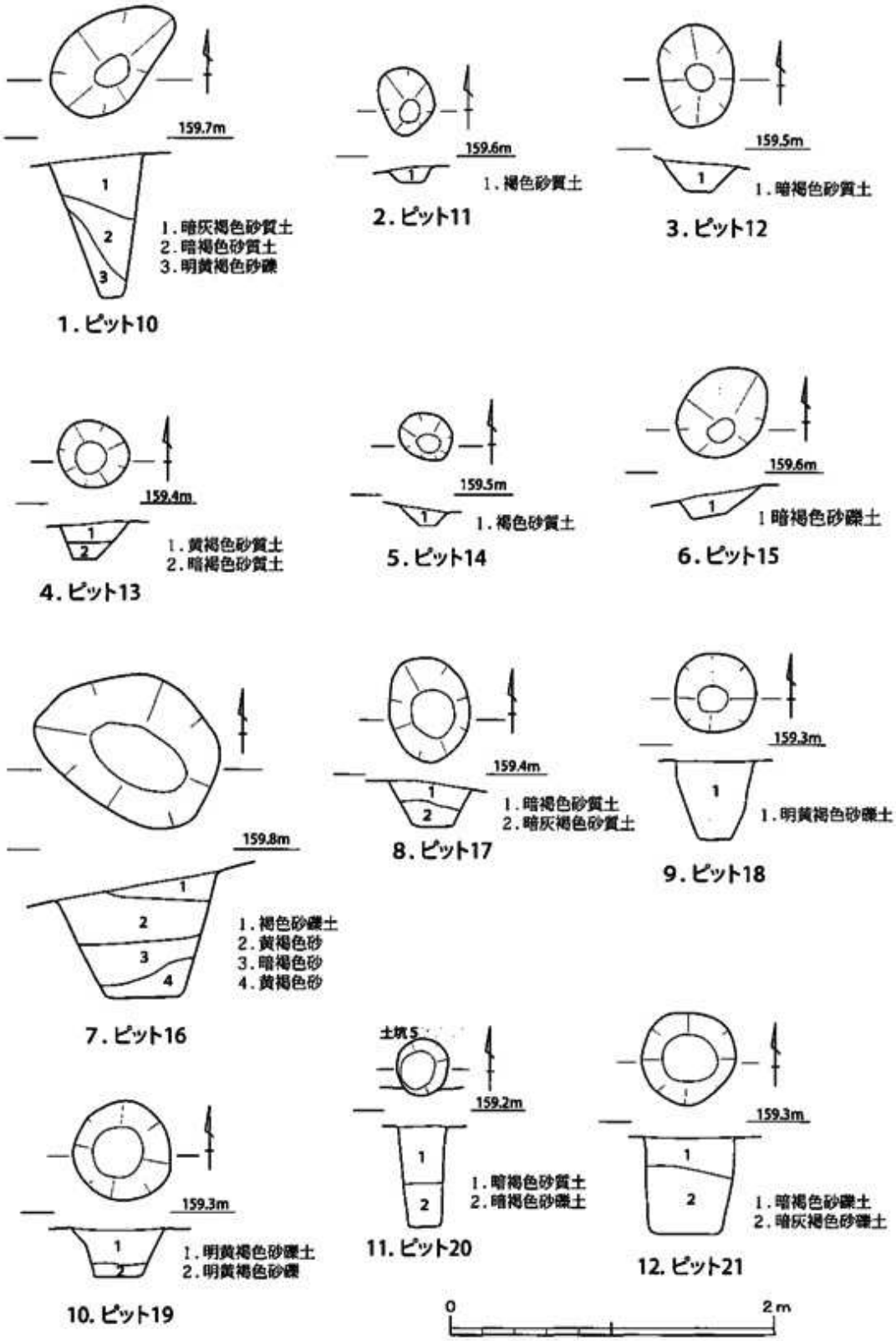


図34　B地区　古墳時代以外の遺構4　（S.＝1/40）

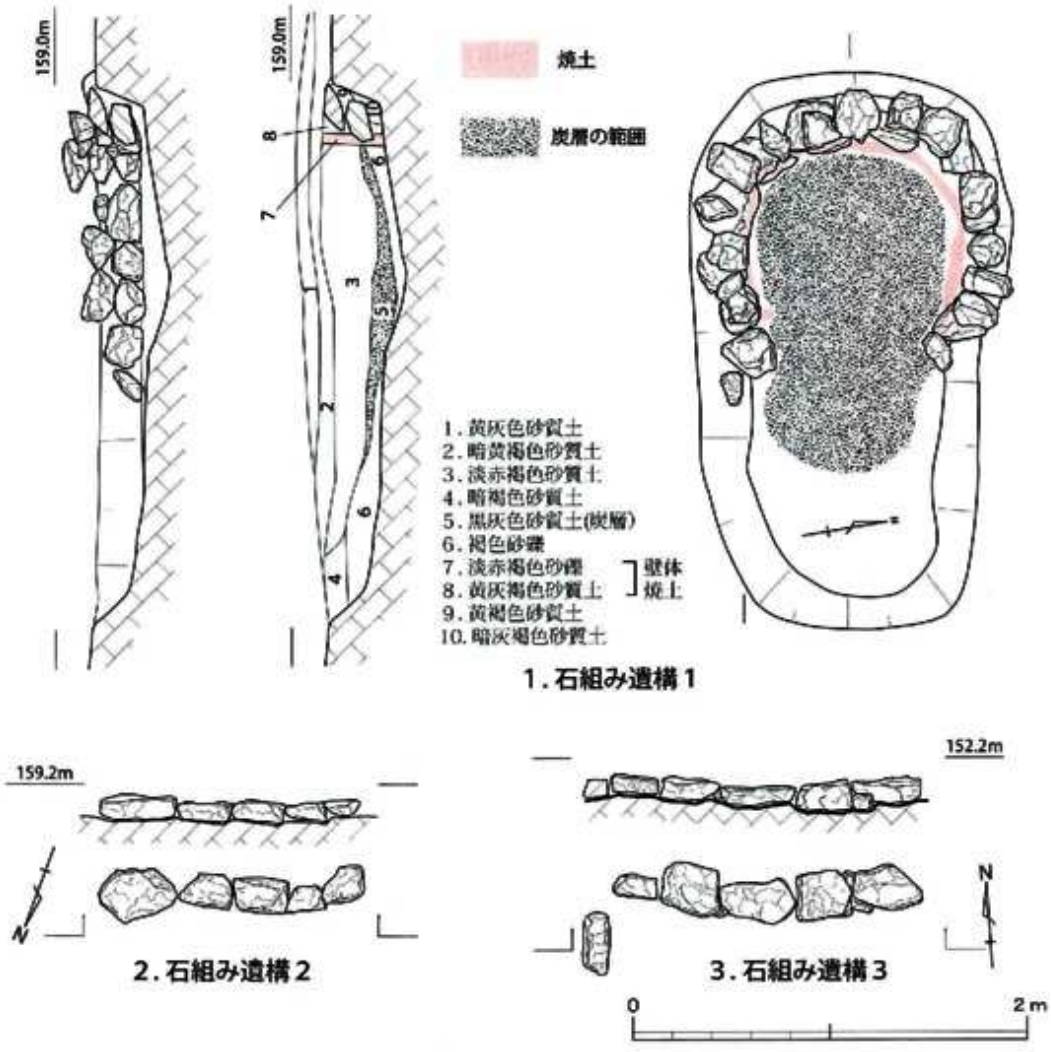


図35　B地区　古墳時代以外の遺構5　（S.=1/40）

る。また、それらの平・立面図などは図35に掲げた。

石組み遺構1は、長軸2.84 m、短軸約1.5 m、深さ約40cmの不整形な隅丸方形の土坑の西半に、人頭大かそれよりもやや大振りの花崗岩を積んで、石組みを造るものである。石組みの平面形はおおよそ円形を描き、その東側の一部が開いている。その開いた側の外側のスペースが土坑の東半の底に当たっている。石組みは多くは基底石を残すのみであったが、西端の一部では3段まで積まれている状態で検出された。石組みの内側には、幅4～5cmの焼土の帯が石に組に張り付くようにして検出され、さらに埋土の下位には厚さ10cm以上の顕著な炭層が石組みの外側にまで分布している状態が検出された。つまり、この遺構の内部で火が焚かれたことは明らかで、石組みの内側に焼土が張り付いているのも意識的に壁体が構築されたと考えられる。以上の状態から、石組み遺構1は、上位の構造が不明ながら、炭焼き窯などのほか、火葬のための施設である可能性も考えられ

るが、詳細は不明である。その構築時期は、埋土中の遺物から16世紀中頃であるとみられる。

一方、石組み遺構2および3のあり方は、石組み遺構1とは異なっている。同様に人頭大の花崗岩を用いるものの、石の並び方が直線的であり、また周囲から焼土・炭などは検出されなかった。石組み遺構2は、5個の石材がおおよそ東西方向に1.36 mの長さで並べられている。石組み遺構3は、6個の石材がほぼ東西方向に1.6 mの長さで並べられており、その西端には南に直角に曲がるかのように1個の石材が確認された。いずれも、本来造られたものの一部分が残存したものとみられる。その点で、石組み遺構3に関して、直角に曲がるように石材が配置されていることは示唆的である。これらの点だけを取り上げれば、これらは1辺が1.5 m前後の方形の区画をした墓の一部が残存したものとも思える。ただし、図30の遺構配置図に示したように、石組み遺構の南側は、平坦面を形成するための段差になっていて、直線的な石列の南側には、方形区画を成すようなスペースがない。このようなことで、石組み2・3は、墓の区画の一部と思われるものの、その全体像をイメージすることも難しい。

以上のように、B地区における古墳時代以降の遺構は、出土遺物も乏しく性格不明なものが多い。墓壙とみられる土坑や、墓の一部である可能性のある石組みもあるが、一方でピットなどの遺構もも存在した。それらは出土遺物で見る限りさほどの時間差もない。また石組み遺構1が火葬に関連する遺構であるとすれば、この地は主として墓地として利用されていたのであろうか。しかし、その他の土坑については、その形状からは単純に土壙墓と即断することもできない。ピットについても何らかの建物などが存在したことを示すと思われるが、その実態は明らかにならなかった。

2．出土遺物

出土遺物の総量はさほど多くないが、図化可能であったものを図36に掲げた。

（36－1～3）は銅銭である。（36－1・2）は、土坑4の北東部で出土した。銅銭35枚が緡銭の状態になっていたものの一部である。互いの表裏が銹着して一塊となっていたのであるが、現状では12枚が銹着して一塊になったもののほか、8枚が銹着したものが1塊、5枚が銹着したものが2塊、3枚が銹着したものが1塊あって、1枚に分離したものが計2枚ある。いずれにせよ、そのほとんどは表面の観察ができなかった。それが可能であった4個体はいずれも天聖元寶であった。そのうちの2個体の拓影を示した。また、5枚で一塊になってしまっているもののうち一方は、藁らしき繊維質が中央孔のほか銭の周囲にも明瞭に残っている（図版31）。（36－1）・（36－2）ともに、直径は2.5cmを測る。（36－1）は現状では5枚の塊の、（36－2）は現状では8枚の塊の最も外側に当たる個体である。このため、それぞれの重量を量ることができない。（36－1）を含む一塊は16.2 g、（36－2）を含む一塊は25.3 gを測るので、1枚当りの平均重量は、前者は3.24 g、後者は3.16 gの数値が得られる。このほかのそれぞれ一塊となったものの重量は、12枚が銹着したものが35.6 g、5枚が銹着したものが16.7 g、3枚が銹着したものが9.5 gで、

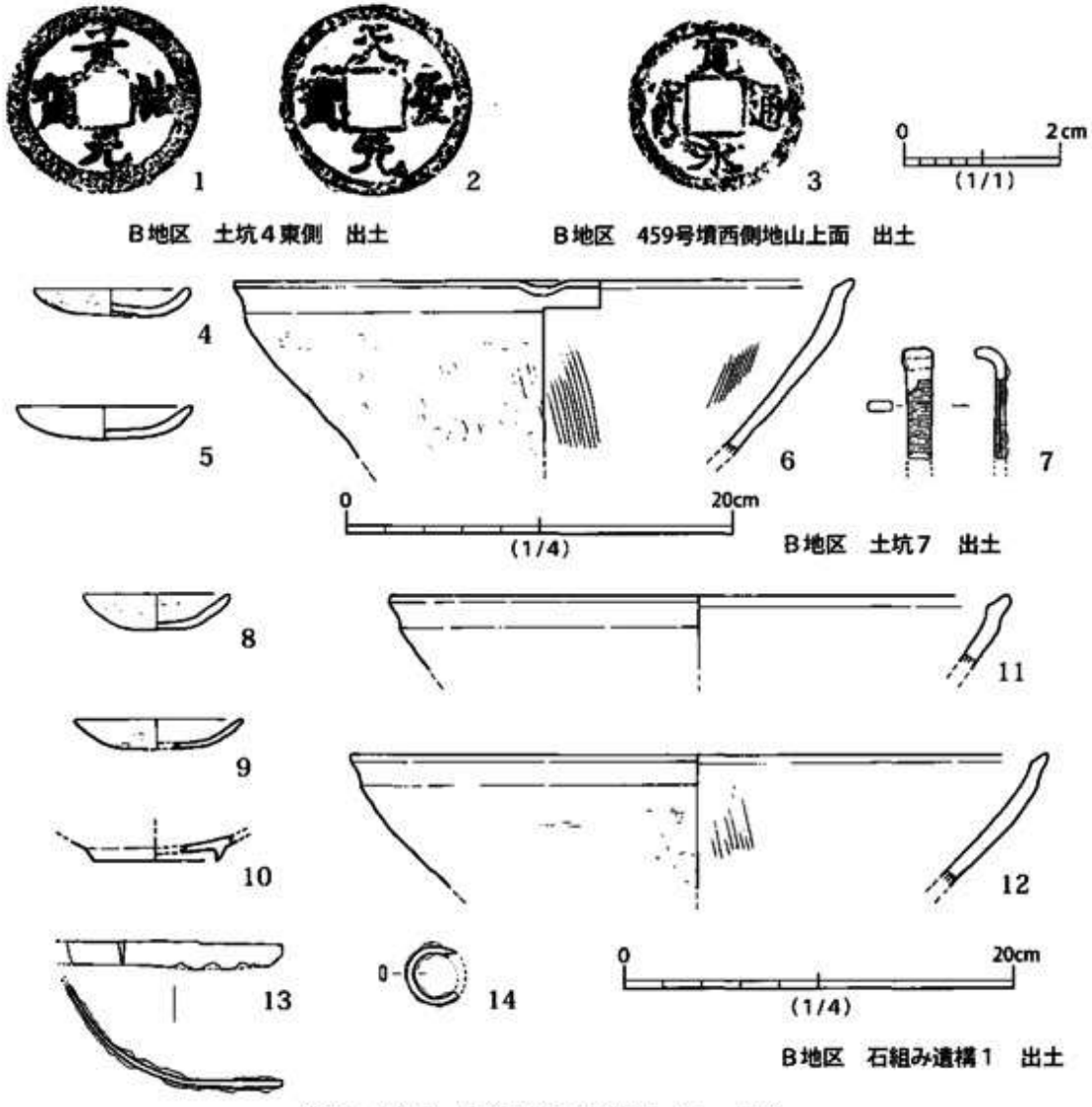


図36　B地区　古墳時代以外の遺物　（S.＝1/4）

1枚だけが分離している2個体については、それぞれ3.7 g、3.5 gであった。

（36－3）は、巨勢山459号墳の西側にあたる地山上で出土した。寛永通寶である。直径2.3cm、重量は2.0 gである。

（36－4）～（36－7）は、土坑7の埋土中から出土した。土師器小皿（36－4）は、口縁部の1/5程を欠いているが、ほぼ完形に近い。口径8.0cm、器高1.5cmを測る。土師器小皿（36－5）は口縁部の1/4程を欠いているが、底部付近はほぼ残っている。口径9.0cm、器高1.6cmを測る。瓦器擂鉢（36－6）は、口縁部の1/3程度が残存した。復原口径は31.8cmである。鉄釘（36－7）は下半を欠損している。元は幅1.1cm、厚み0.5cmの鉄棒の先端がほぼ90度屈曲して頭部になっている。外面には木質が付着して残っている。現状での重量は13.6 gである。以上の遺物のうち、

土師器小皿は時期を特定しにくいが、瓦器擂鉢は16世紀中頃のものであろう。

（36－8）～（36－14）は石組み遺構1の埋土中から出土した。土師器小皿（36－8）は、口縁部の1/2弱が残存していた。復原口径は7.6cm、器高1.6cmを測る。土師器小皿（36－9）は、口縁部の1/3程が残存していた。復原口径は8.8cm、器高1.5cmを測る。磁器椀（36－10）は底部付近のごく一部の残存である。高台の復原径は6.4cmである。（36－11）と（36－12）は瓦器擂鉢である。いずれも残存状態は良くない。（36－11）は口縁部の1/10、（36－12）は1/8程が残存したのみである。それぞれの復原口径は、31.8cm、36.0cmを測る。

石組み遺構1からは、このほか、2点の鉄器が出土した。

（36－13）は刀子らしく刃部・背部があるが、現状では大きく折れ曲がっている。錆によって元の形状も定かはないが、刀身部と茎部が残っているらしく、その境界には僅かに背関が認められる。刀身部背幅は3mmで刀身長さは元は9cm以上である。現状での重量は19.3gである。（36－14）は、鉄製の円環で、巨勢山456号墳の墳丘流土中から出土した（5－3）・（5－4）と形状がよく似ている。（36－14）は、現状では全体の1/3程を欠損している。外径は3.1cm、内径は2.3cmを測る。断面形は方形で、長辺8mm、短辺3mmを測る。現状での重量は6.9gである。

以上の出土遺物のうち、ある程度時期の特定が可能なものは、（36－11・12）の擂鉢である。これらは、口縁端部の形状などの特徴から、土坑7出土の擂鉢と同型式とみられ、およそ16世紀中頃に位置づけられるものであろう。

補註2

これらの遺構の先後関係に関して、現地で作成された平面図の原図に次のような趣旨のメモが記載されている。すなわち、これらの遺構の埋土は土質の識別が困難で、平面的には遺構の先後関係を検証できなかったが、断面観察の結果から、土坑4・ピット7が先行し、後に土坑7が掘られたと判断されるというものである。そして最終的にはそのような遺構の先後関係を描いた平面図が残された。しかし、そのように判断されたという埋土の堆積状況を示す土層断面の図面は、原図作成時に混乱が生じているらしく、上記の趣旨が反映されておらず、平面図との整合性もとれていない状態になっており、遺憾ながら図31には掲示できない。従って、この切合いの先後関係は明確な根拠を欠くと言わざるを得ないが、現地調査担当者の所見メモが原図に残されていることを重視して、土坑7がこれらの中では最も新しく形成されたものとして扱う。

第5章　C地区の調査

第1節　巨勢山463号墳

1．位置と墳丘・墓道

巨勢山丘陵の主稜線部から北東に延びてきた尾根は、今次調査地の最高所に位置する巨勢山458号墳が立地する地点で、そのまま直線的に北東に下る尾根と、東方向に下る尾根に分岐している。この463号墳は、458号墳から北東に延びる尾根上に立地している。458号墳との間には、既述のようにA地区の南端に当たる461号墳と462号墳が存在している。しかし、463号墳は、462号墳とも現状での墳丘頂部での比高差が5m近くあり、かつその間が急な斜面になっていることから、462号墳より南にある古墳とは地形的にも隔絶した感じがする。

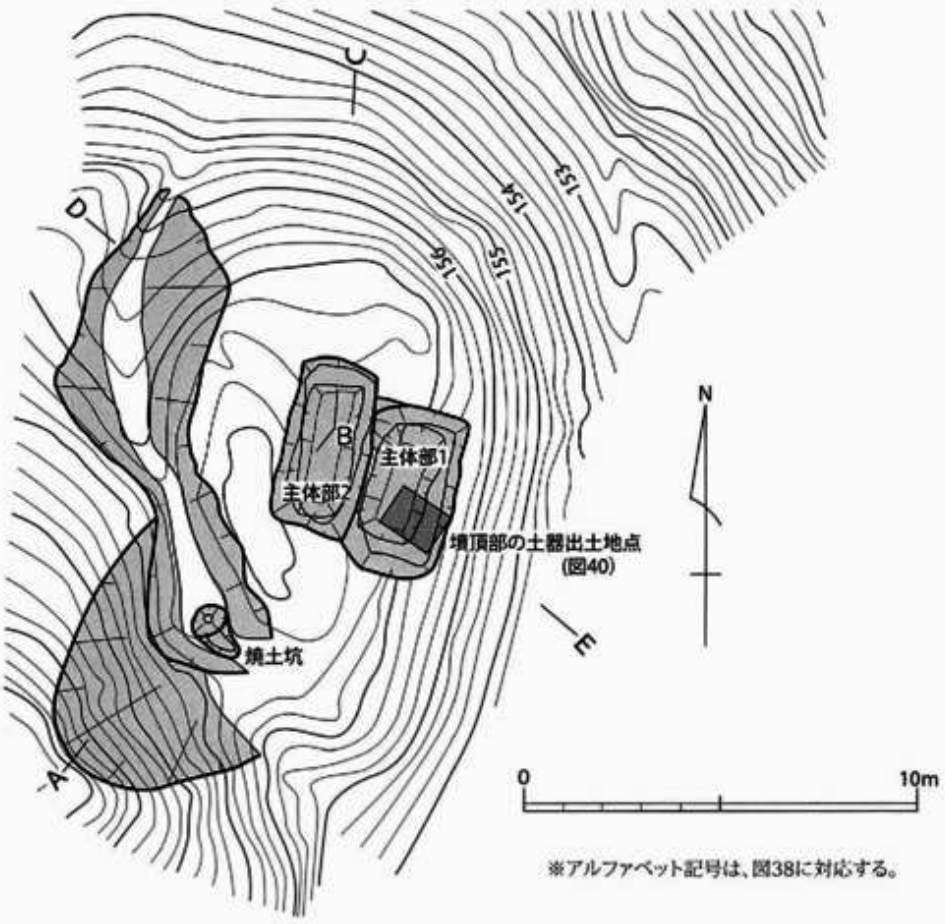


図37　巨勢山463号墳　墳丘測量図　（S.＝1/200）

一方、463 号墳より北側には、後述するように 464 号墳から 466 号墳の 3 基の古墳が存在している。464 号墳との現状での墳頂部の比高差は約 5.5 m もあるが、その間の傾斜角度がそれほど急ではないために、464 号墳以下 3 基の古墳とはむしろ連続性を感じさせる。つまり景観上は 463 号墳から 466 号墳の 4 基の古墳で一つの小支群を成しているとみられる。

さて、463 号墳の現状の墳丘は、図 37 の墳丘測量図に見えるように、その東半が急な斜面になっている。同図の主体部の配置も現状の墳頂部の東端に偏っており、墳丘の東半が崩落していることは一目瞭然である。そのようなことで、墳丘は半壊状態に近くなっているが、主体部に関しては後述するように 2 基の木棺直葬の施設が検出され、墳丘の構造に関しても残存部分から知られることも少なくない。

墳丘は、図 38 の墳丘断面図に示したように、その下半を地山削り出しによって成形し、元より北に低い旧地形のために、墳頂部の北半には比較的厚い盛土を行うことで平らな墳頂部を得ている。本墳の初葬にあたる主体部 1 は、このように墳丘頂部を整地したのちに墓壙を穿っているので、その掘込み面は、南半では地山面になっているが、北側の一部は盛土の上面から掘り始めている

(図 44)。この主体部 1 を埋め戻した後にその上面に盛土を行っている。検出できた厚みは最大で 40cm 程を測るが、追葬にあたる主体部 2 は、この盛土上面から墓壙を掘っており、それを埋め戻した状態が、現状での墳頂部になっている。

墳丘規模については、上記のように墳丘の東半が崩落しているために東西方向の大きさが判りにくい。しかし、南・西・北方向では地山を成形して墳丘端を造りだしていることがよく観察できる。

すなわち、南側背後に立ち上がる斜面は、高さ約 3 m・下端での幅約 6.6 mにわたって扇形のカット面を形成して、墳丘を区画している。ただし、このカット面の東端部分は、墳丘の崩落の影響を受けているとみられるので、本来の大きさはこれよりもさらに東側に広がっていたと考えられ、またその下端部分は後述する墓道に接続している。カット面に対応する墳丘側の下端は明瞭で、図 38 の墳丘断面図には矢印で示したように、この部分が墳丘の南端にあたっている。

北側の墳丘端は、図 37 のコンターラインを観察すれば、標高 155 m付近より下位で間隔が広がって傾斜が緩やかになっていることが判る。墳丘の下半はいずれも地山の削り出しによっており、この傾斜変換点は北側の墳丘端が意識されたものとみなされる。

一方、本墳の西側の状態は、巨勢山古墳群の通例ともやや異なっている。巨勢山丘陵に築かれる古墳は、今次調査地のほか多くの場合、比較的細い尾根上に古墳が築造されており、古墳を区画する墳丘端は尾根線上においては比較的明瞭であるが、谷側は自然に斜面になって下っていくか、もしくは地山を削り出して斜面に緩急をつけて墳丘端とし、その外側はやはり自然に下っていく斜面になっていることが多い。

この 463 号墳の西側端の状況を見ると、墳丘端の外側がそのまま谷に向かって下っていくのではなく、逆に高まりになって、つまり墳丘の西側が溝状の地形になっている。この地点の元々の地形が比較的尾根が広く、西側の墳丘端を画するに際して、周溝状に削り出す必要があったものとも思われる。しかし、図 37 にも示したように、この削り出しが墳丘南側の斜面のカット面にスムースに繋がっていかない点も見受けられた。すなわち、斜面のカット面の下端付近に溝状の遺構の南端部が接続するが、これらが接する所では傾斜角度の変換が見られるし、カット面の西側上端は直線的に溝状遺構の上端に繋がっていない。したがって、南側のカット面と西側の溝状の遺構が墳丘を区画するための一連の作業として同時に形成されたものではなく、溝状の遺構は、墳丘端が一旦形成されたのちに、おそらくあまり時間を措かない間に、改めて掘られたものとみられる。そうであれば、この溝状遺構は、墳丘端の区画に沿うようにして、墳丘背後などに至る墓道として掘削されたものの一部が残存したとみるのが、その形状からも妥当であろうと考える。墓道は、下端幅 0.4 ～ 1 m、長さは 12 m程を検出した。本来は、さらに北側に連続して繋がっていたと思われる。あるいは、後述する 465 号墳の東側で検出した墓道に、尾根線を横断した後に繋がっていた可能性も考えられるが、周辺部は地山を検出して精査したがその痕跡を認めることはできなかった。

以上のように墳丘の南・西・北の端部を押さえると、墳丘の形状は、図 37 に見えるように西側

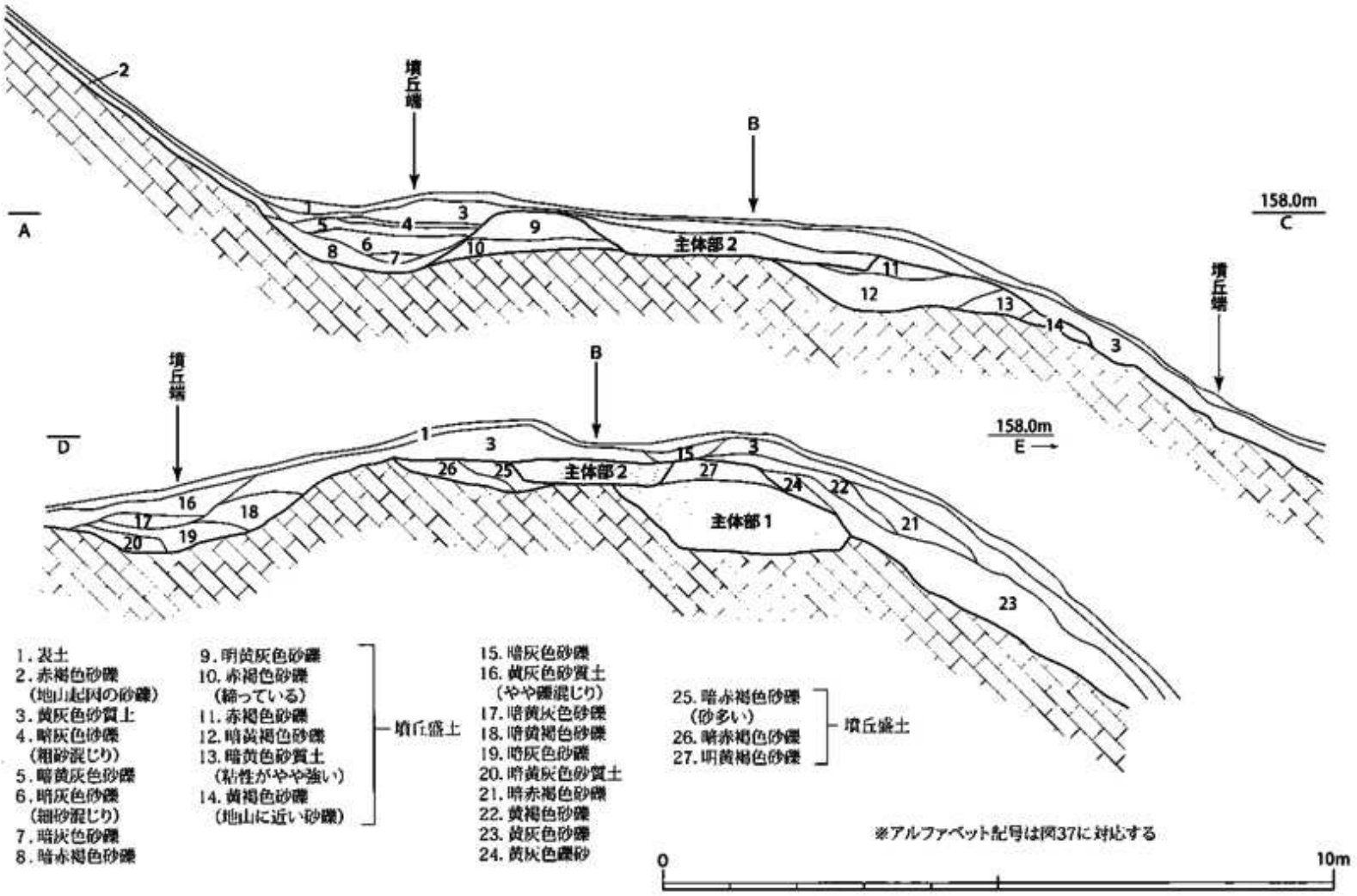


図38　巨勢山463号墳　墳丘断面図　（S.＝1/100）

の墓道や南側のコンターラインが円弧を描くことから円墳であるとみられ、その規模は径約 12 m と想定できる。墓道の形状を見る限りはやや歪な楕円形を呈するとも思えるが、これは旧地形に制約されたものであろう。また特に主体部 1 が現状では墳頂部の東端に偏っているのは、前述のように墳丘の東半が崩落しているためであって、本来は墳頂部のほぼ中央にあったと想定される。

次に墳丘の周囲で検出したその他の遺構について記述する。463 号墳の南側は、上記のように、背後斜面のカット面と共に形成された周溝に西から延びてきた墓道が繋がっているが、その周溝の底で焼土坑を検出した。

図 39 に示したように、遺構は、長径 1.0 m・短径 0.72 m・深さ 0.32 mを測る、平面形が不整形な楕円形を呈する土坑の一方向に、隅丸の三角形を呈する深さ 8 cm 程の浅い窪みが取り付いたような形状をしている。楕円形の深い土坑部分の埋土には明確な焼土は含まれていなかったが、隅丸の三角形の窪み部分には炭や焼土が多く堆積していた。これは、楕円形の土坑で火が焚かれて、その時に生じた炭や焼土を浅い窪みの方に掻き出した状況である。

焼土坑からは遺物の出土がなかったので、遺構の形成時期は厳密には不詳である。しかしこの場合、層位的な検討からある程度それを知ることが可能である。遺構の上面には周溝の埋土が分厚く堆積していて、それらを除去した後に遺構の掘込み面が検出できた。特にこの遺構の場合には、現状でほぼ尾根の中央部に存在したために、偶然にその直上に土層観察用のアゼを設定しており、当初このアゼの下に遺構の半分が隠れた状態で検出した。そのため、まず、アゼ以外の場所で遺構の上面を検出した後に、アゼの断面観察によって改めて遺構の掘込み面を検討することができた。このような手続きを経ることができたこともあって、この遺構が地山直上で、周溝埋土の直下に掘られたことは確実なのである。したがって、この遺構は周溝が掘削された後でこれが埋没し始める間、すなわち古墳の築造後ほとんど時間を経ずに形成されたことになる。このことは、この焼土坑が古墳との関連において形成されたことを示している。そして古墳と関係するとすれば、古墳の背後の周溝底部において火を使った何らかの祭祀行為が行われた可能性が考えられる。

このような祭祀行為としては、明確な遺構には伴わないが、墳頂部の現状での東端で、破砕されてその場に置かれたとみられる須恵器の一群を検出した。その出土状態等については次項の「墳丘

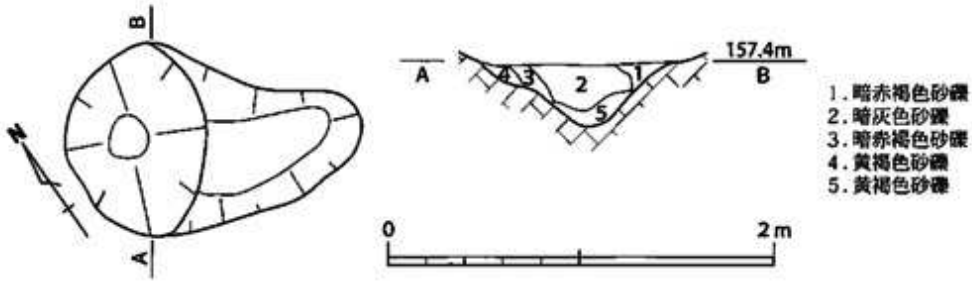


図39　巨勢山463号墳　焼土坑　平面・断面図　（S.＝1/40）

周辺の出土遺物」で詳述するが、その出土位置は、図37の墳丘測量図中には四角形の中にトーンを入れて示したとおり、主体部1の上面にあたり、元の墳頂部のほぼ中央に相当するとみられる。また、後述するように、土器の型式は主体部1出土土器よりも新しいことから、これらの土器を使った祭祀行為が行われたのは、追葬にあたる主体部2に伴ってのことであったと考えられる。

本墳の築造時期は、主体部1墓壙内出土土器からＴＫ10型式期であると考えられる。また、追葬の時期は、主体部2からの出土遺物がなかったが、墳丘上の須恵器がＴＫ209型式期にあたることから、当該期と考えられよう。

2．墳丘周辺の出土遺物

①遺物出土状態

墳頂部で表土除去を開始すると、その直後に須恵器片が出土し始めた。そのなかには表土にまみれて黒く変色したものもあるほどであったが、そのような破片の出土地点の直下から図40に示した状態で土器が検出されたので、表土中から出土した破片についても、元位置を大きく動いたものではないとみられる。

その出土位置は、現状の墳頂部の東端に当たるが、前述したように、本墳の墳丘はその東側の多くが崩落しているために、本来は墳丘のほぼ中央部であったとみられる。また、この地点は、後述する主体部1の墓壙南半の直上に当たっている。

土器出土状態は図40に示した。須恵器片は一辺5～10cmか、それ以下の破片になって一群で出土した。しかし、出土状態の平面図にも明らかなように、破片の分布には一見して偏りがあって、西の一群と東の一群に分れ、その間に破片の分布密度がやや低い部分がある。破片の総数は189片に上ったが、これらすべてに番号を付して取り上げたうえで接合したところ、東の一群が横瓶（41－4）の、西の一群が広口壺（41－3）の破片であって、両者が混じり合わないことが判った。

このような状況から、この横瓶（41－4）と広口壺（41－3）は、破片になった状態から大きく移動したのではなく、この付近で割れて砕片化したと考えられる。しかしながら、その出土地点が墳頂部であって、土器自体が露出している期間が比較的長くあったとしても、元々完形品の土器がその場に置かれて、その後の土砂の堆積過程で割れていったと考えるには、破片が小さすぎるとも思われる。むしろ、砕片化した遺物の状態から見れば、完形の土器が人為的に破砕されてその場に置かれたと考えられる。その際、破砕後の破片を墳頂部に蒔くなどの行為を行わず、一箇所に集中して置いたとみられる。

土器の状態から人為的な破砕を証明することは難しいが、横瓶（41－4）には、側面に打撃痕らしい穴が開いている（図版32）。また、横瓶は、完形近くまでに接合できたが、体部と口縁部の接合はできなかった。広口壺（41－3）は、破片のかなりの部分を失っている状態で、体部上半でそれよりも上位とは接合できなかった。図41はいずれも図上での復原を示したものである。出

土地点が、墳丘東側の崩落部の上端付近に当たることから、特に東側にあった広口壺の破片は墳丘土と共に流出していると考えられるが、(41－4)のように破片のごく一部を欠くのは、土器がその場で土圧等によって割れたのではなく、破砕の後に若干の移動を伴いその間に失われたと考えることもできる。

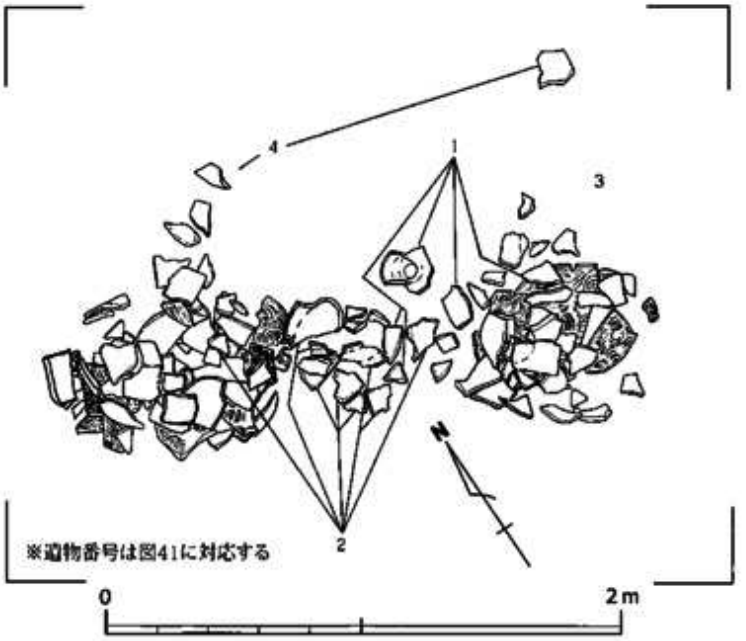


図40　巨勢山463号墳墳頂部　土器出土状態(1/15)

また、横瓶(41－4)と広口壺(41－3)とに挟まれる位置では、高杯(41－1)と短頸壺(41－2)がやはり砕片化した状態で出土した。高杯は、接合したところ脚部の約1/2を、杯部の約2/3を失っていたが、短頸壺は、口縁部の一部等を欠くものの、ほぼ完形近くにまで接合復元できた。そして、高杯、短頸壺とも最大径が12cm程の小形品であるが、出土時にはその破片は、40～45cm程の範囲に散らばった状態であった。このことも、これらの土器がこの地点で完形の状態で安置された後に割れたのではなく、破砕された後にここにその破片が置かれたことを示していると考えられよう。

以上の墳丘上の一括遺物は、出土遺物の項で後述するように、高杯(41－1)の形態などからＴＫ209型式期に併行するとみられる。また、後述する本墳の築造期の埋葬施設である主体部1の墓壙内から出土した須恵器はＴＫ10型式期とみられるので、この場合には、これらの墳丘上遺物は、古墳築造時の主体部1に伴うのではなく、追葬棺に当たる主体部2の時期に伴うと考えられる。この点に関しては、「主体部1」の「遺物出土状態」の項で再述する。

さて、巨勢山463号墳の墳丘周囲で出土した遺物には、以上の墳丘上の一括遺物のほかに、須恵器杯蓋2点と、鉄鏃片とみられる1点、刀子片1点があったので、図42に示した。

杯蓋(42－1)は、墳丘南半の表土や表土直下に存在した流出土から出土したものである。杯蓋(42－2)は、墳頂部の表土・南側周溝の下位・墳丘南斜面の流出土の比較的上位から出土した、3片の破片である。3片は互いに接合しなかったが、胎土・焼成・調整のあり方から同一個体と判断したものである。鉄鏃片とみられる(42－3)と刀子(42－4)は墳丘西裾流出土(図50－3層)から出土した。いずれも遺構に直接伴うものではないことから、この巨勢山463号墳に関係するものであるかすらも明確ではない。特に須恵器杯蓋(42－1)と(42－2)は、「出土遺物」

の項で後述するように、ＭＴ 15 型式の特徴がみられ、本墳の築造期とは時期が合わない。現状ではこれらの遺物は、本墳とは直接関係しないものとみられる。

②出土遺物

巨勢山 463 号墳の墳頂部から出土した須恵器を図 41 に、墳丘流土中など墳丘の周辺から出土した遺物を図 42 に示した。これらのうち須恵器についての形態や調整・法量を始めとする詳細は、156 ～ 157 頁の観察表に記したので参照されたい。

図 41 に示した須恵器は、「墳丘周辺の出土遺物」の「遺物出土状態」の項に記したように、墳頂部の一箇所から出土したもので、一括性の高い遺物群であると言える。

高杯（41 － 1）は、裾部径が相対的に小さい短脚の脚部に、椀形の杯部をのせるものである。杯部口縁端部は丸く収めている。短頸壺（41 － 2）は、短い口縁部が体部から屈曲して開くタイプのものである。口縁端部は外傾する面をなしている。頸部の一箇所から底部中央にかけてヘラ記号とみられる直線が描かれている。（41 － 3）は頸部の比較的短い広口壺である。残存状態は図 41 の 4 個体の中では比較的悪く、全体の 1/3 以上の部分は最終的にも検出されなかった。特に肩部付近の多くを失っており、口縁部と体部は接合できなかった。器高等に関しては図上での復原によったものである。

横瓶（41 － 4）も頸部で口縁部との接合ができず、やはり図上で復原して全体を示したが、全体としては（41 － 3）に比べれば残存状態は良好である。「遺物出土状態」の項にも記したように出土時には多くの破片になっていたが、接合復元した結果、体部は 9 割以上が接合できた。胴部の形成は、まず、上部が開いた砲弾形が形成されている。最終的な胴部の形状は横に長い器形になるが、この形成時には、長軸を鉛直方向立てて据えられていることになる。この場合、図示した（41 － 4）では左図の左側が下になっていた。次の段階で、長軸を垂直方向に立てた時の側面の一箇所に口縁部に繋がる円形の穴を穿ち、その穴から片手を入れながら、上部の開いている側を粘土の円盤で塞いで閉じたものとみられる。また体部の内面には全体に同心円のあて具痕跡が残っているが、それらは最後に円盤で塞がれる前に、比較的丁寧にナデによって擦り消されている。円盤充填された箇所にも同心円のあて具痕跡がみられるので、この部分には口縁部からあて具が差し入れられたと考えられ、その外面には、カキメ調整が施されるものの、タタキ痕跡も残っている。なお、この部位の内面当て具痕跡はおそらく外からはすでに見えなくなっていたためであろう、他の部分のようには擦り消されていない。

また、この（41 － 4）には図示状態左図の右側面付近に、打撃痕らしい孔がある（図版 32）。「遺物出土状態」の項に前述したように、この横瓶を含む土器は、墳丘上で意識的に破砕されたものとみられることから、この孔はその最初の一撃を加えられた際に生じたものかもしれない。

さて、以上の一括資料については、普遍的な蓋杯が含まれていないことから、編年的な位置づけ

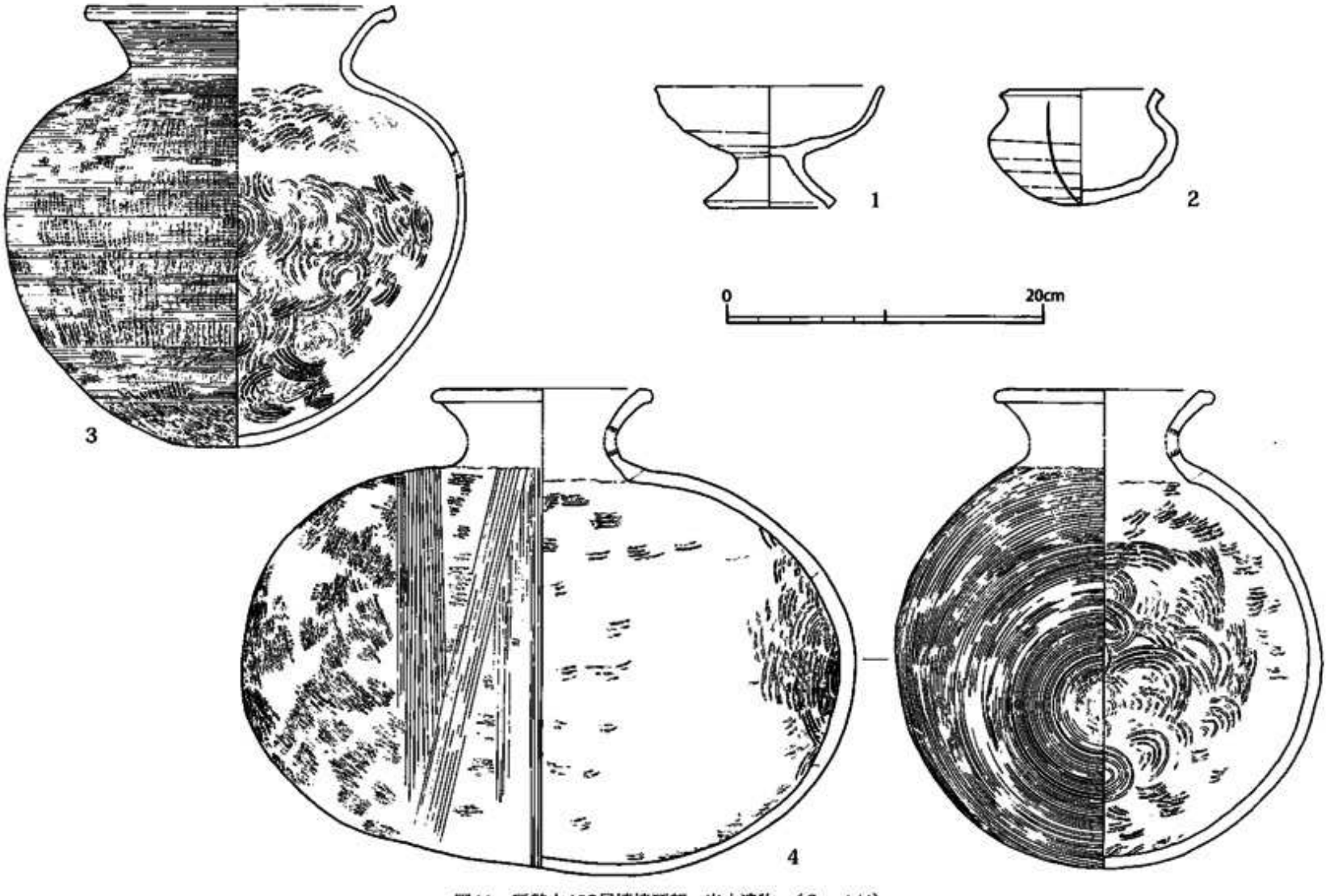


図41　巨勢山463号墳墳頂部　出土遺物　(S.=1/4)

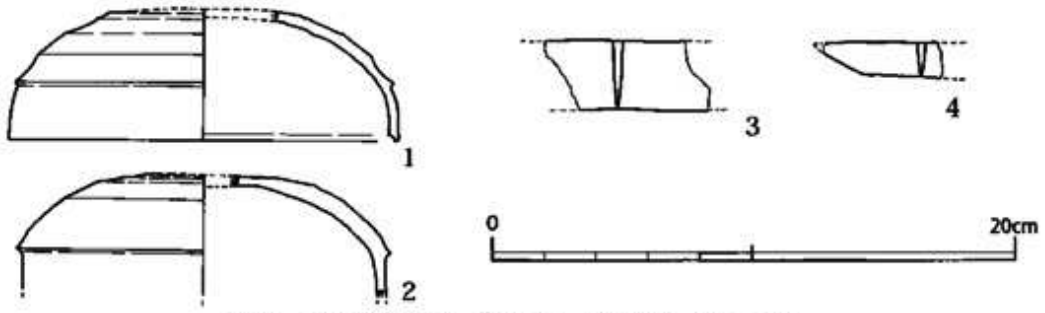


図42　巨勢山463号墳　墳丘周辺　出土遺物　（S.＝1/3）

も容易ではない。高杯や短頸壺、広口壺があるものの、個別にみればやはりいずれもが形態の上で類例が乏しいか、器形の変化が緩やかな器種である。しかし、これらの中で無蓋高杯（41－1）をみると、広陵町牧野古墳出土品の中に類似形態のものを見いだすことができる（河上編 1987、p.87 第 71 図）。当該土器についてはＴＫ 209 型式期の土器群に伴うものであるから、（41－1）がこれらの高杯と同一型式であるとすれば、本墳の墳頂部で出土した出土群についても、ＴＫ 209 型式期併行であると考えられよう。

463 号墳からはこのほか、墳丘周辺の出土遺物として、須恵器２点と鉄器２点を図化することができたので図 42 に掲げた。須恵器の形態や調整・法量を始めとする詳細は 157 頁の観察表に記したので参照されたい。

蓋杯（42－1）は、墳丘南半の表土やその直下に存在した流出土から出土したもので、合計６片があったが、接合の可能なものがあって、最終的に３片の破片になった。場所の離れたところでの出土で、それ以上の接合もできなかったのであるが、土器の胎土・焼成・調整のあり方からみて、同一個体と判断できる。これらを足し合わせると全体の 1/3 程の残存率になる。口縁端部先端は丸いが、端部の内面に段を持っている。天井部と口縁部の境界の稜は、曖昧ではないが、あまり突出しないで断面形がやや丸い。天井部の 2/3 以上がヘラケズリされている。杯蓋（42－2）も、３片の破片で墳頂部の表土・南側周溝の下位・墳丘南斜面の流出土の比較的上位から出土した。３片は互いに接合しなかったが、やはり胎土・焼成・調整のあり方から同一個体と判断したものである。口縁端部の形状は不明であるが、天井部と口縁部の境界の稜は、あまり突出しないでその断面形は先端が丸みを帯びている。天井部のヘラケズリはその 2/3 以上に及んでいる。

復元口径がそれぞれ 14cm 以上あることや、上記の特徴からみれば、こられらの土器はＭＴ 15 型式にあたる。

鉄鏃片とみられる（42－3）と刀子（42－4）は墳丘西裾流出土（図 50－３層）から出土した。（42－3）は図示状態の右端の辺は破面として表現しているが、本来の端部である可能性もある。肉眼観察ではどちらとも判断がつきがたい。背幅３mm、刃部幅 2.5cm を測る。現状の重量は 16.1 g である。（42－4）は背幅３mm、刃部幅最大 1.4cm を測る。現状の重量は 4.5 g である。

これら墳丘周辺から出土した4点の遺物は、いずれも遺構に直接伴うものではないことから、この巨勢山463号墳に関係するものであるかすらも明確ではない。特に須恵器杯蓋は、本墳の築造期や追葬の時期とも合わない。現状ではこれらの遺物は、本墳とは直接関係しないものとみられる。

3．主体部1

①形状

埋葬施設は、木棺直葬の主体部が2基検出された。その主軸は、いずれも尾根の方向に一致させており、2基が平行して存在している。初葬棺にあたる主体部1が現状の墳頂部の東端に偏っているが、元々は墳頂部のほぼ中央に築かれたと思われる。また追葬棺に当たる主体部の東端の一部が、主体部1の墓壙と重なっているが、墓壙の掘込み面の高さが異なるために、主体部2による主体部1に対する破壊は、墓壙の上端の一部に及ぶ程度の軽微なものである。

さて、本墳は南から北に下る尾根上に立地するが、「位置と墳丘・墓道」の項でも述べたように、地山上には、まず、より低い方の北側に盛土をして古墳の形状を整えている。主体部1の墓壙の掘込み面は、基本的には地山面であるが、北側の低い方は一部この盛土の上面になっている。

主体部1の平面・立面図は図43に示した。墓壙は西側辺が一部張り出すように広がる歪な形状を呈している。通有では矩形を呈して、この場合であればその規模は長さ4.38 mで幅2.4 m程になるのであろうが、東西方向の上端が最大3.75 mまで広げられており、墓壙の底で棺の西側に三角形を呈する1㎡程のスペースが造られている。

この墓壙に舟形木棺と目される棺が直葬されたものとみられる。棺の主軸はN－20度－Eに向けている。棺の規模は、最大で長さ3.09 m、幅1.06 m、深さ0.75 m以上を測る。棺底のレベルは、長軸方向に高低差があって、南の方が約12cm高くなっている。また、「遺物出土状態」の項で後述するように、棺底の南小口寄り中央付近には、赤色顔料や歯の断片が検出されたことから、被葬者の頭の位置が特定できた。このことは棺底のレベルが南の方が高いこととも合致してる。すなわち、主体部1の被葬者の頭位は南向きであったことが判る。

②遺物出土状態

棺内からの副葬品の出土はなかった。ただし、図43に示したように、棺底の南小口寄り中央付近で42cm × 48cm四方程の範囲に赤色顔料の分布が認められた。赤色顔料の中央よりやや北寄りには、有機質に起因する黒色土が認められ、ここに被葬者のものとみられる骨片および歯の断片が存在した。歯が存在することから、ここに頭部があったと判断できる。

墓壙内の棺外では、墓壙の底に赤色顔料が散布される箇所が2箇所にあった。棺側西側部分と南東隅付近である。このうち南東隅の方はさらにその上に須恵器などの副葬品が置かれていた。

棺側西側部分は、「形状」の項で前述したしたように、不自然に隅丸三角形に張り出した形状に

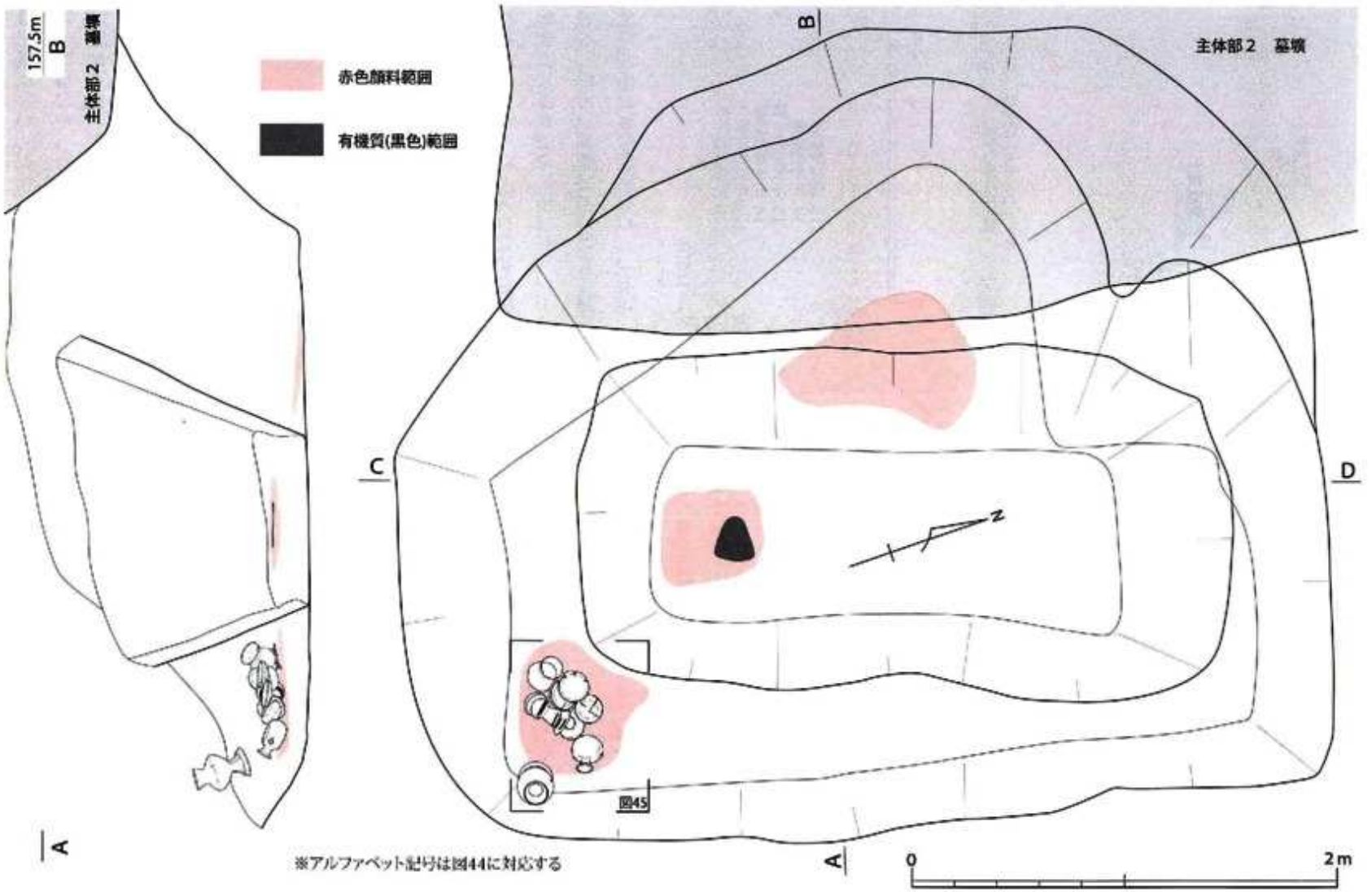


図43　巨勢山463号墳　主体部1　平面・立面図　（S.＝1/30）

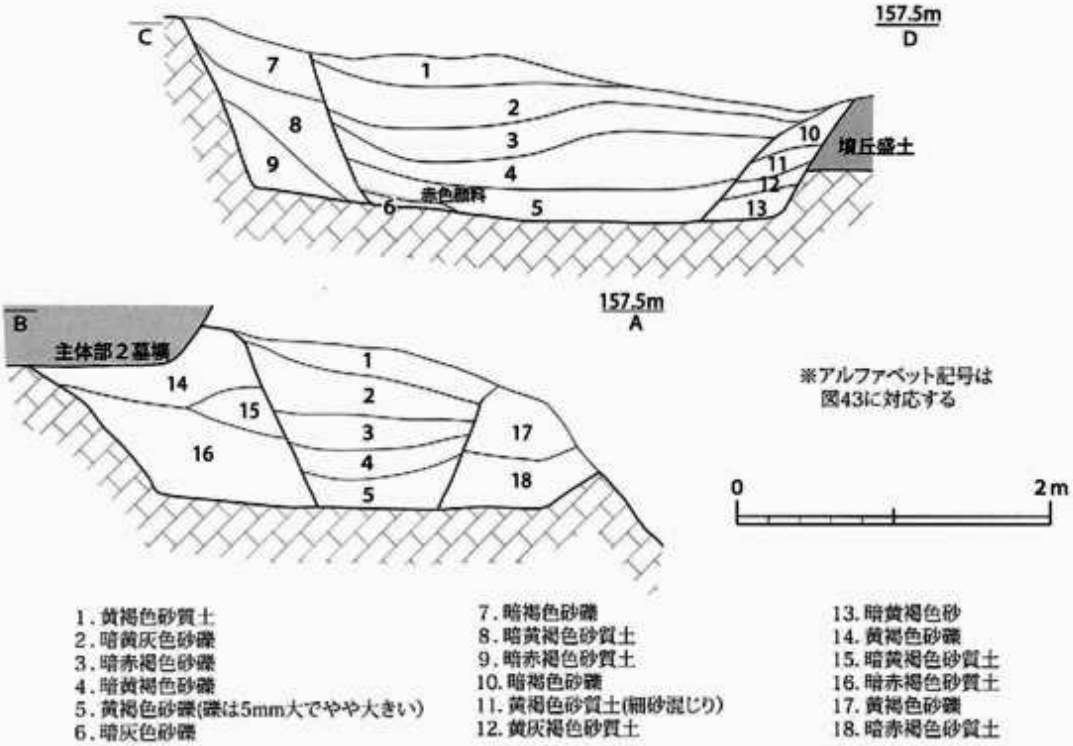


図44　巨勢山463号墳　主体部1　断面図　（S.＝1/50）

なっており、このような形状は木棺直葬の墓壙の通例ではない。しかし、この部分の底に赤色顔料の分布が認められたので、古墳築造時にこのような形状に墓壙が掘られたことは確実である。ただしこの赤色顔料の上には、何らの遺物も検出することができなかった。次に述べる南東隅の状況を勘案すると、本来、ここには副葬品が置かれていて、それが有機質のものであったために今日まで残存しなかったとみられるが、定かではない。

さて、墓壙南東の隅に蒔かれた赤色顔料の上には、図 43 および図 45 に示したように、鉄器・須恵器・土師器が一括して置かれていた。

遺物は、その最下に、すなわち赤色顔料を蒔いた面の直上に鉄鏃・鉄鎌・刀子が置かれていた（図 45 －右図）。鉄鏃は鋒を西に向けて、北から順に（47 － 13）・（47 － 12）・（47 － 14）を検出した。鏃身の一部が折り重なっている状態から、この順に置かれたことも明らかである。これらの鉄鏃の一群の東側に鉄鎌（47 － 15）が鋒を南に向けて置かれていた。この方向は、鉄鏃の鋒が向く方向とは直交するが、想定される矢柄の方向と鉄鎌の木柄の方向は、おおむね平行することになり、それらが揃えられて置かれたともみられる。ただし、この鉄鎌（47 － 15）には、出土遺物の項で後述するように鉄鏃の茎とも見える断面方形の棒状の鉄製品が銹着している。特に銹着している部分の形状が観察できないこともあって、この棒状鉄製品の器種の特定は困難であるが、その延びる方向は鉄鎌の刃部の方向に平行しており、上記の鉄鏃とは方向が揃っていない。また、この鉄鎌と棒

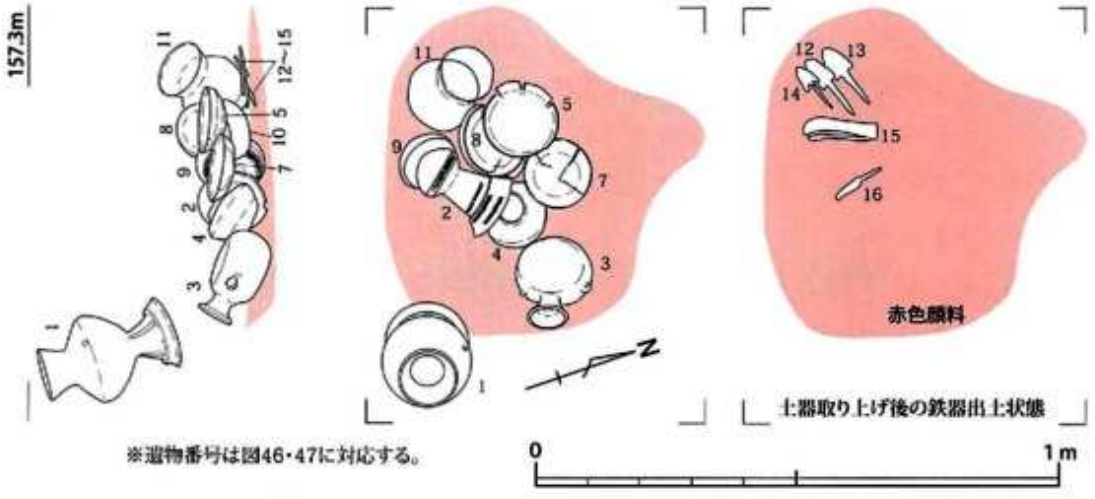


図45　巨勢山463号墳　主体部1棺外　遺物出土状態　（S.＝1/15）

状鉄製品の東側に刀子（47－16）が置かれていた。刀子の鋒も南を向いており、鉄鏃の鋒方向とはほぼ直交している。

これらの鉄製品の上に重ねて、台付長頸壺（46－1）を除く、須恵器・土師器の一群が置かれていた（図45－中央図）。特に、土師器壺（47－11）は鉄鏃・鉄鎌（47－12～15）の直上に、須恵器甕（46－2）は刀子（47－16）の直上に置かれていたために、それぞれに鉄器の錆が付着している。

土器群の出土状態は、まず西端に須恵器堤瓶（46－3）が口縁部を東に向け検出された。堤瓶は体部の扁平な側を上に向けていたが、その底部側、すなわち西側に須恵器短頸壺（46－4）が置かれていた。この短頸壺の北側には、土師器杯（47－7）が口縁部を上に向けて置かれていた。これらの堤瓶・短頸壺・土師器杯は、堤瓶の底部の一部に短頸壺が乗り、短頸壺の肩部の一部に土師器杯が乗っていたので、堤瓶を置いた後に、短頸壺・土師器杯の順に置かれていったことが判る。

次に、短頸壺（46－4）の南側には須恵器甕（46－2）が口縁部を北東に向けて横たわった状態で検出された。この甕の体部は、西に置かれた土師器杯（47－9）の中に収まっていた。この甕の口縁部も、先の短頸壺（46－4）の肩部の一部に乗った状態で検出されたことから、当初から甕を横たえて置いたとすれば、短頸壺の後に甕が置かれたことになる。しかし、土師器杯（47－9）の中に甕（46－2）の体部が収まる状態で検出されたことから、副葬時には甕は、土師器杯の中に立位状態で置かれたものが、墓壙を埋めていく過程で、短頸壺の側に倒れ込んだのかもしれない。

これらの土師器杯（47－7）と、土師器杯（47－9）および須恵器甕（46－2）に挟まれる位置に、土師器杯（47－10）・（47－6）・（47－8）・（47－5）が、下から順次重ねて置かれていた。（47－8）は検出時にやや立位に近い状態になっていたが、いずれもが基本的に口縁部を上に向けて、すなわち正置した状態で重ね置かれていたものである。またこの位置で最上位に置かれた（47－5）

には、赤色顔料が入れられていたらしく、土師器杯内部に入り込んだ土が赤く染まっていた。赤色顔料は、この赤く染まった土を取り除いたところ、土器の壁面にはほとんど顔料が残らなかったことから、土器を装飾する目的で土器の器壁に塗り込まれたのではなかったと思われる。

これらの土師器杯の西側には、土師器壺（47－11）が置かれていた。この位置は、土器群の西端の位置で、前記の鉄鏃の直上の位置に当たる。土師器壺（47－11）はやや傾いていたが、本来は、口縁部を上向きに、すなわち正置されたとみられる。また、この土師器壺の内部に入り込んだ土も土師器杯（47－5）と同様に赤く染まっていた。この壺にも赤色顔料が入れられていたと考えられる。ただし「出土遺物」の項で後述するように、この壺（47－11）の場合には杯（47－5）とは異なって、内部に入り込んだ土を取り除いた後も、底部付近の内面に赤色顔料が残っている。それでも、外からは見えない壺の底部内面に殊更に赤色顔料を塗布したとも考えにくいので、やはり、そのような目的とは別に、赤色顔料そのものを壺の中に入れて副葬したと考えるのが妥当であろう。

さて、須恵器台付長頸壺（47－1）は、図43にも示したように、以上の土器群とは出土したレベルが異なっている。すなわち、上記の土器群の上端のレベルが、（47－1）の下端のレベルにほぼ一致している。このような位置に（47－1）は正置された状態で検出された。

このことは、墓壙埋土の埋め戻しが一気に行われるのでは無く、その過程には段階があったことを示している。この場合には、このような須恵器のあり方から、少なくとも2段階があったことが判る。つまり、最初の土器群が埋め戻どされたレベルで、一旦その作業を措き、改めて須恵器台付長頸壺を副葬してから、その後さらに棺の埋め戻しが継続されたと考えられる。

ところで、前述した墳頂部出土土器（図40・41）の出土位置は、この主体部1の墓壙南東隅付近に当たり、上記の棺外遺物出土地点に程近い地点に当たっている。上記の主体部1棺外遺物のうち須恵器については、後述するようにＴＫ10型式期のものと理解できるのに対して、墳頂部出土の土器はＴＫ209型式期とし、主体部2の埋葬に伴う土器群であると考えた。従って、この2群の土器が近接して出土したことは、偶然の結果と考えられる。

しかし、図41に示した墳頂部出土の土器については、類例が普遍的に存在するものでもなく、または時期的な型式変化の乏しい器種であることから、編年的な位置づけも容易ではない。ここでは高杯（41－1）が広陵町牧野古墳出土の短脚無蓋高杯に形態が似ることから、ＴＫ209型式期に併行すると考えたが、このような形態の高杯がより古い段階からも存在したとすれば、これらの土器が主体部1に伴う可能性も浮上する。

その場合には、主体部1の棺外副葬品の埋置には3段階を想定することが可能である。すなわち、上記のように、鉄器（47－12～16）および須恵器・土師器（46－2～47－11）を墓壙底に置いた後、須恵器台付長頸壺（47－1）が墓壙内に入れられたが、この後さらに、墓壙が完全に埋められた後に、その直上付近に須恵器の一群を置いたことになる。

このように、現状では出土須恵器の編年が容易ではないために、出土状態の評価にも影響し、ここでは２通りの解釈を想定した。しかし、これは今後同種須恵器の類例が増加すれば解決する問題とも思われる。今後の資料蓄積を注視したい。

③出土遺物

図46・47に463号墳の主体部１墓壙内の遺物を掲げた。既述のように、台付長頸壺（46－1）のみがやや出土位置のレベルが異なるが、それをも含めていずれも墓壙内の棺外に当たる南東隅の一箇所に集められて副葬されたものである。これらのうち、須恵器・土師器の形態や調整・法量を始めとする詳細は、観察表（158～160頁）に記したので参照されたい。

台付長頸壺（46－1）は、体部最大径が体部高の中央より僅かに上位にあるだけで、肩部はあまり張らないでなで肩になっている。脚台部は下半にある１条の突帯によって上下に分けられていて、その上半には壺底部からこの突帯に付近に至る細長い方形スカシが３方に穿たれている。

甕（46－2）は、体部最大径の割に頸部径が比較的太く、頸部は外上方にほぼ直線的に長く延びている。

提瓶（46－3）は、体部の正面観がほぼ正円で、側面からみた時に前面はやや丸く膨らみ、背面は平らになっている。この体部の成形に際しては、この「背面」となる平らな面を下にして、粘土紐を巻き上げつつ丸く膨らむ「前面」を作り出している。最終的に、上部に径６cm程の円形の孔が開いた状態になったときに、粘土円盤でその孔を閉じてしまうものである。この時、外面の接合痕は、全面にわたるカキメ調整のために全くそれを残していない。頸部から口縁部に繋がる孔は、どの段階で開けられたものかよく判らないが、このような最終的な粘土円盤を接合する作業の段取りから考えれば、その接合の直前に穿孔されたとみられよう。粘土円盤の接合に際して、この孔から指を差し入れて内面からこれを支持するなどの行為が行われたに違いないと思われる。器形の形成は、この後に頸部が接合され口縁部が作られて、肩部に把手が付けられたとみられる。把手は「U」字状に曲げた粘土紐の両端を体部に接合させた環状のものである。

短頸壺（46－4）は、体部高の上半に最大径があり、体部に短い頸部が取り付く、通有の形態である。焼成時に蓋が被せられていたらしく、口縁部周囲の色調が、それより外側と異なっている。この痕跡は直径9.3cmを測る。

（47－5～10）は、土師器杯である。それぞれの底部の形態を見ると、多少の程度の違いはあるがいずれも丸底になって下方に膨らみ、外面は不定方向のヘラケズリで仕上げられている。法量は概ね一様であるが、（47－10）はやや口径が大きく器高も高い。口縁部が外反する傾向にある（47－5～6）と、直線的に開く（46－8）、内彎する傾向にある（46－9・10）がある。

土師器壺（47－11）は、体部最大径がその高さのほぼ中位にある、平底のものである。口縁部は外上方に直線的にのびた後、端部付近で僅かに外反して開いている。

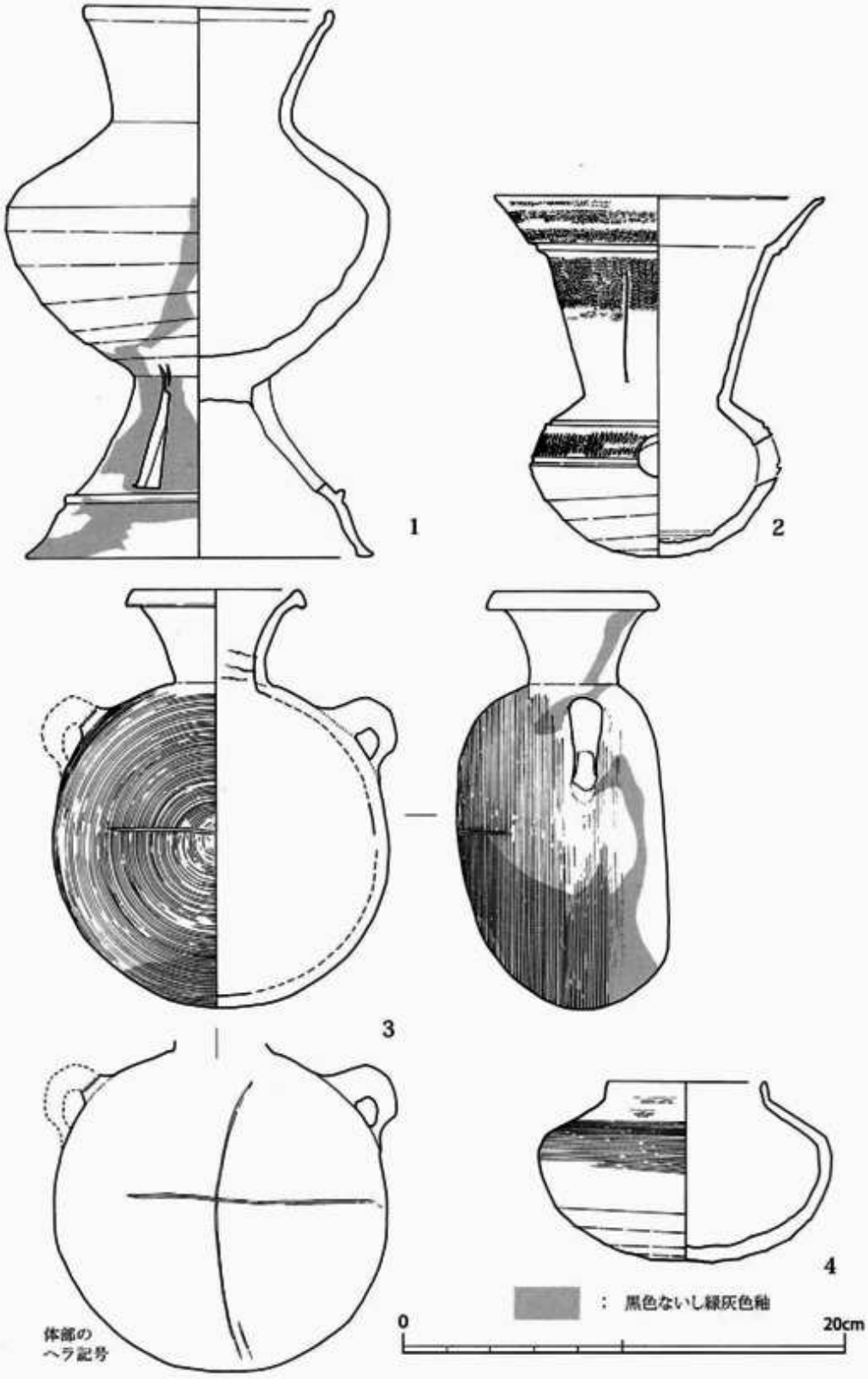


図46　巨勢山463号墳　主体部1　出土遺物　1　（S.＝1/3）

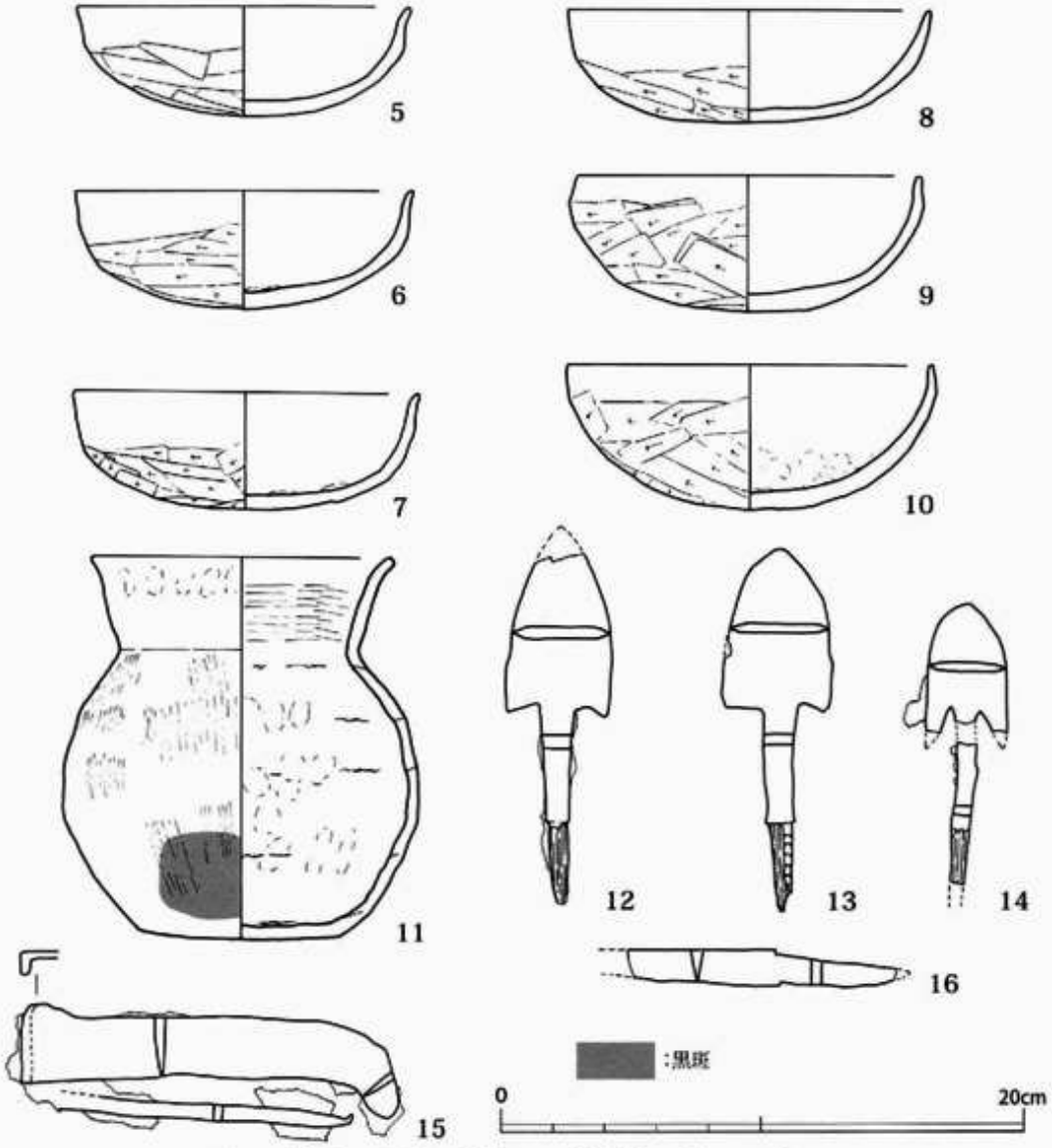


図47　巨勢山463号墳　主体部1　出土遺物2　（S.＝1/3）

（47－12～16）の鉄器は、いずれも土器の下に置かれていたものである。（47－12～14）は鉄鏃である。いずれも平根式の長三角形、平造の鏃身である。3個体とも鏃身が大振りで実用品とは思えない。そのうちでもやや小さい（47－14）は逆刺先端を欠いているが、それが深く明瞭である。この（47－14）は鏃身部と頸部付近が欠損していて、茎部との接合ができない状態であるが、図45の遺物出土状態に見えるように、残存した鉄棒片が、その頸部から茎に当たる地点に存在したので、図47では欠損部を破線で補って示した。（47－12）は残存長13.3cm、鏃身部最大幅4.1ｃｍを測る。現状での重量は35.7ｇである。（47－13）は全長13.9cm、鏃身部最大幅4.2cmを測る。現状での重量は34.1ｇである。（47－14）は鏃身部残存長4.5cm、同最大幅3.1cmを測る。

現状での鏃身部の重量は 10.7 g、同じく頸部・茎部の重量は 4.0 gである。

（47 － 15）は、鉄鏃に断面方形の棒状の鉄製品が錆着したものである。棒状の鉄製品は、鉄鏃の頸部から茎部と思われるが、錆着している部分が特に錆膨れが起こっていて、肉眼での観察が不可能になっている。このために、器種特定は分明ではない。鉄鏃は曲刃鏃で基部を約 6 mm 直角に折り曲げて柄部の装着をしたとみられる。全長 14.3cm、刃部最大幅 2.4cm、背幅 4 mm を測る。棒状の鉄製品が錆着した状態での、現状での重量は 61.4 gである。

刀子（47 － 16）は、鋒と茎の先端を欠損している。茎には柄部の木質もやや残っていて観察が難しいが、関の形状は図示のように両関であるとみられる。残存長は 10.1cm、背幅 4 mm を測る。現状での重量は 15.2 gである。

4．主体部２

①形状

主体部２は、巨勢山 463 号墳に２基ある埋葬施設のうち、追葬棺に当たるものである。その位置は、現状での墳頂部の中央に当たるかに見えるが、既述のように、本墳墳丘はその東半を土砂の流出によって失っていることから、本来は中央よりやや西寄りに築かれたと想定できる。図 37 の墳丘測量図に示したように、平面的に見れば墓壙の東辺が先行する主体部１と重なっている。しかし図 38 の墳丘断面図に示したように、主体部２の墓壙は、主体部１が埋め戻された後にその上位に盛られた盛土面から掘られたことから、主体部１とは掘込み面の高さが異なっている。このため、主体部２による主体部１に対する破壊は、墓壙の上端の一部に及ぶ程度の軽微なものになっている。

さて、墓壙の長軸の方向は、立地する尾根の方向とおおよそ一致しており、先行する主体部１ともほぼ平行になっている。主体部２の平面・断面図は図 48 に示した。墓壙の規模は、検出上端で、長さ 4.47 m、幅 2.07 mを測る。深さは最大で約 50cm を検出したが、墓壙の検出面はその上位に堆積した流入土の直下であって、本墳に当初盛られたはずの盛土も幾分か流出しているとみられるので、墓壙の深さも本来はさらに深かったと考えられる。

この墓壙に舟形木棺と目される棺が直葬されたとみられる。棺の主軸はN － 12 度－Wに向けている。棺の規模は、最大で長さ 3.45 m、幅 3.0 m、深さ 50cm 以上を測る。棺底のレベルは、長軸方向に高低差があって、南の方が約 15cm 高くなっている。

棺の内外から土器などの出土はなかった。ただ、棺のほぼ中軸上で中央より南小口方向に寄った地点で、拳大程の粘土塊を１点検出した。その出土層位は、図 48 に示したように、棺の埋土中であって棺底から約 25cm 高い位置である。後述するように、これに類する粘土塊は 465 号墳の墳丘西側裾部付近で、はやり拳大の大きさに分れているものの、ややまとまった分量（約 5 Kg）が出土した。これらは、調査区全体に満遍なく散見されるのはなく、一箇所に集中する出土状況であっ

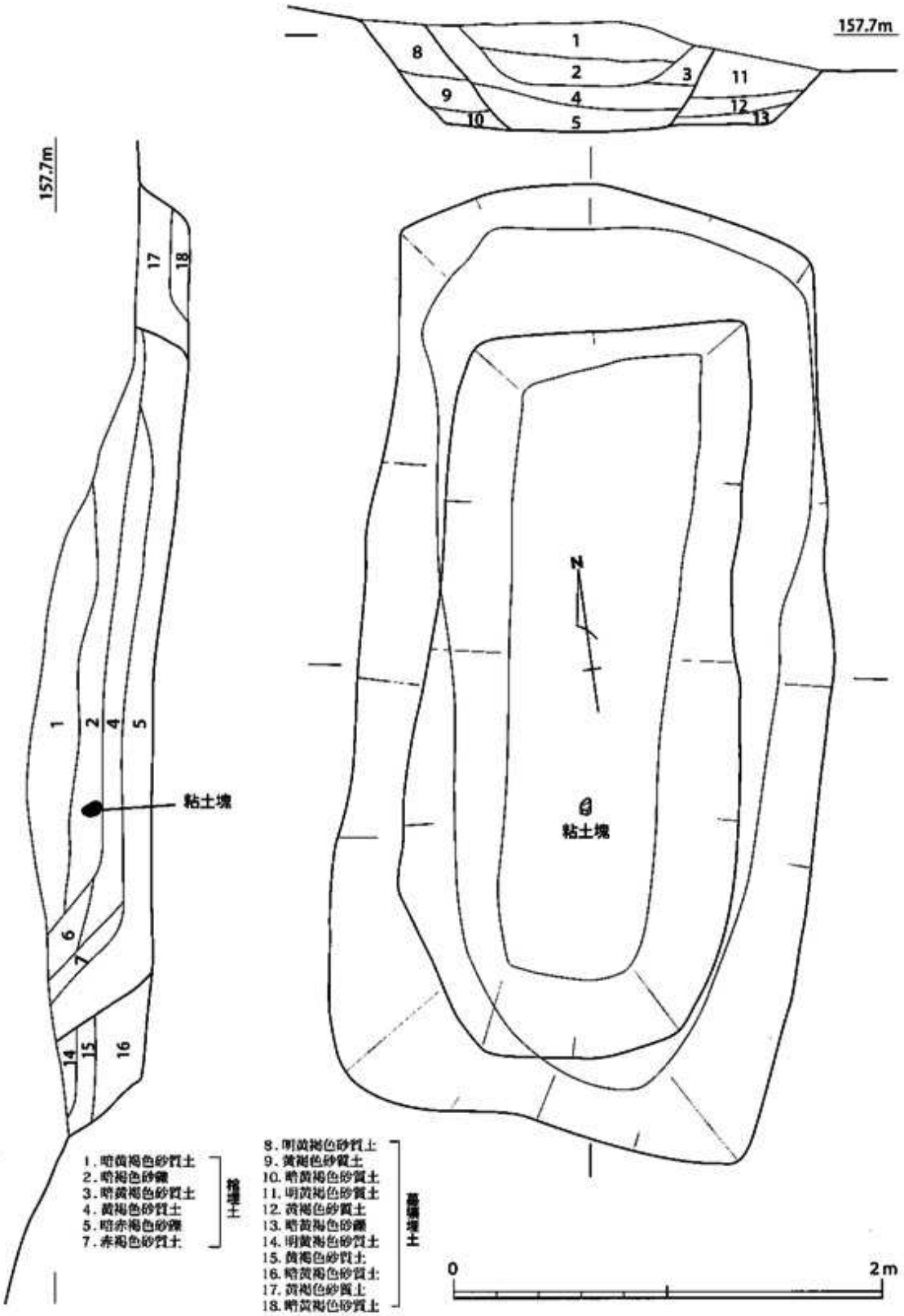


図48　巨勢山463号墳　主体部2　平面・断面図　（S.＝1/30）

たので、特に注意を引いたものである。これらの粘土塊と463号墳主体部2の粘土塊が関係するものか、また、そもそも463号墳のものも含めてこれらの粘土塊の出土が何らかの人為的な行為の結果であるのかすら、不分明である。463号墳の主体部から出土した1点の粘土塊については、仮に意識的に墓所に持ち込まれたものであれば、棺上の中軸線上に置かれた可能性が考えられるが、定かではない。

また、被葬者の頭位については、棺内の副葬品などがないために明確ではない。しかし棺底の高低差をみれば、上記のように南に高くなっていることから、南に頭位を向けていた可能性が考えられる。この方向は、既述の主体部1と同様の方向である。なお、もしこのように南頭位であって、先の粘土塊が意識的に棺上に置かれたものであれば、その位置は、被葬者の顔面から胸のあたりの上位に当たることになる。

主体部2からは土器などの副葬品の出土がなかった。このため、その構築時期すなわち本墳に対する追葬の時期は不明確である。しかし、前述のように墳丘上の須恵器は、初葬時の須恵器の時期と合致しない、ＴＫ209型式期と考えられた。墳丘上に須恵器が置かれたことが主体部2の埋葬に関連するとすれば、この主体部は当該期に構築されたと考えられよう。

第2節　巨勢山４６４号墳

1．位置と墳丘

巨勢山462号墳とは比高差からみて隔絶している北北東方向に伸びる尾根上、463号墳のほぼ北側に464号墳が築造されている。その同一尾根上に465号墳、466号墳が築造されており、これら4基の古墳でひとつの支群をなしていると考えられる。別添図にあるとおり463号墳の18ｍほぼ北側に位置しており、現状での墳頂部の比高差は5ｍ程となっている。墳丘は463号墳から続く尾根の、斜面が若干緩やかとなっている地点に築造されており、図49の平面図のとおり南側は立ち上がる斜面をカットして弧状に墳丘を区画している。現状では土砂の流出が著しく墳丘が判別しづらくなってはいるが、北側のコンターラインは円弧を描き、南側の周溝の形状とも対応することから464号墳が円墳であることが判る。

図50の墳丘断面図にも示しているように、墳丘南側の尾根をカットした部分に幅1.2ｍ程の掘り込みが周溝と考えられることから、標高152.00ｍあたりからの立ち上がりが墳丘端と判断できる。墳丘北側は標高150.00mあたりでコンターラインの間隔が広くなる地点を墳丘端と判断できる。よって464号墳は直径12mの円墳であると判る。

古墳築造以前に図50－17・18・25・26層がすでに堆積しておりそこに古墳の築造が行われている。17層は当時の表土であり他の層と比べて暗灰色を呈している。このことから古墳を築造する際にいわゆる野焼きを行い、草木が除去されたものと考えられる。

墳丘の成形は2度見られる。1度目は墳丘の裾を成形して古墳の形状を整え、21～24層など

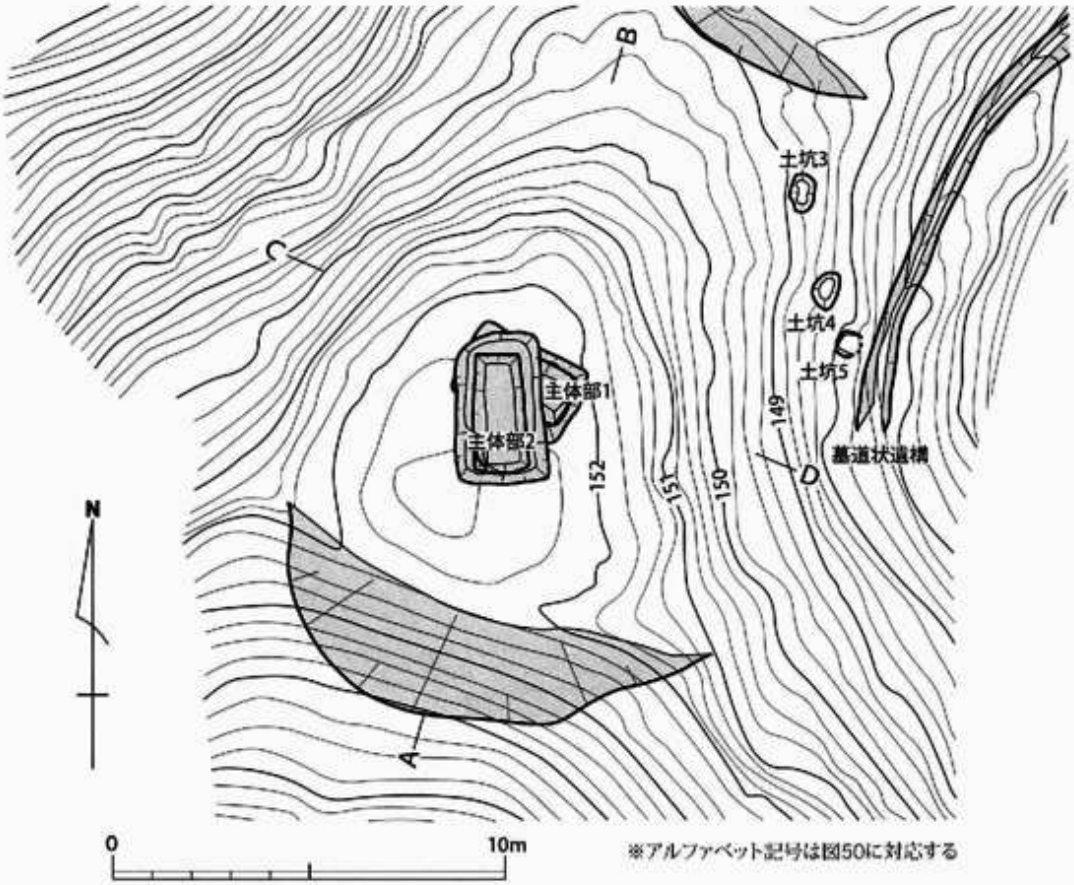


図49　巨勢山464号墳　墳丘測量図　（S.＝1/200）

を盛土した後に墓壙を掘って舟形木棺を直接埋葬し、墓壙を埋め戻して盛土を積んでいる。２度目の墳丘の成形は、１度目に成形した墳丘の上面に主体部２の墓壙を掘り、舟形木棺を直接埋葬し墓壙を埋め戻して盛土を積んだものと思われる。

巨勢山 464 号墳の築造時期であるが、後述するように古墳の築造時期のものである主体部１で検出されている須恵器の一群からＭＴ 15 型式期であると考えられる。

２．墳丘周辺の出土遺物

（51 －１）は墳丘北斜面裾部流土から出土した須恵器杯身である。詳細は観察表（161 頁）に譲るが、口縁端部に面を持たず丸くおさめている点、底部のヘラ削りの部分が狭いことなど形態的な特徴からＴＫ 10 型式に該当する。後述されるように、本墳には、２基の主体部が存在し、先行する主体部１からはＭＴ 15 型式の須恵器が、後出の主体部２からは、ＴＫ 10 型式の須恵器がそれぞれ出土している。したがって墳丘流土から出土したこの（51 －１）は、主体部２に伴うものと考えられる。

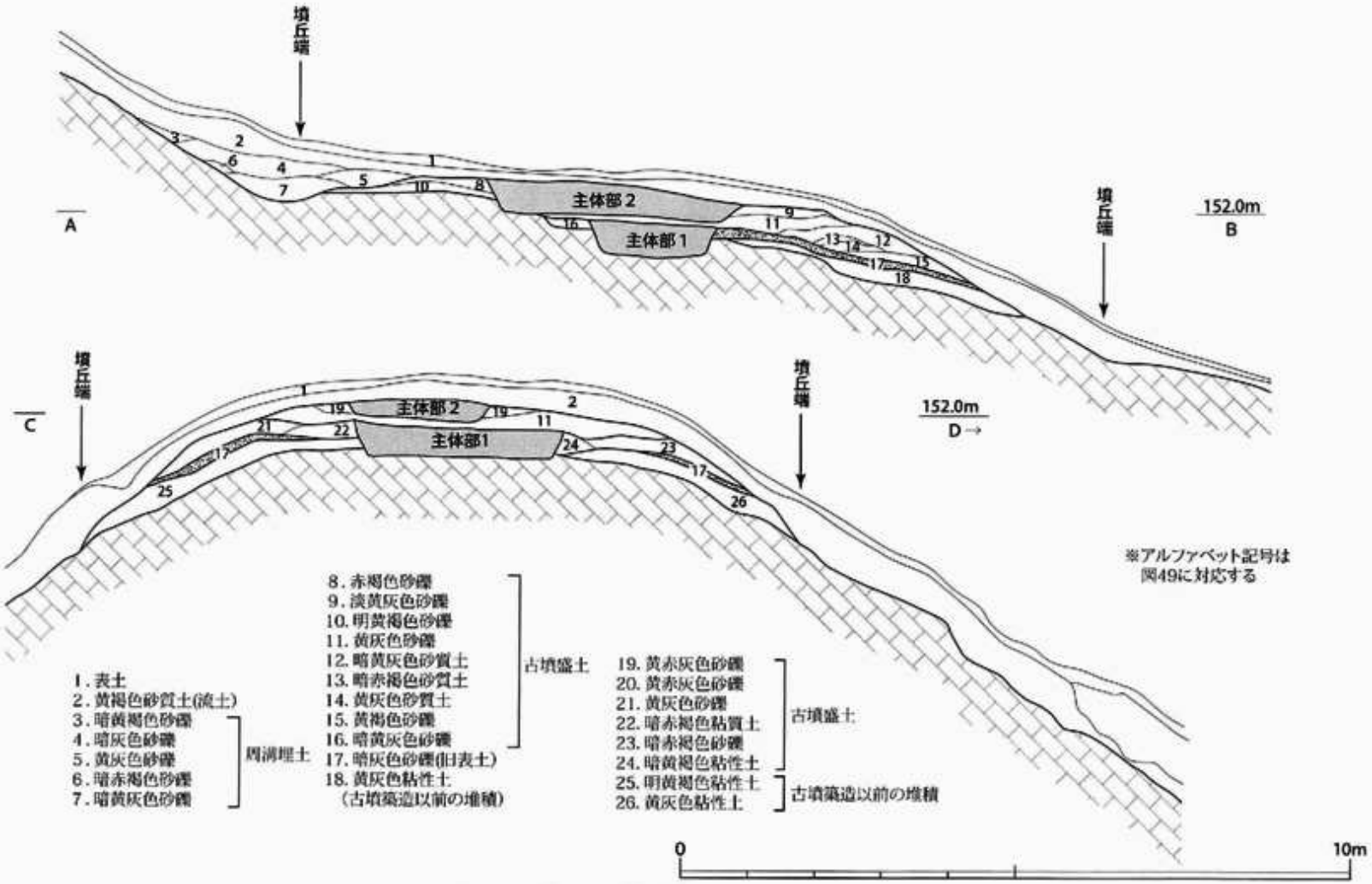


図50　巨勢山464号墳　墳丘断面図　(S.=1/100)

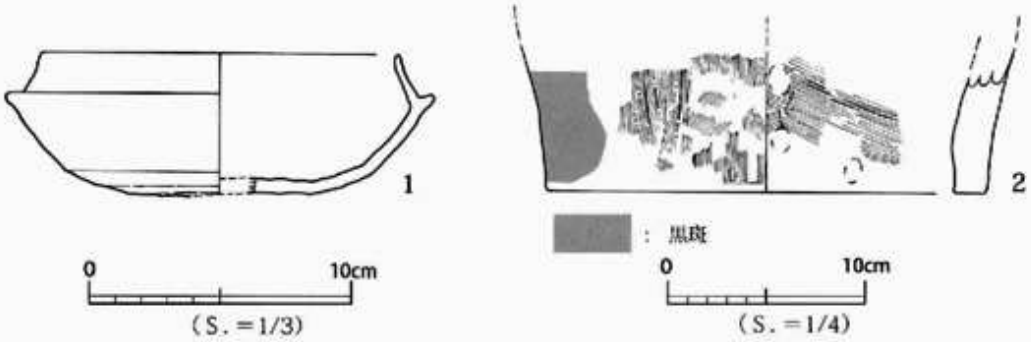


図51　巨勢山464号墳　墳丘周辺　出土遺物

（51－2）は墳丘北裾から出土した円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪の1段目の残存部分である。外面調整はタテハケが主体で、「底部の調整」（上田 1997）はナデるア類である。底部の形態は外側に開く2類で、底端部はb類である。内面調整はナナメハケが行われている。また外面の残存部分には黒斑がみられる（観察表 154 頁）。以上の点からこの埴輪は、川西編年第Ⅲ期のものであるといえよう。この時期は、本墳の2基の主体部とも合致しない。加えて検出された埴輪片はこの1点であるということから、464 号墳の墳丘に埴輪が用いられていたとは考えにくい。そこでこの埴輪の色調および胎土の様子をみると、本墳から南 50 mの上位に位置する 462 号墳出土埴輪、特に（15－2・6）などと類似していることに気づかれる。この点から考えると、この埴輪は本来 462 号墳で樹立されていたものが何らかの事情でこの位置に移動された可能性が高い。

3．主体部1

①形状

墳頂部に2基ある主体部のうち、464 号墳が築造された時のものである。旧地形を削って墳丘を成形し、墳頂部は盛土を積んで成形したうえで主体部1の墓壙が築かれている。図 49 の墳丘測量図にも示しているように、この主体部の主軸は尾根のラインにほぼ直角に交わる方向であり、地形を重視したものとなっている。

主体部1の墓壙の上端は盛土をある程度除去した時点で検出した。墓壙は、最大で長さ 3.2 m、幅 1.9 m、深さ 0.6 mを測り、底のレベルはほぼ同一で平坦である。舟形木棺を直接埋葬したものとみられる。棺底で採ると棺の主軸は N－66 度－W に向けている。棺の規模は検出上面で長さ 2.85 m、幅 1.29m、棺底部では長さ 2.37m、両小口部付近では幅 0.75 m、中央部では 0.63m を測る。また図 52 の主体部平面図にも示しているように、両小口部周辺に赤色顔料の分布が認められる。西側小口周辺では 70cm × 50cm 四方、東側小口周辺では 60cm × 45cm 四方の範囲で検出されている。被葬者の頭部周辺と脚部周辺の棺底から検出されていることから、棺底に塗布されていたものと考えられる。また、少量のため図示できなかったが断面図に示した西側小口周辺の4層直上ならびに3層直上にも若干の赤色顔料を検出している。このことから棺蓋にも顔料が塗布さ

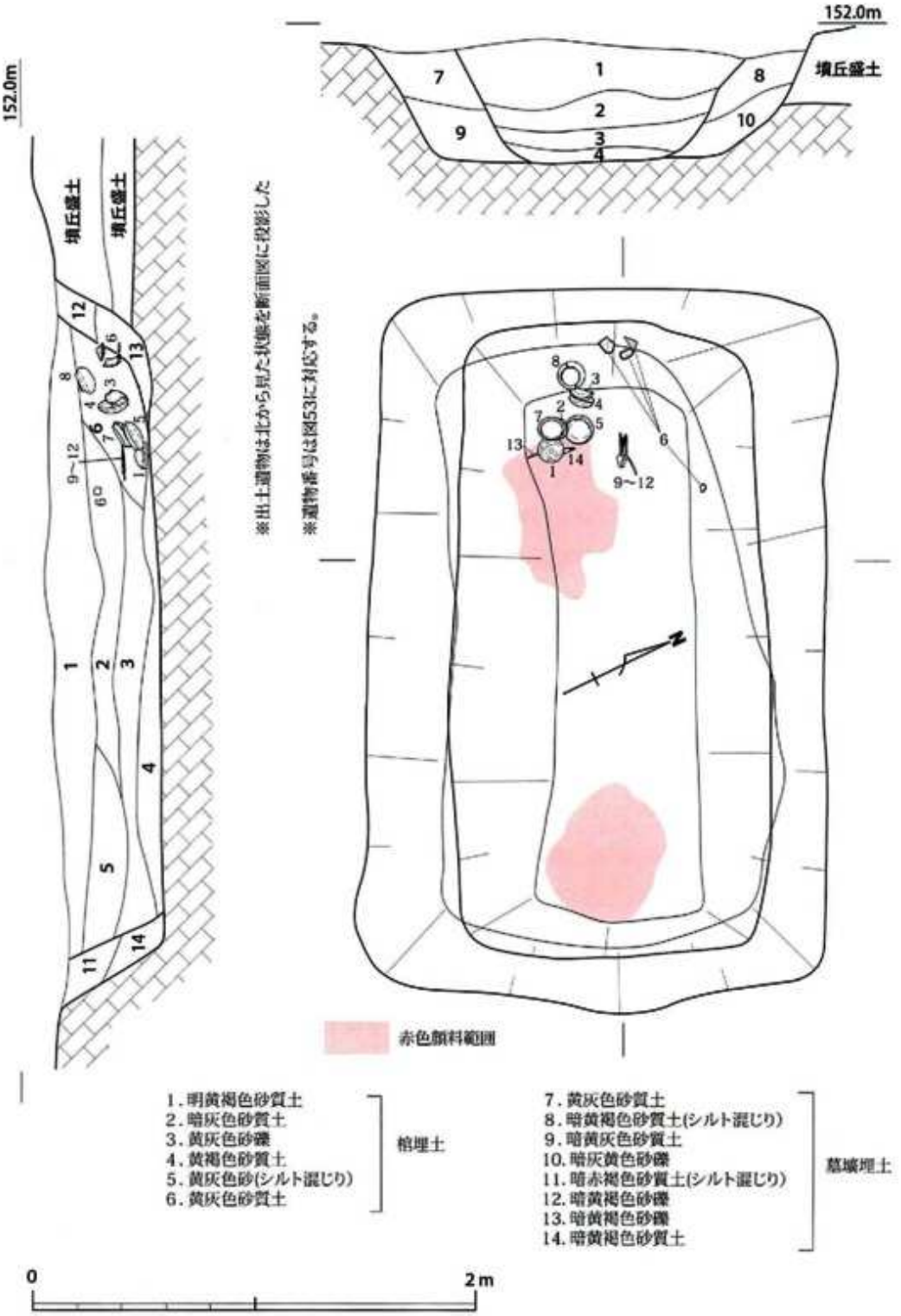


図52　巨勢山464号墳　主体部1　平面・断面図　（S.＝1/30）

れていた可能性がある。副葬品が西側小口部に集中していることから被葬者の頭位は西側を向いていたものと思われる。

②遺物出土状態

図52の平面図にも示しているように主体部1では赤色顔料が両小口付近の棺底である4層直上から検出されている。西側小口付近の赤色顔料の直上には鉄鏃（53－13）と刀子（53－14）が見られ、その上から杯蓋（53－1）が口縁を下に向けて出土した。図52の立面図にあるように、（53－1）の上位に杯身（53－5）が口縁を東に傾けて、その南側に並んで杯身（53－7）が（53－5）と同様に口縁を東に傾けた状態で出土している。（53－5）の西側からは杯蓋（53－4）が口縁部を西側に向け、直立した状態で出土している。（53－4）中には杯身（53－3）が1/2の破片の状態で入り込んでいた。その上位のやや西側からは短頸壺（53－8）が口縁を東側に傾けて出土している。また杯蓋（53－6）の破片が西側小口付近から3片、その地点から約70cm離れた墓壙内から1片が出土している。（53－6）については調査着手直後に表土中から3片が採集されており、それらを接合するとほぼ完形になった。（53－6）は他の土器に比べれば早い段階に破片になっていて、最終的にはそれが主体部の上位や棺内に分かれて存在していたことになる。（53－3）については最終的にこれと接合できる破片はなかった。

これまで述べてきた遺物群の北側からは鉄鏃（53－9～12）がまとまって出土している。鏃身部が残る（53－9～11）は一束になった状態でいずれも鋒を東に向けていた。鏃身部を欠損して茎部だけ残存していた（53－12）はややその状態が乱れていた。茎の先端が（53－11）の鏃身部に当たった状態で鏃身部が残っていたとすれば、その鋒が向く方向は他の3個体の方向と比べると、やや北寄りになってこれらとは斜交している。ただ、これらの4個体の鉄鏃がおおよそ一塊になっていたことは確かで、その平面的な位置は棺の中軸線上にほぼ相当しており、立体的にも大きく傾くことはなくほぼ水平レベルを保っていた。しかし、もとよりこの出土位置は棺内の中位に当たっていて、棺埋土中からの出土であるので、この出土状態が現位置を保っているものではない。

以上のことから、少なくとも（53－1）と（53－13・14）以外のものは床に接していないことから元は棺上に置かれていたと判断できる。それらはいずれも図52の断面図に示す6層に含まれている。この層は棺蓋が破れて土が流れ込んだ状態をよく示している。（53－1）と（53－13・14）については6層に含まれるか、6層の下にあるかは判断しがたい。しかし、これらの3点については赤色顔料の上面に接しているとはいえ、他の遺物が棺内に流れ込んだ状況や、（53－13・14）ならびに（53－1）の重なる状況を観察すると他の遺物と同様に棺上から流れ込んだものであると考えるのが妥当である。

また、副葬されたとみられる須恵器は「出土遺物」の項で述べるようにＭＴ15型式に相当するとみられる。巨勢山古墳群では、木棺直葬墳の棺内に土器を副葬することが一般化するのはＴＫ

10型式期以降のことである。このことからも（53－1）は棺上遺物であると考えて差し支えなかろう。

ここで埋葬の状況を考察する。被葬者が西に頭位を向けていたとすれば、頭部付近の棺上南寄りに（53－13）と（53－14）が置かれ、（53－1・4）は伏せて、また（53－2・5・7・8）はいずれも口縁部を上に向けて置かれたと考えられる。また、それらの北寄りに弓矢を少なくとも4本まとめて置いたものと思われる。1/2を欠損した（53－3）や破片が散在的になっていた（53－6）の存在は墓壙の埋め戻しの段階で破砕行為が行われた可能性を示している。

③出土遺物

巨勢山464号墳主体部1から出土した遺物は図53のとおりである。先述の通り、それらはいずれも棺内に流れ込んだ埋土内で検出されたものである。このうち、須恵器（53－1～8）については、形態、調整、法量などの詳細を161～163頁の遺物観察表に示しているので参照されたい。

杯蓋と杯身の胎土、焼成、法量などを観察した結果、蓋杯（53－2・3）、（53－4・5）、（53－6・7）はそれぞれセットであったとみられる。

（53－1）も併せてこれらの蓋杯を見るとおおむね特徴は共通している。杯蓋は口径13～14cm程度で口縁端部が面をなしており、天井部と口縁部を分ける稜はやや突出するが、それほど鋭くない。いずれも天井部は比較的高い。杯身はいずれもたちあがりが内傾したのち中位よりやや上で屈曲して伸びている。口縁端部は丸く、受け部は外上方に広がっている。ただ、底部については（53－3）が径の割に器高が高いのに対して、（53－5・7）は器高が浅く扁平な感じがする。

短頸壺（53－8）は口縁部が体部から明瞭に屈曲して、ほぼ真上に短く立ち上がる。体部の上半が最大径で肩部となっている。肩部の屈曲も明瞭で肩が張った感じが見受けられる。

これらの土器を須恵器編年に照らし合わせるとＭＴ15型式期に併行するものと考えられるが、蓋杯に扁平なものや口縁端部に丸みを帯びており新しい要素を含んでいるとみられることから同型式期でも時期がやや下ると考えられる。

鉄製品は鉄鏃（53－9～13）と刀子（53－14）が出土している。鉄鏃は鏃身部の残存状況から少なくとも5個体以上の副葬があったとみられるが、実数は不明である。

（53－9）の鏃身は長三角形で、逆刺は欠損するものの有することが残存状況から確認できる。断面は平造となっている。鏃身の大きさは幅2.4cm、長さ5.7cmである。茎には矢柄の木質が残存しており、装着後に巻いたと思われる樹皮も確認できる。鋒から茎先端までが比較的残っており、現状での残存長は15.6cm、重量は19.5gとなっている。

（53－10）の鏃身は長三角形で逆刺を有し、断面は片丸造となっている。鏃身の幅は1.2cmである。茎には矢柄の木質が残存しており、樹皮も確認できる。鋒部分は欠損しているが全体としては比較的残っており、現状での残存長は14.1cm、重量は11.1gとなっている。

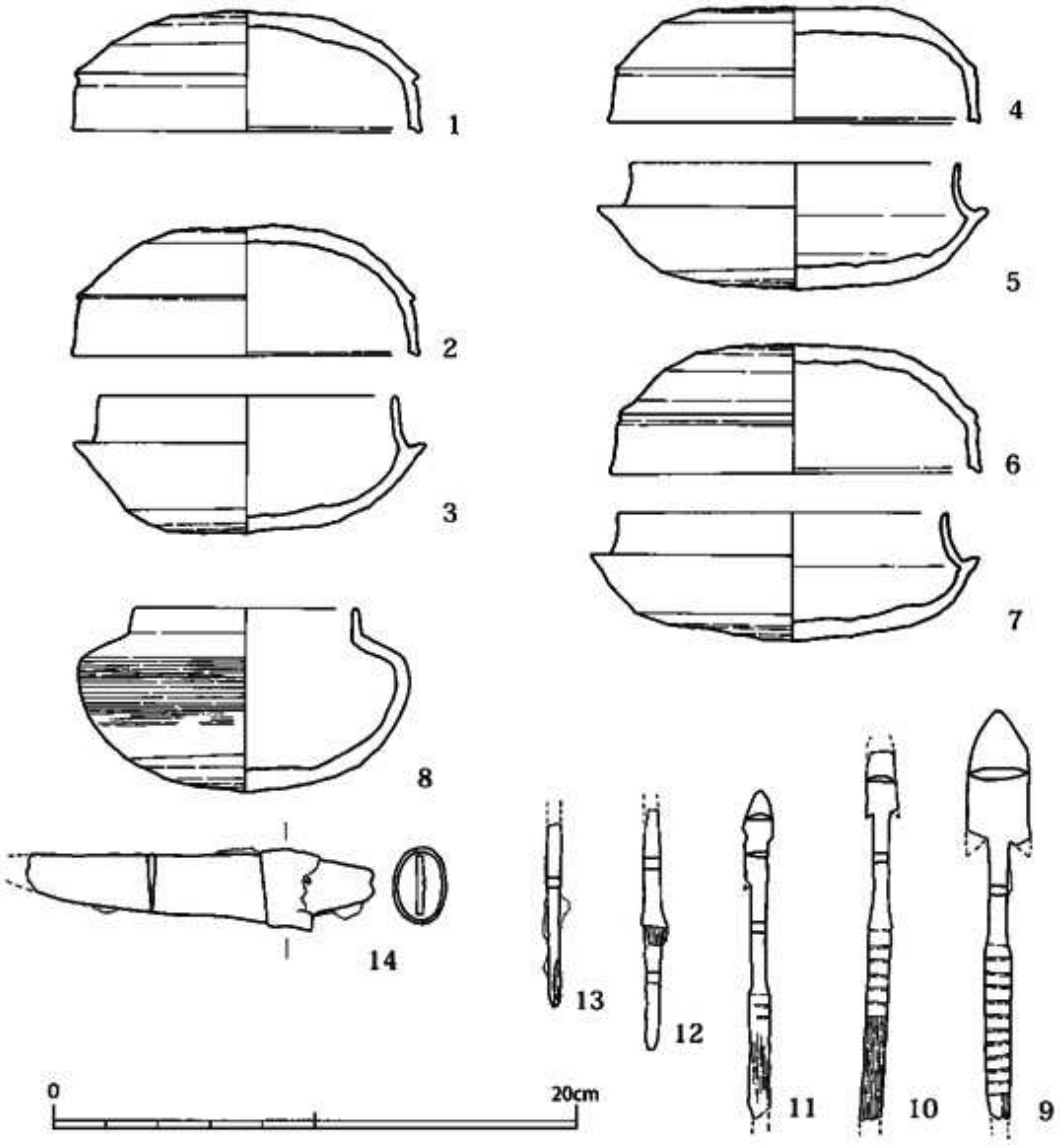


図53　巨勢山464号墳　主体部1　出土遺物　（S.＝1/3）

（53－11）は片逆刺を有する長頸鏃である。刃部と頸部が区別されて、頸部に独立して片逆刺がつくものである。鏃身の断面は片丸造である。鏃身の大きさは幅 1.2cm、長さ 1.9cm である。茎には矢柄の木質が残存している。鋒から茎までの残存長は 12.5cm、重量は 10.4g である。

（53－12・13）は頸部ならびに茎が残存するのみである。いずれも長頸鏃のものであったと思われ、茎には木質が残存している。

刀子（53－14）は鋒と茎端がいずれも欠損している。残存長は 13.5cm、刃部は最大で幅 2.5cm となっている。茎につながる関部の形状は両関で、鉄製の責金具を有している。責金具の柄頭側は欠損しているが、最大で幅 2.2cm を測る。茎には木質の柄が残存している。

4．主体部２

①形状

主体部２は墳頂部に２基ある主体部のうち、主体部１を覆う盛土を掘り込んで築造されたものである。図55にも示しているようにこの主体部の主軸は南北方向であり、主体部１とは異なり地形ではなく方位を意識して造られている。図49のとおり主体部２は主体部１の上に重なり合って築造され、主軸は約30度ずれている。

主体部２の上端は表土ならびに流土を除去した段階で検出された。墓壙は墳丘盛土が流出しているために上部は残っていないが、検出した墓壙の規模は最大で長さ3.9m、幅2.4 m、深さ0.5mを測る。底のレベルはほぼ同一で平坦になっている。舟形木棺を直接埋葬していたものとみられ、主軸はN－３度30分－Wを向けている。棺の規模は最大で長さ3.06 m、幅は北小口部が1.13 m、南小口部が1.41 mと南小口部の方が広い。棺底部は長さ2.55 m、幅は北小口部が0.60 m、南小口部は0.84 mを測る。被葬者の頭位は副葬品の出土が見られないなど判断材料は乏しいが、墓壙ならびに棺が南側を広く造っていることから南側を向いていたと思われる。

②出土遺物

主体部２に伴う遺物は須恵器杯蓋（54－１）のみである。主体部の棺内埋土、棺内埋土直上、墳丘の南東区裾で検出された５片を接合したが全体の1/2にも満たない。このことからこの杯蓋は主体部直上の墳頂部に置かれたか、破砕されたものが主体部直上に撒かれたものと見られる。そのような残存状況であるため図化の際には回転復原している。形態、調整、法量などの詳細は163頁の観察表を参照されたい。杯蓋の口径は15.0cmで、口縁端部の先端は丸い。口縁部と天井部を分ける稜は境界がわずかに突出するだけで稜の下端が凹線となって窪んでいる。天井部はあまり膨らまず扁平な感じを受ける。須恵器編年に照らし合わせると、ＴＫ10型式期に併行すると思われる。これは先行する主体部との層位関係から見ても矛盾はない。

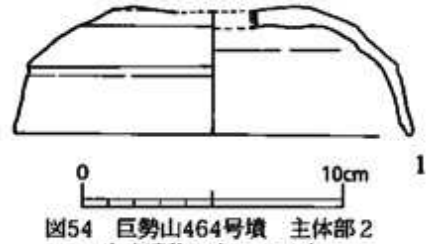


図54　巨勢山464号墳　主体部２
出土遺物　（S.＝1/3）

第３節　巨勢山４６５号墳

1．位置と墳丘・墓道

巨勢山465号墳は、463号墳から北東方向に延びる尾根上に立地している。南接する464号墳および北接する466号墳の現状での墳頂部の高さを比較すると、比高差がそれぞれ3.5 m程になっている。直線距離は464号墳とは約19 m、466号墳とは約20 m離れている。地形上のまとまりを見れば、463号墳から466号墳までの４基が一つの支群を成している景観で、465号墳はその

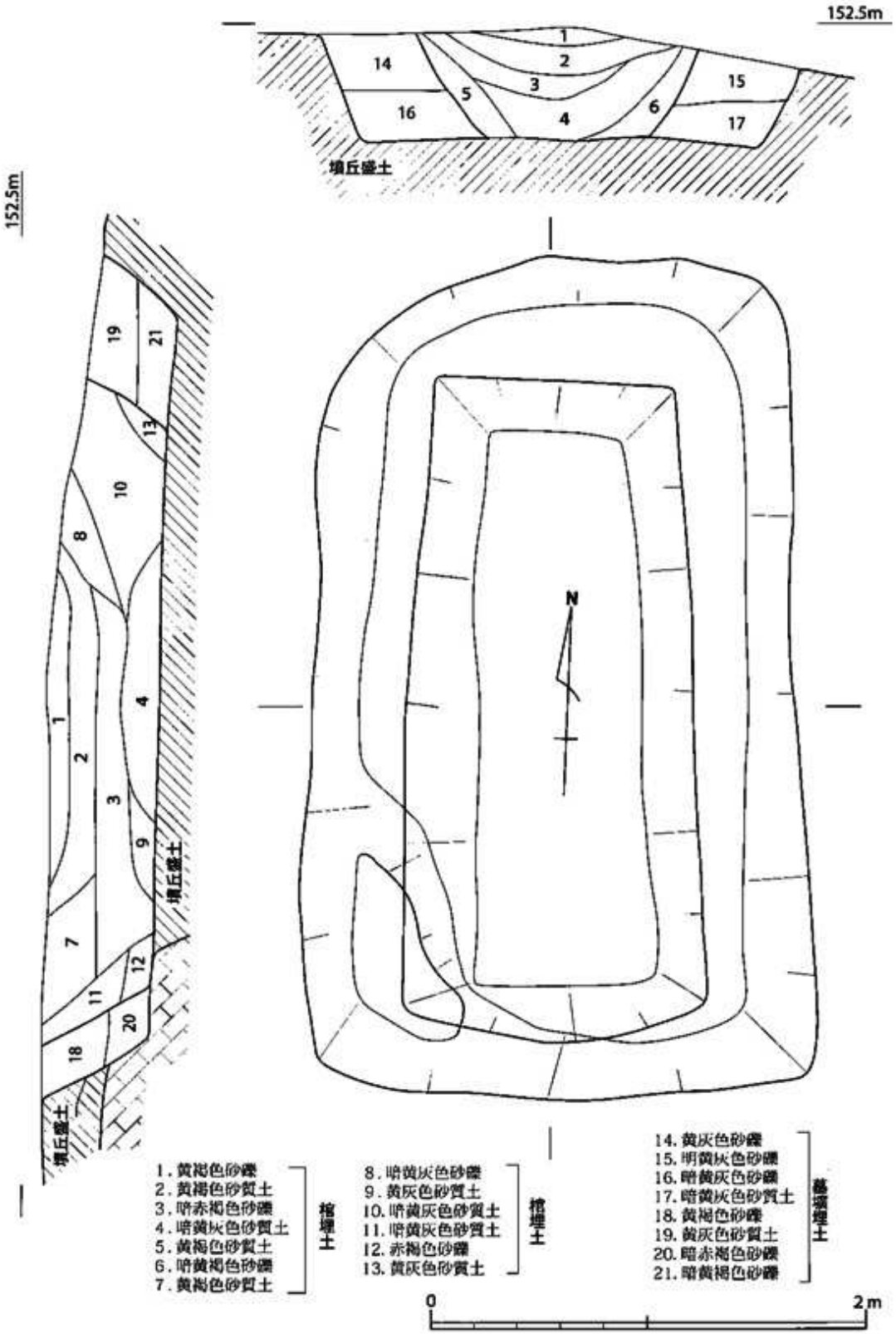


図55　巨勢山464号墳　主体部2　平面・断面図　（S.＝1/30）

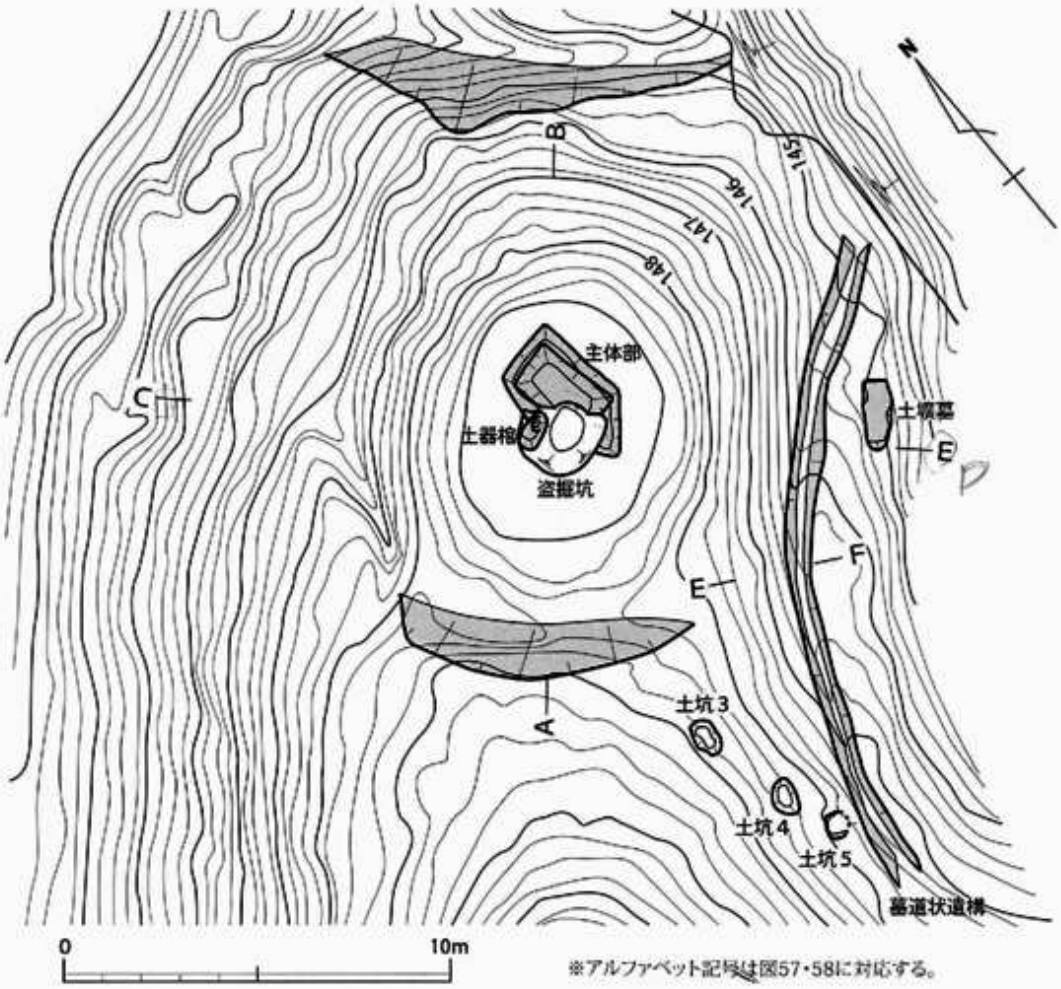


図56　巨勢山465号墳　墳丘測量図　（S.＝1/200）

うちの1基として築造されている。

さて465号墳の墳丘は、通例のように、斜面の高い側、すなわち墳丘南西に当たる尾根斜面をカットして墳丘の区画を行っている。図56の墳丘測量図に示したように、幅7.8 m、高さ75cm程の平面形が扇形になるカット面を検出した。また、そのカット面の西端から墳丘の西側面にかけては、円形墳を意識したとみられる墳丘の区画が、谷状の地形として検出された。一方、墳丘の南東側は、墳頂部から約3 m程下がったところに、後述する墓道とみられる溝状の遺構が検出された。古墳の東限としてはこの墓道状遺構までとして、ここに墳丘端を求めることができる。その高さは、墳丘測量図を見れば標高146.00 m付近になっていて、この高さのコンターラインは円弧を描きつつ北・西面に辿ることができる。また、いずれの方向でもそれより外側がややコンターの幅が広くなっていて、ここに傾斜の変換を見ることができる。つまり、墳丘端は、墳丘の東・北・西面でほぼ同じ高さで巡っている。これらのことを基準にすると、本墳は径約12 mの円墳であると考えられる。

現状での墳頂部の広さは、直径6 m程の円形のスペースになっている。調査着手前から、このほ

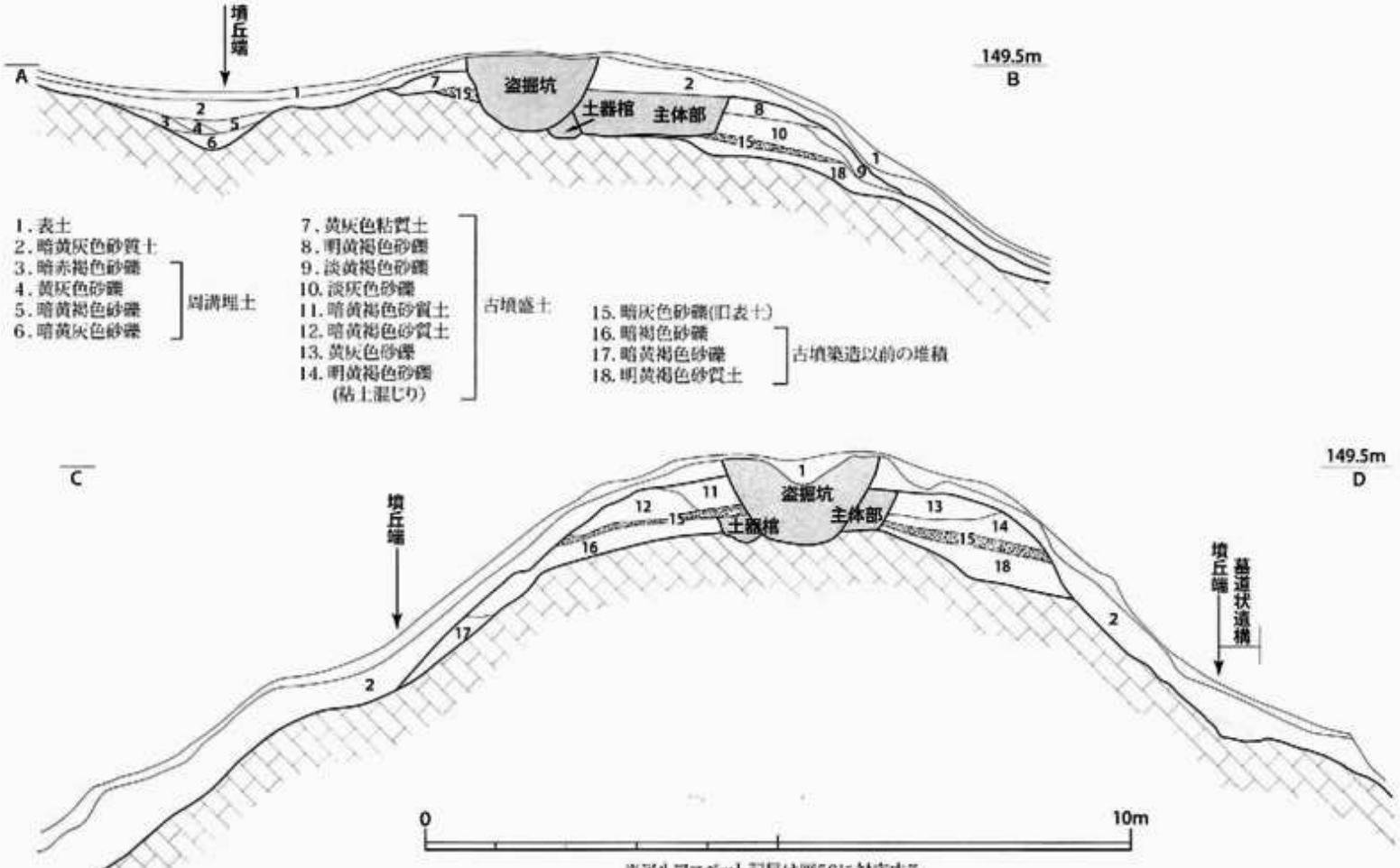


図57　巨勢山465号墳　墳丘断面図　(S.=1/100)

ぼ中央が陥没していることが視認でき、ここに相当な盗掘坑が存在することが判っていた。

発掘調査の手順としては、堆積土観察用のアゼを残して、墳丘面の表土を剥ぎつつ盗掘坑の埋土を除去することから行った。この盗掘坑は、上面での径が 2.2 mの不整形な円形を呈し、深さも 1.3 mを測る比較的深いもので、図 57 の墳丘断面図にも示したように、最も深いところでは花崗岩の岩盤層にまで達していることが判った。盗掘坑の埋土中から出土した遺物は、古墳に関わる遺物として図 60 に掲げた（60 − 1）・（60 − 2）・（60 − 4）・（60 − 5）のほかに、須恵器杯身・杯蓋・高杯などの若干の破片があったが、これら以外にも盗掘の時期を示すワイン瓶片・青磁椀片・薬瓶片などを検出した。これらは現代のもので、盗掘坑の形成時期が比較的新しいことが判った。

また、盗掘坑が比較的大きなものであったので、その壁面を観察することで表土下の状況を一定程度知ることも可能であった。まず、この盗掘坑は木棺直葬の主体部の一部を壊していて、墓壙や棺の痕跡もその壁面に見ることができた。さらに、壁面には盛土下の旧表土が帯状に観察されたし、その下層には古墳築造以前の土器棺の一部も見えた。このようにして、盗掘坑の埋土を除去した時点で、古墳の主体部、盛土及び盛土以前の状況、下層遺構の状態までをある程度把握することができていた。

それらの層位的な関係は、図 57 の墳丘断面図に示した。墳丘の裾部は地山削り出しになっていて、裾部の形成を行いつつ、残土を墳頂部に盛土している。木棺直葬の主体部の墓壙は、この盛土面の上面から掘込まれている。墳丘裾部の削り出しに際しては、東面については、花崗岩の岩盤を成形しているが、その他の面の成形は、必ずしもそのような岩盤にまでは至っていない。多くは古墳築造以前の堆積層（図 57 − 16 ～ 18 層）を削り出している状況である。その堆積層の上面には、盛土の直下層として旧表土（図 57 − 15 層）が帯状に残存していた。このような旧表土の残存状況は、前述された巨勢山 464 号墳と同様である。さらにその直下に土器棺を検出したが、特にそれらの層位的な関係は図 80 の土器棺の平・断面図に示した。土器棺は現代の盗掘坑のみならず、古墳主体部の墓壙によっても一部を破壊されている。なお、この土器棺に関しては、下層遺構であるから「巨勢山境谷遺跡」として章を改めて後述する。

さて、この 465 号墳が立地する地点の尾根の東側斜面において、墳頂部から約 3 m下がったところに、尾根線に沿った方向で溝状の遺構が検出された。図 58 の断面図に示したように、幅約 60cm 内外で深さは約 12cm を測る。埋土中からの出土遺物は無かった。長さ約 16 mが検出されたが、検出された北東端部付近は斜面の自然崩落によって崖面になっているので、本来はさらにこの方向に延びていたと考えられる。南西方向については、遺構の南側で斜面がやや急に立ち上がっていることもあって、崖面にならないまでも表面の土砂流出が起こりやすかったらしく、遺構もこの付近で途切れている。この方向に延長していたとすれば、464 号墳の裾部付近を辿るような状況になる。このような古墳との位置関係や、遺構の幅・深さなどの規模からすれば、この溝自体が墓道である可能性が考えられる。

この遺構からは、古墳時代のものとみられる須恵器片が合計4点出土した。これらについては細片であるために詳細な時期比定が困難で、その上、埋土中の出土とはいえ、この埋土が古墳からの崩落土であれば、必ずしもこれらの遺物が遺構の形成時期を示すものでもない。したがって、遺物からは古墳との時期的な併行関係は不分明であると言わざるを得ない。ただし、この場合には墓道状遺構の南東側に、後述する土壙墓が造られていることが注意される。土壙墓は、この墓道状遺構の脇にあって、長軸方向を墓道状遺構の方向と平行させている。そのこと自体はいずれの遺構も尾根の方向、すなわち自然地形に遺構の方向を合わせているために遺構の軸方向が合致しただけなのかもしれない。それでも、土壙墓が墓道状遺構とは重複しないで、それを避けつつより立地条件の悪い東側の斜面への傾斜変換点付近に造られていることは、土壙墓を造る時にはすでにこの墓道状遺構が存在していたとも考えられる。土壙墓の形成時期は周辺の古墳より一際新しい飛鳥Ⅱ期（西 1986）に当たっているので、土壙墓と墓道状遺構の時期的な関係をこのように捉えられるとすれば、墓道状遺構が周辺の古墳に伴っていた可能性はより高くなる。

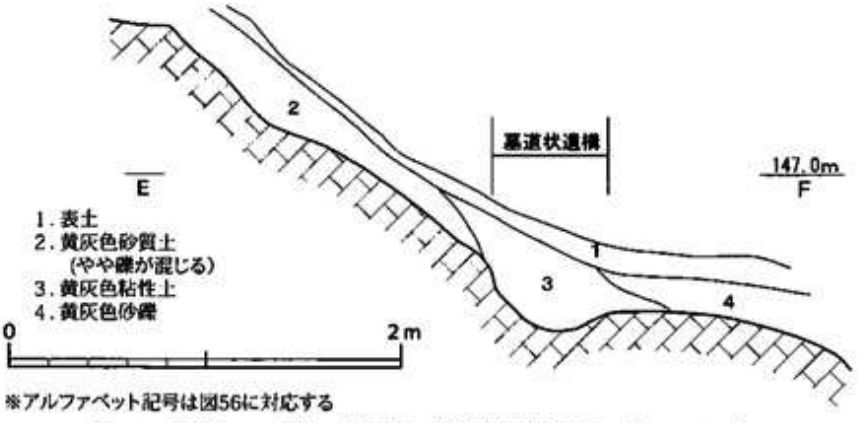


図58　巨勢山465号墳　東裾部　墓道状遺構断面図　（S.＝1/40）

なお、墓道と考えた遺構は、今次調査地においてはこのほか、前述した巨勢山 463 号墳の墳丘付近で検出したものがある。463 号墳の場合は、墳丘の西側で検出されたので（別添図参照）、もし上述の墓道状遺構がこれに繋がるものであるとすれば、いずれかの地点で墓道が尾根を横断していることになるが、連続する遺構であるかどうかとの点も含めて、詳細はよく判らない。

また、出土遺物は、上述中に触れたもののほか墳丘上・周溝埋土の各所で須恵器・土師器片などが若干量出土している。墳頂部では図 60 の（60－1・2・4・5）のように、盗掘坑埋土から出土した破片と接合したものがあり、そのほか図示できなかったが須恵器甕の頸部付近の破片が採取された。これと同一個体かどうか不明であるが、甕の体部破片は墳丘の南斜面や南周溝埋土から約 20 片ほどが出土している。これらのことから、元は墳頂部の付近に須恵器甕が置かれたか、あるいはその甕の破砕を伴う墳丘上の祭祀などが行われた可能性も考えられよう。

さらに、墳丘の西斜面裾部の流土中から拳大ほどの粘土塊が合計約 5 Kg が検出された。同様の粘土塊は前述した 463 号墳の第 2 主体部で 1 個が出土したが、それ以外では調査区全体を通じて

も全く見られなかった。465号墳の墳丘西裾部では、それが比較的まとまった分量で一箇所に集中して存在したことが注意される。しかし、これらの粘土塊の出土層位は流土中に含まれるもので、特に遺構に伴うのではなかった。そのようなことで、これらの粘土塊については、その出土が何らかの人為的な行為の結果であるのかすら、不分明である。また、463号墳第2主体部出土の粘土塊とこれらの粘土塊が関係のあるものなのか、また、463号墳の粘土塊に関してはそもそも何故に同主体部にそれがあったのか、すなわち副葬の意味があったのか、あるいは偶然入り込んだだけなのか、いずれも現状では不明と言わざるを得ない。

本墳の築造時期は、後述する盗掘坑出土須恵器からＭＴ15型式期と考えられる。

2．主体部1

埋葬施設は、墳頂部に木棺直葬の主体部が1基検出された。主体部の南小口付近に、径2.2 m、深さ1.3 m程の比較的規模の大きい盗掘坑があって、その部分が破壊されていた。

主体部は墳頂部のほぼ中央にある。「位置と墳丘・墓道」の項で前述したように、墳丘の多くの部分では、裾部の地山直上にある、古墳築造以前からの堆積層を削り出して墳端を整えて、その時に生じた残土を墳頂部に盛り上げて墳丘を形成している。主体部となる墓壙の掘込み面は、この盛土上面である。

主体部1の平面・断面図は図59に示した。墓壙はおおよそ南北方向に主軸を向けている。墓壙は南小口部が歪に張り出した形状になっている。ただ、この付近は盗掘坑があって元の形状は破壊されていて判らなくなっている。現状での最大長3.64 m、幅2.32 mを測る。

この墓壙に舟形木棺と目される棺が直葬されたものとみられる。棺底を基準にして棺の主軸の方位をとれば、Ｎ－６度－Ｗの数値が得られ、ほぼ北方向が意識されたことが判る。棺の規模は、最大で長さ2.28 m、幅1.32 m、深さ0.56 m以上を測る。棺底のレベルは、長軸方向に高低差があって、南の方が約10cm高くなっている。

主体部から副葬品等、出土遺物は検出されなかった。ただし、この主体部の場合、南小口付近の盗掘坑の埋土中から、須恵器杯身（60－4）、同杯蓋（60－1・2）、同高杯（60－5）が出土した。また、これらの土器は墳頂表土中から出土した別の破片とも接合している。そして、墳頂表土中から出土した（60－3）は、その出土のあり方が、先の蓋杯・高杯の破片のうち同表土中から出土したものと同様であったので、この（60－3）も含めて、これらの5個体の須恵器は、元は主体部に副えられた副葬品であったとみられよう。この時、盗掘坑の位置からこれらの副葬品は主体部内においても南小口付近に置かれていたことになる。

被葬者の頭位については不明な点も多いが、上のように、棺底で南小口部が高いことや、元の副葬品が被葬者の頭部を意識して置かれたとすれば、南に向けていた可能性が高い。

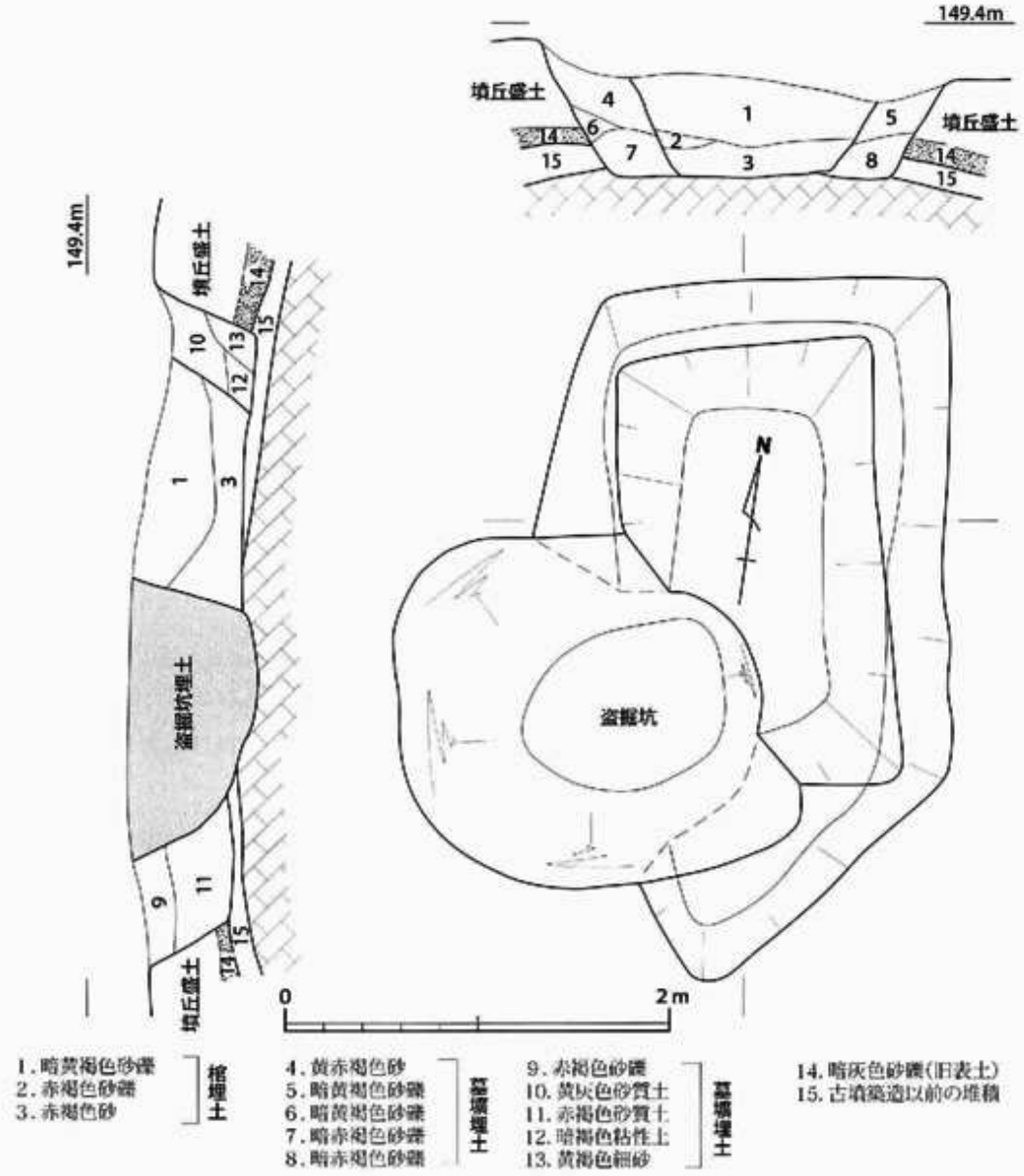


図59　巨勢山465号墳　主体部　平面・断面図　（S.＝1/40）

3．出土遺物

図60に巨勢山465号墳の盗掘坑ほかから出土した遺物を掲げた。須恵器6点であるが、これらの形態や調整・法量を始めとする詳細は、観察表（163～164頁）に記したので参照されたい。

既述のように、これらの遺物のうち（60－1～5）は元は主体部に副えられた副葬品であると考えられる。（60－6）は墳丘の南西側周溝埋土から出土したものである。盗掘坑から出土した須恵器のうち（60－5）は、接合はできなかったものの、土器の胎土や焼成の具合および調整のあり方から同一個体と思われる破片が、南西側周溝埋土から出土している。このことから考えると、（60－6）についても、元は主体部への副葬品であった可能性があるが、必ずしも確証が得られな

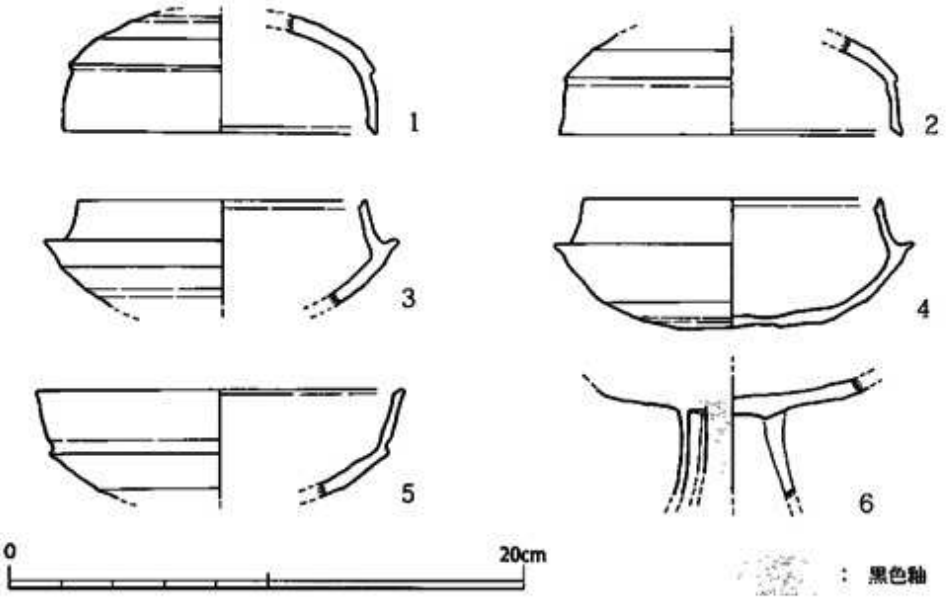


図60　巨勢山465号墳　盗掘坑ほか　出土遺物　（S.＝1/3）

い。墳丘周辺では、「位置と墳丘・墓道」の項に前述したように、図化できなかった遺物として須恵器甕片なども検出されているので、この高杯もそのような甕に共伴する可能性も考えられる。ここでは、（60－6）は主体部への副葬品とは区別しておく。

蓋杯のうち、（60－1）の杯蓋は天井部を多く欠損しているが残存部分から丸く膨らむ形態であるらしい。この点で他の3個体よりやや古い様相を示しているが、同じ杯蓋の（60－2）は、口径が13.0cmとやや大きく、天井部も偏平に近くなっている。また、（60－1）についても天井部と口縁部の境界となる稜はやや突出するものの先端が鈍く、（60－2）は突出度が低くむしろその下端が凹線になって窪んでいる。杯身（60－3）・（60－4）は、たちあがりが比較的長いものの、内傾する傾向が強い。このようなことから、これらはMT 15型式に併行するとみられる。

（60－5）は、杯底部付近から脚部を欠損している。この形態は杯蓋の可能性も考えられるが、口縁部が開く傾向が強いので高杯の杯部とした。（60－6）は三方スカシを有する高杯の脚部上端付近である。残存部から全形は復原するのは難しいが、杯底部との接合部付近からすぐに裾部に向けて広がるのではなく、一旦下方に直線的に延びたのち広がる様子が看取できる。このような形態から、長脚の脚部であるとみられる。高杯（60－5）・（60－6）とも、先の蓋杯と同様にMT 15型式期とみても矛盾はない。

4．土壙墓1

①形状

土壙墓1は、巨勢山465号墳の南東側裾部の外側に検出した墓道状遺構の、さらに東側で検出

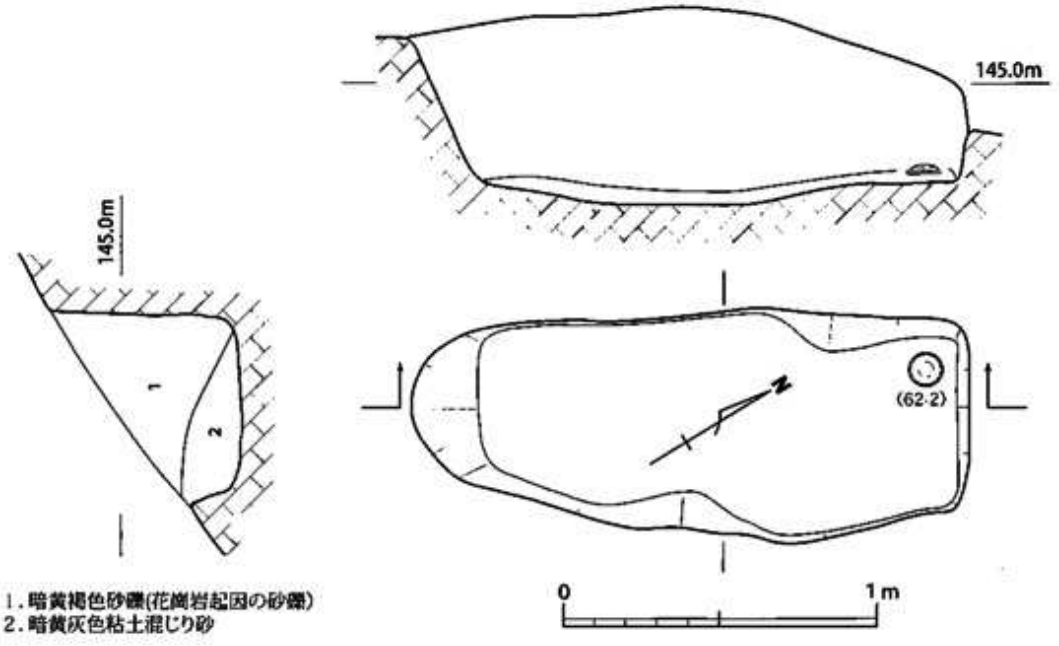


図61　巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓　平面・立面・断面図　（S.＝1/25）

した。調査の当初段階で、この部分には、465号墳の墳丘端や盛土の状態を探るべく、墳頂部からこの地点付近に至るアゼおよび、それに沿ったトレンチを設定していた。このトレンチが、墓壙の北東小口付近を通ったために、遺憾ながら、遺構にトレンチによる多少の破壊が及んでしまった。図61の長軸方向の断面図の、北東小口付近の遺構上端が下がっており、逆に埋土が遺構の上端より高く盛り上がった表現になっているのはこのためである。また、この時に、遺構の底にあった須恵器杯蓋（62－1）を、その出土状態の図化および写真撮影前の前に取り上げてしまった。このため遺構平面図には（62－1）はその出土状態が描かれていない。しかし、その出土位置は図化している杯身（62－2）にほど近い地点で、並べ置かれていたことは間違いない。

さて、墓壙の長軸の方向はおおよそN－32度－Eに向けており、方位を意識したものにはなっていない。墓壙の立地が谷に向かう傾斜地に当たるために、等高線に平行する方向に長軸を採ったとみられる。またこの方向は墓壙のすぐ西側を通る墓道状遺構の方向とも概ね一致している。

墓壙の最大長1.77 m、同幅0.75 m、同深さ0.6 mを測る。墓壙の平面形は、検出上端の形態を見ると南西側小口部分がやや丸みをもって張り出していて、方形を呈していない。しかし、底の形態は四隅が比較的明瞭に削り出されていることから、元は長方形を意識した墓壙が穿たれたと考えられよう。墓壙の埋土は2層に分れて、上層は暗黄褐色砂礫、下層は暗黄灰色粘土混じり砂となっている。墓壙自体が花崗岩の岩盤である地山を掘込んだもので、その埋め戻し土も花崗岩起因の砂礫になっていた。上層の砂礫土は特にそのことが顕著であった。なお、墓壙の輪郭を検出後は、木棺直葬などの可能性が十分に考えられたので、平・断面とも注意深く精査したが、木棺などの痕跡

は全く認められなかった。

②遺物出土状態

遺物は、図61に示したように、墓壙内底の北東隅付近で検出した。出土地点が明確な（62－2）は、杯身で口縁を下に向けて置かれていた。「形状」の項でも前述したとおり、出土位置を図化する前に取り上げてしまった（61－1）は、やはりこの付近に並べ置かれていたものである。

③出土遺物

土壙墓1から出土した須恵器2点は、図62に示した。これらの形態や調整・法量を始めとする詳細は、観察表（165頁）に記したので参照されたい。

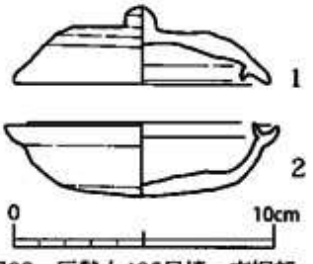


図62　巨勢山465号墳　東裾部土壙墓　出土遺物　（S.＝1/3）

杯蓋（62－1）は杯Gの蓋で、天井部中央に乳頭形のつまみ付いている。口縁部内面に付くかえりは薄く小さいもので、その下端は口縁端部より上にあって突出しない。杯身（62－3）は杯Hの身である。口縁部のたちあがりはごく短く薄い。端部は受け部の上端より辛うじて上位にあるが、部分的にはそれよりも下位にあって突出していない箇所もある。底部外面はヘラ切り未調整である。

これらの蓋杯はいずれも飛鳥Ⅱ期に該当しよう。また、これらは、元より杯Gの蓋と杯Hの身であって、同一墓壙の副葬品でありながら、セットになるものではない。小規模な土壙墓への副葬品であり、おそらく日常の雑器から抽出されてここに副葬されたのであろうが、被葬者の階層的位置を象徴するようでもあり、興味深い。

第4節　巨勢山４６６号墳

1．位置と墳丘

巨勢山466号墳は、463号墳から北東方向に延びる尾根上に立地している。地形上のまとまりを見れば、463号墳から466号墳までの4基が一つの支群を成している景観で、466号墳はそのうちの1基として築造されている感がある。南接する465号墳との現状での墳頂部の比高差は3.5m程あってこの466号墳の方が低い。墳頂部の中心で両墳の距離を測ると約12m離れている。

466号墳の墳丘は、図63の墳丘測量図に示したように、その東側が急な傾斜になる崖面になっていて、すでに墳丘のおよそ1/3程が崩落していることが判る。また、古墳の北側で調査区の北端近くでは、「古墳時代以降の遺構と遺物」の章で後述するように、土坑1・2のような後世の遺構が造られており、この時の地形の改変も多少はあったとみられる。また図63にも見えるように、古墳の北西裾付近についても不自然な平坦面があって、このような地形についても、土坑1・2な

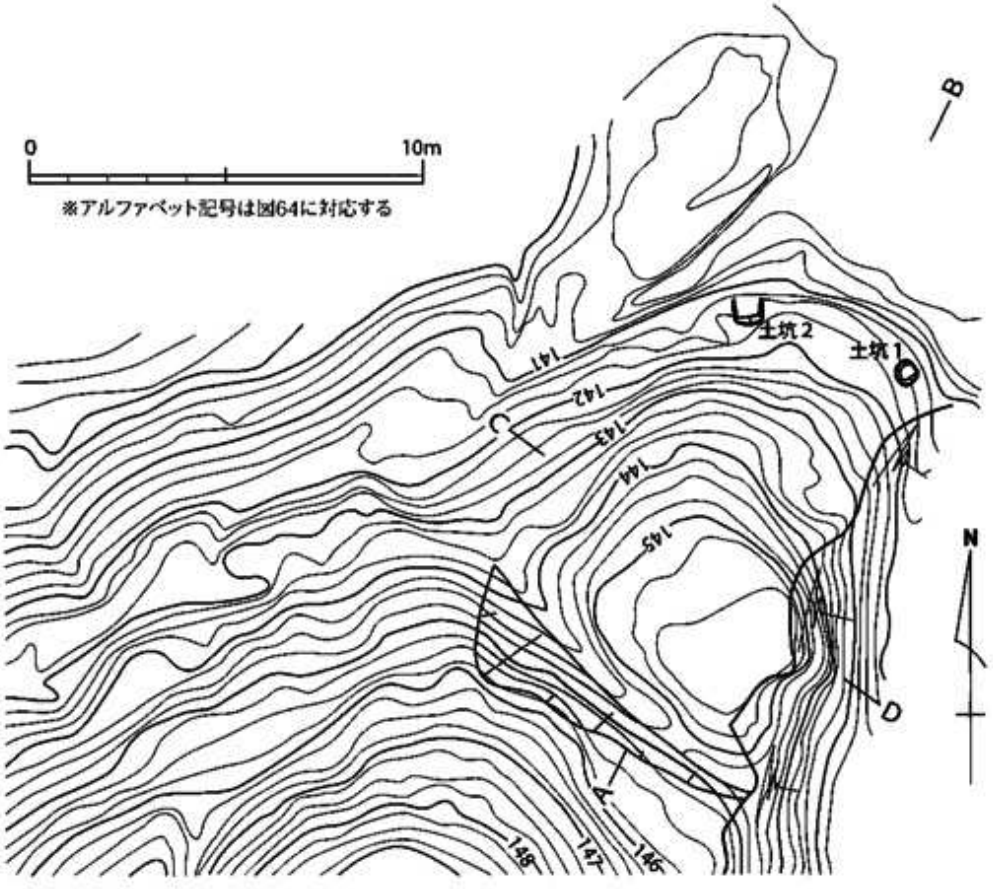


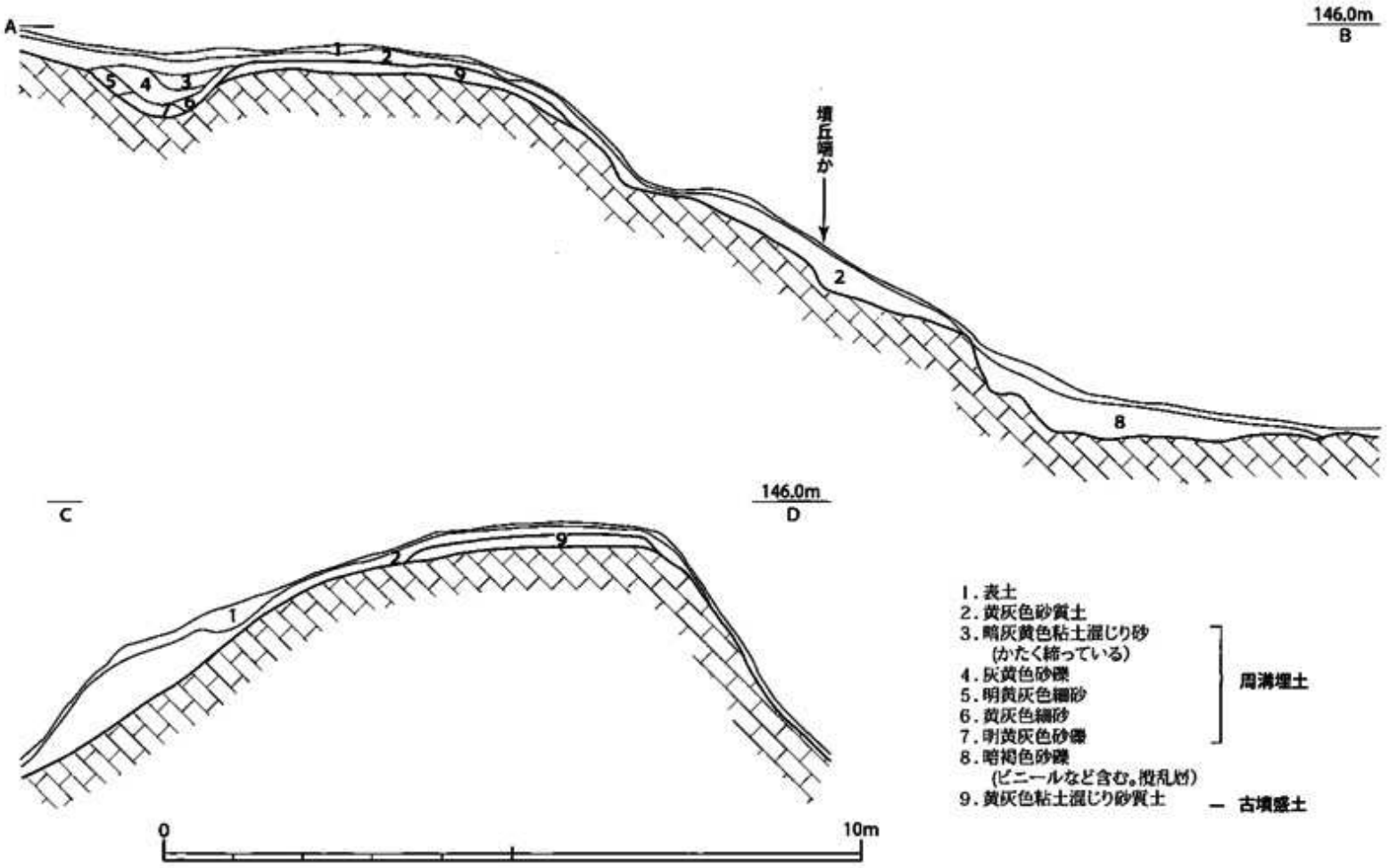
図63　I 遠勢山466号墳　墳丘測量図　（S.＝1/200）

どの時期と関連して古墳の地形が改変されている可能性がある。

このようなことで、466 号墳の墳丘規模・墳形については判然としないことが多い。しかし、斜面の高い側、すなわち墳丘南西に当たる尾根斜面をカットして墳丘の区画を行っていることは通例のとおりであって、やはり地山を削り出して周溝の南側法面および墳丘の北側斜面を形成していた。この部分には周溝になる地形が測量図のコンターラインにも明瞭に表れているので、墳丘端も明らかである。

これに対して墳丘の北側は、標高 143.00 ～ 144.00 mのコンターライン間隔がやや広くなっており、144.00 m付近に墳丘端があるともみられる。しかしそれにしてもこの付近のコンターラインの間隔は一様ではなく、地形の乱れが著しい。一方、それより下位の 142.00 m付近にも傾斜の変換点があって、この地点より北側は傾斜が緩やかになっている。この 142.00 mのコンターラインにも若干の乱れはあるが、それでも尾根の西側にまで緩やかな円弧を描きつつ辿っていくことができる。断定する材料は乏しいが、尾根線上の北側の墳丘端はこの付近に求めるのが妥当であろうと思われる。

これらのことから墳丘規模をみると、径 9.5 mの数値が得られる。墳形に関しては、特に墳丘西



※アルファベット記号は図63に対応する。

図64　巨勢山466号墳　墳丘断面図　(S.=1/100)

側のコンターラインが直線状になっていることもあって、判然としない。しかし、尾根線上での、墳丘南北の両側でのコンターラインが緩やかながらも円弧を描いていることから、円墳とみるのが妥当であろう。

墳丘の断面図は図 64 に示した。墳丘は通有のように裾部分の地山を削り出して、その際生じた残土を墳頂部に盛り上げて墳丘の形状を整えているらしい。ただし、現状での墳頂部に認められた盛土は、厚さ 10cm 程度のもので、その大部分はすでに流出していると考えられる。また、墳頂部には僅かしか平坦面が残っていなかったが、この盛土の上面およびこれを除去後の地山面で、慎重に精査を繰り返した。しかし、ついに埋葬施設の痕跡すら検出することはできなかった。

墳丘の高さは、北側からみると、現状でも３m強を認めることができるが、南側周溝底までの高さであれば、１m程度になってしまっている。墳丘は、このような盛土の流出、東側の自然崩壊、北から西側にかけての後世の攪乱によって、相当形状が改変されていると思われる。このために埋葬施設もすでに失われていたものと考えられる。

墳丘周囲からの出土遺物は少なかったが、南周溝の埋土の下位で土師器壺（65 － 1）が出土した。１個体分がその場で割れた状況で、多くの破片になっていたが、それらをすべて採集して接合したところ、ほぼ完形にまで復元することができた。比較的脆弱な土師器の、このような出土状態からみて、この土器が別の古墳や本墳の主体部や墳頂部から転落してこの場所に流れ込んだとは考えがたい。おそらく、南周溝を掘り抜いてからあまり時間を経ずに、この場所に置かれたものが土砂の流入によって土圧を受けて、砕片化しつつもここに埋没したものであろう。

本墳の築造時期については、主体部が検出されず墳丘周囲から時期比定が比較的明確にできる須恵器の出土がなかったために不明である。南周溝出土の土師器壺や、周辺の古墳の築造時期からすると、後期中葉ごろかとも思われるが、定かではない。

2．墳丘周辺の出土遺物

墳丘の周囲で、古墳に関連する遺物として出土したのは、図 65 に掲げた土師器壺が１点あったのみである。その形態や調整・法量を始めとする詳細は、観察表（165 頁）に記したので参照されたい。

（65 － 1）は出土時は多くの破片に割れていたが、一箇所に固まっていた。それらを接合した結果、ほぼ完形にまで復元することができた。器形は全体に歪で不整形である。また、口縁部の中央付近も器壁が厚くなり、腫れぼったい感じがする。底部は丸底になっているが、このような全体的に粗雑な様相か

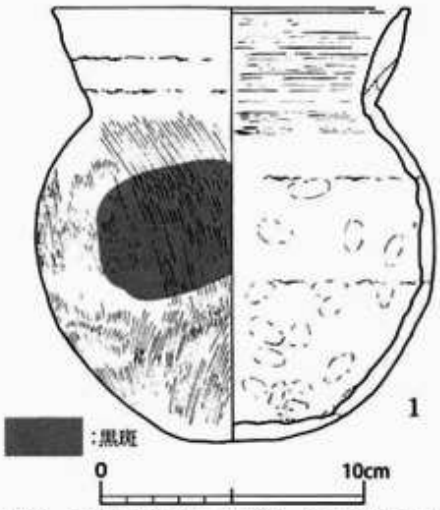


図65　巨勢山466号墳　南周溝　出土遺物（S=1/3）

らみれば、おおよそ後期のうちに属するものと思われるが、その詳細な時期は分明ではない。

第５節　古墳時代以外の遺構と遺物

Ｃ地区においては、散在的なあり方であるが、５基の土坑が検出された。それらの配置については図 66 に示した。また、遺構には伴わないが復原すれば完形に近くなる黒色土器や須恵器が、巨勢山 465 号墳の南斜面の古墳流土中から出土した。これらは比較的近い地点で検出されたことから、本来は近辺にこれらが入れられた土坑などの遺構が存在したと思われるが、精査したがそれを検出することはできなかったものである。

以下、遺構、遺物に分けて順次記述していく。

１．遺構

①土坑１

土坑１は、今次調査地の北端部で、尾根の最も低い地点に位置している。現状の地形では尾根中央線より東寄りに当たっているが、当該地においては、尾根の東側が大きく崩落していることから、本来は土坑１の所在地点付近は、旧地形の尾根線上に当たっていたと思われる。むしろ、土坑１は、形成当時には、意識的に尾根線上が選地されたと考えられる。

土坑１の平面形は、南北 63cm、東西 55cm のやや不整形な円形を呈する。南北方向にやや長いのは、遺構の形成後に、その東側の土砂流出の影響を幾分か受けたためであるかもしれない。土坑の深さは約 15cm を検出した。このような比較的小さく浅い土坑であったが、ここに埋置された状態で土師器皿 131 個体以上を検出した。その状態は図 67 に示した。土坑の埋土は、同図左上の横断面図に示したように暗褐色砂礫であったが、むしろ、土坑自体が土師器皿で埋め尽くされた後に、それを隠すように覆い被された土が皿の隙間などの空間に入り込んだものであろう。また、遺構の検出に際しては、各遺物に番号を付しながら、それを上位から順次取り上げていった。図 67 の出土状態の詳細図はその過程で記録した平面図であるが、各図化面は便宜的なもので層位的な面を形成していたものではない。

「出土遺物」の項で後述するように、出土した土師器皿は、法量の点でＬ・Ｍ・Ｓの３種に分類されるほか、各部の形態の特徴によってさらに型式的に細分される。しかし、遺物を埋置するに際してはそのような皿の型式差は一切配慮されていない。つまり遺物の埋置には規則性を看取することができず、乱雑に置かれた感じがする。ただ、図 67 － 3 に示した（73 － 85）と（75 － 17）、図 67 － 4 に示した（75 － 123）と（73 － 15）および（75 － 82）と（73 － 12）、図 67 － 5 に示した（75 － 83）と（75 － 75）と（73 － 27）、図 67 － 6 に示した（75 － 87）と（75 － 42）は、それぞれ内面を上にして、口径の小さい皿を、口径の大きい皿の上に重ねて置かれていた。その部分だけを見れば整然とした感じもするが、それらは意識的に並べ置いたものとも思えない。

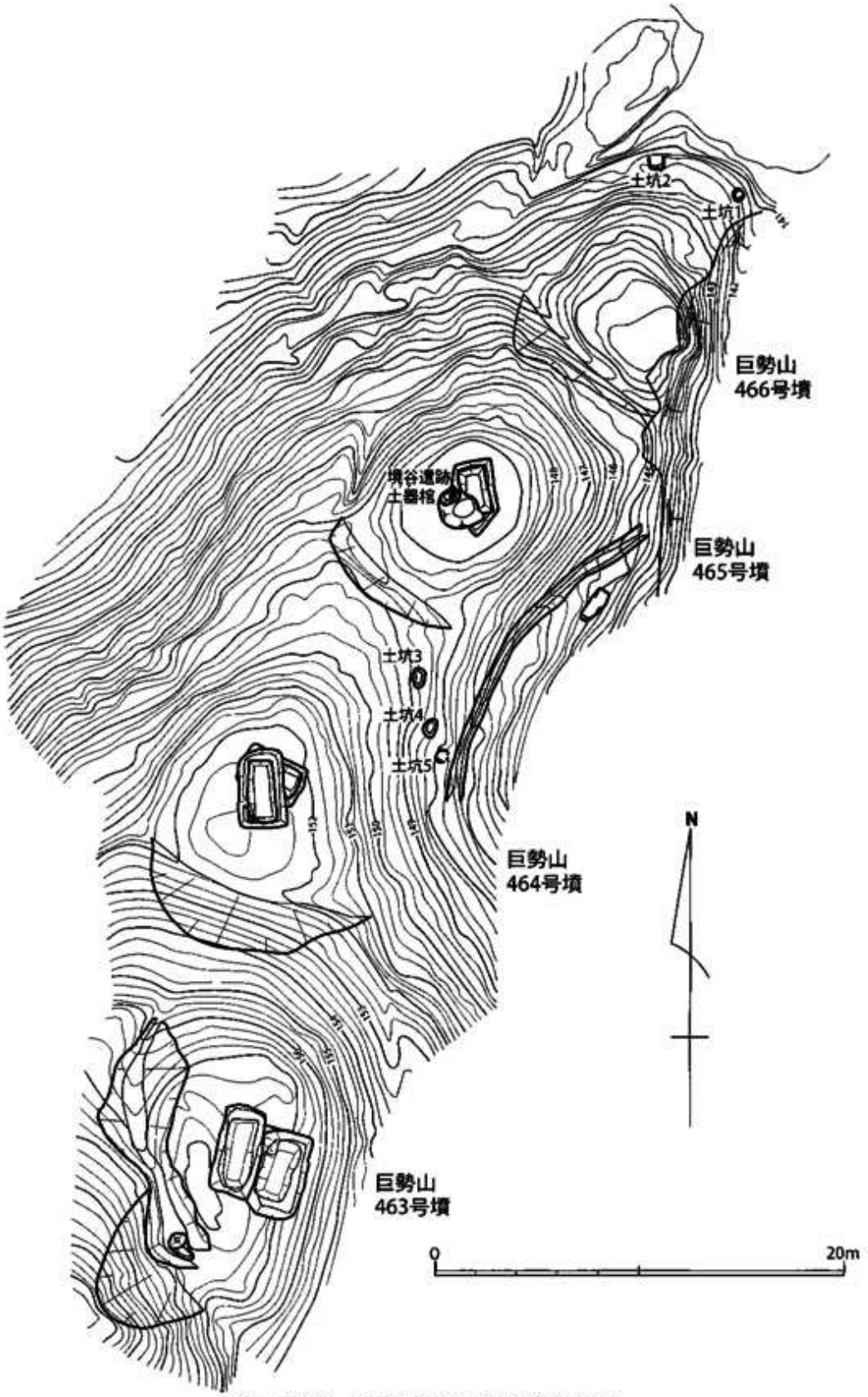


図66　C地区　古墳時代以外の遺構の名称と配置

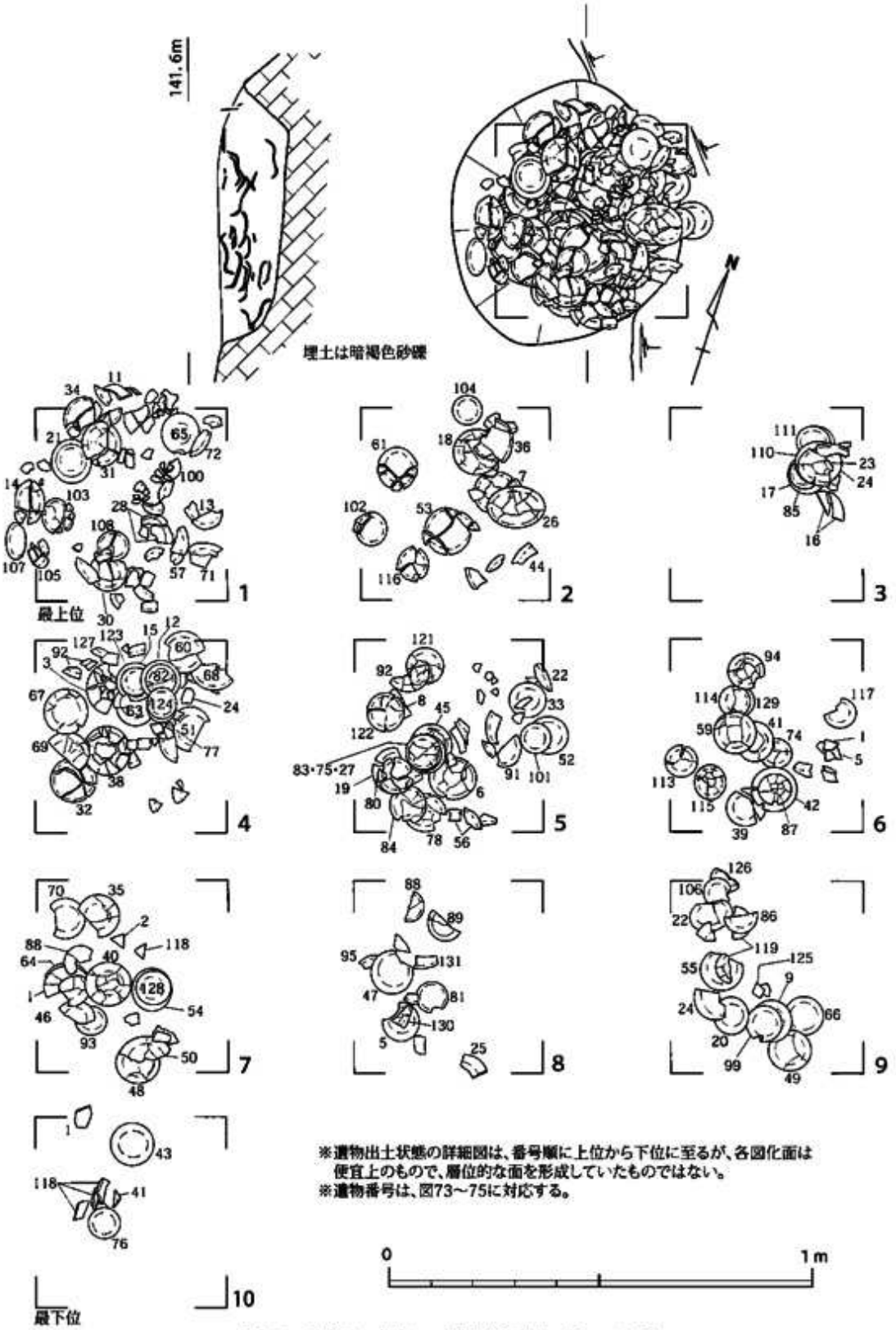


図67　C地区　土坑1　平面・断面図　（S.＝1/15）

おそらく多量の小皿を土坑内に入れるに際して、持ち運びの便宜上、2～3枚を適当に重ねたものを、そのまま土坑内に置いた結果、上のような状態になったと理解される。

遺構の形成時期は、比較的長期間にわたって器形が変化しない土師器皿から厳密に特定することは難しい。後述の土師器皿の諸特徴から見れば、14世紀中葉から15世紀後葉頃までの幅が考えられる。ただ、小皿の型式にややバラエティがあることから、そのなかでも古く位置づけられるかもしれず、そうであれば15世紀前葉を前後する時期といえようか。

②土坑2

土坑2は、土坑1とともに今次調査地北端部で最も標高が低い地点に立地している。土坑1の西約8mの地点で、標高はほぼ同様の高さである。北斜面に掘られたもので、現状では、遺構の北辺は地山の斜面になっていて削れている。ただし、遺構はむしろこのような斜面地を狙って形成されているようで、本来の形状も北側が開いたものであったかもしれない。上端の形状も下端の形状も方形を呈しており、現状では上端の1辺は70cm程になっている。図68の平面・断面図に示したように、遺構の底には炭化物の薄い堆積がみられ、上端付近の壁面には火熱を受けて焼土となっている箇所がある。

遺物の出土が無かったために土坑2の形成時期は不明であるが、このような遺構の状態から、土坑2は焚き火などの痕跡と考えられるが、その詳細な性格はよく判らない。

③土坑3

図66に見えるように、土坑3・土坑4・土坑5は、巨勢山464号墳と465号墳の中間点で、尾根の東斜面上に存在した。土坑3はその内でも最も北側にあって、標高148.75mのコンターラインを跨ぐ位置に当たっている。

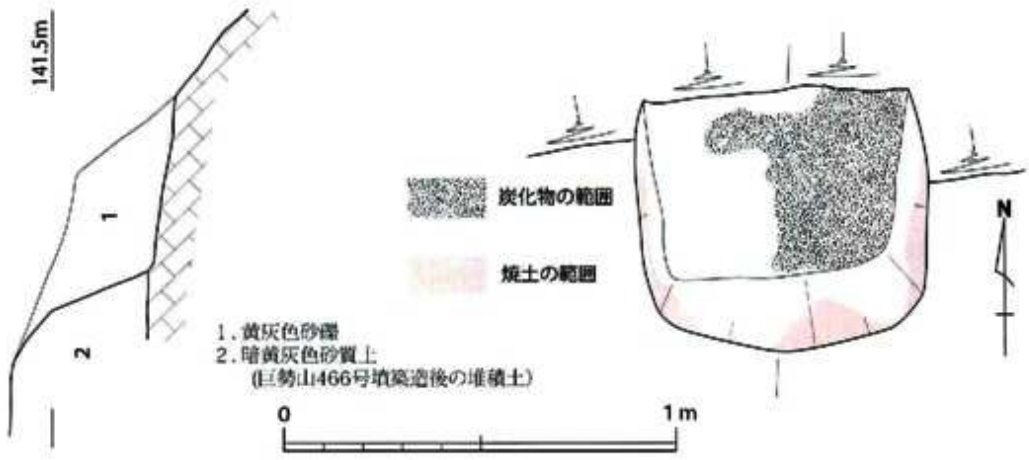


図68　C地区　土坑2　平面・断面図　(S.=1/20)

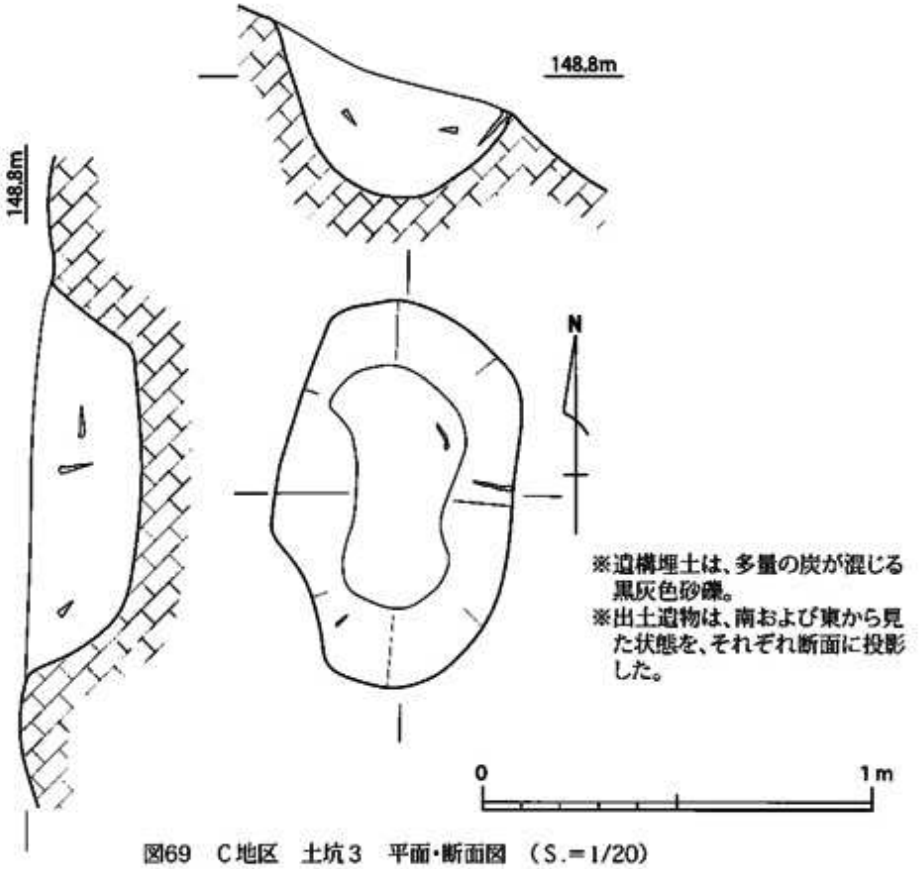


図69　C地区　土坑3　平面・断面図　（S.＝1/20）

土坑3の平・断面図は図69に示した。平面形は長径98cm、短径62cmの不整形な楕円形を呈する。断面形は、横断面を見るとU字形を呈しており、底が平らではない。出土遺物は、鉄釘片が3点出土したほか、土器の出土は見られなかった。埋土に多量の炭が混じっていることと、この釘の出土を考え合わせると、例えば棺ごと火葬した遺体を改葬したような施設である可能性が考えられるが、その時期をはじめとする性格の詳細は明らかではない。

④土坑4

土坑4は、土坑3から約2m南に存在した。標高はやや下がって148.25～148.50m付近の地山を掘り込んだ土坑となっている。斜面地に造られているために、遺構の上端付近は流出して、当初の高さよりも低くなっていると思われる。特に東辺は西辺に比べて下がっている。

その平・断面図は図70に示した。平面形は、長径96cm、短径64cmの不整形な楕円形を呈する。遺構の底は、土坑3とは異なり、平らになっている。深さは、最も深いところで約50cm程が残っていた。

遺構の底で、図70に示したように、骨片ほかの有機質の痕跡が認められた。また埋土中から鉄釘が出土した。完形であるもの2点と頭部を欠損する1点の合計3個体分である。このような出土

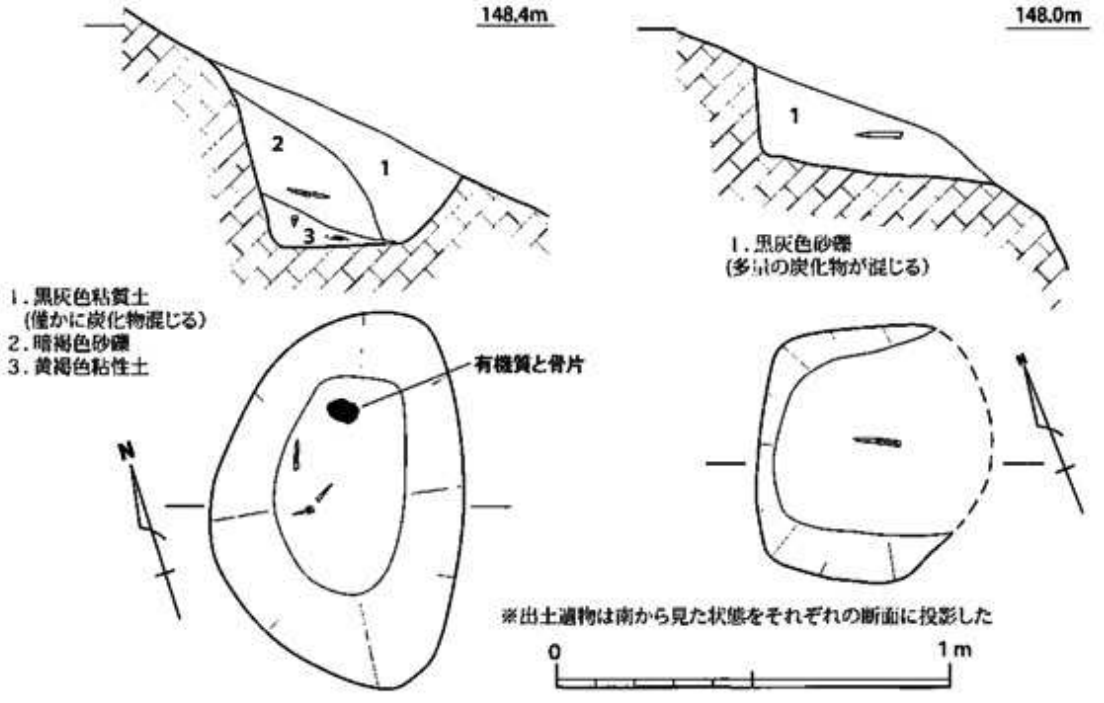


図70　C地区　土坑4・土坑5　平面・断面図　(S.=1/20)

遺物の状態からみて、当該土坑は墓壙であった可能性が考えられる。この場合、既述のように土坑3は改葬墓の可能性も考えられたが、この土坑4については、埋土中の炭化物の量が相対的に少なかったこと、出土した鉄釘に木質が明瞭に残存していることから、棺ごと一旦火葬に付されたとは考えられない。遺構の形状についても、底が平坦に造られていることが異なっている。土坑4については、遺構の規模からみて、乳幼児などが木棺に入れられて土葬されたと考えるのか妥当であろう。ただし、棺痕跡については遺構として検出された訳ではない。調査の精度による部分もあろうが、棺材の厚みがあまり厚くなく、棺材の腐朽が比較的早くて、棺の痕跡を残しにくい場合もあったのではないかと思われる。

なお、土坑内からの土器の出土は無かったため、遺構の形成時期の詳細は判らなかった。

⑤土坑5

土坑5は、土坑4の南東約1m弱の地点で検出した。標高は、147.75～148.00m付近の地山面を掘込み面としている。尾根の東斜面上にある条件から、特に遺構の東辺での土砂の流出が著しく、おそらく当初は遺構の東側上端もあって四方から堀込まれたと思われるが、現状では、東側辺や法面は流出してしまっていた。平・断面図は図70に示したが、現状では長辺66cm、短辺55cm程の方形を呈するかに見える。遺構の底は平坦に形成されている。遺物は、多量に炭化物が混じる埋土中から鉄釘1点が出土した。埋土の状態からは、土坑3と同様に火葬後の改葬墓である可能性が考えれるが、定かではない。また土器の出土が無かったために、遺構の形成時期も明らか

ではない。

2．遺物

①土坑1

土坑1では、土師器皿131個体以上が出土した。図73～75に実測図を掲げた。出土した土師器皿は法量および各部の形態の特徴によってさらに型式的に細分される。ここでは、出土した多量の土師器皿を観察するために、各部の形態上の特徴を、松本洋明氏の分類（松本1988）によりながら新たに分類基準を設定して分類した。

まず法量については、L・M・Sの3種に分類した。このうち法量Lは松本氏分類の「中形土師皿」、法量Mと法量Sは同じく「小形土師皿」に当たっている。つまり、ここでは「小形土師皿」をさらに2分できたので、土坑1出土遺物の法量に関する観察基準を新たに設けて上記の3分類を設定した。その基準とした数値は下に示したとおりで、これは図71のように実際に出土した土器の法量を散布図としてグラフ化したうえで、そのドットの分布上の偏りから導いたものである。

次に各部の形態は、口縁部・口縁部と底部の境界・底部に分けて観察し、このうち、口縁部は「口縁部の形状」・「口縁部長」・「皿口縁」の項目を設けた。皿口縁と皿底部の分類は、松本氏の分類項目をそのまま適用したものである。各分類基準は、以下のとおりで、その模式的な図は図72に示した。

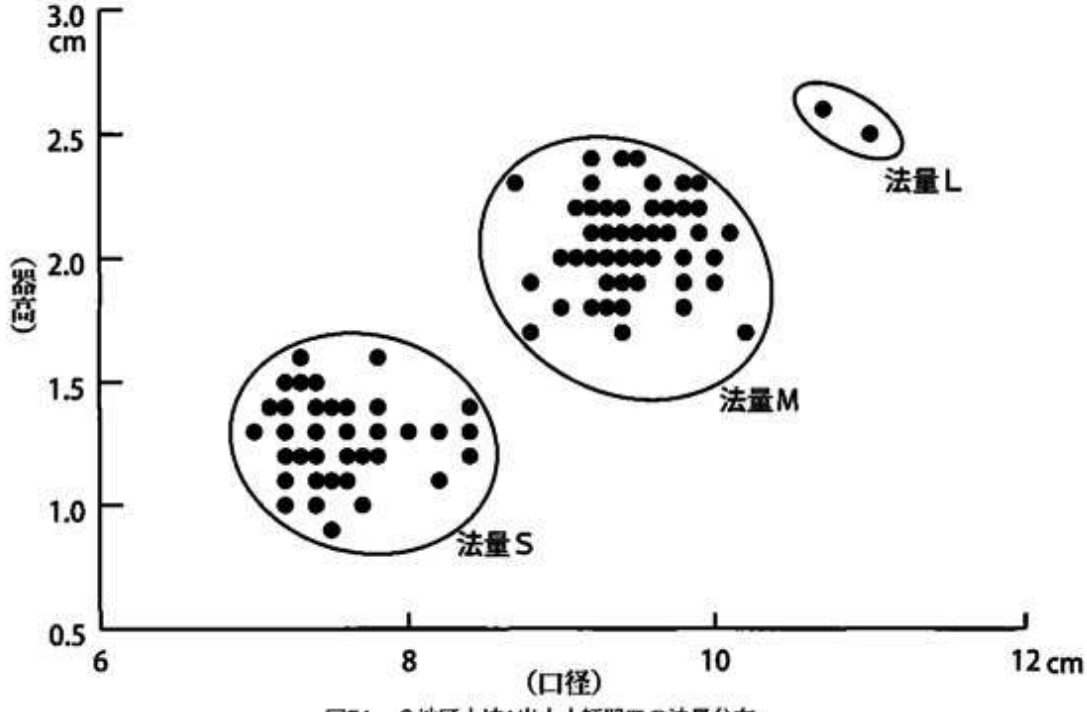


図71　C地区土坑1出土土師器皿の法量分布

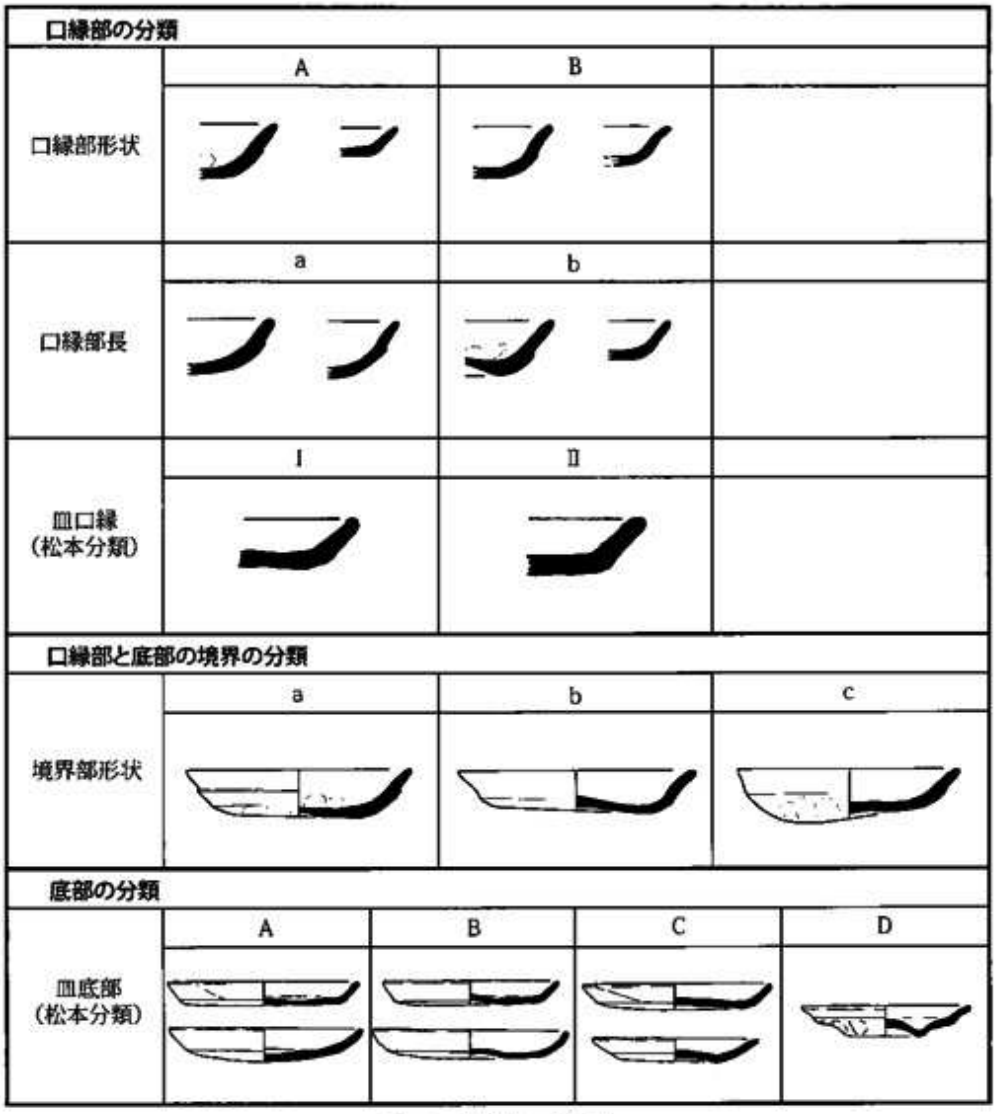


図72　土師器皿の分類

〈法量〉

L：口径 10.7 cm以上、器高 2.5cm 以上。

M：口径 8.7 cm ～ 10.2 cm ・ 器高 1.7 cm ～ 2.4 cm。

S：口径 7.0 cm ～ 8.4 cm、器高 0.9 cm ～ 1.6 cm。

〈口縁部形状〉

A：口縁部が直線的に延びて開くもの。

B：口縁部が外反ぎみに開くもの。

〈口縁部長〉

a：口縁部が短いもの。

b：口縁部が長いもの。

〈皿口縁〉松本分類

Ⅰ：土師皿の口縁端部を上方へ屈曲させて跳ね上げ状に形成したもの。

Ⅱ：口縁の立ち上がりに従って端部を形成したもの。

〈口縁部と底部の境界部形状〉

a：段をなすもの。

b：稜線になるもの。

c：ゆるやかに屈曲するもの。

〈皿底部〉松本分類

A：窪みのない底部。

B：中央が窪んだ底部。

C：底部全体が幅広く窪んだ上げ底状の底部。

D：意識的に上げ底状に成形した底部。

以上の各部の分類基準に従って、個別に出土土師器皿を観察した。その詳細は、166～169頁の遺物観察表に記しているので参照されたい。

法量Lの土師皿は2個体（73－1・73－2）があった。口径は（73－1）が10.7cm、(73－2）が11.0cmとほぼ同様である。2個体とも、口縁部が直線的に延びて開き（口縁部形状A）、底部との境界からの口縁部の長さが長く（口縁部長b）、口縁端部は立上がりに従って形成したもの（皿口縁Ⅱ）である。また、口縁部と底部の境界は、緩やかに屈曲する境界部形状cであることも共通する。底部については、(73－2）は欠損しているために明確ではないが、(73－1）では中央が窪んだ皿底部Bを示しており、(73－2）についても残存部分から同様な形態になる可能性が高い。すなわち、法量Lとした2個体の土師皿は、図73に並列して示したように、同一型式と認識できるものである。

法量Mの土師皿は70個体を図化（図73・74）できた。その大部分は、口縁部の形態が直線的に延びて開く口縁部形状A（73－3～74－67）であるが、外反ぎみに開く口縁部形状Bは、少数派ながら5個体（74－68～74－72）があった。そしてそれらの5個体はいずれもが口縁部の長さが長い口縁部長bのもので、長さが短い口縁部長aのものは認められなかった。もっとも実測図にも見られるように、(73－11)・(73－16)・(73－18)・(73－21）などは、口縁部が外反の傾向にもあり、厳密な区別は困難な場合もある。

次に口縁端部の形状を見ると、口縁部の長さや外反の度合いにかかわらず、口縁の立上がりに従って端部を形成した皿口縁Ⅱが圧倒的に多い。ここでは（73－3）・(74－41)・(74－42)・(74－43）の4個体の口縁部について、端部を上方へ屈曲させて跳ね上げ状に形成する皿口縁Ⅰに分類した。これらは端部の形態によって、他の多くの土師皿とは違いを認識できるのであるが、

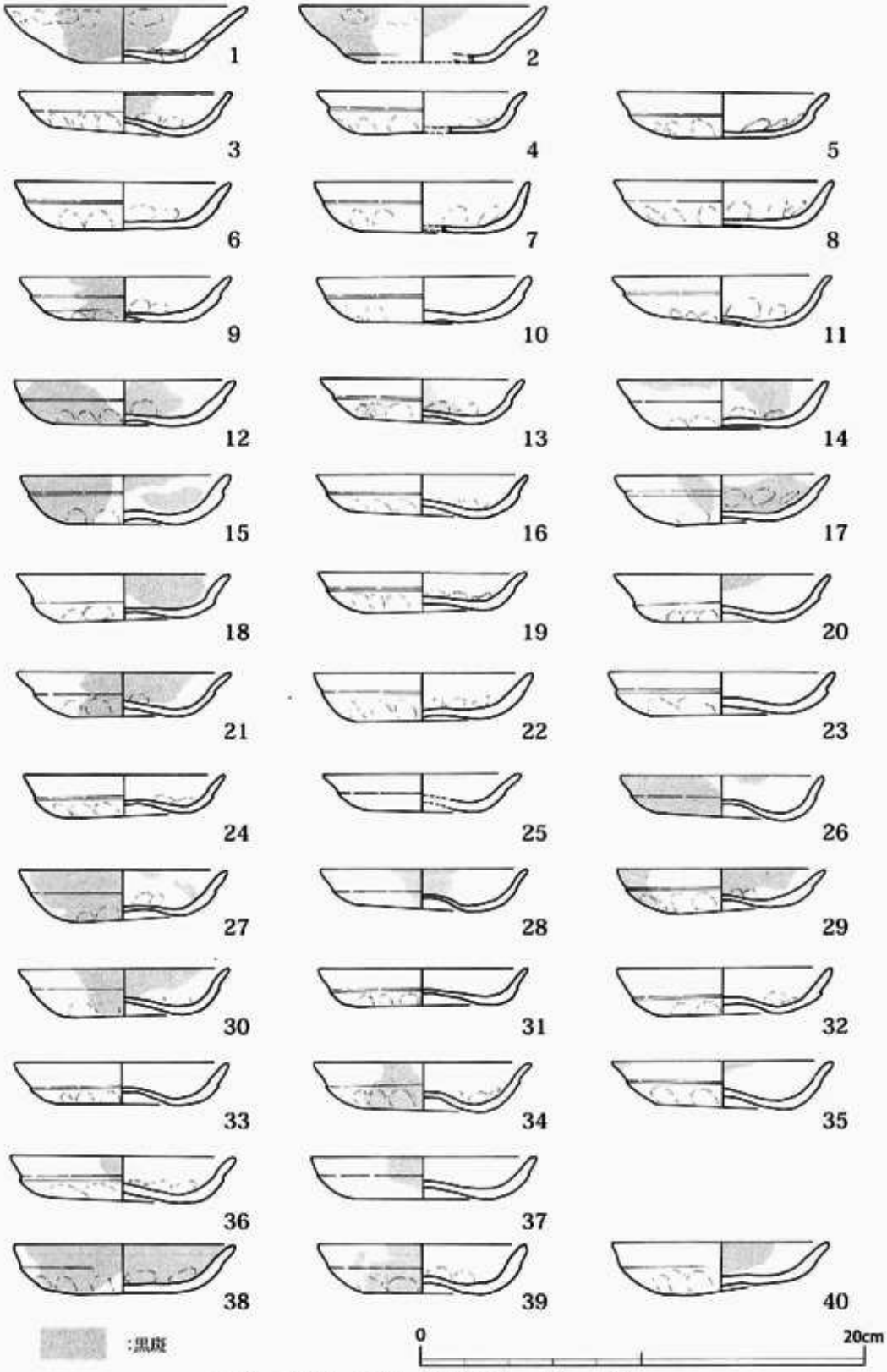


図73　C地区　土坑1　出土遺物1　（S.=1/3）

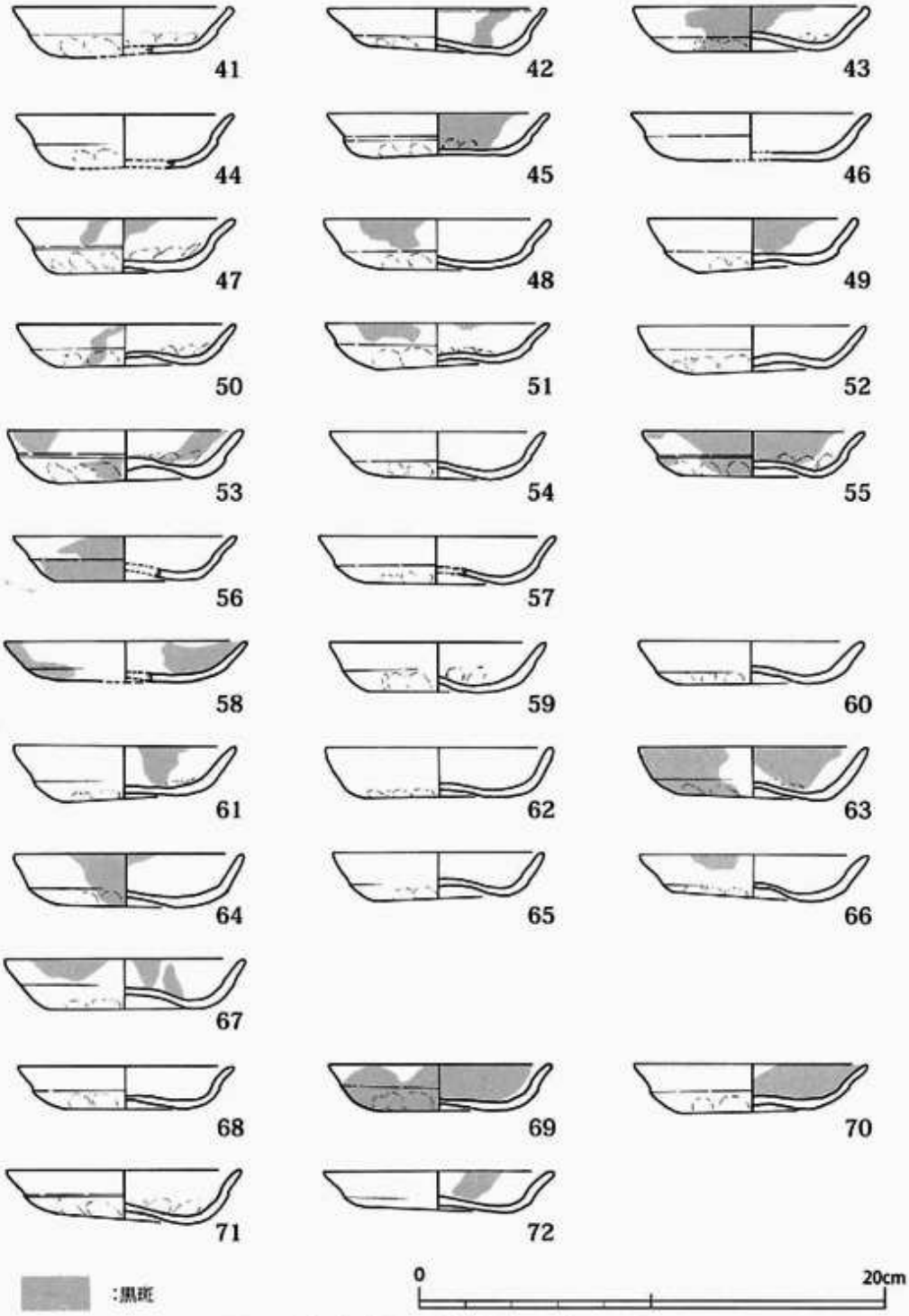


図74　C地区　土坑1　出土遺物2　（S.＝1/3）

その端部の形成手法は、強いヨコナデによって口縁端部が内側に肥厚した程度のもので、松本氏が分類される「皿口縁Ⅰ」とは厳密な意味では異なるものかもしれない。口縁部の長さに関しては、

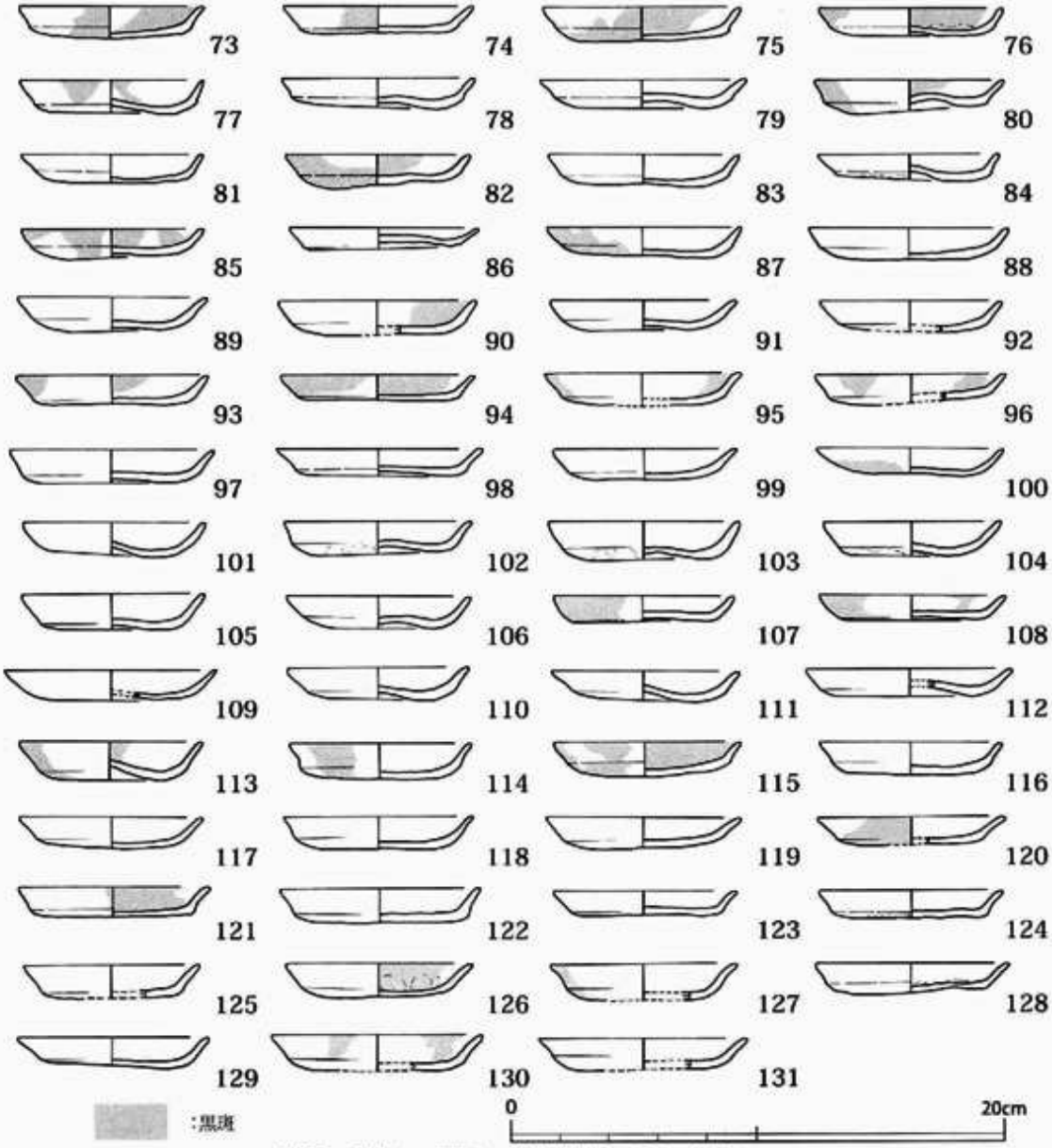


図75　C地区　土坑1　出土遺物3　（S.＝1/3）

法量Mの土師皿70個体中、長さが短い口縁部長aは38個体、長さが短い口縁部長bは32個体で、ほぼ伯仲している。

すなわち、法量Mの土師皿は、口縁形態によって分類すればＡａⅠ（73－3）・ＡａⅡ（73－4～73－40）・ＡｂⅠ（74－41～74－43）・ＡｂⅡ（74－44～74－67）・ＢｂⅡ（74－68～74－71）に大別され、口縁部ＡａⅡが37個体、ＡｂⅡが24個体となり、これらが全体の87.1％を占めている。

また、これらはいずれも口縁部と底部の境界の形態によってさらに細分が可能であるが、その境

界が段をなす境界部形状aがもっとも多く、口縁部AaⅡでは37個体中34個体（73－4～73－37）、口縁部AbⅡでは24個体中14個体（74－44～74－57）となっている。

底部の形態に関しては、先に記したように松本洋明氏の分類に従って4型式に分けたが、基本的には窪みのない平底の底部か上げ底になる底部の二者に大別されると思われる。上げ底の状態については、観察表にもそれを細分して記したが、特に皿底部Cと皿底部Dなどの区別は困難である。上げ底状の底部となる皿底部B・C・Dを一括すれば、70個体中59個体となって、全体の84.3%を占めている。

法量Sの土師皿は59個体を図化（図75）できた。口縁部が外反気味に開く口縁部形状Bが59個体中18個体（75－114～75－131）に認められ、法量Mの土師皿に対してその割合が高いことが知られる。その一方で、口縁端部を上方へ屈曲させて跳ね上げ状に形成した皿口縁Ⅰは認められなかった。

これらの口縁部は、長さが短いもの（口縁部長a）と、長いもの（口縁部長b）に分類することが可能であったがその違いは微妙で、必ずしも製作者の意図を反映した分類ではないかもしれない。

口縁部と底部の境界についても、法量Mの土師皿と同様にその形態によって分類できた。しかし、その境界が段をなす境界部形状aは、法量Mの土師皿に比較して、全体に占める割合が少なく59個体中8個体のみ（75－73～75－80）であった。底部の形状は、上げ底状になる皿底部B・C・Dを一括すると59個体中29個体になって、窪みのない皿底部Aの30個体とほぼ伯仲する。法量Mの土師皿では、皿底部Aは70個体中11個体（15.7%）であったので、この点からも法量Mとの違いを認識できる。

以上のように、土坑1から出土した土師器皿の諸特徴を述べた。まず、それらの法量から3つのグループに弁別したが、法量Lの土師皿は数量が少なかったものの、2個体の形態上の諸特徴が共通し、法量Mや法量Sの土師皿とは、全体の形状も異なったものであった。法量Mと法量Sの土師皿は、各細部の形態の組み合わせによって、全体の形状はバラエティに富むが、法量Mでは口縁部形状A、口縁端部Ⅱが多い。また、口縁部と底部の境界は境界aが多く、底部は上げ底になるものが多いとの傾向がある。一方、法量Sでは、法量Mに比較すると、口縁部形状Bの割合や底部Aの割合が増え、逆に境界aが少なくなっている。これらのことから、土坑1で出土した小形土師皿の形態差は、その法量におおむね対応していると言える。

②C地区のその他の遺物

C地区で出土した古墳時代以降の遺物として、土坑1以外のものを図76に実測図を掲げた。

土坑3からは、（76－1）～（76－3）の3個体の鉄釘が出土した。（76－1）は完形である。身部の先端を短く屈曲して頭部としている。長さ10.5cm、身部の断面形は正方形に近く、1辺7

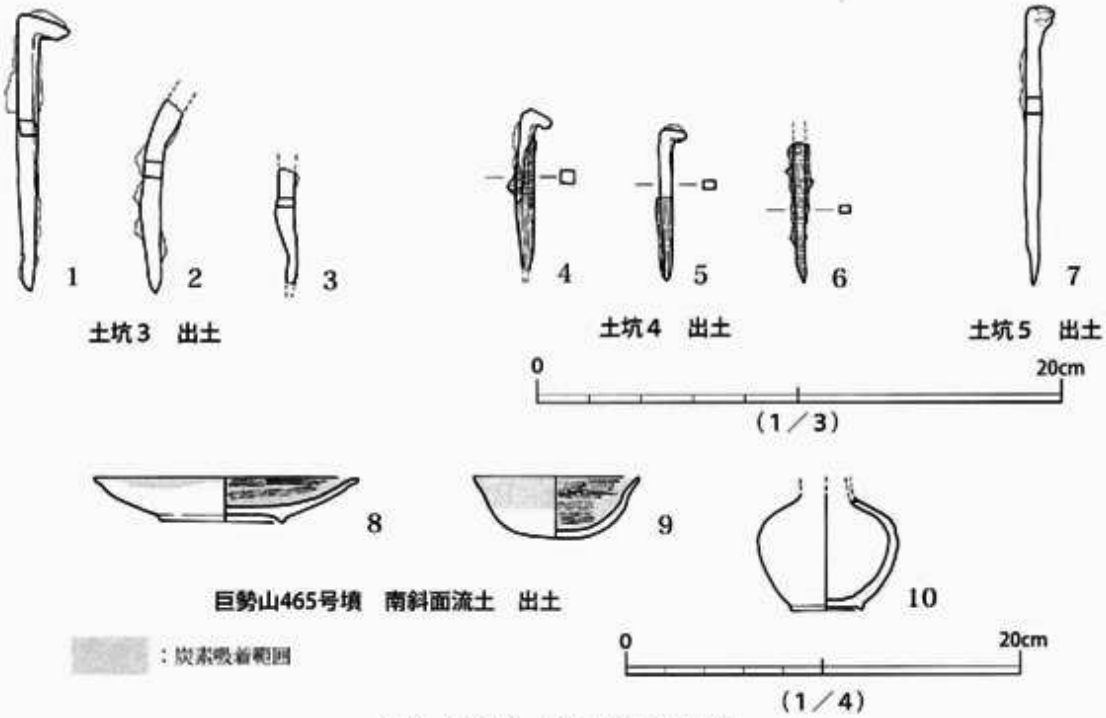


図76　C地区　古墳時代以外の遺物

mm 程を測る。重量は 23.0 g である。(76 − 2) は頭部付近を欠損している。現状は全体に屈曲している。残存長 8.3cm、身部の断面形は正方形に近く、1 辺 8 mm 程を測る。元の形状は(76 − 1) に近いものであったと思われる。現状での重量は 11.3 g である。(76 − 3) は両先端部を欠損している。残存長 4.3cm、断面形は長方形を呈し、長辺 8 mm、短辺 4 mm を測る。現状での重量は 4.3 g である。

土坑 4 からは (76 − 4) ～ (76 − 6) の 3 固体の鉄釘が出土した。(76 − 4) 先端をわずかに欠損している。(76 − 5) は完形である。共に木質が付着していて、先端部は縦方向の木目が観察できる。(76 − 4) については、頭部側には横方向の木目も観察でき、釘の中程で木目方向の異なる 2 材の境界を見ることができる。頭部側の横方向の木目を持つ木材の厚みは 2.7cm である。

(76 − 4) は残存長 6.1cm、身部の断面形は方形を呈し 1 辺 5 mm を測る。現状での重量は 6.0 g である。(76 − 5) は長 5.8cm、身部の断面形は長方形を呈し長辺 5 mm、短辺 4 mm を測る。現状での重量は 3.6 g である。

(76 − 6) は、頭部付近を欠損している。現状での形状は全体に彎曲している。外面全体に木質が付着しており、横方向の木目が観察できる。残存長は 5.3cm、身部の断面形は長方形を呈し、長辺 4 mm、短辺 3 mm を測る。現状での重量は 2.5 g である。

土坑 5 からは、完形の (76 − 7) の鉄釘が出土した。頭部の形状は、錆膨れ影響もあって判然としない。段をもって身部よりやや大きい頭部をつくり出すものと見えるが、短く屈曲させている

のかもしれない。長さ 10.6cm、身部の断面形は正方形に近く 1 辺 6 mm を測る。重量は 15.9 g である。

以上の遺構に伴うもののほか、巨勢山 465 号墳の墳丘南斜面の流土中から、黒色土器や須恵器が出土した。(76 − 8) ～ (76 − 10) であるが、それらは比較的残存率がよく、(76 − 8) と (76 − 9) は口縁部の約 1 割を欠損するもののほぼ完形になった。特に (76 − 9) は欠損部分以外は割れていない状態で出土した。(76 − 10) も頸部以上を欠損しているものの、体部はすべて残っていた。このような残存状態からすると、出土地に近い位置に、当該期の遺構が存在したものと思われる。調査時においてもそのような出土状態が留意されて、特に周辺を精査したが遺構検出はできなかった。

(76 − 8) は黒色土器皿である。内面を黒色処理している。口径 13.6cm、器高 2.3cm を測る。高台は断面三角形の低いものを貼付けている。内面にはヘラミガキを横方向に重ねるらしいが、表面の劣化のために明確には確認しにくい。(76 − 9) は黒色土器杯である。内面を黒色処理している。口径 8.6cm、器高 3.2cm を測る。内面には全体にヘラミガキが施されている。(76 − 10) は須恵器水瓶である。体部最大径 7.1cm、残存高 5.7cm を測る。底部外面には糸切り痕跡が残っているので、高台は、体部が回転台から切り離された後に貼付けられたことが判る。遺物の時期は明確ではないが、10 世紀頃のものであろうか。

第 6 章　巨勢山境谷遺跡

第 1 節　位置と既往の調査

境谷遺跡は、今次調査地の最高所、巨勢山 456 号墳が立地する地点から北東方向に延びる尾根上に位置する。今次調査地においては、巨勢山 458 号墳、465 号墳の下層で、境谷遺跡に関係する遺構が検出されている。また現状では、今次調査地西側は、尾根の中央付近から急な崖になっているが、かつては巨勢山 456 号墳が立地する地点から派生して支尾根上にも古墳が存在した。ここに弥生時代の遺跡があることが初めて気づかれたのは、昭和 48 (1973) 年 7 月から 10 月の、この支尾根上の古墳の発掘調査時で、巨勢山 439 号墳 (境谷 1 号墳) の攪乱土中から弥生土器片が出土した (久野編 1974) ことによる。そして、後に五條市引ノ山遺跡の発掘調査を担当した関川尚功氏は、その調査報告書で、大和南西部の高地性集落を総括してその意義を論じ、ここで、境谷 1 号墳出土の弥生土器に注目して、この地点を境谷遺跡と命名した (関川 1977) のである。

さて、当時「巨勢山古墳群境谷支群」と呼ばれた一角は、調査後土砂採取地となり、その北側の尾根上に存在した数基の古墳については、未調査のまま立地していた尾根ごと消滅した。その結果として今次調査地の西側が急な崖面となり、この崖面上端には、いくつもの古墳が崩壊寸前の状態で取り残されることになったのである。

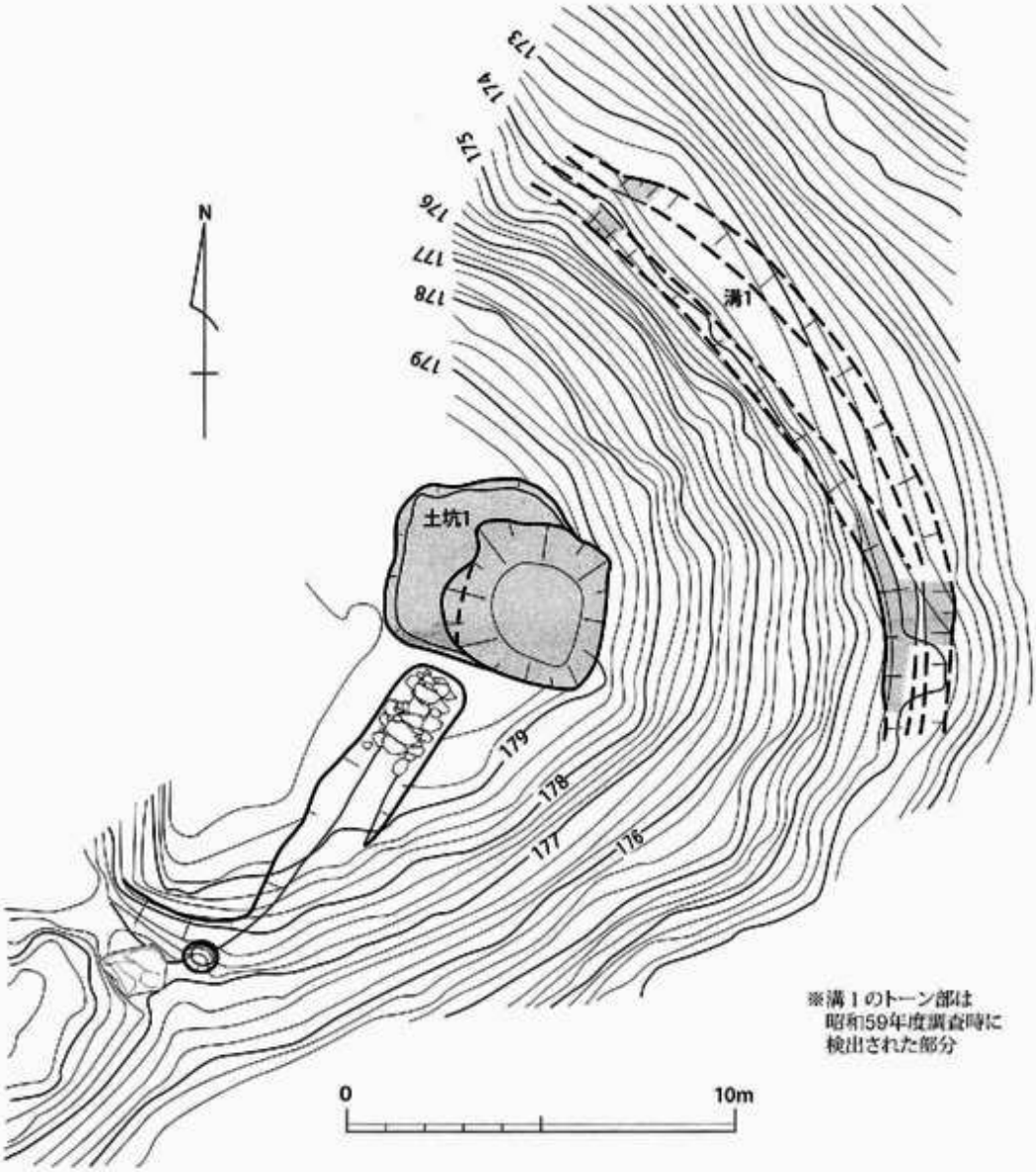


図77　巨勢山境谷遺跡　遺構の配置1（巨勢山458号墳付近）（S.＝1/200）

一方、このような状況下に昭和59（1984）年に奈良県で開催された「わかくさ国体」に先立って巨勢山古墳群の一角にあたる大字朝町・栗坂にラグビー場およびその関連施設が建設されることになった。上のような土砂採取が別の地点とはいえ進行するなか行われた比較的規模の大きい公共事業であったので、この開発行為は、巨勢山古墳群全体の保護のための基礎資料の必要性が再認識される契機ともなった。このようなことから、御所市教育委員会は、奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所の指導・協力の元、昭和58（1983）年度・昭和59（1984）年度の2箇年にわたって国庫・県費補助を得て、古墳群の詳細分布調査および一部古墳の保存を目的とした発掘調査を実施したのである。

境谷遺跡に関連しては、巨勢山458号墳(境谷10号墳)の発掘調査(藤田1985)がそれに当たる。この時の巨勢山458号墳に関する調査内容の概略は、本書「第3章第3節　巨勢山458号墳」(13頁)に記したので参照されたい。境谷遺跡に関しては、古墳の墳丘盛土や墳丘流出土および「周溝埋土」内から、弥生土器が「破片数にして約500点」出土していて、いずれも畿内第Ⅴ様式に属するものであると報告されている。

この昭和59年の調査時に「周溝」と認識された遺構は、今次調査によって面的な発掘を行った結果、本書「第3章第3節　巨勢山458号墳　1．既往の調査」(13頁)に記したように、境谷遺跡を構成する遺構の一つであったと考えるに至った。以下には境谷遺跡溝1として報告する。また、同様に昭和59年の調査で墳頂部に検出された「段状の地山整形」についても、今次調査では平面プランが方形の土坑として検出されたので、以下には土坑1と呼称して報告する。

第2節　遺構

1．溝1

溝1は、A地区巨勢山458号墳に対する昭和59年のトレンチ調査で、古墳の裾を取巻く「周溝」であると考えられた遺構である。かつての調査で検出された部分については、図77中の溝1遺構図の該当箇所をトーンで示した。この時には、溝のそれぞれの上端・下端が平・断面で検出されており、溝の底から立ち上がる斜面もそれぞれ検出されていたのである。ところが、今次調査においては、そのトレンチ間を結ぶ地点で溝の上端・下端の延長が検出されなかったばかりではなく、遺憾ながら、旧トレンチ内に存在したはずの遺構についてもその形状が再検出されなかった。

しかし、最終的に地山面が露出した地形測量図(図77)をみれば、かつてトレンチ内で検出された溝状遺構を結ぶ位置のコンターラインの間隔が広く、平坦な地形になっていることが判る。昭和59年の調査時における遺構の検出がトレンチ内のみであったとはいえ、それは平面と断面で確認されたものであるから、この点を踏まえれば、本来はこの位置にコンターラインに平行する方向の溝状遺構が存在したとみるのが適当と考える。図77には、従前検出された遺構の一部を破線で繋ぐようにして、その想定される位置と形状を示した。

旧トレンチの調査結果を総合して考えれば、溝1は上端の幅3.8～4.0m、深さ20cm程度を測る。上記のように遺構は、立地点のコンターラインに平行する方向に掘削されたとみられ、その形状に合わせて平面形は緩やかに円弧を描いていたと考えられる。西端は、尾根の崖となり、南端も急な斜面になっていて、流出している。長さ15m程が残存していたのであろう。埋土は、褐色系ないしは灰色系の砂質土・礫砂土で周辺の流出土と基本的な違いはほとんどない。

出土土器は完形に近いものは希で、すべてが割れて破片になっていた。その量は、コンテナ3箱になった。遺構の長さが15m程度であったことからすると、遺物の密度は高いと言える。

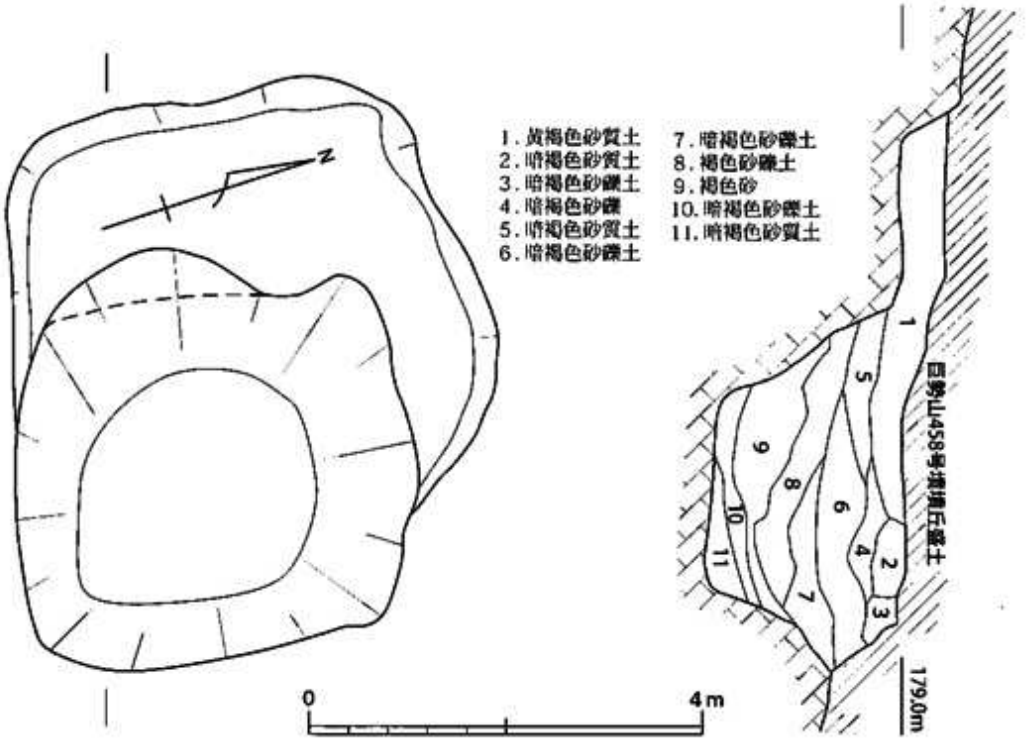


図78　巨勢山境谷遺跡　土坑1　平面・断面図　（S.＝1/80）

2．土坑1

土坑1は、A地区巨勢山458号墳に対する昭和59年のトレンチ調査で、墳頂部で検出された「段状の地山整形」とされたものである。当該調査では、遺構の一部が検出されたのみであったが、今次調査では面的調査が実施されたので、この形状の全容が明らかになった。

まず、検出された面の層位については、図8の巨勢山458号墳墳丘断面図として提示した。同図に明らかなように、土坑1は、古墳墳丘の盛土下で検出されたものであるから、古墳に先行することは層位的にも明らかである。

遺構の平・断面図は図78に示した。上面から見た場合、二つの方形が重なりあったような形状を呈しているが、一つの遺構として認識された。全体の上面の形状は、北辺などでやや膨らみが見えるが、おおむね短辺4.0～4.5 m程、長辺5.6 mの長方形を呈する。南北方向に短く、東西方向に長い。このうち、遺構の西半から北端が浅く、南東部が深く掘り込まれた2段掘りの様相を呈している。南東部の深い部分の上面の形状は、1辺が3.6 m程のやはり方形である。深さは、西半の浅い部分で0.56 m、南東部の深いところはさらにそこから、約2 mが掘られている。遺構検出面の最も高い部分から最深部までの深さは2.64 mである。

埋土はいずれも褐色系の砂質土ないしは砂礫で、周辺地山に起因する土である。焼土や、土坑の壁面が焼けた痕跡などは見られなかった。

出土遺物は、(84 − 1) の土玉があったが、土器などは検出されなかった。そのようなことから、その形成時期についても厳密には決定の根拠を欠いている。しかし、それは上記のように検出層位から古墳（巨勢山 458 号墳）に先行していることは明らかで、そうであれば、周辺で検出されている境谷遺跡に関連する遺構であると考えるのが妥当であろう。ただ、その場合にも、この遺構の性格については理解に苦しむ。遺構の主体になる下段の堀方だけを見ても、一辺 3.5 m以上、深さ 2 m近くあって、その規模の大きいことが特徴である。直ちにはこのような遺構の用途について想定しにくい。今後の類例を待ちたい。

3．土器棺墓 1

土器棺墓 1 は、C 地区巨勢山 465 号墳の調査途中で、その下層遺構として検出されたものである。すでに「第 5 章第 3 節　巨勢山 465 号墳 1．位置と墳丘・墓道」(98 頁) の項で述べたように、巨勢山 465 号墳の墳頂部には、径 2.2 m、深さ 1.3 m の比較的規模の大きい盗掘坑が掘られていた。調査はこの盗掘坑の埋土を除去することから始めたので、盗掘坑の壁面を観察することで、古墳の下層の状況をある程度知ることが出来た。この土器棺墓 1 も、その一部が盗掘坑によって削られていたために、盗掘坑を精査すれば壁面に土器の一部が見え、土器内部に空洞のあることも窺えていたのである。なお、調査の進捗によって、土器棺墓の一部は盗掘坑のみならず、古墳主体部の墓壙によっても破壊されていたことが判った。

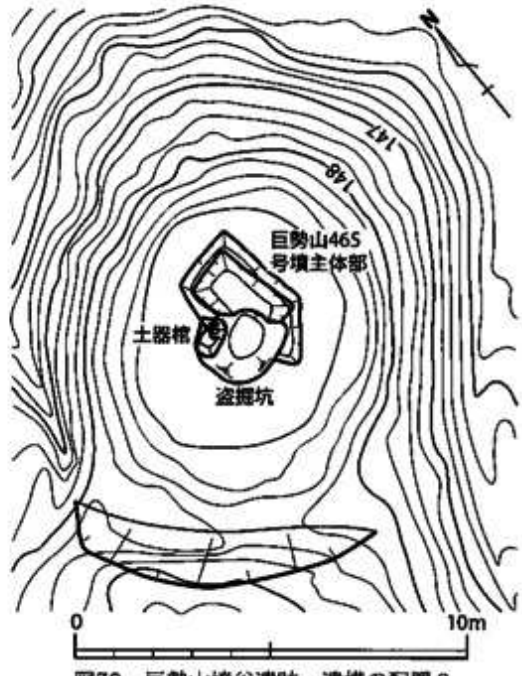


図79　巨勢山境谷遺跡　遺構の配置 2
(巨勢山465号墳付近)　(S.＝1/200)

土器棺墓と旧表土・古墳盛土・古墳主体部・盗掘坑との層位的な関係は、図 57 の巨勢山 465 号墳墳丘断面図として全体像を示すことができ、図 80 の土器棺の平面・断面図にクローズアップした状態で示した。これらから、巨勢山 465 号墳が立地する地点は、古墳盛土の直下層として古墳築造以前の旧表土（図 57 − 15 層）が帯状に残存しており、土器棺墓の掘込み面は、この旧表土の直下層に当たっていることが判る。また、図 80 からは、土器棺墓に及んだその後の破壊の状態を見て取ることができる。すなわち、図 80 − 左図に墓壙の南端は上記の盗掘坑に削られた状態を、図 80 − 上図に墓壙の東端が古墳主体部の墓壙に削られている状態を示した。それでも棺に用いられた土器には偶然にも破壊が及ばず、土器そのもの残存状態はかなり良好であった。また、遺構断

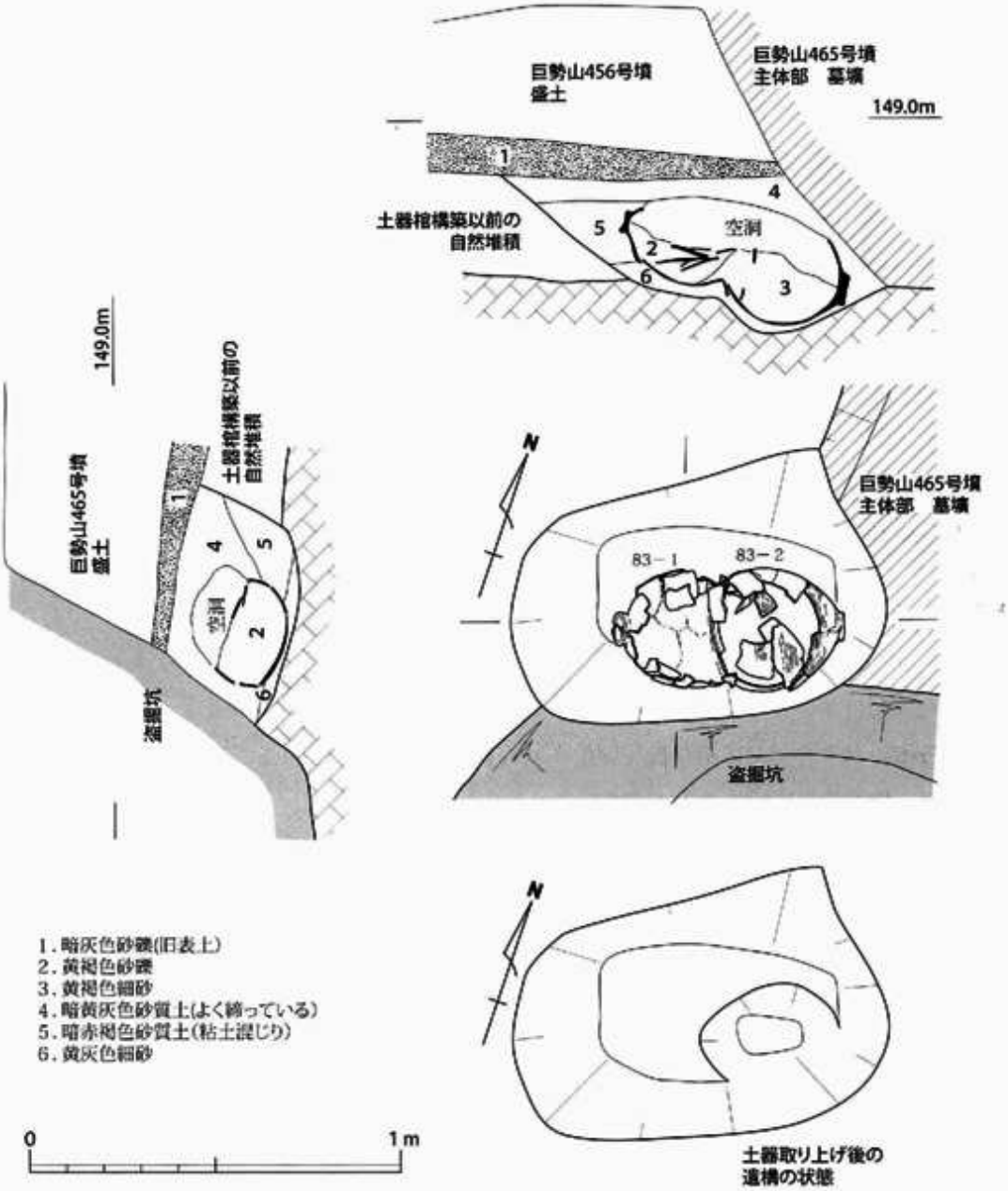


図80　巨勢山境谷遺跡　土器棺　平面・断面図　（S.＝1/20）

面図に示しているように土器の上部は空洞になっていた。このことから横たえらえた土器の上半は、相当の期間壊れないで内部に空洞を保持していたと考えられる。検出時には、上半部の土器片が内部に崩れて重なり合っている状態であったが、それらを室内作業によって接合したところ、当初から打ち欠かれていた（83－2）の壺口頸部は別にして、ほぼ完形に復元できた。

さて、遺構の検出は、古墳の調査が終了した後に、直上の盛土および旧表土を除去してから行った。墓壙として掘削された土坑は、図80に示したように平面形が現状ではやや歪な楕円形を呈し

ている。これは、上記のように東端部を古墳の主体部によって、南端部を古墳に対する盗掘坑によって削られているためでもある。現状では長軸 1.02 m、短軸 0.64 mを測るが、元々は長軸 1.3 m程度の墓壙であったと考えられる。深さは、最深部で 0.42 mを測る。

この墓壙内東側に、(83 − 2) の壺が口頸部を打ち欠いた後に横たえられ、その西側に (81 − 1)の甕が合口にして置かれていた。この結果、壺の甕の内側にできる空間の長さは約 50cm になっている。図 80 − 上図に掲げた縦断面図に示したように、墓壙は、西側すなわち (83 − 2) の壺が置かれた方が一段深く掘削されていた。このため土器棺の下端は水平ではなく、東にレベルが高くなっている。このことは、土器棺内に埋葬された乳児などの頭足の方向が意識されたことを示しているのかもしれない。

第3節　出土遺物

溝 1 出土土器について、図 81・82 に掲げた。溝 1 の遺構に関する説明で述べたように、出土土器は完形もしくは完形に近いものは少なく、(81 − 10)・(82 − 28)・(82 − 46)などの小形品や(81 − 4) が口頸部全体が残存していて比較的大きな破片であるほかは、いずれも断片資料である。しかし、そのような状態でありながらもコンテナ 3 箱分が出土しているので、遺構の規模からすれば、土器の出土量は多いと言えよう。図にはそれらの土器の中から、図化可能なもの 46 個体分を抽出して示した。個々の詳細は観察表 (170 ～ 178 頁) に記したので、ここでは時期を知る手がかりをはじめ、特徴的な事柄を中心に述べる。

(81 − 1) ～ (81 − 3) は、垂下口縁の広口壺で、口縁端部外面に、凹線文を施すもの (81 − 1) や円形浮文の上から竹管文を施して飾るもの (81 − 3) がある。

(81 − 4) は長頸壺の頸部である。ほぼ頸部の下端までが残存している。口径が 13.2cm あり、残存高も 16.5cm と大きい。残存部からも大形の長頸壺であることが判る。なお、残存部は口頸部に限ってはほぼ完存する状態になっており、割れ面を下にして安置した場合、口縁部がほぼ水平になって、その形態があたかも器台に似ている。このことから、長頸壺の口頸部を打ち欠いたものを器台に転用した可能性も考えた。しかし、下端の割れ面は、そのまま残されて何ら調整が加えられていないことから、その可能性は低いとみられる。現状で割れ面を下にして安置したときに口縁部がほぼ水平になるのは、その割れ面が分割成形された口頸部とそれより下半の体部との接合部に当たるためであると思われ、接合部が剥離した結果として現状の形態になっていると理解される。

(81 − 5)は短頸壺である。胴部最大径は、その中位かやや下にあるらしい。(81 − 6)・(81 − 7) は、頸部径が小さいことから細頸壺とみられる。(81 − 8)・(81 − 9) は壺底部であるが、体部の形態がやや異なる。(81 − 8) は細身であることから長頸壺の、(81 − 9) は体部がやや張っていることから短頸壺か広口壺の、それぞれ底部付近とみられる。なお、現状での形態を見れば、(81 − 9) は短頸壺 (81 − 5) と同一個体である可能性がある。しかし、現状で接点を持たないこと

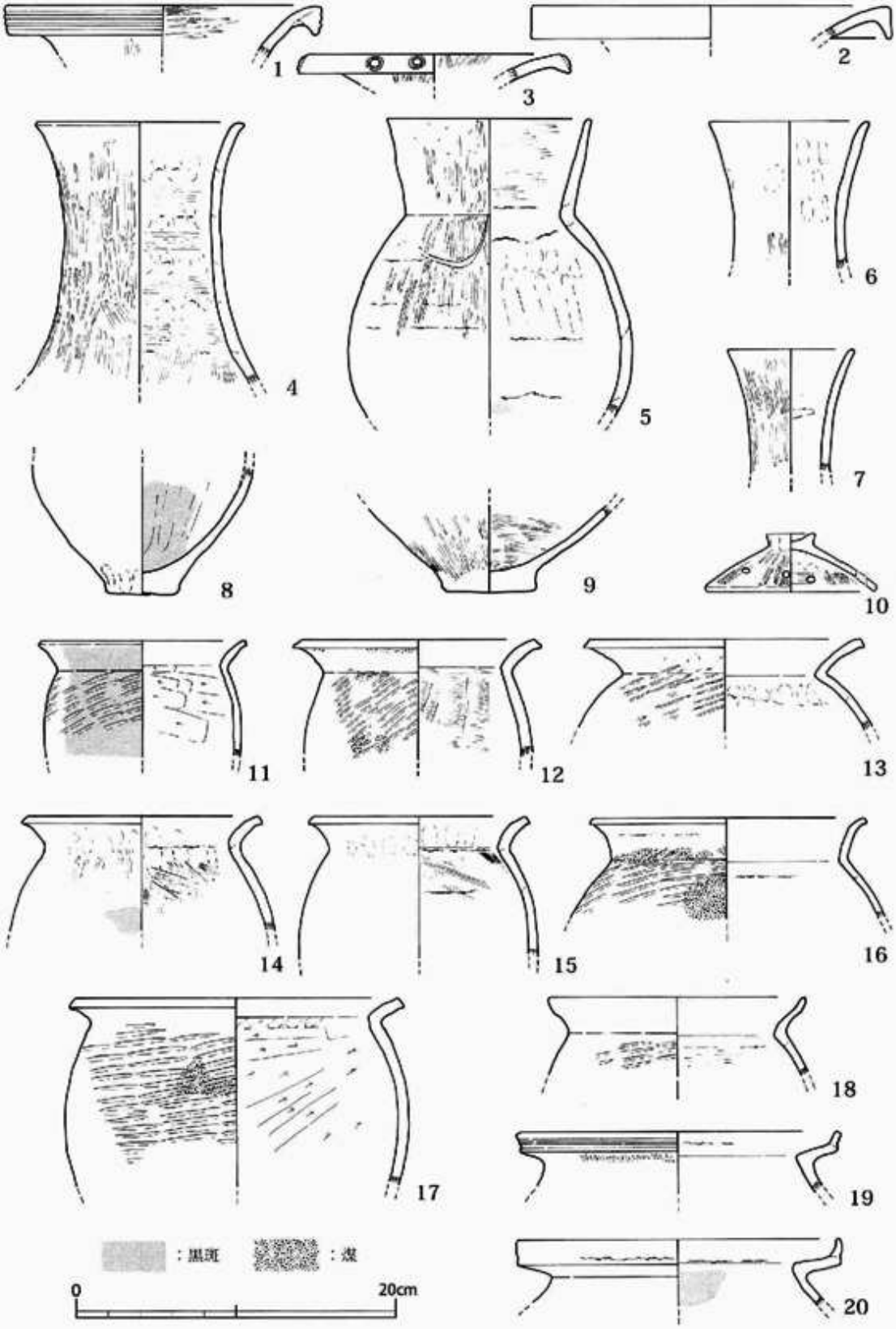


図81　巨勢山境谷遺跡　溝1　出土土器1　（S.＝1/4）

は言うまでも無いが、胎土観察の結果、(81－9) は (81－5) に比べて雲母がやや大きく多かったので、別個体と判断した。

(81－10) は蓋形土器である。対向する2箇所に2個を1セットとする直径6mmの円孔が穿たれている。口径からみて壺蓋と考えられる。

(81－11) ～ (81－20) は、甕の口縁部から体部にかけて残存したものである。口縁部の形態を見れば、体部から屈曲して外上方に開き口縁端部は外傾する面を成すものが多いが、受け口状口縁を成すものもある。(81－18) ～ (81－20) がそれで、特に (81－19) と (81－20) は疑口縁に粘土を継ぎ足して直立気味に口縁を立ち上げた複合口縁の状態がよく観察できる。これらは、胎土観察の結果による確証を持てる訳では無いが、搬入土器である可能性がある。

一方、体部の形態がある程度わかるものは、(81－11) ～ (81－17) までがある。体部があまり拡張しないもの (81－11・12・14・15) と、比較的体部が張るもの (81－13・16・17) がある。

(82－21) ～ (82－26) は、甕または鉢の底部、ないしは、その中央に円孔を穿って有孔鉢などとしたものである。底部の形態はやや上げ底になるもの (82－21・22) と平底のもの (82－23・24) がある。

(82－27)・(82－28) は分割成形による底部の上端を口縁端部として整形した鉢である。いずれも比較的残存率がよい。

(82－29) ～ (82－43) は高杯である。杯口縁部の状態がわかるものとして (82－28) ～ (82－39) を示し、脚部の形態がわかるものとして (82－40) ～ (82－43) を示した。

杯部の形態がわかるものは、大部分が幅の広い杯底部に短く外反する口縁部を備えるものである。ただ、その中でも若干の型式差があって、(82－33) は口縁部の長さが比較的長い。ただしそれでも大きく外反して開くものではなく、直立気味に立ち上がっている。また、これらとは別形式として、椀形の杯部をもつ (82－39) もある。

脚部のうち、柱状部から裾部までの形態がわかるものは (82－42) と (82－43) がある。いずれも裾部での屈曲がなく、「ハ」字状に広がりつつ滑らかに裾部に繋がっている。裾部は大きくは広がらない。(82－40)・(82－41) は全形は残っていないが、杯部との接合部から柱状部の形態を見れば、やはり同様の形態であるとみられる。

(82－44)・(82－45) は全形が不詳ながら、結合形土器の一部分とみられる。結合形土器は、広口壺の口縁部と高杯の脚部を結合させたものを言うが、(82－44) に見える突帯は、杯部における結合部界にあたるとみられる。(82－45) については、いずれにせよ脚台部の裾部付近になろうが、残存部上端にある突帯は、結合形土器脚裾部の、下方に屈曲する位置に付く突帯の型式的ななごりともみえる。そうであれば、(82－44) と (82－45) は、同一個体の可能性もある。色調も似ているが、胎土観察の結果、(82－44) は (82－45) に比べて、石英・チャートが目

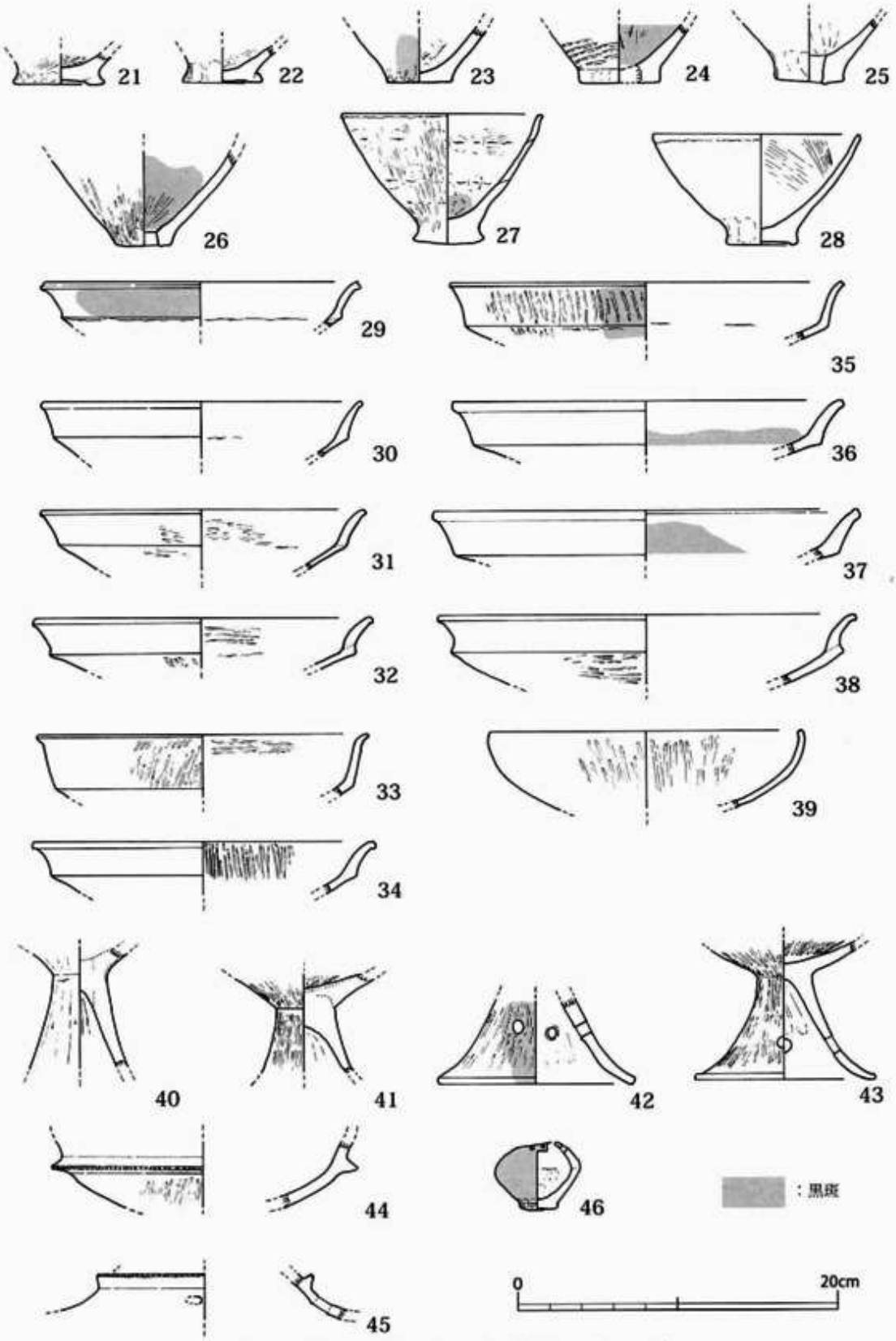


図82　巨勢山境谷遺跡　溝1　出土土器2　（S.＝1/4）

立つことから、別個体と判断した。

（82－46）は、ミニチュアの無頸壺形土器である。口縁部の直下に直径3mmの円孔が、2個を1セットとして対向する2方向に配置されている。

以上の土器のうち、もっとも時期的な変化を器形に表す器種は高杯である。出土高杯の杯部を見ると、口縁部が比較的短く、外反の度合いも小さくて外側に大きく開いていないのが特徴である。また脚部も裾部で屈曲しないで滑らかに彎曲しながら裾部まで繋がり、極端な広がり方をしていない。このような特徴は大和Ⅵ－1様式に当たる。出土高杯の編年的位置をこのように考えた上で他の器種を見れば、甕は、体部があまり張らない特徴など、時期的に合致する。また、結合形土器については、大和地域では大和Ⅴ様式にみられる器種であるが、大和Ⅴ様式の結合形土器は、口縁部と脚台との結合部界には器台口縁部のなごりとしての明瞭な突帯があり、外面に凹線などもめぐる。脚部の突帯も同様に明瞭である。この（82－44）や（82－45）がそれらの退化型式であるとすれば、若干時期が下って、大和Ⅵ様式併行になる可能性が考えられる。さらに、ここではミニチュア製品として表れているが、本来の無頸壺は大和Ⅴ様式までに盛行する器種で、このようなものの存在もあまり時期を下らして考えられない根拠である。

一方で、（81－1）・（81－2）・（81－3）はやや古い時期の様相を示しており、逆に細頸壺（81－7）はやや新しい時期に当たるかもしれない。ただし、それらは、いずれも細片であり、量的にもごく少数派である。

以上を総体的に見れば、溝1出土土器は、おおよそ大和Ⅵ－1様式に併行すると考えられる。

次に、土器棺として検出したものを図83に掲げた。その詳細については観察表（179頁）を参照されたい。甕（83－1）は、体部外面にタタキ痕跡が僅かに残り、その上からハケで調整している。体部は内面もハケ調整されているが、口縁部・底部はナデ調整である。壺（83－2）は、口頸部を欠いている。土器棺として用いられる時に打ち欠かれたものであろう。体部外面に全体にタタキ痕跡が残り、その上からミガキが施されている。ミガキはやや粗く元のタタキ痕跡が目立っている。

これらの土器を細別した時期に位置づけることは難しいが、概ね上記の溝1出土土器に併行するものと考えられよう。

図84には、以上のほか今次調査地の各地区から出土した弥生時代の遺物を掲げた。

（84－1）・（84－2）は土玉である。粘土で形成したものが焼成されており、両者とも黒斑が確認できる。（84－1）は図上横方向の径22mmを測り、同縦方向に径2mmの穿孔が行われている。重量は12.3gである。（84－2）は図上横方向の径19mmを測り、同じく径4mmの穿孔が行われている。重量は5.5gである。なお、これらと同様の遺物は昭和59年の調査でも検出されている。報告書（藤田1985）に掲載された図21－39がそれである。今次調査で出土した2点についても、巨勢山458号墳が築造された付近から出土しているもので、それ以外の地区からの出土は無かった。これらはいずれも近い位置からの出土であると言えることから、元は糸などで一連のものになっ

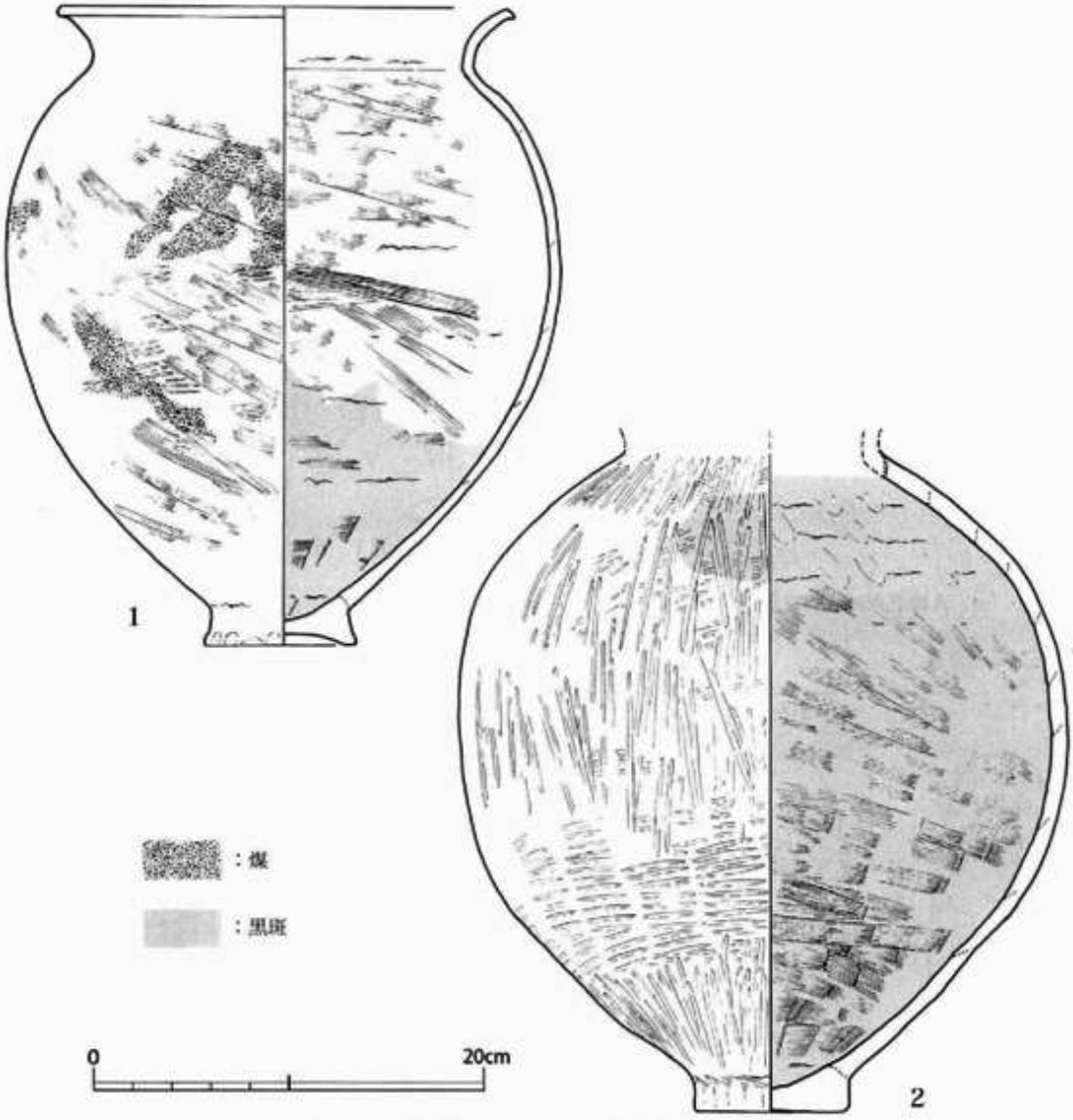


図83　巨勢山境谷遺跡　出土土器棺　（S.＝1/4）

ていて、458 号墳の下層に当たる土坑 1 付近で用いられたものと考えられる。

（84 － 3）は犬形土製品である。B 地区の巨勢山 459 号墳が築造された地点の南斜面で採取した。遺構に伴うものでないことから、境谷遺跡に関連するものか、すなわち弥生時代のものであるのかという点にも疑問も残る。しかし、角南聡一郎氏の集成（角南 2004）によれば、弥生時代から古墳時代前半代の動物形土製品は全国で 83 点が出土している。それらの形態や大きさもバラエティに富んで、（84 － 3）を含めても個々に同一型式であるものを認めることはできない。特に（84 － 3）は全国の出土例に比べると相対的に小さい。それでも同様の遺物であることは言えそうで、今次調査地においては古墳時代前半の遺構・遺物が検出されていないことから、弥生時代の境谷遺跡に伴うものであろうと考えた。

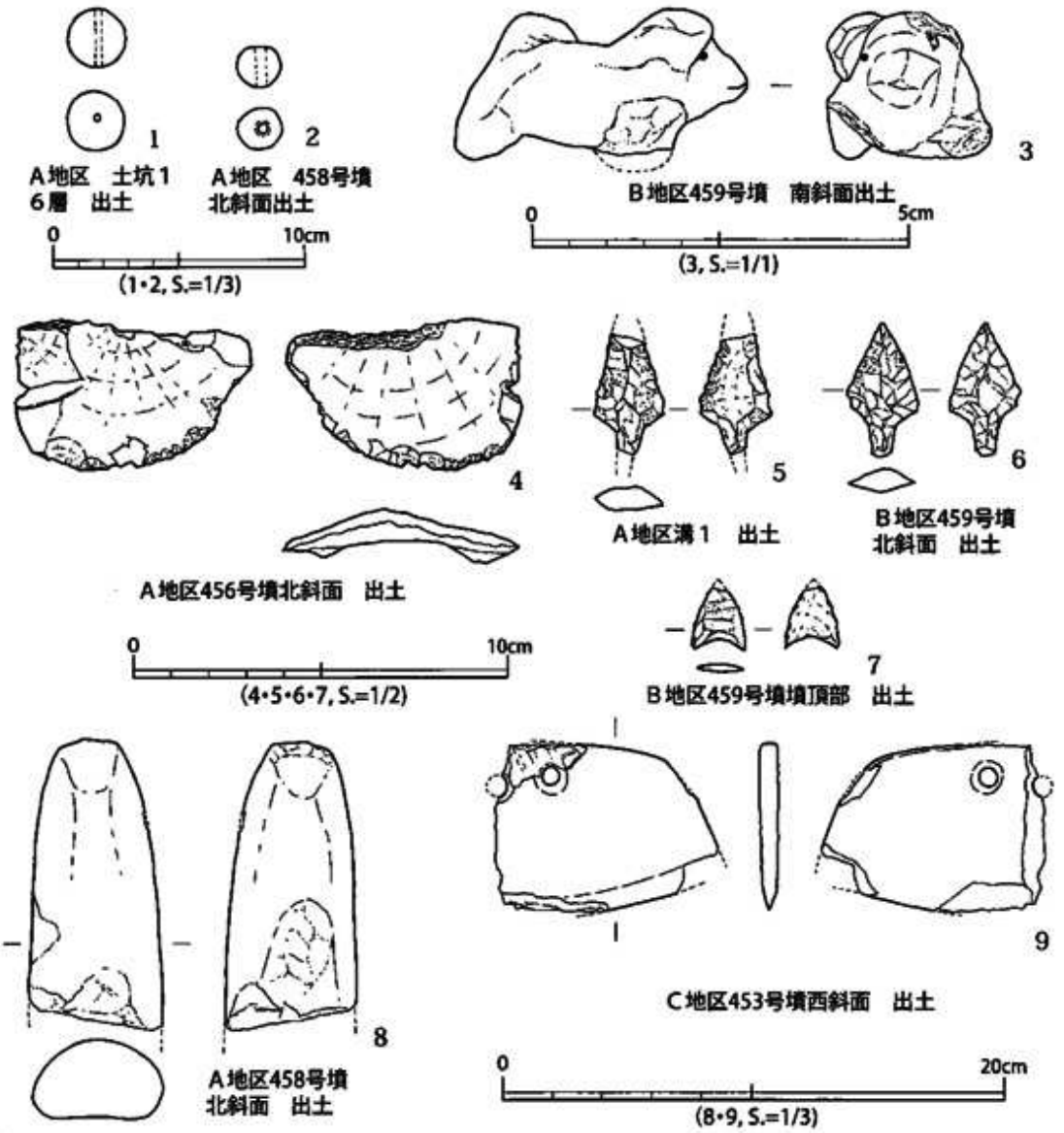


図84　巨勢山境谷遺跡　出土土製品・石器

（84－3）は全長39mm、現状での重量は15.7 gである。白色系の粒子の細かい粘土を用いて焼成されている。頭部・胴部と後足は、一体の粘土から手捏ねによって成形している。耳・尾・前足はそれぞれの形状に作った別の粘土を貼付けて表現されている。目は刺突によって表されている。尾の形状は、上部に跳ね上がって巻いている。耳は現状では左耳が剥離している。また、両前足と左後足も欠損している。そのうち左前足については、粘土の接合面で剥離している。このように現状では、「犬」を構成する多くの部位を欠損しているが、それが意識的に行われたものであるかは不明である。

（84－4）～（84－7）はいずれもサヌカイト製の石器で、（84－4）は剥片、（84－5）～

（84－7）は石鏃である。（84－4）は長6.4cm、幅4.0cmを測る。重量は21.2ｇである。（84－5）は現存長3.2cm、最大幅2.0cmを測る。現状の重量は3.4ｇである。（84－6）は、長3.5cm、最大幅1.9cmを測る。重量は2.7ｇである。（84－7）は現存最大長1.6cm、最大幅1.5cm、現状の重量は0.5ｇである。

（84－8）は石斧で、図示状態下端の基部を欠損してる。現存長11.4cmを測る。（84－9）は緑色片岩製の石包丁破片である。約1／2が残存した状態になっている。

第7章　まとめ

今次調査では、A・B・Cの3地区に分けて、巨勢山456～466号墳の11基の古墳の調査を行った。また、古墳の調査を実施する過程で古墳時代以降の遺構と遺物が検出されることもあった。さらに、458号墳から465号墳が立地する地点に重なって、従前から周知されていた弥生時代の高地性集落である巨勢山境谷遺跡の遺構も検出した。以下に、A～C地区の各古墳と古墳時代以降の遺構、及びA・C地区にまたがる巨勢山境谷遺跡の要点をまとめる。

〈A地区〉

巨勢山456号墳

456号墳は、径30ｍ弱の円墳であったとみられるが、調査時点において、墳丘自体が半壊状態で、その残存部分には主体部も認めることができなかった。出土遺物は、墳丘の周囲で検出した。須恵器杯身2・鉄滓1・鉄環2があった。ただし、鉄環は、古墳に伴う遺物ではない可能性が高い。出土した須恵器から、古墳の築造期はＭＴ15型式期、追葬の時期はＴＫ10型式期であると推定される。

巨勢山457号墳

457号墳は、径20ｍ弱の円墳であったとみられるが、調査時点において、墳丘の大部分が失われていた。埋葬施設に関する痕跡は全く残されておらず、遺物の出土も無かった。

巨勢山458号墳

458号墳は、「巨勢山境谷10号墳」として報告されている（藤田1985）古墳である。今次調査によって、南北径25ｍ、東西径10～15ｍの規模を有する円墳であったと想定された。主体部は、既報告の副次的埋葬施設である横穴式石室のほかは検出されなかった。古墳の築造時期は、中期中葉から後葉の古い段階が想定される。出土遺物は、円筒埴輪の破片約20片があった。

巨勢山461号墳

461号墳は、直径10数ｍの円墳であったとみられるが、調査時点において、墳丘の旧状をほとんど保っていなかったため、詳細は不明である。主体部等も残存していなかった。古墳の築造時期

は、中期前葉であるとみられる。出土遺物は、墳丘北側の平坦面で円筒形の埴輪の1段目が据え置かれた状態で検出された。この埴輪は形象埴輪の基部である可能性がある。このほか、墳丘の北・東斜面の流土中から埴輪片が出土した。

巨勢山462号墳

462号墳は、本来は南北径10数m強の円墳であったとみられるが、調査時点で、既に墳丘のほとんどを失っており、詳細は不明である。遺物は、墳丘周囲の流出土中出土の埴輪片があった。これらの遺物が462号墳に伴うとすれば、古墳の築造期は中期前葉にあたり、461号墳と相前後して造られたことになろう。

A地区古墳時代以外の遺構・遺物

道の痕跡かと思われる平坦面が検出された。その上層に堆積した炭化物混じりの土層は、焚き火などの痕跡とみられるが実態は不明である。また、その堆積層から、16世紀中頃のものとみられる土師器・瓦器などが出土した。これとは別に、巨勢山456号墳の東斜面に当たる地点で、開元通寶1が出土した。

〈B地区〉

巨勢山459号墳

459号墳は、径約17mの円墳である。主体部は中心主体とみられる主体部1と、追葬棺にあたる主体部2が存在した。古墳の築造期は、TK 10型式期を下らない後期前半とみられる。

主体部1は、墓壙の規模は、長さ3.8m、幅1.4m、深さ0.3mが検出された。木棺は割竹形木棺が用いられたとみられる。棺の規模は、検出上面での長さ3.35m、幅は北小口部が0.8m、南小口部が0.6mを測る。棺の主軸はN－2度30分－Eに向けている。棺の両小口周辺に赤色顔料が検出された。主体部1で検出された遺物は、刀子1点があった。元は棺上に置かれたとみられる。

主体部2は、墓壙の規模は、長さ3.5m、幅1.4m、深さ0.4mが検出された。木棺は組合式箱形木棺とみられる。棺の規模は、検出上面での長さ2.3m、幅は北小口が0.53m、南小口が0.48mを測る。棺の主軸はN－3度－Eに向けている。主体部2で検出された遺物は、棺内南小口付近の床面で出土した刀子片があった。

遺物に関しては、このほかいずれの主体部に伴うものであるか不明であるが、墳丘流土から、須恵器杯身・杯蓋・鉄鏃・刀子・鉄鎌・留金具の各破片が出土した。

巨勢山460号墳

460号墳は、直径約15mの円墳である。墳頂部は盛土が残存しないほど削平を受けており、主体部も検出されなかった。遺物は墳丘流土中から埴輪片がコンテナ3箱分出土した。

B地区古墳時代以外の遺構と遺物

遺構は、土坑8基、ピット21基、溝1条、石組み遺構3基を検出した。それらの性格は不明な

場合が多い。墓壙とみられる土坑（土坑４・７）や、墓の一部である可能性のある石組み（石組み遺構２・３）もあるが、一方で炭焼き窯とみられる遺構（石組み遺構１）も存在した。これらの形成年代は、個別的には特定ができない場合がほとんどである。しかし、地区内の出土遺物は、おおよそ 16 世紀中頃のものが多くあまり年代に開きが無かったことから、これらの遺構はほぼ同じ頃に構築された可能性が考えられる。

〈Ｃ地区〉

巨勢山 463 号墳

463 号墳は、径 12 ｍの円墳であったとみられる。主体部は、墳頂部で２基の木棺直葬の施設を検出した。古墳の築造期はＴＫ 10 型式期で、追葬時期はＴＫ 209 型式期とみられる。

主体部１は、墓壙の規模は長さ 4.38 ｍ、幅最大 3.75 ｍを測る。棺は舟形木棺とみられる。棺の規模は、長さ 3.09 ｍ、幅 1.06 ｍ、深さ 0.75 ｍ以上である。棺の主軸はＮ－ 20 度－Ｅに向けている。棺底の南小口より中央付近に赤色顔料や歯の断片が検出されたことから、被葬者の頭位は南向きであったことが判る。

主体部１に伴う遺物は、墓壙内棺外の南東隅部において須恵器・土師器・鉄器が一括で出土した。その内訳は次の通りである。

須恵器台付長頸壺１、同瓶１、同提瓶１、同短頸壺１、土師器杯６、同壺１、鉄鏃３・刀子１・鉄鎌１、棒状鉄製品１。

主体部２は、墓壙の規模は長さ 4.47 ｍ、幅 2.07 ｍを測る。棺は舟形木棺とみられる。棺の規模は長さ 3.45 ｍ、幅 3.0 ｍ、深さ 50cm 以上を測る。棺の主軸はＮ－ 12 度－Ｅに向けている。被葬者の頭位は定かではないが、棺底のレベルから南に頭を向けていた可能性が考えられる。主体部２に伴う遺物も明確ではないが、棺上にあって棺内に落ち込んだともみられる拳大程の粘土塊が１点あった。

463 号墳で検出した遺物は、上記の主体部１に伴うもののほか、墳頂部や墳丘流土中から出土したものがある。墳頂部で出土した須恵器は横瓶１、広口壺１、高杯１、短頸壺１である。これらの土器は、破砕した後にその場に破片をある程度集めて置かれたものとみられる。また、この墳頂部出土土器とは別に墳丘周囲の流出土中から、須恵器杯蓋２、鎌らしき鉄片１、刀子片１が出土している。ただし、特に須恵器については 463 号墳の築造時期とも合致しないので、現状では 463 号墳とは直接関係しないものとみられる。

また、古墳に関連する遺構として、墳丘の西裾付近で墓道が検出され、墳丘南周溝の底では何らかの祭祀行為が行われたとみられる焼土坑が検出された。

巨勢山 464 号墳

464 号墳は、径 12 ｍの円墳である。主体部は墳頂部に２基の木棺直葬の主体部が存在した。古

墳の築造期はＭＴ 15 型式期で、追葬時期はＴＫ 10 型式期である。

主体部１は、墓壙の規模は長さ 3.2 m、幅 1.9 m、深さ 0.6 mを測る。棺は舟形木棺とみられる。棺の規模は、長さ 2.85 m、幅 1.29 mである。棺の主軸はＮ－ 66 度－Ｅに向けている。棺の両小口付近に赤色顔料の分布が認められる。赤色顔料は棺内埋土中からも少量検出された。

出土遺物は、元は棺上に置かれ棺蓋の腐朽によって棺内に流れ込んだと考えられる須恵器・鉄器があった。その内訳は、須恵器杯身３、杯蓋４、短頸壺１、鉄鏃５、刀子１である。なお、このうち杯身、杯蓋の各１点から墓壙の埋め戻し段階で須恵器の破砕行為が行われたことが考えられる。

主体部２は、主体部１の上に重なりあって造られ、主軸は約 30 度ずれている。墓壙の規模は長さ 3.9 m、幅 2.4 m、深さ 0.5 mを測る。棺は舟形木棺とみられる。棺の規模は、長さ 3.06 m、幅は北小口部 1.13 m、南小口部 1.41 mである。棺の主軸はＮ－３度 30 分－Ｗに向けている。

出土遺物は、須恵器杯蓋１があった。主体部の直上に置かれるなどしたものと考えられる。

巨勢山 465 号墳

465 号墳は、径 12 mの円墳である。主体部は墳頂部に木棺直葬の主体部が存在した。古墳の築造期はＭＴ 15 型式期である。

主体部は、墓壙の規模は現状での最大長 3.64 m、幅 2.32 mを測る。棺は舟形木棺とみられる。棺の規模は、最大で長さ 2.28 m、幅 1.32 m、深さ 0.56 m以上を測る。棺の主軸はＮ－６度－Ｅに向けている。

主体部から出土遺物は検出されなかったが、盗掘坑や墳頂部の表土中などから須恵器杯身２・杯蓋２・高杯２のほか、甕の破片約 20 片が出土した。

465 号墳の南東側裾の外側で墓道状遺構と、土壙墓１を検出した。

墓道状遺構は幅約 60cm、深さ 12cm の溝状を呈したものである。長さ約 16 mを検出した。

土壙墓１は、最大長 177cm、同幅 75cm、深さ 60cm を測る。墓壙の平面形元は長方形を意識したとみられる。墓壙の長軸の方向はＮ－ 32 度－Ｅに向けている。出土遺物は、墓壙内底から須恵器杯身１・同蓋１があった。

巨勢山 466 号墳

466 号墳は、径 9.5 mの円墳とみられる。墳丘は、自然崩落などが著しく埋葬施設は検出されなかった。古墳の築造時期は、後期中葉とみられるが定かではない。出土遺物は南周溝埋土下位で土師器壺１があった。

Ｃ地区古墳時代以外の遺構と遺物

土坑５基が検出された。土坑１からは土師器皿 131 個体以上を検出した。土坑１の形成期は 15 世紀前葉ごろとみられる。土坑２は焚き火などの痕跡と考えられるが、その詳細な性格はよく判らない。土坑３～５は墓壙とみられる。そのうち土坑３と土坑５は改葬墓である可能性がある。

〈巨勢山境谷遺跡〉

巨勢山境谷遺跡は、今次調査のＡ地区とＣ地区にかけて所在する弥生時代の高地性集落である。遺構としては溝・土坑・土器棺墓が検出された。

溝１は、調査時の不手際があって面的に検出されたものではない。旧トレンチの調査結果などから、幅 3.8 ～ 4.0 m、深さ 20cm 程度のものが、本来長さ 15 m程残存していたとみられる。この地点から多くの弥生土器が出土した。それらはおおよそ大和Ⅵ－１様式に併行すると考えられる。

土坑１は、短辺 4.0 ～ 4.5 m程、長辺 5.6 mの長方形を呈する。遺構検出面の最も高い部分から最深部までの深さは 2.64 mである。

土器棺墓１は、元々は長軸 1.3 m程、短軸 0.64 m、深さ 0.42 mの、平面形がやや歪な楕円形の墓壙内に壺と甕が合口にして置かれていたものである。壺と甕の内側にできる空間の長さは約 50cm になっていた。

以上が、今次調査によって明らかになった遺構と遺物のあらましである。

現地調査においては、知り得た事実のすべてを第三者に伝えうるよう、細心の注意を払って図面等記録の作成を行っているのは当然のことである。記録の作成には万全を期して臨んでいるが、それでも諸般の原因で一部の記録漏れが生じることもあるのが実情ではないかとも思われる。そうした時に本来であれば、現地調査担当者が報告書作成を行うことで、現地での記録漏れなどは担当者の記憶などである程度は補いうる場合もあるだろう。しかし、調査の契機と経過で述べたとおり、今次調査においてはＡ・Ｂ地区を担当した調査員が、報告書の刊行に向けての整理作業が始まるまでに退職したために、両地区の遺構に関する報告は、残された図面と写真を元にしてＣ地区を担当した木許が中心になって当たった。

一方で全国的に見て、昨今は、開発事業の瞬発的な増加に対応するための発掘調査員は正規職員ではなく、臨時の嘱託職員が採用されることが多いことにも思いが至る。特に不況期の 1990 年代以降今日までに発掘調査されてきた遺跡で今後報告書が刊行されるべきもののなかには、現地調査担当者以外の人が報告書作成に当たらざるを得ない場合も多いのではないかとも思われる。あるいは、調査組織によっては、すでにそのような事態は通常行われていることであるかもしれない。

憂うべき現状であり、今次調査においては本書作成にかかる実態でもあった。このような形態での報告書作成は、本市教育委員会においては初めてのことであったが、それだけに、要領のつかみ難いところがあり、十分に意を尽くし得たか心許ない。ただしこのような事情があるとはいえ、もし報告段階で遺漏があったとすれば、編者でもある筆者の責であることは言うまでもない。

〈参考文献〉

赤塚次郎　1979「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』第90号

石田茂輔　1967「日葉酢媛命御陵の資料について」『書陵部紀要』第19号　宮内庁書陵部

一瀬和夫　1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』Ⅴ　大阪府教育委員会

上田　睦　1997「出土埴輪から見た古市古墳群の構成」『堅田直先生古稀記念論文集』

　　2002「巨勢山419号墳の埴輪の特徴とその位置付け」『巨勢山古墳群』Ⅲ（『御所市文化財調査報告書』第25集）

鍾方正樹　1991「Ⅳ　B　大和における円筒埴輪の地域性」埴輪の生産と供給」「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991』

　　1997「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内』（『奈良市埋蔵文化財調査報告』第1冊）

　　2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号　埴輪検討会

河上邦彦編　1987『史跡　牧野古墳』（『広陵町文化財調査報告』第1冊）

川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号

木許　守　2001「鴨都波1号墳と鴨都波遺跡」『鴨都波1号墳調査概報』御所市教育委員会編　　学生社

木許　守・藤田和尊　1996『室宮山古墳範囲確認調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第20集）

楠元哲夫　1976『清水谷古墳群』（『奈良県文化財調査報告書』第25集）

楠元哲夫・長谷川俊幸　1985『岩室池古墳　平等坊・岩室遺跡』天理市教育委員会・橿原考古学研究所

宮内庁書陵部　2003『埴輪Ⅳ』

久野邦雄　1981「175号墳」『新沢千塚古墳群』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第39冊

久野邦雄編　1974『大和巨勢山古墳群（境谷支群）』奈良県教育委員会

斎藤明彦　1988『史跡新沢千塚古墳群保存整備報告』橿原市教育委員会

重根弘和　2005「第3章第3節　1．窯」『土井遺跡・谷の前遺跡・慶雲寺跡』（『岡山県埋蔵文化財調査報告』191）

白石太一郎　1973「大型古墳と群集墳ー群集墳の形成と同族系譜の成立」『考古学論攷』第2冊　橿原考古学研究所

末永雅雄　1932「磯城郡三宅村石見出土埴輪」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第13冊

角南聡一郎　2004「弥生時代～古墳時代中期前半の動物形土製品ー研究史の整理及び資料集成を中心にー」『元興寺文化財研究所　研究報告2003』

関川尚功　1976『斑鳩町瓦塚1号墳発掘調査概報』奈良県教育委員会

　　1977『引ノ山古墳群』五條市教育委員会

　　1985「大和における大型前方後円墳の変遷」『考古学論攷』第11冊　橿原考古学研究所

積山　洋　1989「第3節　3．黒斑のある埴輪」『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ　財団法人大阪市文化財協会

十河良和　1992「第2章第3節　遺物」（「日置遺跡発掘調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第32冊）

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』（『研究論集』第10号　平安学園考古学クラブ）

千賀　久・藤川智之　1988「H－19号墳」『寺口忍海古墳群』（『新庄町文化財調査報告書』第1冊）

都出比呂志　1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号

中川住三　1992「Ⅲ　2．（3）出土遺物　埴輪」『高取町イノヲク古墳群第4次発掘調査報告』（『高取町文化財調査報告』第12冊）

西　弘海　1986「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』真新社

正田和男　1976「石光山20号墳」『葛城・石光山古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第32冊）

若杉智宏　2005「第4章　1　将軍山古墳出土の円筒埴輪の系譜と位置づけ」『将軍山古墳群Ⅰ－考古学資料調査報告集1』（『新修　茨木市史　史料集8』）

藤田和尊　1985『巨勢山境谷10号墳発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第4集）

藤田和尊編　2002『巨勢山古墳群Ⅲ』（『御所市文化財調査報告書』第25集）

藤田和尊・木許　守　1999『台風7号被害による室宮山古墳出土遺物』（『御所市文化財調査報告書』第20集）

藤田三郎・松本洋明　1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社

藤田三郎・豆谷和之　2003「奈良県における土器編年」『奈良県の弥生土器集成』（『橿原考古学研究所研究成果』第6冊）

松永博明　1990『イノヲク古墳群　第二次発掘調査報告』（『高取町文化財調査報告』第10冊）

森　浩一　編　1972『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部考古学研究室

森歴美佐子　1995「第4部第2章第2節　古墳時代後期の遺物」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター

吉田恵二　1973「埴輪生産の復原」『考古学研究』第19巻第3号

安村俊史　2000「B種ヨコハケ雑考」『埴輪論叢』第2号　埴輪検討会

表2　出土埴輪観察表

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土							色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
						長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他		
9－1 円筒 458号墳　墳丘東盛土内	口縁径 34.0cm 残存1/5	・Ⅳ類 ・－	1次調整：タテハケ 2次調整：ヨコハケ (10条/cm)	ナナメハケ (10条/cm) 原体幅1.5cm 15条	良好	M2	Ⓛ・L4	M3	S1	M1	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・緑灰色	『境谷10号墳』図22－40と同一個体の可能性。「盛土」は横穴式石室の盛土。
9－2 円筒 458号墳　墳丘東盛土内	口縁径 26.0cm 残存1/6	・Ⅰ類 ・－	1次調整：タテハケ 2次調整：ヨコハケ 下部のヨコハケはB種とも考えられる (6条/cm) 指頭押圧 口縁部付近はナデ	ヨコハケ（静止痕あり） 原体幅2.5cm 16条 (6条/cm) 指頭押圧	良好	S1	Ⓛ・L4	S3	S1	M1	M1		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色－黒灰色	外面に赤色顔料塗布。『境谷10号墳』図22－41とは同一個体の可能性あり。「盛土」は横穴式石室の盛土。
9－3 円筒 458号墳　北流土	口縁径 26.6cm 残存1/8	・Ⅰ類 ・－	ナナメハケ ハケの工具は2種類（7条/cm）・(10条/cm)	ヨコハケ (9条/cm)	やや不良	S1	Ⓛ・L3	L3	Ⓢ2	0	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	
9－4 円筒または朝顔 458号墳　墳丘東盛土内	タガ径 29.0cm 残存1/6	・－ ・2b	1次調整：タテハケ 2次調整：ヨコハケ ヨコハケの工具は2種類 タガ上のハケ (12条/cm) スカシ孔周辺のハケ（8条/cm) タガのナデ右から左	ヨコハケ ナナメハケ (9条/cm) 右から左	良好	S2	Ⓛ・L3	S3	S1	M1	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・灰黄色	不整形の円形スカシ孔。「盛土」は横穴式石室の盛土。
9－5 円筒または朝顔 458号墳　墳丘東盛土内	底部径 20.6cm 残存1/6	・－ ・－	1次調整：タテハケ 2次調整：ヨコハケ (6条/cm)	ナデ 指頭押圧 左から右	やや不良	S2	M2	S2	M3	0	0		・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	『境谷10号墳』図22－44と接合。「盛土」は横穴式石室の盛土。上田分類「底部の調整」：ア類。
9－6 円筒または朝顔 458号墳　北斜面流出土	底部径 21.8cm 残存1/4	・－ ・－	タテハケ (5条/cm)	指頭押圧 ケズリ 左から右	やや不良	S1	L1	S3	S・Ⓢ2	L1	M3		・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・灰黒色	上田分類「底部の調整」：ア類。
9－7 円筒または朝顔 458号墳　墳頂流出土	底部径 20.4cm 残存1/6	・－ ・－	タテハケ(7条/cm) 後指頭押圧 基底部付近にヨコハケ	ナデ 指頭押圧	やや不良	S1	Ⓛ・L3	S2	M2	L3	0		・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・淡黄褐色	上田分類「底部の調整」：ア類。
12－1 円筒 461号墳　墳丘北東斜面	口径 39.4cm 残存1/4	・Ⅳ類 ・2b	タテハケ (7条/cm) 左から右 2次調整なし	B種ヨコハケ (7条/cm) 下から上 右から左	良好	S1	L・M1	S4	S・Ⓢ2	Ⓛ・L1	0		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	黒斑。
12－2 円筒 461号墳　図10-10層	タガ径 38.6cm 残存1/8	・－ ・2b	タテハケ（9条/cm)	ナナメハケ (7条/cm) 下から上 右から左	良好	S1	M2	S3	Ⓢ3	L・M2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
12－3 円筒 461号墳　図 10-10層	タガ径 35.0cm 残存 1/12	・－ ・3c	タテハケ後 ヨコハケ後 タテハケ 原体幅2.6cm19条 (9条／cm)	ナナメハケ 原体幅2.6cm (9条／cm) 下から上 右から左	良好	S2	S1	S3	L・Ⓢ2	M1	S2		・赤褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	
12－4 円筒または朝顔 461号墳　北 墳丘端	底部径 31.5cm (含突帯： 33.8cm) 完存	・－ ・2b	タテハケ (7～9条／cm) 原体幅6.0cm 左から右	ナナメハケ (7～9条／cm) 下から上 右から左	良好	S2	L1	S2	Ⓢ2	L1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 －黒灰色	有黒斑。 半円形のスカシ孔。底部に低位置突帯あり。 盾形埴輪の可能性あり。
13－5 円筒または朝顔 461号墳　図 10-10層	底部径 19.8cm 完存	・－ ・2b	1次調整：タテハケ 2次調整：タテハケ (8条／cm) 原体幅1.7cm 右から左	ナナメハケ 原体幅2.0cm (8条／cm) のち板ナデ 左から右	良好	S1	L1	M2	S2	L2	0		・赤黄褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	二段目にスカシ孔がみられない。上田分類「底部の調整」：ウ類。
13－6 円筒 461号墳　図 10-10層		・Ⅰ類 ・－	摩滅のため詳細不明	ナナメハケ のちヨコハケ (7条／cm) 右から左	ややあまい	S1	M・S2	S2	Ⓢ1	M2	M2		・黄褐色 ・赤褐色 ・黒灰色	
13－7 円筒または朝顔 461号墳　北 斜面裾上位		・－ ・2b	摩滅のため詳細不明	ナナメハケ 指頭押圧	良好	0	M1	M・S2	S1	M2	0		・黄褐色 ・赤褐色 ・黄褐色 －黒灰色	
13－8 円筒または朝顔 461号墳　東 斜面		・－ ・3c	ヨコハケ (11条/cm)	ナデ 指頭押圧	良好	S1	M1	M2	Ⓢ3	M2	0		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	
13－9 形象 461号墳 流土			荒いハケ目 (4条/cm) 原体幅：2.7cm 9条	ナデ	良好	0	M2	S2	Ⓢ3	0	0		・赤黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	荒いハケ目。(ハケ目間隔1.5mm以下) 形象埴輪の可能性が高い。
15－1 朝顔 462号墳　第 2トレンチ			ナデ	指頭押圧	良好	S1	L・M2	Ⓢ2	Ⓢ1	L1	0		・赤褐色 ・黄褐色 ・黒灰色	
15－2 朝顔 462号墳　第 2トレンチ	タガ径 32.0cm 残存1/9		タテハケ (11条/cm)	指頭押圧	良好	S1	Ⓛ・M2	M・S2	S1	L1	0		・赤褐色 ・褐色 ・褐色	15－6と同一個体の可能性があるが径が合わない。
15－3 円筒 462号墳　南 周溝		・Ⅱa類 ・－	タテハケ (11条/cm) 後ナデ	指頭押圧	やや不良	S1	M・S2	S4	L・M2	M1	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	
15－4 円筒 462号墳　南 周溝		・Ⅳ類 ・－	タテハケ (7条/cm)	ヨコハケ (7条/cm)	良好	0	M1	S2	S・Ⓢ3	0	0		・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
15－5 円筒 462号墳　南周溝		・Ⅳ類 ・－	タテハケ (12条/cm) ナデ	ナデ 指頭押圧	良好	S1	L1	S2	S2	L1	0		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	
15－6 円筒または朝顔 462号墳　南周溝	タガ径 27.0cm 残存 1/12	・－ ・3a	タテハケ (8条/cm)	ナデ	良好	M・S1	M1	S2	M・S2	M1	0	花崗岩礫	・赤黄褐色 ・褐色 ・褐色	円形のスカシ孔。15-2と同一個体の可能性がある。
15－7 円筒または朝顔 462号墳　南周溝	タガ径 26.4cm 残存 1/6	・－ ・2b	タテハケ (10条/cm)	ナナメハケ (10条/cm)	良好	S1	L・M2	S3	S2	L1	0		・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	
15－8 円筒または朝顔 462号墳　南周溝		・－ ・1b	摩滅のため詳細不明	指頭押圧	良好	S1	M2	S2	Ⓢ2	L1	0		・黄褐色 ・褐色 ・黄褐色	
15－9 円筒または朝顔 462号墳　第2Tr.		・－ ・1b	ヨコハケ (7条/cm)	指頭押圧	良好	S1	M1	M1	M1	L1	0		・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・淡黄褐色	スカシ孔あり。黒斑。
15－10 円筒または朝顔 462号墳　南周溝		・－ ・1b	タテハケ (10条/cm)	ナデ 指頭押圧	良好	S1	Ⓛ・L1	M1	Ⓢ2	Ⓛ・M2	0		・黄褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	
15－11 円筒または朝顔 462号墳　第1トレンチ		・－ ・2b	摩滅のため詳細不明	ヨコハケ (12条/cm) ナデ 指頭押圧	良好	0	M1	S・Ⓢ4	Ⓢ2	M2	S2		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	
15－12 円筒または朝顔 462号墳　南周溝		・－ ・2b	タテハケ (8条/cm)	ヨコハケ (8条/cm) 指頭押圧	良好	S1	L・M2	Ⓢ3	S2	M2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・淡黄褐色	
15－13 円筒または朝顔 462号墳　南周溝16区	底部径 17.4cm 残存 1/6		板ナデ 原体幅　2.9cm	板ナデ 原体幅　2.9cm 指頭押圧	やや不良	S2	Ⓛ・M2	S3	Ⓢ3	Ⓛ・M1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	外面に赤色顔料塗布。
15－14 円筒または朝顔 462号墳　第1トレンチ			タテハケ (7条/cm)	指頭押圧	やや不良	S2	Ⓛ・M3	M2	S1	M2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・黒灰色	

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
15－15 円筒または朝顔 462号墳　第1トレンチ	底部径 20.0cm 残存1/8	・－ ・－	タテハケ 後 ナナメハケ (8条/cm)	指頭押圧	不良	S1	Ⓛ・M3	S2	Ⓢ2	L2	0		・赤黄褐色 ・黄褐色 ・黒灰色	上田分類「底部の調整」：ア類。
16－16 形象 462号墳　第1トレンチ			ナデ	ナデ	良好	S2	L・M2	S2	S・Ⓢ2	L1	0		・黄褐色 ・赤褐色 ・黒灰色	盾形埴輪片。外面に沈線。
16－17 形象 462号墳　南周溝			指頭押圧	指頭押圧	良好	S2	Ⓛ・M3	M・S3	L・M3	L・M2	0		・褐色 ・褐色 ・黄褐色	盾形埴輪片。外面に沈線。
16－18 形象 462号墳　第1トレンチ			ナデ 指頭押圧	ナデ	やや不良	S1	L1	S2	S1	L・M2	0		・赤褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	家形埴輪片か。
16－19 形象 462号墳　第1トレンチ			ナデ 指頭押圧	ナデ	やや不良	S2	Ⓛ1	M3	S3	M2	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	家形埴輪片か。
16・20 形象 462号墳　第1トレンチ			指頭押圧	未調整	良好	S1	Ⓛ・L1	S1	Ⓢ2	M1	0		・赤褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	不明形象埴輪片。
16・21 形象 462号墳　第2トレンチ			ナナメハケ (14条/cm)	ナデ	良好	S2	M1	M1	S1	M1	M2		・黄褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	不明形象埴輪片。
16・22 形象 462号墳　第1トレンチ			ハケメ (8条/cm)	ナデ	良好	M2	S1	M・S2	M1	L1	0		・褐色 ・赤褐色 ・褐色	不明形象埴輪片。
16・23 形象 462号墳　南周溝			ナデ	ナデ	良好	S1	L1	M1	M・S2	L1	S2		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	不明形象埴輪片。
25・1 朝顔 460号墳　墳丘北流土	最大径 33.4cm 残存1/6		ヨコハケ　下から上　左から右 (7条/cm・10条/cm) (タガ上位3条/cm)	ケズリか	良好	S1	Ⓛ・L4	M・S3	Ⓢ1	M2	0		・黄褐色 ・灰黄褐色 ・灰色	外面に赤色顔料を塗布。
25－2 朝顔 460号墳　墳丘北流土	最大径 24.8cm 残存1/5		ヨコハケ（右から左10条/cm・7条/cm）	ヨコハケ（5条/cm）上から下 後ナデ	良好	S2	L2	S3	S2	Ⓛ・L3	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・灰色	外面全体に赤色顔料塗布。
25・3 朝顔 460号墳 石組み遺構1　2層			口縁部に強いヨコナデ	ナデ	良好	S1	L・M2	M・S2	Ⓢ2	L・M2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・灰白色	

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土							色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
						長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他		
25・4 側頸 460号墳　墳 丘北流土			ヨコハケ (5条/cm)	ナナメハケ (6条/cm) ナデ	良好	S1	L1	M2	S・Ⓢ2	L・M2	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・灰白色	
25・5 円筒 460号墳　西 周溝	口縁部径 31.6cm 残存1/4	・Ⅱa ・2c	1次調整：タテハケ 2次調整：C種ヨコハケ　下から上（9条/cm） タガ間に2回行う	指頭押圧 ヨコハケ 胴体幅　3.3cm 27条（9条/cm）	良好	S1	L1	M・S2	M・S2	M1	0		・赤褐色 ー黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 ー灰白色	外面に赤色顔料塗布。 ×印のヘラ記号あり。 楕円形のスカシ孔。 突帯間隔：最上段6.8cm。上から二段目：7.7cm。
25・6 円筒 460号墳　西 周溝	口縁部径 28.0cm 残存1/12	・Ⅱa ・ー	ヨコハケ (8条/cm)	指頭押圧	良好	S1	L・M2	L1	L・M2	L・M2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
25・7 円筒 460号墳　墳 丘北流土	口縁部径 30.4cm 残存1/12	・Ⅱa ・ー	ヨコハケ (7条/cm) 指頭押圧	ナナメハケ (7条/cm) 後 ナデ・指頭押圧	良好	0	M1	M・S2	S2	L・M2	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	ヘラ記号あり。
25・8 円筒 460号墳　墳 丘北流土	口縁部径 31.4cm 残存1/12	・Ⅱa ・ー	ヨコハケ (7条/cm)	ナデ指頭押圧	良好	S1	M2	M2	L・S3	L・M2	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	
25・9 円筒 460号墳　墳 丘北流土	口縁部径 35.0cm 残存1/12	・Ⅱa ・ー	ナデのちヨコハケ (16条/cm)	ヨコハケ (16条/cm) 後 指頭押圧	不良	M1	Ⓛ1	M2	Ⓢ1	L1	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	ヘラ記号あり。 表面磨滅のため観察困難。
25・10 円筒 460号墳　西 周溝		・Ⅱa ・ー	指頭押圧	ヨコナデ	不良	S1	L・M2	S1	L1	L・M2	0		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・赤黄褐色	黒斑。
25・11 円筒 460号墳　墳 丘北流土		・Ⅱa ・ー	ナデ	ヨコナデ	良好	0	L2	M2	Ⓢ3	Ⓛ1	S2		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	外面に赤色顔料塗布。
25・12 円筒 460号墳 墓1，2列		・Ⅱa ・ー	ヨコハケ (13条/cm)	ヨコハケ (18条/cm) 右から左	良好	0	L3	S3	Ⓢ1	L2	M1		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	外面に赤色顔料塗布。 ヘラ記号あり。
25・13 円筒 460号墳　墳 丘北流土		・Ⅱa ・ー	ヨコハケ (14条/cm)	ナデ	良好	0	L2	L・M2	S2	L・M3	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	
25・14 円筒 460号墳　西 周溝		・Ⅱa ・ー	ヨコハケ (12条/cm)	ヨコハケ (16条/cm)	良好	L・M1	L1	M2	S・Ⓢ4	L2	L2		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 ー灰白色	ヘラ記号あり。 外面に赤色顔料塗布。
25・15 円筒 460号墳　墳 丘北流土		・Ⅱa ・ー	タテハケ 後ヨコハケ (5条/cm)	ナナメハケ (5条/cm)	やや不良	0	L1	S3	Ⓢ2	0	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土							色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
						長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他		
26－16 円筒 460号墳　墳 丘北流土、東流土	口縁部径 30.6cm 残存1/12	・Ⅱa ・－	ヨコハケ (10条/cm) 後 板ナデ	ナデ・指頭押圧	良好	S1	Ⓛ1	M2	Ⓢ3	Ⓛ・M2	0		・明赤褐色 ・明赤褐色 ・黄褐色	ヘラ記号あり。
26－17 円筒 460号墳　西周溝	口縁部径 26.2cm 残存1/12	・Ⅱa ・－	タテハケ後ヨコハケ（7条/cm）上から下	ヨコハケ後ナデ (6条/cm)	不良	S1	L・M2	M・S2	M・Ⓢ3	L・M2	L1		・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・淡黄褐色	18と同一個体の可能性あり。
26－18 円筒 460号墳　西周溝	口縁部径 31.0cm 1/12	・Ⅱa ・－	タテハケ後ヨコハケ（6条/cm） 指頭押圧	ヨコハケ (6条/cm) 後ナデ	良好	0	L・M2	S2	Ⓢ2	L2	S1		・淡黄色 ・淡黄色 ・淡黄色	17と同一個体の可能性あり。
26－19 円筒 460号墳　墳 丘北流土	口縁部径 32.4cm 1/10	・Ⅱa ・－	ヨコハケ（10条/cm） 指頭押圧	指頭押圧	良好	0	L1	S1	Ⓢ2	L・M1	S2		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	ヘラ記号あり。
26－20 円筒 460号墳　墳 丘北流土		・Ⅱa ・－	ヨコハケ(10条/cm)	ナデ	良好	0	L3	M1	S1	L2	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 －灰白色	
26－21 円筒 460号墳　墳 丘北流土		・Ⅱa ・－	ナデ	ナデ	良好	S1	L2	S1	Ⓢ1	L2	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	ヘラ記号あり。
26－22 円筒 460号墳 墓1，2層		・Ⅱa ・－	ナデ	ナデ	良好	S1	L1	S1	Ⓢ2	Ⓛ・L2	0		・灰色 ・赤褐色 ・明灰色	
26－23 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土	タガ部径 26.4cm 残存1/12	・－ ・2c	ヨコハケ（10条/cm）	ヨコハケ（10条/cm）	良好	0	L2	S2	Ⓢ1	L2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	円形のスカシ孔。
26－24 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土	タガ部径 26.8cm 残存1/9	・－ ・2c	ヨコハケ（10条/cm）	ヨコハケ(5条/cm) ナデ	良好	S2	L1	S2	Ⓢ2	L・M3	0		・黄褐色 ・暗黄褐色 ・暗灰色	
26－25 円筒または朝顔 460号墳　西周溝	タガ部径 25.4cm 残存1/4	・－ ・3c	1次調整：タテハケ 2次調整：C種ヨコハケ（10条/cm） タガ周辺は原体幅　9mm（7条/cm）	ヨコハケ ナナメハケ (10条/cm) 後ナデ	良好	S1	L1	S1	L2	Ⓛ・M2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・灰色	楕円形のスカシ孔。
26－26 円筒または朝顔 460号墳　西周溝	タガ部径 22.0cm 残存1/5	・－ ・2c	1次調整：タテハケ 2次調整：C種ヨコハケ（10条/cm）	ナナメハケ ナデ 原体幅　2cm (7条/cm) (10条/cm)	やや不良	0	L2	S2	Ⓢ2	L・M2	0		・赤褐色 ・黄褐色 ・緑灰色	円形のスカシ孔。

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土							色調 ・外面面 ・内面面 ・断面	備考
						長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他		
26・27 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土	タガ部径 25.0cm 残存 1/11	・— ・2c	ヨコハケ (5～7条/cm) 上から下	ナデ ナナメハケ (5条/cm)	良好	S1	Ⓛ・L3	M2	S1	L3	0		・黄褐色 ・灰黄褐色 ・黄褐色	
26・28 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土		・— ・2c	ヨコハケ (6条/cm)	ナデ	良好	0	L・M2	S4	Ⓢ2	L2	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黒灰色	
26・29 円筒または朝顔 460号墳 墓1，2層		・— ・2c	ヨコハケ (11条/cm) 下から上	板ナデ　右から左 後　指頭押圧	良好	S1	L2	S4	S・Ⓢ1	Ⓛ・L2	S1		・赤黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	ヘラ記号あり。
26・30 円筒または朝顔 460号墳 墓1，2層		・— ・2c	ヨコハケ (8条/cm)	指頭押圧 ハケ（7条/cm）	良好	0	Ⓛ・L3	S2	Ⓢ1	L2	0		・黄褐色 ・赤褐色 ・灰白色	
27・31 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土	タガ部径 30.4cm 残存 1/11	・— ・2c	ヨコハケ 原体幅　2.0cm 14条（7条/cm）	板ナデ ナナメハケ (5条/cm)	やや不良	S1	L2	S2	L・M2	L・M2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・緑灰色	円形のスカシ孔。
27・32 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土	タガ部径 31.4cm 残存 1/8	・— ・2c	ヨコハケ後タテハケ 原体幅：3cm 24条（10条/cm） 板ナデ	ヨコハケ (14条/cm) 後指頭押圧	不良	M1	L2	M3	Ⓢ1	L・M3	S1		・赤褐色 ・赤黄褐色 ・赤黄褐色	楕円形のスカシ孔。
27・33 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土		・— ・3c	ヨコハケ 原体幅：1.7cm (22条/cm)	ヨコハケ (9条/cm) 後指頭押圧	不良	S1	L・M2	S2	Ⓢ2	L3	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
27・34 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土		・— ・3c	ヨコハケ (12条/cm) 右から左	ヨコハケ (8条/cm) 指頭押圧	不良	S1	Ⓛ・M2	S2	M1	M2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
27・35 円筒または朝顔 460号墳　墳 丘北流土		・— ・3c	板ナデに近いヨコハケ（14条/cm）	板ナデに近いヨコハケ（14条/cm） 右から左	不良	S1	L・M2	S2	S1	Ⓛ・L2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	
27－36 円筒または朝顔 墳丘南流土	底部径 18.6cm 残存 1/12	・— ・—	タテハケ (8条/cm) 下から上 後ナデ	タテハケ 原体幅　1.6cm (8条/cm) 指頭押圧	良好	0	Ⓛ・L1	L・M2	S1	L3	0		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土							色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
						長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他		
27 - 37 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土	底部径 19.0cm 残存 1/16	・－ ・－	板状押圧 工具幅：2.3cm 右から左	ナデ 指頭押圧	精良	0	L・M1	S2	S1	L3	0		・淡黄色 ・黄褐色 ・灰白色	「底部調整」。
27 － 38 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土	底部径 20.8cm 残存 1/12	・－ ・－	タテハケ (11条/cm) 後 板状押圧	ナデ 指頭押圧	良好	0	S1	S2	⑤2	L・M2	0		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・灰白色	「底部調整」。
27 － 39 円筒または朝顔 460号墳　西周溝	底部径 18.4cm 残存 1/8	・－ ・－	ヨコハケ・タテハケ後ナナメハケ(7条/cm)　右から左　下から上 板状押圧　右から左	指頭押圧	良好	0	L2	M2	L・M2	L2	M1		・黄褐色 ・黄褐色 ・灰白色	「底部調整」。
27 － 40 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土	底部径 24.6cm 残存 1/8	・－ ・－	ナナメハケ (12条/cm) 板状押圧	ナナメハケ（12条/cm） ナデ 指頭押圧	良好	M1	L1	S2	⑤2	L・M3	S1		・明黄褐色 ・明黄褐色 ・明黄褐色	「底部調整」。
27 － 41 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北トレンチ	底部径 19.4cm 残存 1/10	・－ ・－	板状押圧 工具幅　2.8cm 右から左	指頭押圧	良好	0	0	S2	M・S3	L2	0		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	「底部調整」。
27 － 42 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土	底部径 16.7cm 残存 1/2	・Ⅱa ・－	ナナメハケ　左から右下から上、タテハケ原体幅4.9cm35条（8条/cm）板状押圧　右から左	タテハケ 原体幅 2.5cm (7条/cm) 指頭押圧	良好	M1	L1	M・S4	M3	L・M2	0		・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・灰白色	黒斑。
27 － 43 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土	底部径 20.0cm 残存 1/8	・－ ・－	タテハケ (9条/cm) 板状押圧	ナデ 指頭押圧	良好	L1	L1	L2	⑤2	L2	0		・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色	
27 － 44 円筒または朝顔 460号墳　墳丘西流土	底部径 18.6cm 残存 1/5	・－ ・－	タテハケ (9条/cm) 板状押圧　左から右　タテからヨコ	ナデ 指頭押圧	良好	M1	Ⓛ・L3	S2	⑤2	L3	0		・赤黄褐色 ・明黄褐色 ・黄褐色 －灰白色	上田分類「底部の調整」：ア類。
27 － 45 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土		・－ ・－	ナナメハケ（5条/cm） 指頭押圧　左から右	ヨコハケ (7条/cm) 指頭押圧	良好	L2	L1	S3	⑤2	L2	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 －黒色	
28 － 46 円筒または朝顔 460号墳　墳丘東流土	底部径 22.4cm 残存 1/5	・－ ・－	タテハケ　原体幅4.0cm　28条(7条/cm) 底部付近工具痕ケズリの工具幅1.4cm	ヨコハケ（7条/cm）後指頭押圧 上部：タテハケ	良好	0	Ⓛ・L1	S2	L1	Ⓛ・L1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	上田分類「底部の調整」：ウ類。

図一遺物番号 器種 出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
28－47 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土	底部径 21.0cm 残存 1/12	・－ ・－	ナデ後タテハケ (9条/cm)　右から右 後ヨコハケ（6条/cm）	指頭押圧	良好	S1	L1	M2	Ⓢ2	M2	0		・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・灰白色	上田分類「底部の調整」：ア類。
28－48 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土		・－ ・－	板状押圧	指頭押圧	不良	M2	Ⓛ・L3	S1	Ⓢ1	L3	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・灰白色	ヘラ記号あり。
28－49 円筒または朝顔 460号墳　墳丘西流土	底部径 20.0cm 残存 1/12	・－ ・－	ナデのちタテハケ (9条/cm) 右から左 底部はナデ	指頭押圧	良好	M2	Ⓛ・L3	S2	Ⓢ1	L2	0		・黄褐色 ・赤褐色 ・黄褐色 －灰色	黒斑。 上田分類「底部の調整」：ア類。
28・50 円筒または朝顔 460号墳　墳丘北流土			ヨコハケ (17条/cm)	ナデ	良好	S1	L2	S2	S・Ⓢ2	M2	S3		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	外面に赤色顔料塗布。 ヘラ記号あり。
28・51 円筒または朝顔 460号墳　墓 1，2層			1次調整：タテハケ 2次調整：ヨコハケ (10条/cm) 下から上	ナナメハケ（10条/cm）　下から上 後　指頭押圧	良好	S1	L1	S・Ⓢ3	Ⓢ2	L1	0		・赤褐色 ・黄褐色 ・赤黄褐色	外面全体に赤色顔料塗布。 ヘラ記号あり。
28・52 円筒または朝顔 460号墳　墓 1，2層			ヨコハケ (6条/cm)	ナナメハケ (6条/cm)	良好	S2	M1	S3	L2	L2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	赤色顔料塗布。 ヘラ記号あり。 楕円形のスカシ孔。
28・53 形象 460号墳　西周溝			ナデ		良好	L1	L1	S1	S2	S1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	人物埴輪の腕部。
28・54 形象 460号墳　西周溝			ナデ		良好	M3	M3	M4	S2	M2	S1		・黄褐色 ・暗灰色 ・暗灰色	人物埴輪の腕部。
28・55 形象 460号墳　墳丘北流土			沈線	指頭押圧	良好	M1	L・M2	M3	S1	M1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	人物埴輪か。
28・56 形象 460号墳　墳丘西流土			工具痕	ナデ	良好	S1	M3	S2	M・S4	0	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	人物埴輪片か。
28・57 形象 460号墳　墳丘北流土			ハケ	ナデ	良好	S3	L3	S2	0	S2	0		・暗黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 －灰白色	人物埴輪片か。

図一遺物番号 器種出土場所	法量	各部形態 ・口縁 ・タガの断面	外面調整	内面調整	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
28・58 形象 460号墳　墳 丘西流土				ナデ	良好	S1	M1	M2	S・Ⓢ3	0	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	人物埴輪片か。
28・59 形象 460号墳　墳 丘北トレンチ				指頭押圧	良好	S2	L・M3	S3	L・S2	0	0		・暗黄褐色 ・暗黄褐色 ・暗黄褐色	人物埴輪片か。
28・60 形象 460号墳　墳 丘北流土			ハケ（7条/cm）	指頭押圧	良好	S1	L・M2	M・S2	M・S2	M1	S2		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	人物埴輪片か。
28－61 形象 460号墳　墳 丘北流土			ナデ	指頭押圧	良好	M1	Ⓛ・M3	S3	S2	0	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 －灰白色	人物埴輪片か。 楕円形のスカシ孔。
28・62 形象 460号墳　墳 丘北流土			指頭押圧	指頭押圧	良好	S1	Ⓛ・M3	S2	Ⓢ1	0	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 －灰白色	人物埴輪片か。
29－63 形象不詳			タテハケ（9条/cm） 右から左 剥離部分に突帯設定のための沈線	ナデ 指頭押圧	良好	S2	L・M3	S4	Ⓢ2	L1	M2		・赤褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	家形埴輪片。 スカシ孔あり。
29－64 形象W周溝			板状押圧か	ナデ 指頭押圧	やや不良	0	Ⓛ・L3	M1	Ⓢ1	L3	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色 －灰白色	家形埴輪片か。
29－65 形象 460号墳　墳 丘北流土			工具痕	指頭押圧 ナデ	やや不良	L1	L1	M1	Ⓢ1	Ⓛ・L2	0		・黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄褐色 －灰白色	家形埴輪片か。
29－66 形象 460号墳 墳丘北流土			ナデ指頭押圧	ナデ 剥離あり	やや不良	0	Ⓛ・L2	M・S2	M2	L1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	不明形象埴輪片。 動物・鳥形埴輪片か。
29－67 形象 460号墳　墳 丘北流土			ナデ	板状押圧か	良好	0	Ⓛ・L2	M・S2	S2	L1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・灰白色	不明形象埴輪片。
29－68 形象 460号墳　墳 丘東流土			指頭押圧	指頭押圧	良好	0	L2	M・S2	M・S2	L1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	壺形埴輪片か。
29－69 形象 460号墳　墳 丘北流土			ハケ 原体幅：2.6cm 14条（5条/cm） 左から右	ナデ	良好	0	L2	M・S2	S2	L1	0		・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	不明形象埴輪片。
51－2 円筒または朝顔 464号墳　墳 丘北堀	底部径 22.0cm 残存 1/10	・－ ・－	タテハケ ナナメハケ （12条/cm）	ナナメハケ （7条/cm） 静止痕あり 指頭押圧	良好	M・S3	L・M3	S2	Ⓢ2	L・M1	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・黒灰色	461号墳または462号墳から流出した埴輪。 上田分類「底部の調整」：ア類。

表3　出土須恵器・土師器観察表

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎　土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備　考
5－1 須恵器　杯蓋 456号墳　墳 丘東斜面流土	口径　13.0cm(残存1/3からの回転復原) 器高　4.8cm 口縁部は僅かに内彎して下方にのびている。口縁端部は面をなし、端部内面に段がある。天井部と口縁部の境界は、やや外方に突出するが、稜線は鈍く丸い。稜線の下端はヨコナデによって窪んでいる。天井部はごく僅かに膨らむが、扁平に近い。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面　ヨコナデ ・－	直径2～5mm大の石英を含む。0.2mm以下の長石・石英をかなり含む。	良好	・濃青灰色 ・濃青灰色 ・濃青灰色	
5－2 須恵器　杯蓋 456号墳　墳 丘東斜面流土	口径　12.8cm(残存1/10からの回転復元) 残像高　4.6cm 口縁部は直線的に下方にのびるが、端部付近でやや強いヨコナデによって、僅かに外反している。口縁端部は丸いが、内面にごく浅い凹線が巡り、これによって弱い段が形成されている。天井部と口縁部の境界は、僅かに外方に突出するが、稜線はきわめて鈍く丸い。天井部の形態は、不明な部分が多いが、残存部からみると僅かに膨らむらしい。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面　ヨコナデ ・－	直径2mm大の石英を僅かに含む。0.2mm以下の石英・雲母を僅かに含む。	良好	・濃青灰色 ・濃青灰色 ・暗青紫色	
22－1 須恵器　杯蓋 459号墳　墳 丘南流土	口径　14.2cm(残存1/3からの回転復原) 残存高　4.3cm 口縁部は外方に開きつつ下方にのびている。口縁端部は丸くおさめられ、端部内面にごく弱い段がある。天井部と口縁部の境界は、僅かに外方に突出して稜線を形成するが、突出度はあまり高くない。むしろ稜線の下端に凹線を巡らせることで境界としている。天井部の形態は扁平である。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3以上をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面　ヨコナデ ・－	直径0.1mm以下の長石・石英を含む。2mm大の石英を若干含む。1mm大の黒色粒をかなり含む。	良好	・暗灰色 ・暗灰色 ・暗灰色	
22－2 須恵器　杯身 459号墳　墳 丘北流土	口径　14.6cm(残存1/6からの回転復原) 残存高　3.5cm たちあがりは、ほぼ直線的に内上方にのびる。口縁端部は内傾する面をなすが、その両端辺は丸くやや鈍い。端面の中央はごく浅い凹線になっていて、窪んでいる。受け部は外上方に広がり、上面は平らになっている。底部の形状は不詳。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・－	直径2mm大の花崗岩礫を若干含む。0.2mm以下の石英・黒色粒を含む。	良好	・暗青灰色 ・暗青灰色 ・暗青灰色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
41－1 須恵器　高杯 463号墳　墳頂部	口径　14.0cm(残存1/8からの回転復原) 器高　7.7cm 杯口縁部は、緩やかに屈曲して外上方に広がっている。端部は丸く収められている。杯底部との境界はなめらかで稜などを成さないが、この部分に粘土の接合単位があることが観察される。脚部は大きく外下方に広がる短いものが付く。裾端部はヨコナデによって外側に面をなし、先端部は下方に僅かに突出している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ、底部内面は、不定方向ナデ ・外面　ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	直径0.2mm以下の長石・雲母をかなり含む。1mm大のチャートを含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	
41－2 須恵器　短頸壺 463号墳　墳頂部	口径　9.1cm(ほぼ完形) 器高　7.3cm 体部から大きく外側に屈曲した口頸部は短く、口縁端部は外径する面を成す。端面の両辺はあまり鋭くなく鈍い稜線になるが、端面中央はヨコナデによってごく浅い凹線になって窪んでいる。体部の最大径は体部高の中心より僅かに上にある。肩部はあまり張らないで緩やかに屈曲している。底部はやや膨らんで丸い。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ後ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面　不定方向ナデ	直径2～5mm大のチャートを含む。0.5mm以下のチャート・長石・石英をかなり含む。0.2mm以下の雲母を含む。	良好	・濃青灰色 ・濃青灰色 ・暗灰色	頸部から底部にかけて直線文状のヘラ記号。
41－3 須恵器　広口壺 463号墳　墳頂部	口径　20.4cm(口縁部の1/4強を欠損) 器高　30.0cm（図上復元による推定高さ） 体部から大きく屈曲して、ほぼ直線的に外上方にのびる頸部は、あまり長くなく、口縁部に至る。口縁部はさらに外側に開いて、端部は上下に拡張されている。しかし、端部外側は面をなさないで丸みを持っている。この部分には　口縁端部の拡張に際して施された上下それぞれのヨコナデによって、ごく浅い凹線が生じている。端部上辺は丸いが、上方に突出している。体部部の最大径は、体部高のやや上位にあるとみられる。肩は張らない。底部は膨らんで丸い。 ・外面　ヨコナデ。頸部外面はヨコナデのちカキメ 内面　ヨコナデ(ロクロ回転方向右廻り) ・外面　タタキのちカキメ 内面　同心円のあて具痕跡未調整 ・外面　タタキ 内面　同心円のあて具痕跡未調整	直径7mm大のチャートわずかに含む。0.5mm以下のチャート・長石・雲母をかなり含む。石英を含む。	良好	・濃灰色 ・濃灰色 ・濃灰色	体部上半で、それより上位との接点を持っていない。図上復元したものを示した。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
41－4 須恵器　横瓶 463号墳　墳頂部	口径　13.8cm(残存1/4からの回転復原) 器高　30.8cm(図上復元による推定高さ) 頸部は、体部から大きく屈曲して外反気味に開いている。口縁端部は、さらに外側に屈曲して厚みをもって仕上げられる。端面を持たずに全体としては丸い形状であるが、口縁部の上下に強いナデが施されており、特に上部はその箇所が1条の凹線になっている。体部の長軸側の最大径は38.4cm、短軸側の最大径は26.6cmを測り、その位置はそれぞれ体部高のほぼ中央にある。底部は丸く不安定である。体部の形成は、長軸側の一方の側面（図示状態の左）を下にして、まず砲弾形を形成したのちに上部を円盤で塞いで閉じている。口縁部は短軸側の一方に円形の穿孔を行ってここに頸部を接合している。それぞれの箇所に接合痕跡が残っている。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　タタキのち一部にカキメ 内面　同心円のあて具痕跡の上からナデ。ただし、体部形成時の最終段階での円盤充填部は未調整。 ・外面　タタキのち一部にカキメ 内面　同心円のあて具痕跡の上からナデ	直径2mm大の石英・チャート・長石を含む。0.5mm以下の雲母をかなり含む。	やや軟	・白灰色 ・暗灰色 ・白灰色	
42－1 須恵器　杯蓋 463号墳　南周溝表土・墳丘西裾	口径　14.4(残存1/5からの回転復原) 残存高　4.9cm 口縁部は僅かに内彎しながら下方に下る。口縁端部先端は丸いが、内面に段を持っている。口縁部と天井部の境界の稜はあまり突出しないで、断面形も丸い。稜の上部は強いヨコナデが及んでおりやや窪んでいる。天井部はあまり膨らまないとみられる。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3以上をヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) 内面　ヨコナデ ・－	直径2mm大のチャートを含む。.2mm以下の長石をかなり含む。雲母を含む。	良好	・濃灰色 ・暗紫灰色 ・暗紫灰色	
42－2 須恵器　杯蓋 463号墳　南周溝下位・墳頂表土・墳丘南流土上位	最大径　14.0cm(残存1/5からの回転復原) 残存高　3.5cm 口縁部はほぼ直線的に下方にのびるらしい。口縁端部の形状は不明。口縁部と天井部の境界の稜はあまり突出しないで、断面形も丸い。天井部はあまり膨らまないとみられる。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3以上をヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) 内面　ヨコナデ ・－	直径2mm大の石英を含む。0.2mm以下の石英・長石・雲母をかなり含む。	良好	・暗青灰色 ・暗青灰色 ・暗赤紫色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
46－1 須恵器　台付長頸壺 463号墳　主体部1棺外	口径　11.0cm(ほぼ完形) 器高　24.3cm 頸部は、ほぼ直線的に外上方にのびたのち、上端近くで僅か屈曲している。口縁端部は丸い。体部最大径は、体部高の中央より僅かに上位にあり、肩部はあまり張らないでなで肩になっている。頸部と体部の境界付近の屈曲も比較的緩やかで稜を成さない。脚台部は外下方に外反しつつ広がり、1条のつまみ出し突帯を境に下方に屈曲して裾部になる。脚台部はこの突帯によって上下に分けられ、上半には、壺底部からこの突帯付近に至る細長い方形スカシが3方に穿たれている。突帯の上下には強いヨコナデが及んでおり、特に下端は凹線風に窪んでいる。裾部は、その下端付近で強いヨコナデによる端部調整が施されている。すなわち、裾端部付近で僅かに外側に屈曲し、その先端は丸く収められているが、下端に面を形成して、土器を正置した時の安定を増している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデを行うも、その後に付着した粘土粒については未調整。	直径1mm大の石英・チャート・長石をかなり含む。	良好	・濃灰色 ・淡灰色 ・淡灰色	体部下半から脚台部にかけて黒色釉。肩部に、この黒色釉に関連する、径1.5cm大の塊がある。 脚台部内面には、成形時の調整後に付着したとみられる粘土粒が相当みられる。
46－2 須恵器　甕 463号墳　主体部1棺外	口径　14.6cm(口縁部の一部を欠損するもほぼ完形) 器高　16.1cm 頸部と体部の境界は体部最大径の割に比較的太く、頸部は外上方にほぼ直線的にのびている。頸部の口縁部の境界は段になって、段の上端にほぼ接して1条の凹線が巡っている。口縁部はこの段を境に傾斜角度を変えて頸部よりさらに外側に開いている。口縁端部の先端は丸いが、端部内面には強いヨコナデによる凹線様の窪みがある。体部は、肩部もなだらかで、体部最大径は体部高のほぼ中位にある。底部は丸い。 ・外面　ヨコナデのち頸部上半および口縁部に櫛描波状文（原体幅27mm、1単位28条） 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデのち2条の凹線文間に櫛描列点文（原体幅11.5mm、1単位11条）の文様帯を施し、径17mmの円孔を上向きに穿っている。 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面　粘土紐巻き上げ痕未調整	直径2mm大のチャートを含む。1mm大の石英・長石を含む。0.2mm以下の長石をかなり含む。	良好	・暗灰色 ・暗青灰色 ・暗灰色	頸部上端から下半にかけて、縦方向に直線のヘラ記号。頸部の一部に、副葬時に直下にあった刀子（47－16）の銹が付着している。
46－3 須恵器　提瓶 463号墳　主体部1棺外	口径　7.4cm（口縁部はほぼ完形、把手の一方を欠損） 器高　18.6cm 頸部は僅かに外反しつつ外上方にのびている。口縁部は外側に外傾する面を成し、その下端が僅かに垂下している。体部の正面観はほぼ円形で、側面から見たときに前面はやや丸く膨らみ、背面は平らになっている。把手は「U」字状に曲げた粘土紐の両端が体部に接合されて環状になっている。体部上半の2箇所に取り付くが、一方を欠損している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　前面はカキメ調整。背面は不定方向ナデ 内面　全面および背面の内面は未調整。側面の内面はヨコナデ ・—	直径10mm大のチャートを僅かに含む。0.5mm大のチャートを含む。0.2mm以下の長石をかなり含む。	良好	・暗灰色 ・暗灰色 ・暗灰色	体部全面に大きく「X」字状のヘラ記号。 口頸部および体部の一部に黒色釉。

図－遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
46－4 須恵器　短頸壺 463号墳　主体部1棺外	口径　7.0cm(完形) 器高　8.0cm 口頸部は僅かに内傾して直線的に短く立ち上がる。口縁端部は丸い。体部最大径は、体部の上半にあって肩部になっている。肩部はやや張った感じがする。底部の中央部は狭い範囲で平らになるが、全体に丸く膨らんだ感じがする。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　カキメ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面　ヨコナデ	直径0.5㎜以下の石英・長石・チャートを含む。	良好	・暗青灰色 ・暗青灰色 ・－	焼成時に蓋が被せられていたらしく、口縁部周囲の色調がそれより外側と異なっている。この痕跡は直径9.3cmを測るほぼ正円である。ただし、蓋の口縁端部の粘土粒が壺肩部に付着するなどの痕跡は全く無い。
47－5 土師器　杯身 463号墳　主体部1棺外	口径　12.5cm(完形) 器高　4.2cm 体部と口縁部の境界は、比較的稜線が明瞭である。口縁部は外反しつつ僅かに外上方に開いている。口縁端部は丸い。体部と底部の境界は明瞭ではなく、緩やかに屈曲して繋がっている。底部は丸くやや下方に膨らんでいる。 ・外面　横方向のナデ 内面　横方向のナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ	直径0.5㎜以下の雲母を多量に含む。0.5㎜以下の赤色粒を含む。0.2㎜以下の長石を若干含む。	良好	・赤橙色 ・赤橙色 ・淡赤橙色	副葬時に内部に赤色顔料が入れられていた。
47－6 土師器　杯身 463号墳　主体部1棺外	口径　12.6cm(ほぼ完形) 器高　4.5cm 体部から上方に屈曲してのびる口縁部はごく僅かに外反している。口縁端部は丸いが比較的薄くやや尖った感じがする。体部と底部の境界は明瞭ではなく、緩やかに屈曲して繋がっている。底部は丸くやや下方に膨らんでいる。 ・外面　横方向のナデ 内面　横方向のナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ ナデ	直径0.5㎜以下の雲母を多量に含む。0.5㎜以下の赤色粒を含む。石英を僅かに含む。0.2㎜以下の石英・長石を若干含む。	良好	・白赤橙色 ・白赤橙色 ・白赤橙色	
47－7 土師器　杯身 463号墳　主体部1棺外	口径　12.9cm（完形） 器高　4.5cm 体部から緩やかに屈曲して上方にのびる口縁部は、端部付近で僅かに外反して開いている。口縁端部は丸い。体部と底部の境界も不明瞭で、緩やかに屈曲している。底部は丸く僅かに下方に膨らんでいる。 ・外面　横方向のナデ 内面　横方向のナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ	直径0.2㎜以下の雲母をかなり含む。赤色粒を含む。	良好	・赤橙色 ・赤橙色 ・赤橙色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
47－8 土師器　杯身 463号墳　主 体部1 棺外	口径　12.6cm(完形) 器高　3.9cm 口縁部は、体部から緩やかに屈曲して上方にのびている。口縁端部は丸い。体部と底部の境界は不明瞭で、緩やかに屈曲している。底部中央は下方にあまり膨らまないで、比較的平らである。 ・外面　横方向のナデ 内面　横方向のナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ	直径0.2㎜以下の雲母をかなり含む。赤色粒を含む。	良好	・赤橙色 ・赤橙色 ・赤橙色	
47－9 土師器　杯身 463号墳　主 体部1 棺外	口径　13.0cm(完形) 器高　5.2cm 体部と口縁部の境界は比較的明瞭で、口縁部は弱いながらも稜を成して内上方に屈曲している。体部高が比較的高いこともあって、口縁部の長さは短く感じられる。口縁端部は丸い。体部と底部の境界は不明瞭で、緩やかに屈曲している。底部は丸く下方に膨らんでいる。 ・外面　横方向のナデ 内面　横方向のナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ ナデ	直径0.2㎜以下の雲母をかなり含む。0.5㎜以下の赤色粒を含む。0.2㎜以下の長石を僅かに含む。	良好	・赤橙色 ・赤橙色 ・－	
47－10 土師器　杯身 463号墳　主 体部1 棺外	口径　13.7cm(完形) 器高　5.5cm 体部と口縁部の境界は不明瞭である。体部から緩やかに屈曲する口縁部は僅かに内彎しながら内上方に向く。口縁端部は丸い。器高が比較的高く、口縁部の長さは短く感じられる。体部と底部の境界も不明瞭で、緩やかに屈曲して繋がっている。底部は丸く下方に膨らんでいる。 ・外面　横方向のナデ 内面　横方向のナデ ・外面　不定方向ヘラケズリ 内面　ナデ ・外面　不定方向ナデ 内面　ナデ	直径0.2㎜以下の雲母をかなり含む。0.5㎜以下の赤色粒を含む。0.2㎜以下の長石を僅かに含む。	良好	・赤橙色 ・赤橙色 ・－	
47－11 土師器　壺 463号墳　主 体部1 棺外	口径　11.2cm（ほぼ完形） 器高　14.3cm 口縁部は、体部から屈曲して外上方にのびたのち、端部付近で僅かに外反して開いている。口縁端部は外傾する面を成し、面の中央は、強い横方向のナデによって、ごく僅かに窪んでいる。体部は、その最大径を体部高のほぼ中位にもっている。外面の調整は比較的丁寧に行われているが、成形時に生じた粘土帯の接合痕跡が内面によく残り、外面からもその粘土帯の単位が凹凸として認識できる。体部と底部の境界は稜にはならないが明瞭で、底部は平らである。 ・外面　横方向のナデ 内面　横方向のハケ（4条/cm）のちナデ ・外面　縦方向のハケのちナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　指頭による押圧	直径0.2㎜以下の雲母をかなり含む。0.2㎜以下の石英・長石を含む。	良好	・黄赤褐色 ・黄赤褐色 ・暗赤褐色	黒斑。 内面の底部付近に赤色顔料が付着している。元、壺内に赤色顔料を入れて副葬したものか。 体部外面下半に、副葬時に直下にあった鉄鏃・鉄鎌（47 － 12 ～ 15）の錆が付着している。

図－遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
51－1 須恵器　杯身 464号墳　墳丘北斜面裾部流土	口径　13.4cm（残存1/6からの回転復原） 器高　5.3cm 口縁部は比較的長く、内上方にほぼ直線的にのびたのち中位よりやや上でごく僅かに上方に屈曲している。口縁端部は丸い。受け部は外上方に短くのび、比較的凹みがある。底部はあまり膨らまないで平らになるらしい。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ	直径0.2㎜以下の石英・長石・チャートを含む。	良好	・白青灰色 ・白青灰色 ・白青灰色	
53－1 須恵器　杯蓋 464号墳　主体部1棺内埋土（元は棺上遺物）	口径　12.0cm（完形） 器高　4.5cm 口縁部は僅かに内彎しつつ下方にのび、端部付近で逆に外反している。口縁端部は外径する面をなし、端面中央は凹線状に窪んでいる。天井部と口縁部の境界となる稜は、外方に突出するがあまり鋭くない。ただし、稜の下端は凹線になって窪んでいて、稜の突出の度合いを強調する結果になっている。天井部は丸みを持っているが高く膨らまない。天井部のヘラケズリは比較的丁寧である。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3をヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ ・－	直径0.5㎜以下のチャートを含む。0.2㎜以下の長石をかなり含む。	良好	・白青灰色 ・白青灰色 ・－	副葬時に直下にあった鉄鏃（53－13）および刀子（53－14）の銹が、口縁部に付着している。
53－2 須恵器　杯蓋 464号墳　主体部1棺内埋土（元は棺上遺物）	口径　13.1cm（完形） 器高　4.9cm 口縁部はごく僅かに広がりつつ下方にのび、端部付近で僅かに外反している。口縁端部は僅かに外傾する面を成す。天井部と口縁部の境界となる稜は外方にやや突出するが、その先端は鈍い。天井部は丸みをもって膨らんでおり、比較的高い。天井部のヘラケズリの範囲は比較的狭いが仕上げは丁寧である。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の1/2をヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ ・－	直径0.2㎜以下の長石・雲母を含む。0.2㎜以下の黒色粒を若干含む。	やや軟	・白灰色 ・白灰色 ・－	胎土・焼成・法量から、杯身（53－3）と製作時のセットであると考えられる。
53－3 須恵器　杯身 464号墳　主体部1棺内埋土（元は棺上遺物）	口径　11.2cm（残存1/2から回転復原） 器高　5.2cm　たちあがりは内傾したのち、中位より下で屈曲して上方にのびている。口縁端部は丸い。受け部は外上方に広がっている。底部は径の割に器高が比較的高い。しかし底部下端は丸くならないで、平らになっている。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ ・－	直径0.2㎜以下の長石・雲母を含む。0.2㎜以下の黒色粒を若干含む。	やや軟	・白灰色 ・白灰色 ・白灰色	胎土・焼成・法量から、杯蓋（53－2）と製作時のセットであると考えられる。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎　土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備　考
53－4 須恵器　杯蓋 464号墳　主体部1棺内埋土（元は棺上遺物）	口径　13.8cm（完形） 器高　4.4cm　口縁部はごく僅かに開いて下方に下っている。口縁端部は外傾する面を成し、端面中央は凹線になって窪んでいる。天井部と口縁部の境界の稜は、やや外方に突出する。稜の下端は幅の狭い凹線になっているが、稜そのものは突出の度合いも小さい。天井部は扁平なな感じであまり膨らまない。天井部のヘラケズリの範囲は比較的狭いが仕上げは丁寧である。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の1/2をヘラケズリ（ロクロ回転方向左廻り） 内面　ヨコナデ ・－	直径0.2㎜以下の長石・雲母をかなり含む。0.5㎜以下の石英を若干含む。0.2㎜以下の黒色粒を僅かに含む。	良好	・濃灰色 ・濃灰色 ・－	胎土・焼成・法量から、杯身（53－5）と製作時のセットであると考えられる。外面に焼成時の焼き斑があることや、ロクロ回転方向も（53－5）に合致する。
53－5 須恵器　杯身 464号墳　主体部1棺内埋土（元は棺上遺物）	口径　12.4cm（完形） 器高　4.8cm たちあがりは内傾したのち、中位より上で屈曲して上方にのびている。口縁端部は丸い。受け部は比較的厚みがあり、外上方に広がっている。底部は、径の割に浅く、扁平な感じがする。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ（ロクロ回転方向左廻り） 内面　ヨコナデおよび不定方向ナデ	直径0.2㎜以下の長石・雲母をかなり含む。0.5㎜以下の石英を若干含む。0.2㎜以下の黒色粒を僅かに含む。	良好	・濃灰色 ・濃灰色 ・－	胎土・焼成・法量から、杯蓋（53－4）と製作時のセットであると考えられる。外面に焼成時の焼き斑があることや、ロクロ回転方向も（53－4）に合致する。
53－6 須恵器　杯蓋 464号墳　主体部1棺内埋土・墳頂部中央表土	口径　14.6cm（口縁部の一部を欠損） 器高　4.9cm 口縁部は外反しつつ下る。口縁端部は面を成すが、面の両辺は丸みを持っていて鈍い。天井部と口縁部の境界は上下からのヨコナデによって稜をつくるが突出せずに丸い。むしろこのヨコナデの部分が凹線になっている。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3をヘラケズリ（ロクロ回転方向左廻り） 内面　ヨコナデ	直径2㎜のチャートを僅かに含む。0.2㎜以下の雲母をかなり含む。0.2㎜以下の長石・石英を含む。黒色粒を僅かに含む。	軟	・白灰色 ・白灰色 ・白灰色	胎土・焼成・法量から杯身（53－7）と製作時のセットであると考えられる。ロクロ回転方向も合致する。
53－7 須恵器　杯身 464号墳　主体部1棺内埋土（元は棺上遺物）	口径　12.5cm（完形） 器高　4.9cm たちあがりは、内傾したのち中位よりやや上で屈曲して上方にのびている。口縁端部は丸い。受け部は外上方に広がっている。底部は径の割に浅く、全体に扁平な感じがする。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ（ロクロ回転方向左廻り）	直径2㎜のチャートを僅かに含む。0.2㎜以下の雲母をかなり含む。0.2㎜以下の長石・石英を含む。黒色粒を僅かに含む。	軟	・白灰色 ・白灰色 ・－	胎土・焼成・法量から杯蓋（53－6）と製作時のセットであると考えられる。ロクロ回転方向も合致する。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎　土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備　考
53－8 須恵器　短頸壺 464号墳　主体部1棺内埋土（元は棺上遺物）	口径　8.3cm（完形） 器高　6.9cm 口頸部は体部から明瞭に屈曲して、ほぼ真上方向に短く立ち上がっている。口縁端部は丸い。体部最大径はその上半にあって肩部になっている。肩部の屈曲も比較的明瞭でやや肩が張った感じがする。底部は丸く、下方に膨らんでいる。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　カキメのちヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ（ロクロ回転方向左廻り） 内面　ヨコナデ	直径5mm大のチャート・石英を僅かに含む。0.2mm以下のチャート・長石・石英・雲母を含む。	良好	・濃灰色 ・濃青灰色 ・濃灰色	
54－1 須恵器　杯蓋 464号墳　主体部2棺内埋土・主体部直上・墳丘南東区裾	口径　15.0cm（残存1/2から回転復原） 器高　4.8cm 口縁部はやや開きながらほぼ直線的に下方にのびている。口縁端部先端は丸いが、内面に弱い段がある。天井部と口縁部の境界の稜は僅かに突出し、稜の下端は凹線になって窪んでいる。天井部はあまり膨らまないでやや扁平な感じがする。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の1/2をヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデおよび不定方向ナデ ・－	直径5mm大以下のチャートを僅かに含む。0.2mm以下の長石・石英・チャートを含む。雲母を若干含む。	良好	・濃青灰色 ・青灰色 ・青灰色	
60－1 須恵器　杯蓋 465号墳　盗掘坑・墳頂部表土	口径　12.0cm（残存1/2） 残存高　4.5cm 口縁部はやや内彎しながら、僅かに開いて下方にのびている。口縁端部は内面に段がある。天井部と口縁部の境界の稜は鈍いが、やや突出する。天井部は多くを失っているが、残存部から丸く膨らむ形態であるらしい。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3をヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ（残存部） ・－	直径0.5mm以下のチャートをかなり含む。0.2mm以下のチャート・長石・雲母を含む。	良好	・濃青灰色 ・濃灰色 ・濃青灰色	
60－2 須恵器　杯蓋 465号墳　盗掘坑・墳頂部表土	口径　13.0cm（残存1/6から回転復原） 残存高　3.8cm 口縁部はほぼ直線的に下方にのびて、端部付近で僅かに外反している。口縁端部は外傾する面を成すが、端面の特に外側の辺となる稜すなわち端部先端はやや丸く鈍い。天井部と口縁部の境界の稜は小さく突出する。その下端は浅い凹線になって窪んでいる。天井部は丸く膨らむらしいが多くを欠損しており明らかではない。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　天井部の2/3をヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ（残存部） ・－	直径0.2mm以下の長石を僅かに含む。0.1mm以下の雲母を含む。	良好	・濃灰色 ・濃青灰色 ・濃灰紫色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎　土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備　考
60－3 須恵器　杯身 465号墳　墳頂部表土	口径　11.0cm（残存1/5から回転復原） 残存高　3.9cm たちあがりはやや内傾して上方にのびている。口縁端部は内面に弱い段がある。端部先端は丸い。受け部は外上方に広がっている。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ	直径0.2㎜以下の石英・雲母を含む。	良好	・暗灰紫色 ・暗青灰色 ・暗青灰色	
60－4 須恵器　杯身 465号墳　盗掘坑・墳頂部表土	口径　11.3cm（残存1/4から回転復原） 器高　4.9cm たちあがりはやや内傾して上方にのびている。口縁端部は内面に段がある。段は強いヨコナデによって形成されており、部分的にこのヨコナデの際に生じた凹線が残っている。受け部は外上方に広がっている。受け部の厚みは比較的薄く、先端は尖り気味である。体部から緩やかに屈曲する底部は、底部は平らであるが、径の割にやや深い。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ	直径0.2㎜以下の長石・雲母を若干含む。	良好	・濃灰色 ・濃灰色 ・濃灰色	
60－5 須恵器　高杯 465号墳　盗掘坑・墳頂部表土・南西周溝	口径　14.0cm（残存1/5から回転復原） 残存高　4.1cm 杯部の一部である。口縁部は外上方にほぼ直線的にのびている。口縁端部は丸いが、内面にきわめて弱い段がある。口縁部と底部の境界は、上下からのヨコナデによって稜がやや突出している。稜の上端はヨコナデによって凹線状に窪んでいる。底部の形態はやや膨らむらしいが多くを欠損しており明らかではない。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　杯底部外面はヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ ・－	直径0.2㎜以下のチャート・雲母を若干含む。	良好	・暗青灰色 ・暗青灰色 ・濃灰色	底部が残存していないために、杯蓋との区別が難しい。口縁部が開くことから、高杯の杯部と考えた。高杯である場合（60－6）と同一個体である可能性があるが、接合点がなく、胎土も異なるので、別個体とみられる。
60－6 須恵器　高杯 465号墳　南西周溝	残存高　4.6cm 高杯の一部である。杯底部は平らになって体部から上方に屈曲するらしい。脚部の、杯部との接合部の径は比較的太い。脚部には方形スカシが3方向に穿たれている。スカシの上端には穿孔の際に生じた刀子様の工具が当たった痕跡が残っている。 ・－ ・外面　杯底部外面はヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	直径0.5㎜以下のチャートを含む。0.2㎜以下の長石・石英をかなり含む。	良好	・暗青灰色 ・濃灰色 ・暗青灰色のほか、一部　暗灰紫色	脚部外外面および杯底部外面の一部に黒色釉。（60－5）と同一個体である可能性があるが、接合点がなく、胎土も異なるので、別個体とみられる。

図ー遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
62－1 須恵器　杯蓋 465号墳東裾部　土壙墓	口径　9.6cm（かえり径7.5cm）（完形） 器高　3.0cm 口縁部は外下方に広がり、口縁端部は丸い。端部内面に付くかえりは、薄く小さいもので、その下端は口縁端部より上にあって突出しない。天井部と口縁部の境界は比較的明瞭に屈曲し、天井部は平らになっている。その中心につまみが付いている。つまみは上端がやや尖り気味になるものの、下端がくびれないで小鈕の形態を成し、宝珠形よりも乳頭形に近い。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラケズリ（ロクロ回転方向右廻り） 内面　ヨコナデおよび静止後の不定方向ナデ ・－	直径0.2㎜以下の雲母をかなり含む。長石を含む。チャートを若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・－	
62－2 須恵器　杯身 465号墳東裾部　土壙墓	口径　8.6cm（完形） 器高　2.7cm たちあがりはごく短く薄い。口縁端部は受け部の上端より幸うじて上位にあるが、部分的にはそれより下位にあって突出していない箇所もある。受け部は内彎しつつ上方に向いていく。受け部と体部の境界は明瞭に屈曲している。体部から底部にかけては緩やかな屈曲になって境界が定かではない。底部はごく僅かに下方に膨らんでいて平らではない。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヘラ切り未調整 内面　ヨコナデ	直径0.2㎜以下の長石・雲母を若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・－	
65-1 土師器　壺 466号墳　南周溝下位	口径　13.3cm（ほぼ完形） 器高　16.6cm 器形は全体に歪で不整形な感じである。このため口縁部は上面からみると楕円形を呈し、短径12.3cmを測る。口縁部は体部から広がって外上方にのびている。口縁部の中位付近は器壁が厚くなりやや膨れぼったい感じがする。口縁端部付近に強い横方向のナデがおよんでおり、この部分が僅かに外反する一方、内面にやや肥厚してごく弱い段になっている。体部と口縁部の境界は比較的緩やかな屈曲で稜を成さない。体部最大径は体部高の中位にあり、肩部は張らないで丸い。底部は丸く、正置したときに自立しない。 ・外面　横方向ナデ（粘土帯接合痕跡残る） 内面　横方向ハケ（7条/cm） ・外面　縦方向ハケ（7条/cm） 内面　指頭押圧およびナデ（粘土帯接合痕跡残る） ・外面　ナデ 内面　指頭押圧およびナデ	直径0.5㎜以下の長石・石英・チャートをかなり含む。0.2㎜以下の雲母を含む。	良好		

表4　C地区　土坑1　出土土師器皿　観察表

図一遺物番号	残存状況		法量	口径	高さ	口縁	口縁部と底部の境界	底部	備考
	口縁部	底部							
73－1	完存	ほぼ完存	L	10.7	2.6	A b Ⅱ	c	B	
73－2	大部分欠損	大部分欠損	L	11	2.5	A b Ⅱ	c	－	残存 2/7 からの回転復元
73－3	約 1/2 を欠損	約 1/2 を欠損	M	9.4	2	A a Ⅰ	a	B	
73－4	一部欠損	約 1/2 を欠損	M	9.2	2	B a Ⅱ	a	A	
73－5	完存	ほぼ完存	M	9.3	2	B b Ⅱ	a	A	
73－6	ほぼ完存	ほぼ完存	M	9.5	2.1	A a Ⅱ	a	A	
73－7	完存	大部分欠損	M	9.6	2.3	A a Ⅱ	a	A	
73－8	約 1/2 を欠損	一部欠損	M	9.7	2.1	A a Ⅱ	a	A	
73－9	ほぼ完存	完存	M	9.5	2	A a Ⅱ	a	A	
73－10	一部欠損	一部欠損	M	9.6	2	A a Ⅱ	a	B	
73－11	一部欠損	ほぼ完存	M	9.6	2.3	B a Ⅱ	a	B	
73－12	ほぼ完存	完存	M	9.8	2	A a Ⅱ	a	B	
73－13	約 1/2 を欠損	約 1/2 を欠損	M	9	2	B a Ⅱ	a	B	
73－14	完存	完存	M	9.2	2.2	A a Ⅱ	a	B	
73－15	一部欠損	完存	M	9.2	2.2	A a Ⅱ	a	B	
73－16	ほぼ完存	ほぼ完存	M	9.3	1.9	B a Ⅱ	a	B	
73－17	ほぼ完存	完存	M	9.4	2.2	A a Ⅱ	a	B	
73－18	一部欠損	ほぼ完存	M	9.4	2.1	B a Ⅱ	a	B	
73－19	約 1/2 を欠損	一部欠損	M	9.4	1.8	B a Ⅱ	a	B	
73－20	ほぼ完存	ほぼ完存	M	9.6	2.1	B a Ⅱ	a	B	
73－21	一部欠損	完存	M	9.6	2	B a Ⅱ	a	B	
73－22	一部欠損	完存	M	9.8	2.2	A a Ⅱ	a	B	
73－23	大部分欠損	一部欠損	M	10	2	A a Ⅱ	a	B	残存 1/3 からの回転復元
73－24	一部欠損	ほぼ完存	M	8.8	1.9	B a Ⅱ	a	B	
73－25	大部分欠損	大部分欠損	M	8.8	1.7	B a Ⅱ	a	B	残存 1/3 からの回転復元
73－26	一部欠損	一部欠損	M	9	2	A a Ⅱ	a	B	
73－27	完存	完存	M	9.2	2.4	A a Ⅱ	a	B	
73－28	一部欠損	ほぼ完存	M	9.2	2	A a Ⅱ	a	B	
73－29	ほぼ完存	一部欠損	M	9.2	2	A a Ⅱ	a	B	
73－30	ほぼ完存	ほぼ完存	M	9.3	2.2	B a Ⅱ	a	B	
73－31	完存	ほぼ完存	M	9.4	1.7	A a Ⅱ	a	B	
73－32	ほぼ完存	ほぼ完存	M	9.5	2.1	A a Ⅱ	a	B	
73－33	完存	完存	M	9.6	2	A a Ⅱ	a	B	
73－34	一部欠損	ほぼ完存	M	9.7	2.2	B a Ⅱ	a	B	
73－35	一部欠損	一部欠損	M	9.8	2.2	A a Ⅱ	a	B	
73－36	一部欠損	一部欠損	M	9.9	2.1	B a Ⅱ	a	B	
73－37	大部分欠損	大部分欠損	M	10	1.9	A a Ⅱ	a	B	残存 1/3 からの回転復元

図一遺物番号	残存状況		法量	口径	高さ	口縁	口縁部と底部の境界	底部	備考
	口縁部	底部							
73－38	ほぼ完存	一部欠損	M	9.8	2.3	A a Ⅱ	c	A	
73－39	一部欠損	ほぼ完存	M	9.2	2.2	A a Ⅱ	c	B	
73－40	ほぼ完存	ほぼ完存	M	9.5	2.4	A a Ⅱ	c	B	
74－41	ほぼ完存	大部分欠損	M	9.3	2.1	A b Ⅰ	a	A	
74－42	ほぼ完存	完存	M	9.2	2	A b Ⅰ	a	B	
74－43	完存	完存	M	9.8	1.9	A b Ⅰ	c	B	
74－44	大部分欠損	大部分欠損	M	9.1	2.2	B b Ⅱ	a	A	残存 1/3 からの回転復元
74－45	完存	ほぼ完存	M	9.4	1.8	A b Ⅱ	a	A	
74－46	大部分欠損	大部分欠損	M	10	2	B b Ⅱ	a	A	残存 1/3 からの回転復元
74－47	一部欠損	一部欠損	M	9.2	2.3	B b Ⅱ	a	B	
74－48	完存	完存	M	9.7	2.1	B b Ⅱ	a	B	
74－49	完存	完存	M	8.7	2.3	A b Ⅱ	a	B	
74－50	約 1/2 を欠損	約 1/2 を欠損	M	9.2	1.8	A b Ⅱ	a	B	
74－51	一部欠損	ほぼ完存	M	9.5	1.9	B b Ⅱ	a	B	
74－52	完存	完存	M	9.6	2	A b Ⅱ	a	B	
74－53	ほぼ完存	ほぼ完存	M	9.9	2.2	A b Ⅱ	a	B	
74－54	一部欠損	完存	M	9.2	2	B b Ⅱ	a	B	
74－55	一部欠損	一部欠損	M	9.4	1.9	B b Ⅱ	a	B	
74－56	約 1/2 を欠損	大部分欠損	M	9.4	1.9	B b Ⅱ	a	B	残存 1/2 からの回転復元
74－57	大部分欠損	大部分欠損	M	10	2	B b Ⅱ	a	B	残存 1/3 からの回転復元
74－58	大部分欠損	大部分欠損	M	10.2	1.7	A b Ⅱ	c	A	残存 1/4 からの回転復元
74－59	ほぼ完存	一部欠損	M	9.2	2.1	A b Ⅱ	c	B	
74－60	一部欠損	ほぼ完存	M	9.3	1.8	A b Ⅱ	c	B	
74－61	ほぼ完存	完存	M	9.4	2.4	A b Ⅱ	c	B	
74－62	大部分欠損	約 1/2 を欠損	M	9.6	2.1	A b Ⅱ	c	B	残存 2/5 からの回転復元
74－63	ほぼ完存	完存	M	9.6	2.2	A b Ⅱ	c	B	
74－64	一部欠損	一部欠損	M	9.6	2.2	A b Ⅱ	c	B	
74－65	ほぼ完存	完存	M	9.1	2	A b Ⅱ	c	B	
74－66	完存	完存	M	9.6	2	A b Ⅱ	c	B	
74－67	ほぼ完存	完存	M	10.1	2.1	A b Ⅱ	c	B	
74－68	約 1/2 を欠損	約 1/2 を欠損	M	9	1.8	B b Ⅱ	a	B	
74－69	一部欠損	ほぼ完存	M	9.4	1.9	B b Ⅱ	a	B	
74－70	一部欠損	一部欠損	M	9.6	2.1	B b Ⅱ	a	B	
74－71	約 1/2 を欠損	約 1/2 を欠損	M	9.9	2.3	B b Ⅱ	a	B	
74－72	ほぼ完存	一部欠損	M	9.8	1.8	B b Ⅱ	b	B	
75－73	完存	一部欠損	S	7.4	1.3	A a Ⅱ	a	A	
75－74	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.6	1.1	A a Ⅱ	a	A	
75－75	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.8	1.4	A a Ⅱ	a	A	

図－遺物番号	残存状況		法量	口径	高さ	口縁	口縁部と底部の境界	底部	備考
	口縁部	底部							
75－76	完存	完存	S	7.2	1.1	A a Ⅱ	a	B	
75－77	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.4	1.3	A a Ⅱ	a	B	
75－78	完存	完存	S	7.7	1.2	A a Ⅱ	a	B	
75－79	約1/2を欠損	約1/2を欠損	S	8.2	1.1	A a Ⅱ	a	B	残存1/2からの回転復元
75－80	一部欠損	一部欠損	S	7.5	1.4	A b Ⅱ	a	B	
75－81	ほぼ完存	一部欠損	S	7.2	1.2	A a Ⅱ	b	A	
75－82	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.4	1.4	A a Ⅱ	b	A	
75－83	一部欠損	ほぼ完存	S	7.6	1.3	A a Ⅱ	b	A	
75－84	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.2	1.1	A a Ⅱ	b	B	
75－85	完存	完存	S	7.2	1.2	A a Ⅱ	b	A	
75－86	約1/2を欠損	一部欠損	S	7.5	0.9	A a Ⅱ	b	C	
75－87	一部欠損	一部欠損	S	7.8	1.2	A a Ⅱ	c	A	
75－88	ほぼ完存	一部欠損	S	8	1.3	A a Ⅱ	c	A	
75－89	大部分欠損	約1/2を欠損	S	7.6	1.4	A a Ⅱ	c	A	残存1/2からの回転復元
75－90	大部分欠損	約1/2を欠損	S	7.8	1.4	A a Ⅱ	c	A	残存1/4からの回転復元
75－91	約1/2を欠損	約1/2を欠損	S	7.4	1.3	A a Ⅱ	c	B	
75－92	ほぼ完存	一部欠損	S	7.2	1.2	A b Ⅱ	b	A	
75－93	完存	完存	S	7.6	1.2	A b Ⅱ	b	A	
75－94	一部欠損	一部欠損	S	7.7	1	A b Ⅱ	b	A	
75－95	大部分欠損	大部分欠損	S	7.8	1.3	A b Ⅱ	b	A	残存1/3からの回転復元
75－96	完存	大部分欠損	S	7.6	1.2	A b Ⅱ	c	A	
75－97	約1/2を欠損	一部欠損	S	8.2	1.3	A b Ⅱ	b	A	残存2/5からの回転復元
75－98	約1/2を欠損	一部欠損	S	8.2	1.1	A b Ⅱ	b	A	残存1/2からの回転復元
75－99	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.3	1.2	A b Ⅱ	c	A	
75－100	一部欠損	一部欠損	S	7.4	1.1	A b Ⅱ	c	A	
75－101	完存	完存	S	7.3	1.5	A a Ⅱ	c	B	
75－102	完存	完存	S	7.6	1.4	A a Ⅱ	c	B	
75－103	一部欠損	一部欠損	S	7.8	1.6	A a Ⅱ	c	B	
75－104	完存	完存	S	7.1	1.4	A b Ⅱ	c	B	
75－105	約1/2を欠損	一部欠損	S	7.2	1.4	A b Ⅱ	c	B	
75－106	ほぼ完存	完存	S	7.4	1.3	A b Ⅱ	c	B	
75－107	完存	完存	S	7.2	1	A b Ⅱ	c	A	
75－108	完存	ほぼ完存	S	7.4	1.5	A b Ⅱ	c	A	
75－109	大部分欠損	大部分欠損	S	8.4	1.2	A b Ⅱ	c	B	残存1/4からの回転復元
75－110	一部欠損	ほぼ完存	S	7.2	1.3	A a Ⅱ	c	B	
75－111	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.4	1.2	A a Ⅱ	c	B	
75－112	大部分欠損	大部分欠損	S	8.2	1.1	A a Ⅱ	c	B	残存1/3からの回転復元

図－遺物番号	残存状況		法量	口径	高さ	口縁	口縁部と底部の境界	底部	備考
	口縁部	底部							
75－113	一部欠損	ほぼ完存	S	7.3	1.6	A b Ⅱ	c	B	
75－114	完存	完存	S	7.2	1.5	B a Ⅱ	b	A	
75－115	完存	ほぼ完存	S	7.5	1.4	B a Ⅱ	b	A	
75－116	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.4	1.3	B a Ⅱ	b	A	
75－117	一部欠損	一部欠損	S	7.4	1.3	B a Ⅱ	c	A	
75－118	約1/2を欠損	約1/2を欠損	S	7.6	1.3	B a Ⅱ	c	A	
75－119	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.8	1.3	B a Ⅱ	c	A	
75－120	大部分欠損	大部分欠損	S	7.5	1.1	B b Ⅱ	b	A	残存2/5からの回転復元
75－121	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.6	1.2	B b Ⅱ	b	A	
75－122	ほぼ完存	完存	S	8	1.3	B b Ⅱ	b	A	
75－123	ほぼ完存	完存	S	7.4	1	B b Ⅱ	b	A	
75－124	ほぼ完存	完存	S	7.5	1.1	B b Ⅱ	b	A	
75－125	大部分欠損	大部分欠損	S	7	1.3	B b Ⅱ	c	A	残存1/4からの回転復元
75－126	ほぼ完存	ほぼ完存	S	7.4	1.3	B b Ⅱ	c	A	
75－127	大部分欠損	大部分欠損	S	7.5	1.4	B b Ⅱ	c	A	残存1/3からの回転復元
75－128	完存	完存	S	7.6	1.3	B b Ⅱ	c	A	
75－129	一部欠損	ほぼ完存	S	7.6	1.2	B b Ⅱ	c	A	
75－130	大部分欠損	大部分欠損	S	8.4	1.4	B b Ⅱ	c	A	残存1/5からの回転復元
75－131	大部分欠損	大部分欠損	S	8.4	1.3	B b Ⅱ	c	A	残存1/5からの回転復元

表5　巨勢山境谷遺跡　弥生土器　観察表

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色頁岩	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
81－1 広口壺 溝1	口径　20.0cm（残存1/4からの回転復原） 残存高　3.3cm 大きく開く口縁部は、拡張して下方にやや垂下する口縁端面を成している。 ・外面　ナデのち口縁端面に3条の凹線文 内面　横方向のヘラミガキ ・－ ・－	良好	M 2	Ⓛ・L 3	M・S 3	M・S 3	M 2	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・濃灰色	
81－2 広口壺 溝1	口径　22.4cm（残存1/6からの回転復原） 残存高　2.1cm 大きく開く口縁部は、拡張して下方に垂下する口縁端面を成している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヘラケズリのちナデ ・－ ・－	良好	S 2	L・M 3	M 3	M・S 2	M 3	0		・赤褐色 ・淡赤褐色 ・濃灰色	
81－3 広口壺 溝1	口径　16.0cm（残存1/4からの回転復原） 残存高　1.8cm 大きく開く口縁部は、拡張して下方に垂下する口縁端面を成している。 ・外面　ヘラミガキ。口縁端面には中央に竹管文を押印した円形浮文を貼りつけている。 内面　ヘラミガキ ・－ ・－	良好	S 2	S 1	S 4	S 3	0	0		・暗橙灰色 ・暗橙灰色 ・暗橙灰色	口縁部外面の円形浮文は2個を1セットとして、3方向に配置されたとみられる。
81－4 長頸壺 溝1	口径　13.2cm　（口頸部完存） 残存高　16.5cm 口縁端部は、ほぼ水平に外側にやや肥厚している。口縁部から頸部にかけては緩やかに外反して繋がっている。 ・外面　ヨコナデ　縦方向のヘラミガキ 内面　ハケのちナデ ・－ ・－	良好	S 1	Ⓛ 1	S 3	L・M 4	0	0		・淡黄灰色 ・淡黄灰色 ・淡黄灰色	
81－5 短頸壺 溝1	口径　13.0cm（残存1/2からの回転復原） 残存高　18.9cm 体部から屈曲した頸部は外上方にほぼ直線的にのびて口縁部になる。口縁端部は丸く収められている。体部の形態はやや下膨れになるらしい。 ・外面　ヘラミガキ 内面　横方向のハケのちナデ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ ・－	良好	M 1	L・M 3	L・M 3	S・Ⓢ 2	0	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	体部上半の肩部付近に、横に広い「U」字状のヘラ記号がある。向かって左半が欠損しており全体の形状は不明。
81－6 長頸壺 溝1	口径　10.0cm（残存1/4からの回転復原） 残存高　9.4cm 頸部は緩やかに外反しながら外上方にのびて口縁部に繋がっている。口縁端部は丸く収められている。 ・外面　横方向のナデのちヘラミガキ 内面　指頭による押圧およびナデ ・－ ・－	良好	0	L・M 2	M 1	M・S 2	0	S 2		・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・濃灰色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	・外面 色調・内面 ・断面	備考
81－7 長頸壺 溝1	口径　7.8cm（残存1/2からの回転復原） 残存高　7.9cm 頸部は緩やかに外反しながら外上方にのびて口縁部に繋がっている。口縁端部は丸く収められている。全体に頸部が細い印象を受ける。 ・外面　ナデのちヘラミガキ 内面　指頭による押圧およびナデ ・－ ・－	やや軟	S 3	Ⓛ・M 3	S 3	S 2	S 1	S 2		・淡赤灰色 ・淡橙色 ・淡橙色	胎土が比較的精良。色調も白っぽく、他の土器とは違って特徴的である。搬入土器か。
81－8 壺 溝1	残存最大径　13.8cm（残存部の反転復原） 残存高　7.1cm 底部は下方に突出した小さな平底になっている。底面は中央付近がごく僅かに窪むが全体にナデ調整されて平滑である。残存部上端に、それより上に粘土を継ぎ足した接合痕が残っているので、鉢にはならない。 ・－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	S 2	S 1	L・M 3	S 3	M 1	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤黄褐色	内面に黒斑。
81－9 壺 溝1	残存最大径　15.6cm（残存部の反転復原） 残存高　5.5cm 底部は下方に突出した小さな平底になっている。底面はナデ調整にされて平滑になっている。体部は球形に近い丸みを持ったものか。 ・－ ・外面　ヘラミガキ 内面　横方向のハケ ・外面　ナデ 内面　蜘蛛の巣状ハケ	良好	S 2	M 2	M 3	Ⓛ・L 4	0	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
81－10 甕形土器 溝1	口径　13.2cm（残存部の反転復原） 残存高　4.7cm 口縁端部は、弱い稜線によって面を成している。口縁部から天井部にかけてはごく緩やかに内彎している。天井部に、径3.9cmのつまみを付けている。つまみ中央は大きく窪んでいる。 ・外面　ヨコナデ ・内面　ヨコナデ ・外面　縦方向のヘラミガキのち、径6㎜の円孔を2個をセットして対向する位置に2箇所、計4個を穿っている。 内面　横方向ハケおよび氏王に寄る押圧 ・－	良好	0	M 2	S 1	L・S 4	M 1	0		・赤黄褐色 ・赤褐色 ・赤黄褐色	
81－11 甕 溝1	口径　13.0cm（残存1/2からの回転復原） 残存高　7.5cm 口縁部は、内面に弱い稜をつくって屈曲して外上方にのびている。口縁端部は、外傾する面を成すが端面の上下端の稜は鈍く稜は明確ではない。体部最大径は口径の割に比較的小さい。 ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　タタキ 内面　ナデ ・－	良好	M 2	Ⓛ・L 2	M 2	M 2	L 2	M 2		・黄灰色 ・黄褐色 ・黄灰色	外面に黒斑。

図－遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
81－12 甕 溝1	口径　14.6cm（残存1/4からの回転復原） 残存高　7.4cm 口縁部は、内面に稜をつくって屈曲して外上方にのびている。口縁端部は外傾する面を成し、端面中央はヨコナデによってやや窪んでいる。体部最大径は、口径の割に比較的小さい。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　タタキ 内面　横方向のハケのちナデ ・－	良好	S 3	L・S 2	M 2	M・S 4	0	0		・淡灰褐色 ・灰褐色 ・淡赤褐色	口縁部外面に僅かに煤。
81－13 甕 溝1	口径　16.7cm（残存1/4からの回転復原） 残存高　5.9cm 口縁部は、内面にやや弱い稜をつくって屈曲して外上方のびている。口縁端部は外傾する面を成し、端面の下端は下方にやや肥厚している。体部最大径は口径より大きく、肩部がやや張るものか。 ・外面　ナデおよび指頭押圧。端部付近はヨコナデ。 内面　ヨコナデ ・外面　タタキ 内面　ナデ。上端に口縁部として接合した粘土の接合痕。 ・－	良好	S 1	S 1	S 2	M・S 4	0	S 1		・赤灰褐色 ・赤灰褐色 ・濃灰色	
81－14 甕 溝1	口径　14.4cm（残存1/4からの回転復原） 残存高　7.3cm 口縁部は、緩やかに屈曲して外上方にのびている。内面には稜を成さない。口縁端部は外傾する面を成し、端面の下端は下方にやや肥厚している。口径より体部最大径の方が大きいが、体部はあまり張らない。 ・外面　ヨコナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ。上端に口縁部として接合した粘土の接合痕。この接合痕付近にヘラミガキを施すも、接合痕は消えていない。 ・内面　ハケのちナデ。上端に口縁部として接合した粘土の接合痕。 ・－	良好	S 2	M 1	M・S 3	L・M 4	0	M 1		・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・黄灰色	
81－15 甕 溝1	口径　13.4cm（残存1/4からの回転復原） 残存高　9.0cm 口縁部は、緩やかに屈曲して外上方にのびている。内面に稜を成さない。口縁端部は外傾する面を成し、端面の下端は下方にやや肥厚している。体部最大径は、口径の割に比較的小さい。 ・外面　ヨコナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ。 内面　ハケのちナデ。上端に口縁部として接合した粘土の接合痕。 ・－	良好	S 1	M・S 3	M・S 2	S 2	L 1	M 1		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤黄灰色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	・外面 色調・内面 ・断面	備考
81－16 甕 溝1	口径　16.5cm（口縁部完周して残存） 残存高　6.5cm 口縁部は、内面に稜をつくって屈曲して外上方にほぼ直線的にのびたのち、端部近くで外側に屈曲してやや開いている。口縁端部は外傾する面を成をなすが、端面の上端の稜は鈍く部位によっては面自体も丸くなっているところもある。端面の下端はやや肥厚している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　タタキ 内面　ケズリのちナデ ・－	良好	S 1	0	S 2	S 2	L・M 2	S 1		・暗赤褐色 ・黄灰色 ・暗赤褐色	体部および口縁部外面の一部に煤。
81－17 甕 溝1	口径　20.0cm（残存1/12からの回転復原） 残存高　12.1cm 口縁部は、内面に稜をつくって外方に屈曲して開いている。口縁端部は外傾する面を成す。体部最大径はその上半にあるらしい。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　タタキ 内面　ヘラケズリ ・－	良好	S 1	L・M 2	M 2	M 2	L・M 2	L・M 4		・赤灰褐色 ・赤褐色 ・暗赤褐色	体部外面の一部に煤。
81－18 甕 溝1	口径　15.8cm（残存1/8からの回転復原） 残存高　5.1cm 口縁部は、内面に稜をつくって外上方にのびたのち、端部付近で上方に屈曲して受け口状口縁になっている。口縁端部は丸い。 ・外面　ヨコナデ 内面　ハケのちナデ ・外面　タタキ 内面　ナデ ・－	やや軟	0	L 1	S 1	S 2	S 1	S 1		・淡赤褐色 ・淡黄灰色 ・淡黄灰色または濃灰色	搬入土土器か。
81－19 甕 溝1	口径　19.5cm（残存1/5からの回転復原） 残存高　4.0cm 口縁部は内面に稜をつくって外方に屈曲して開いたのち、粘土帯を継ぎ足して直立気味に立ち上がる複合口縁になっている。口縁端部は僅かに外傾する面を成す。 ・外面　口縁外端面に３条の凹線文 内面　ヨコナデ ・外面　残存部はナデ 内面　残存部はナデ ・－	良好	S 2	M 1	M・S 3	S 4	M 3	M・S 3		・灰褐色 ・淡赤褐色 ・黄灰色	口縁部外面に煤。 搬入土器か。
81－20 甕 溝1	口径　19.8cm（残存1/8からの回転復原） 残存高　4.3cm 口縁部は内面に稜をつくって外方に屈曲して開いたのち、粘土帯を継ぎ足して直立して立ち上がる複合口縁になっている。口縁端部は丸い。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・－ ・－	良好	S 1	M・S 2	M 2	L・M 3	M 1	S 1		・赤褐色 ・赤褐色 ・黄灰色	外面に１cm大の赤色に変化した部分が見える。粘土に含まれた鉱物によるものか。 搬入土器か。

図－遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
82－21 甕 溝1	底部径　5.8cm（底部は完存） 残存高　2.0cm 底部は下方に突出した小さな平底であるが、中央が窪んで上げ底になっている。底部下端は、指頭押圧によって外方に拡張している。 ・－ ・－ ・外面　指頭押圧およびナデ 内面　蜘蛛の巣状ハケ	良好	M・S 3	L・M 1	M・S 2	M・S 3	S 1	O		・暗赤灰色 ・赤灰色 ・暗赤灰色	
82－22 甕 溝1	底部径　5.0cm（底部は完存） 残存高　2.3cm 底部は下方に突出した小さな平底であるが、中央部は僅かに窪んで上げ底状になっている。底部下端は、指頭押圧によって外方に拡張している。 ・－ ・－ ・外面　指頭押圧およびナデ 内面　ハケのちナデ	良好	S 1	L 1	S・Ⓢ 2	Ⓢ 2	L 1	S 2		・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色	
82－23 壺か 溝1	底部径　4.2cm（底部の残存1/2以上） 残存高　3.2cm 底部は下方に突出した小さな平底である。 ・－ ・－ ・外面　ナデ 内面　蜘蛛の巣状ハケ	良好	S 1	O	S 1	S・Ⓢ 3	L 1	O		・暗赤褐色 ・暗赤褐色 ・濃灰色	外面に黒斑
82－24 甕 溝1	底部径　5.0cm（残存1/3からの回転復原） 残存高　3.7cm 底部は下方に突出した小さな平底である。 ・－ ・外面　タタキ 内面　ハケ ・外面　ナデ 内面　ハケ	良好	S 2	L 1	M・S 2	Ⓢ 2	L 1	O	花崗岩礫	・赤褐色 ・濃灰色 ・濃灰色	内面に黒斑
82－25 有孔鉢 溝1	底部径　4.3cm（底部は完存） 残存高　4.1cm 底部は下方に突出した小さな平底であるが、体部と底部の境界は稜にならないで緩やかに屈曲している。底部に径1.2cmの円孔を穿っている。 ・－ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	S 1	L・M 2	S 3	S・Ⓢ 2	L・M 1	M 1		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
82－26 有孔鉢 溝1	底部径　3.5cm（底部は完存） 残存高　5.2cm 底部は下方に突出した小さな平底であるが、体部と底部の境界は稜にならないで緩やかに屈曲している。底部に径1.4cmの円孔を穿っている。 ・－ ・外面　縦方向のヘラミガキ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ハケ	良好	S 2	L 2	S・Ⓢ 3	S・Ⓢ 2	L 3	S 1		・淡赤褐色 ・濃灰色 ・淡黄褐色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	・外面 色調・内面 ・断面	備考
82－27 鉢 溝1	口径　12.5cm（口縁部1/2以上残存） 器高　8.2cm 体部から口縁部にかけては僅かに内彎しつつ滑らかに繋がり、外上方に開いている。口縁端部は丸く収められるが、部分的に強いヨコナデによって外方に僅かに肥厚している箇所がある。底部は下方に突出した小さな平底であるが、底部の中央付近が下方に膨らんでいる。底部下端はやや外方に拡張している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ナデ ・外面　縦方向へラミガキ 内面　ナデ ・外面　指頭による押圧のちナデ ・内面　指頭による押圧のちナデ	良好	S 2	S 1	M・S 4	S 4	0	0		・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・黄灰褐色	底部内面に黒斑。
82－28 鉢 溝1	口径　12.8cm（全体の3/4以上残存） 器高　7.0cm 体部から口縁部にかけてはごく僅かに内彎しつつ滑らかに繋がり、外上方に開いている。口縁端部は丸い。底部は下方に突出した平底であるが、中央部が僅かに窪んでやや上げ底状になっている。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ナデ 内面　ハケのちナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	S 2	M 2	M・S 3	S 3	0	0		・濃赤褐色 ・濃赤褐色 ・濃赤褐色	
82－29 高杯 溝1	口径　19.6cm（残存1/4からの回転復原） 残存高　2.8cm 杯底部と口縁部の境界は、やや突出する稜を成して屈曲し、口縁部は外反して開いている。口縁端部は、外傾する面を成し、端面中央はヨコナデによって窪んでいる。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・－ ・－	良好	S 2	L・M 3	M 2	L・M 2	0	0		・暗赤褐色 ・暗黄褐色 ・暗灰色	口縁部外面の一部に黒斑。
82－30 高杯 溝1	口径　19.6cm（残存1/10からの回転復原） 残存高　3.2cm 杯底部と口縁部の境界は稜を成して屈曲し、口縁部は外反して開いている。口縁端部は外傾する面を成すが、口縁端面の上下端辺は丸く不明瞭である。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・－	良好	S 2	M 1	S 3	S 2	M 1	M・S 2		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
82－31 高杯 溝1	口径　20.0cm（残存1/10からの回転復原） 残存高　3.8cm 杯底部と口縁部の境界はやや不明瞭な稜を成して屈曲し、口縁部はやや外反して開いている。口縁端部は丸く、外側に僅かに拡張している。 ・外面　ヨコナデ 内面　横方向のヘラミガキ ・外面　横方向のヘラミガキ 内面　横方向のヘラミガキ ・—	良好	S 1	M 1	S 3	S 1	M・S 2	M・S 2		・赤黄褐色 ・赤褐色 ・黄褐色	
82－32 高杯 溝1	口径　20.8cm（残存1/10からの回転復原） 残存高　3.3cm 杯底部と口縁部の境界は明瞭な稜を成して屈曲し、口縁部は外反して開いている。口縁端部は不明瞭な稜をもって端面を形成し、僅かに外側に拡張している。 ・外面　ヨコナデ 内面　横方向のヘラミガキ ・外面　縦方向のヘラミガキ 内面　ナデ ・—	良好	S 2	M 1	M・S 3	S 3	M 2	0		・赤黄灰色 ・赤黄灰色 ・濃灰色	
82－33 高杯 溝1	口径　20.4cm（残存1/9からの回転復原） 残存高　4.0cm 杯底部と口縁部の境界は稜を成して屈曲している。口縁部はほぼ直立して立上がり、端部付近で外側に短く屈曲している。口縁端部は丸い。 ・外面　縦方向のヘラミガキ 内面　横方向のヘラミガキ ・— ・—	良好	S 2	L・M 2	M・S 3	S・Ⓢ 2	M 2	0		・赤褐色 ・赤黄褐色 ・黄灰色	
82－34 高杯 溝1	口径　21.2cm（残存1/8からの回転復原） 残存高　3.4cm 杯底部と口縁部の境界は稜を成して屈曲し、口縁部は外反して開いている。口縁端部は丸く、外側にやや肥厚している。 ・外面　ヨコナデ 内面　縦方向のヘラミガキ ・外面　ナデ 内面　ヘラミガキ ・—	良好	S・Ⓢ 1	M・S 1	S・Ⓢ 4	M 2	0	M・S 2		・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡灰色	
82－35 高杯 溝1	口径　24.4cm（残存1/6からの回転復原） 残存高　3.7cm 杯底部と口縁部の境界は稜を成して屈曲し、口縁部は直立気味に立上がりつつも外反して開いている。口縁端部は外傾する面を成し、端面中央はヨコナデによってやや窪み、端面の外側は僅かに肥厚している。 ・外面　縦方向のヘラミガキ 内面　ヨコナデ ・外面　縦方向のヘラミガキ 内面　ナデ ・—	良好	0	L・M 3	M・S 4	Ⓢ 2	0	M 1	花崗岩礫	・赤褐色 ・赤黄灰色 ・赤黄灰色	外面に黒斑。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	・外面 色調・内面 ・断面	備考
82－36 高杯 溝1	口径　24.2cm（残存1/9からの回転復原） 残存高　3.6cm 杯底部と口縁部の境界は稜を成して屈曲し、口縁部は外反して開いている。口縁端部は丸く、端部外側に僅かに肥厚している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　不詳 内面　ヨコナデ ・－	良好	S 1	M・S 2	M・S 2	S・Ⓢ 2	M 1	M 2		・赤黄灰色 ・赤黄灰色 ・濃灰色	内面に黒斑。
82－37 高杯 溝1	口径　26.4cm（残存1/10からの回転復原） 残存高　3.15cm 杯底部と口縁部の境界は稜を成して屈曲し、口縁部は外反気味に開いている。口縁端部は面を成し、端面の両辺は内外にそれぞれ僅かに肥厚している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	やや軟	S 1	M 1	S 3	S・Ⓢ 3	L・M 2	S 2		・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・黄灰色	内面に黒斑。
82－38 高杯 溝1	口径　26.2cm（残存1/10からの回転復原） 残存高　4.4cm 杯底部と口縁部の境界は明瞭な稜を成して屈曲し、口縁部は外反して開いている。口縁端部は丸く、外側に肥厚している。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　横方向のヘラミガキ 内面　ナデ ・－	やや軟	S 2	Ⓛ・M 1	M・S 3	M 2	0	M 2		・赤褐色 ・淡赤褐色 ・赤黄褐色	
82－39 高杯 溝1	口径　19.6cm（残存1/8からの回転復原） 杯底部から口縁部にかけては緩やかに内彎して繋がっている。残存分では口縁端部がさらに内彎しているが部分的な特徴かもしれない。口縁端部は丸い。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　縦方向のヘラミガキ 内面　縦方向のヘラミガキ ・－	良好	S 1	M 1	M・S 4	M 2	L 1	0		・赤黄褐色 ・赤黄褐色 ・赤黄褐色	
82－40 高杯 溝1	残存高　7.7cm 脚柱状部は裾部に向けてほぼ直線的に広がっている。柱状部の上端は中実。 ・－ ・－ ・外面　縦方向のケズリ 内面　シボリメの上からナデ	やや軟	S 1	L・M 1	S 2	S・Ⓢ 2	M 1	0		・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
82－41 高杯 溝1	残存高　6.3cm 脚柱状部は裾部に向けてほぼ直線的に広がっている。柱状部の上端は中実。 ・－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　ヘラミガキ 内面　ナデ		0	0	S 2	S・Ⓢ 2	L 1	0		・暗赤褐色 ・暗赤褐色 ・暗赤褐色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土 長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
82－42 高杯 溝1	裾部径　12.2cm（残存1/3からの回転復原） 残存高　5.4cm 脚裾部は脚部の下端付近で緩やかに屈曲して広がっている。屈曲点よりやや上位に径1.1cmの円形スカシがある。裾端部は面を成す。 ・－ ・－ ・外面　縦方向のヘラミガキ 内面　ナデ	良好	S 1	0	M・S 4	M 3	0	0		・黄灰色 ・淡赤黄灰色 ・黄灰色	外面に黒斑。残存部では1.8cmの間隔をあけてほぼ同じ高さに2個のスカシが確認できる。2個を1セットとしたスカシ孔の配列か。
82－43 高杯 溝1	裾部径　11.2cm（残存1/7から回転復原） 残存高　8.8cm 脚柱状部はほぼ直線的に外下方にのび、脚部の下端付近で緩やかに屈曲して広がる裾部に繋がっている。屈曲点のやや上位に径1.0cmの円形スカシがある。裾端部は丸く、上方に僅かに肥厚している。 ・－ ・外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ ・外面　縦方向のヘラミガキ 内面　ナデ	良好	S 2	M 1	L・M 3	S 2	L 2	0		・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・黄褐色	スカシ孔は残存部から4方に配置されたとみられる。
82－44 結合形土器 溝1	突帯部径　19.2cm（残存1/6からの回転復原） 残存高　4.3cm 杯底部と杯体部の境界になる断面三角貼付突帯の頂部には、キザミメが施されている。 ・－ ・外面　ナデおよび縦方向のヘラミガキ 内面　ナデ ・－	やや軟	M・S 2	L 1	S 3	M 2	M 1	0		・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・淡黄褐色	
82－45 結合形土器 溝1	突帯部径　13.6（残存1/10からの回転復原） 残存高　2.9cm 断面三角貼付突帯の頂部にはキザミメが施されている。突帯のやや下位に復原径0.9cmの円形スカシがある。 ・－ ・－ ・外面　ヨコナデ 面面　ナデ	やや軟	S 2	0	S・Ⓢ 3	M 2	0	0		・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色	
82-46 ミニチュア壺形土器 溝1	口径　2.4cm（完形） 器高　4.4cm 体部は体部高のほぼ中位に最大径を持ち、算盤玉形をする。体部上半は内上方に僅かに内彎しつつのびて、そのまま口縁部になる。口縁端部は丸い。口縁部の直下に径3mmの円孔が2個を1セットとして対抗する2方向に配置されている。底部は小さく下方に突出する平底である。 ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	S 1	0	S 2	M・S 4	0	0		・暗赤褐色 ・暗灰色 ・暗灰色	外面の1/2以上に黒斑。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	焼成	胎土							色調 ・外面 ・内面 ・断面	備考
			長石	石英	角閃石	雲母	チャート	赤色斑粒	その他		
83－1 甕 土器棺墓	口径　22.8cm（完形） 器高　33.0cm 口縁部は、内面に弱い稜を成して屈曲して、外上方にのび、僅かに外反して開いている。口縁端部は外傾する面を成すが、特に上端辺はあまり明確ではない。下端辺は下方に肥厚している。体部最大径は器高の中位よりやや上にあって、口縁径を凌駕している。底部は下方に突出していて、中央が窪む上げ底になっている。 ・外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ ・外面　タタキのちハケ 内面　ハケ ・外面　ナデ 内面　ナデ	良好	M 2	L・M 3	M 2	M・S 3	M 3	0		・赤褐色 ・黄赤褐色 ・黄赤褐色	体部外面の一部に煤。体部から底部にかけての内面に黒斑。
83－2 甕 土器棺墓	体部最大径31.1cm（体部・底部完存） 残存高　34.4cm 口縁部はその下端付近からを欠損している。体部最大径はほぼその中位にある。底部は小さく下方に突出する平底である。 ・－ ・外面　タタキのち縦方向のヘラミガキ 内面　ハケ ・外面　ナデ 内面　蜘蛛の巣状ハケ	良好	S・⑤ 2	L 2	S 2	⑤ 2	L 2	S 3		・赤黄褐色 ・暗灰色 ・暗灰色	体部・底部の内面に黒斑。体部外面の一部に黒斑。

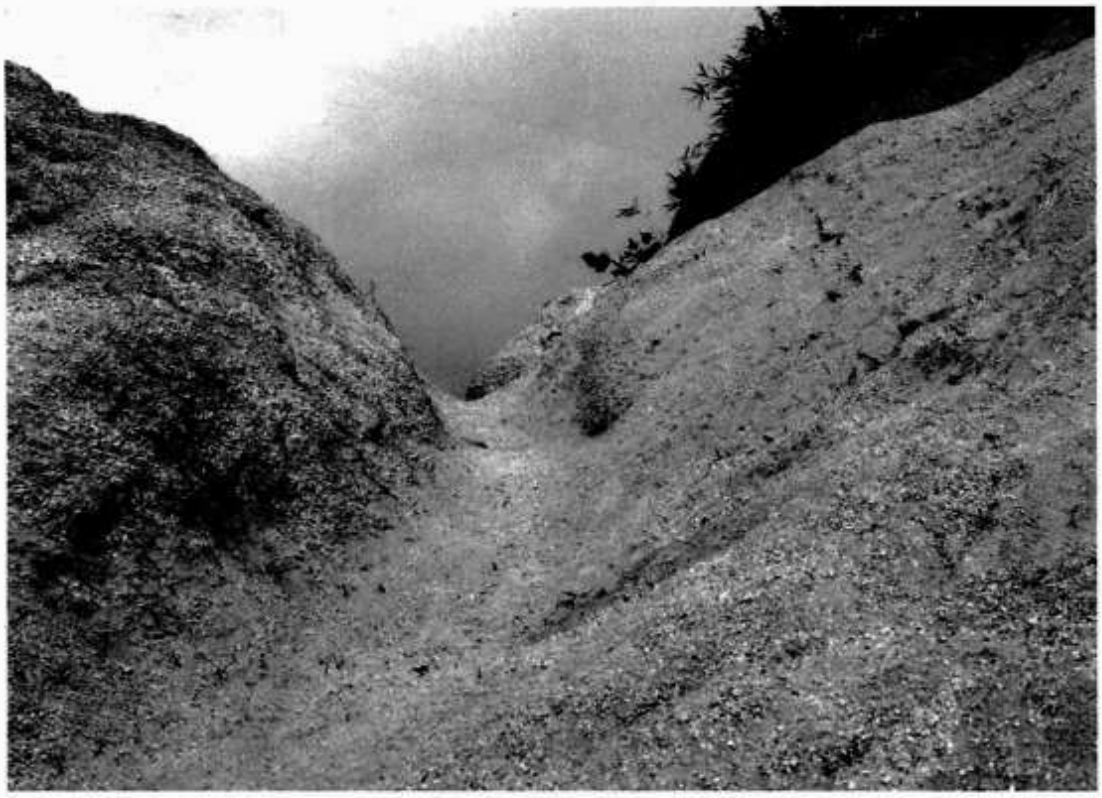
図　版

図版1

A・B地区　全景　東上空から

A・B地区　全景　真上から

図版2



巨勢山456号墳　南周溝　東から

巨勢山458号墳　南周溝　東から

巨勢山461号墳（手前）と462号墳

巨勢山461号墳　埴輪出土状態　東から

巨勢山461号墳　埴輪出土状態２　据付け穴埋土除去後

巨勢山462号墳　墳丘南東部の立上がり

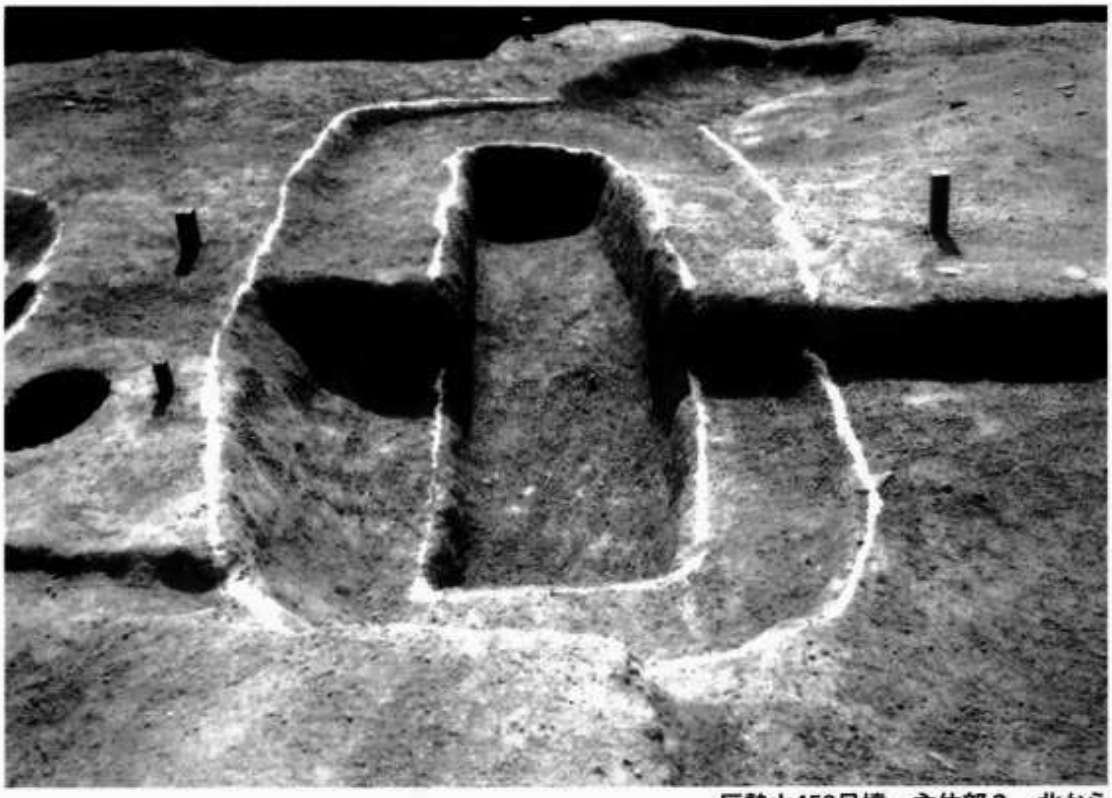
B地区　全景　南上空から

B地区　全景　西から

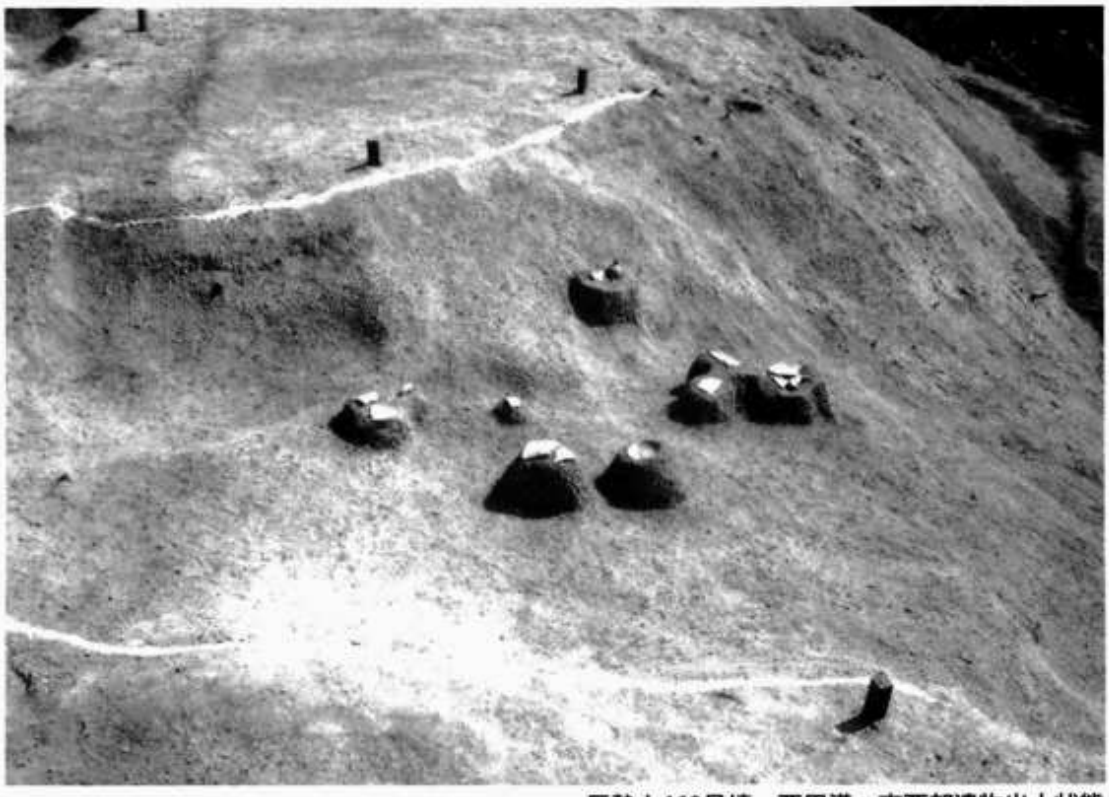
図版6

巨勢山459号墳　主体部１（手前）と主体部２

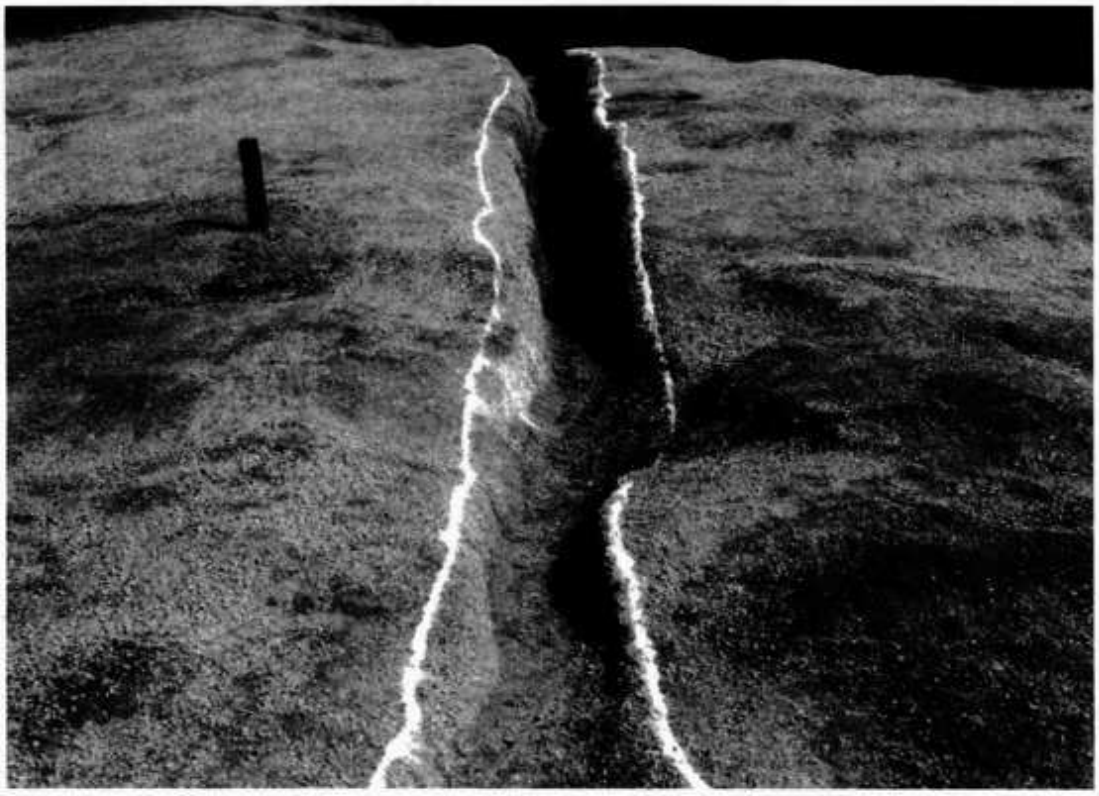
巨勢山459号墳　主体部１　北から



巨勢山459号墳　主体部２　北から



巨勢山460号墳　西周溝　南西部遺物出土状態



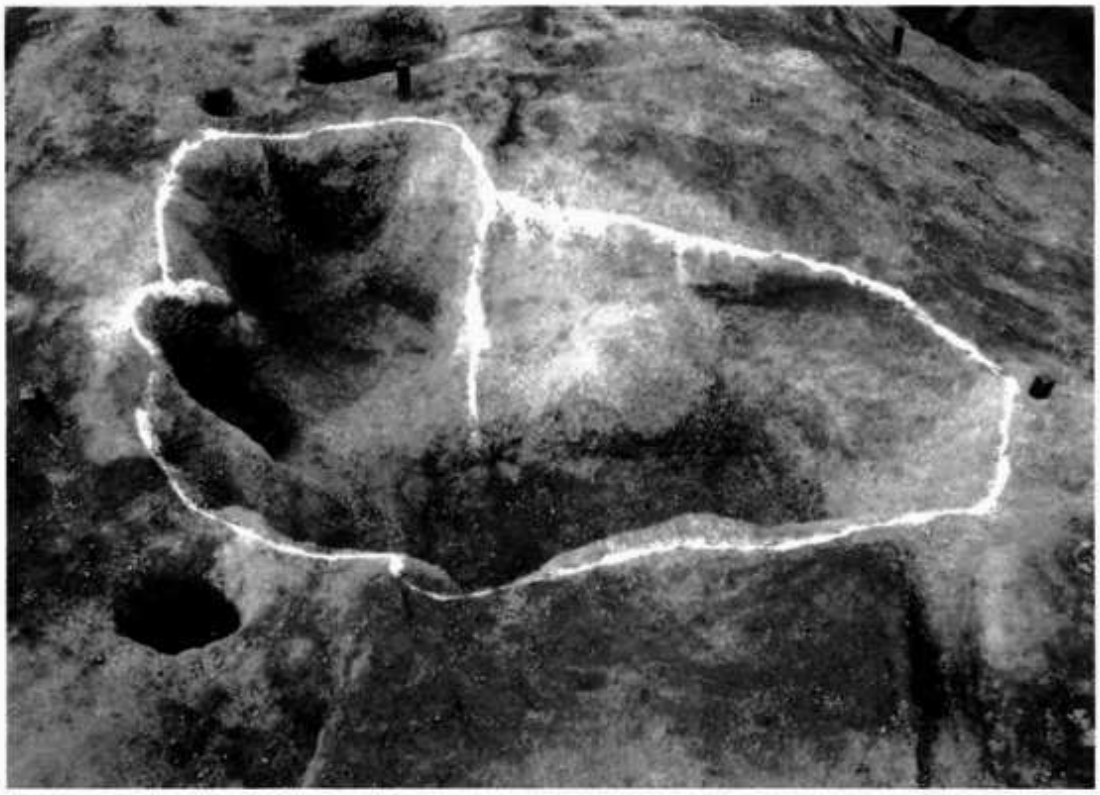
B地区　溝1　南から

B地区　石組み遺構1　東から

B地区　石組み遺構3（手前）と石組み遺構2　東から

B地区　土坑3

図版10



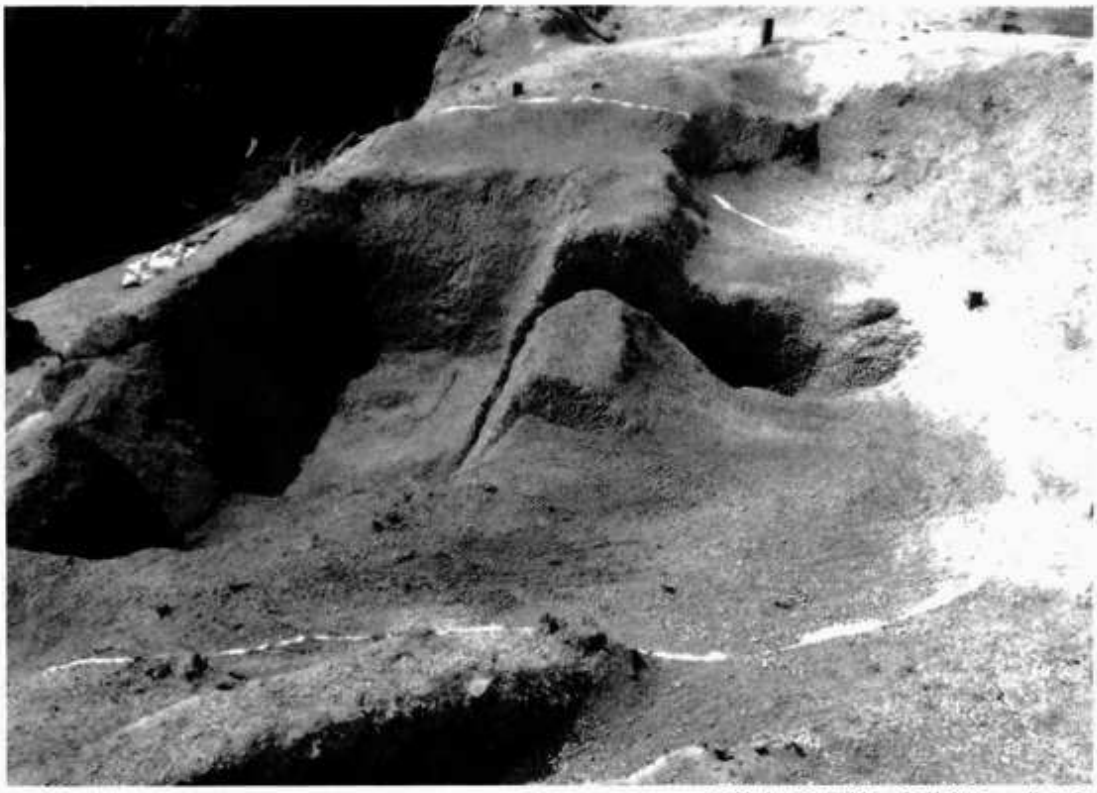
B地区　土坑4・土坑7・ピット7

B地区　土坑4　北東部　銭出土状態

C地区　全景　北上空から

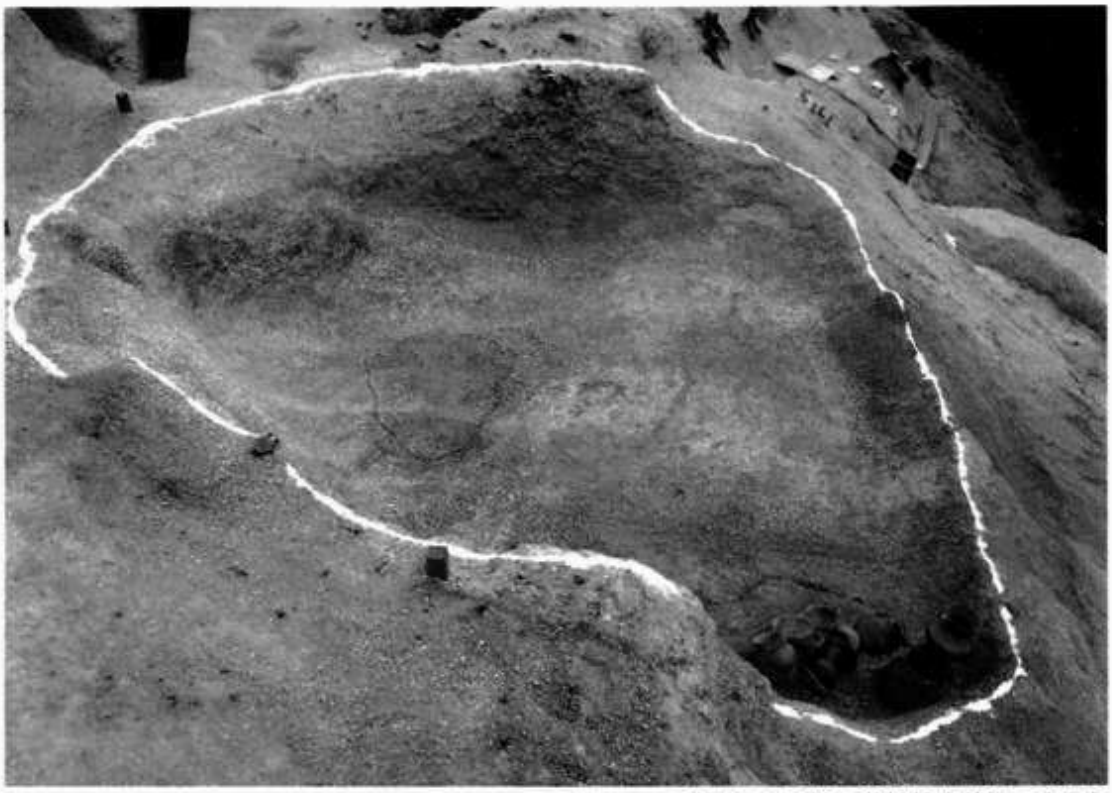
C地区　全景　南から

巨勢山463号墳　墳頂部　遺物出土状態



巨勢山463号墳　主体部１　北から

巨勢山463号墳　墓壙検出状況　北から



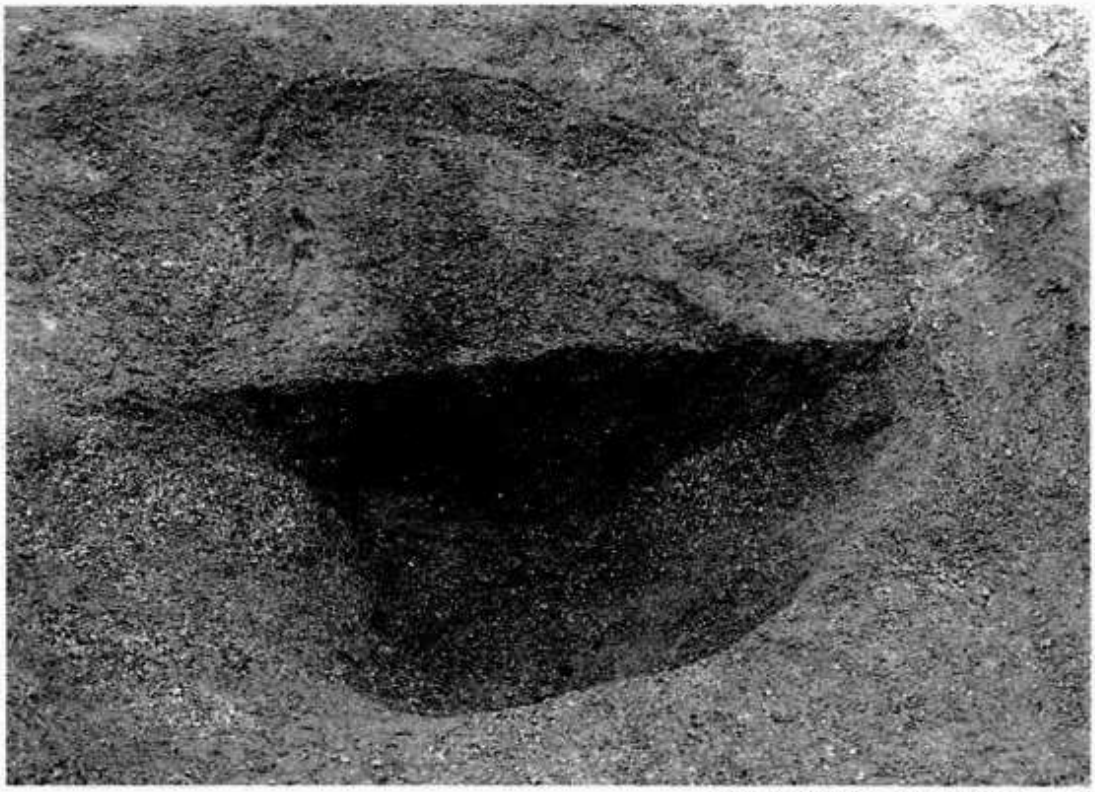
巨勢山463号墳　墓壙検出状況　南から

巨勢山463号墳　主体部１　遺物出土状態１

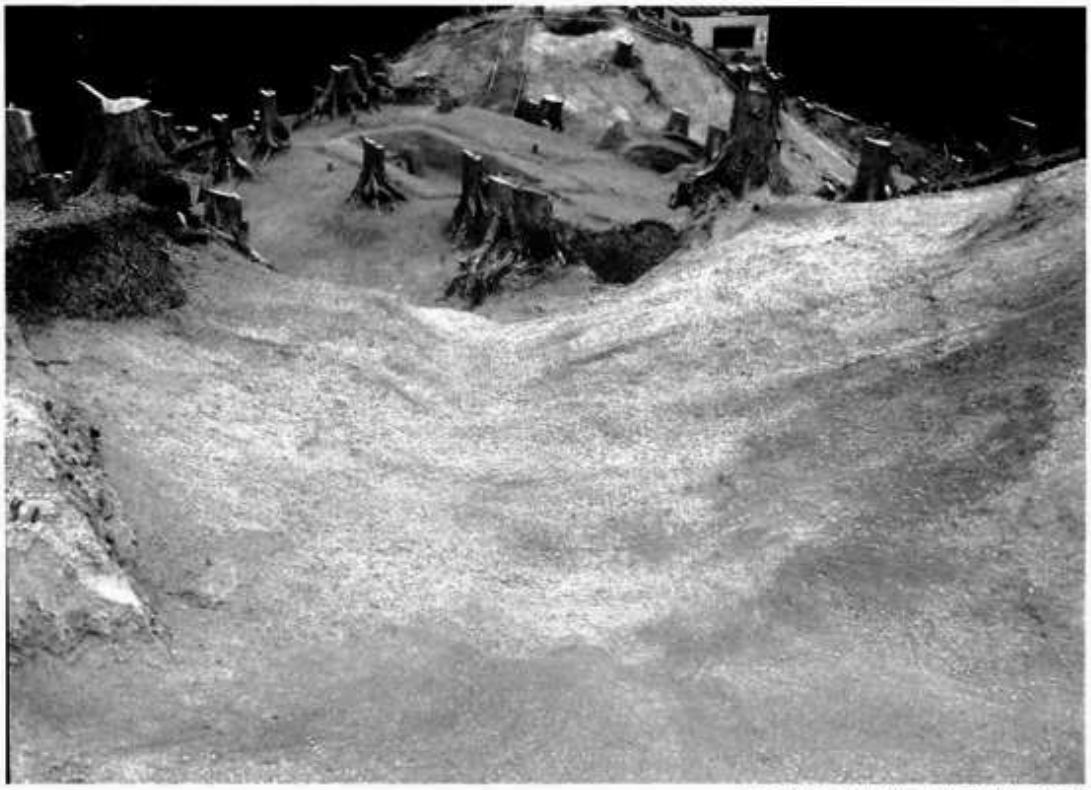
巨勢山463号墳　主体部１　遺物出土状態２

巨勢山463号墳　主体部２　北から

巨勢山463号墳　南周溝　西から



巨勢山463号墳　南周溝部　焼土坑



巨勢山463号墳　西裾部　墓道

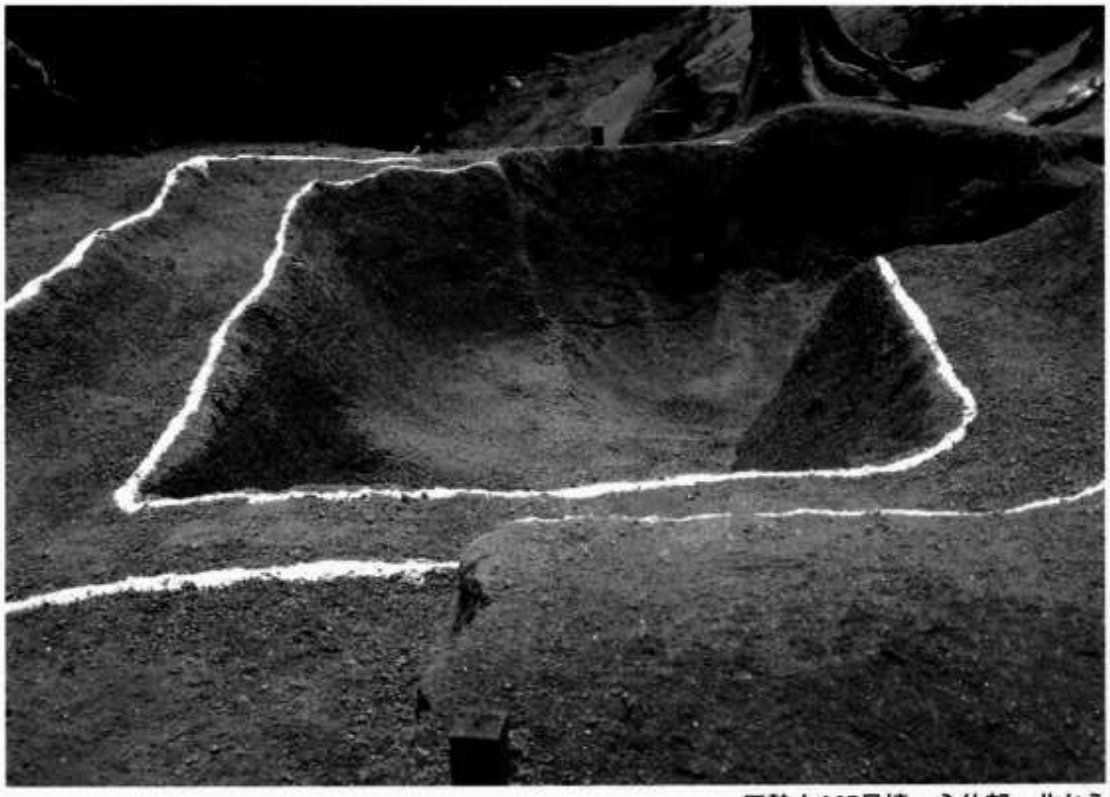
巨勢山464号墳　主体部１　東から

巨勢山464号墳　主体部１　遺物出土状態

図版18

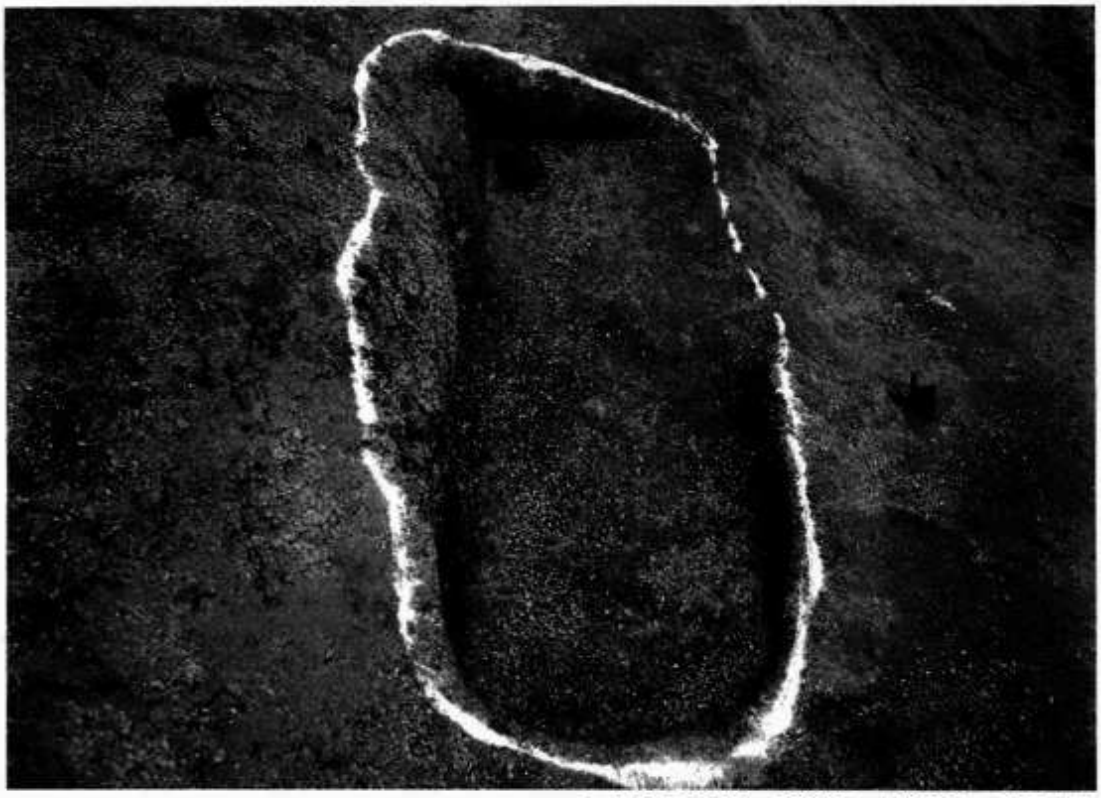
巨勢山464号墳　主体部２　南から

巨勢山464号墳　南周溝　東から



巨勢山465号墳　主体部　北から

巨勢山465号墳　東裾部　墓道



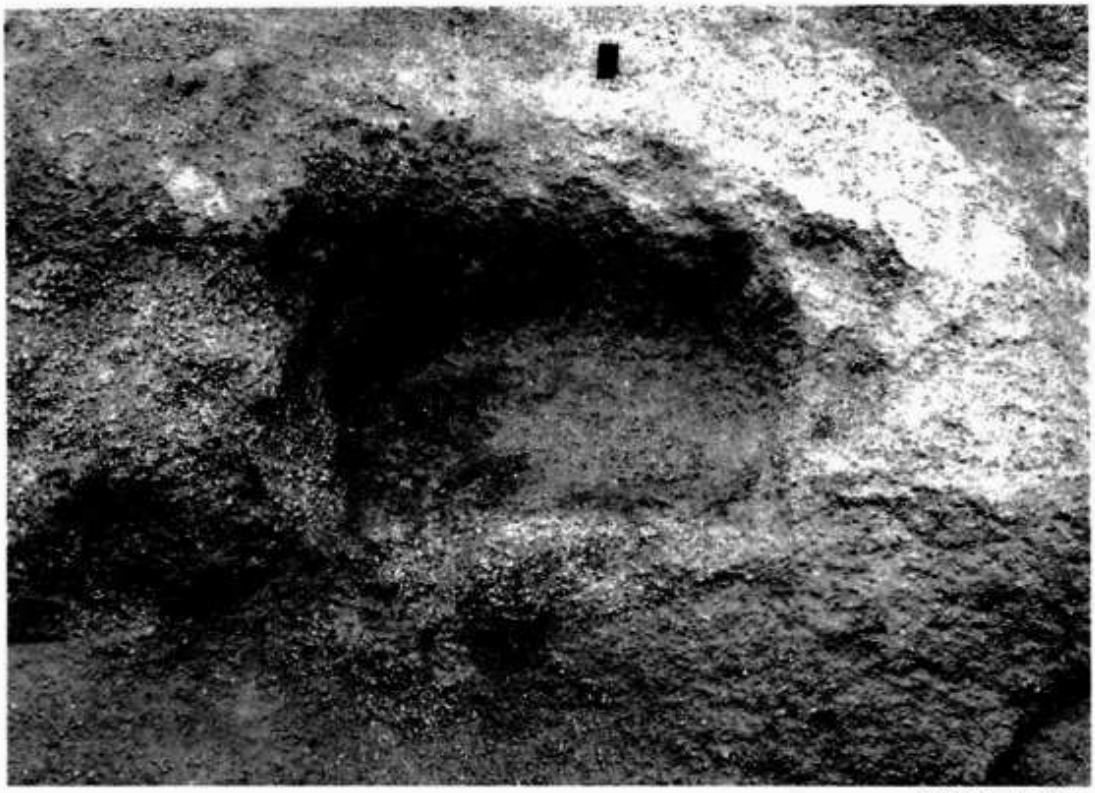
巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓１　南西から

巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓１　遺物出土状態

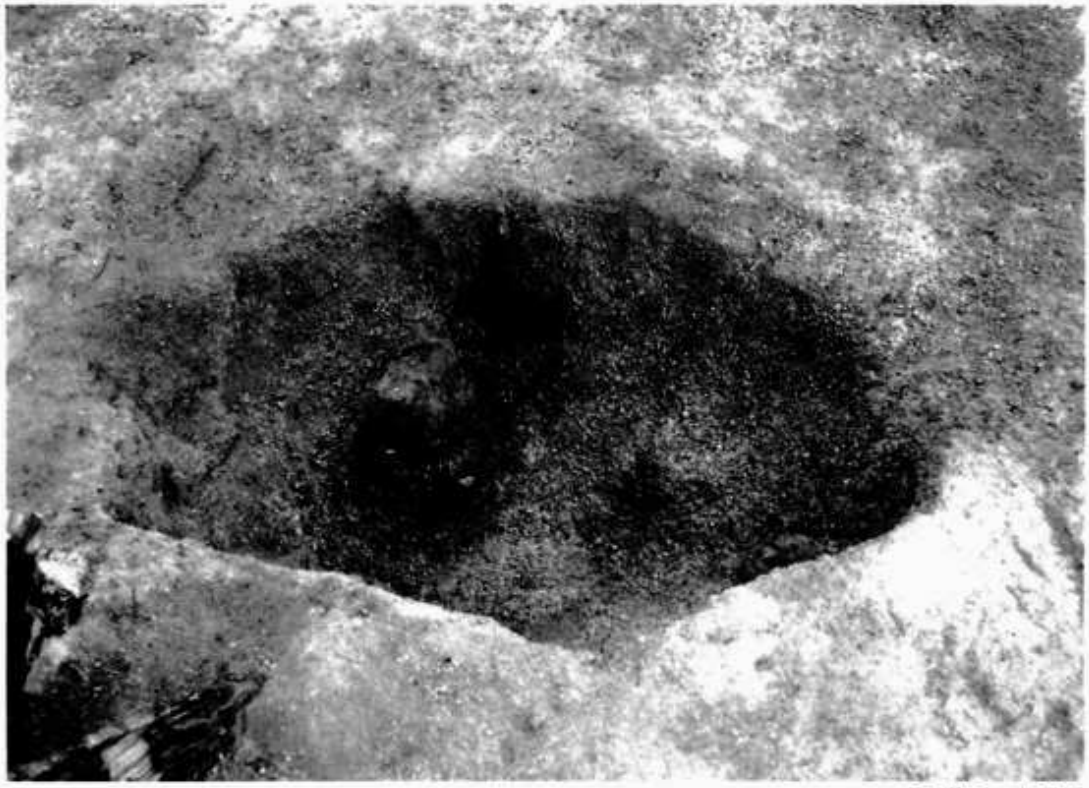
巨勢山466号墳　南周溝　東から

C地区　土坑1

図版22



C地区　土坑2



C地区　土坑3

C地区　土坑4

C地区　土坑5

巨勢山境谷遺跡　土坑1

巨勢山境谷遺跡　土器棺

5-1

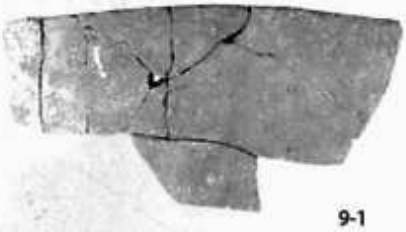
5-3

5-4

5-2

5-5

巨勢山456号墳　墳丘流土出土遺物（S.≒1/3）


9-1

9-2

9-3

9-4

9-5

9-6

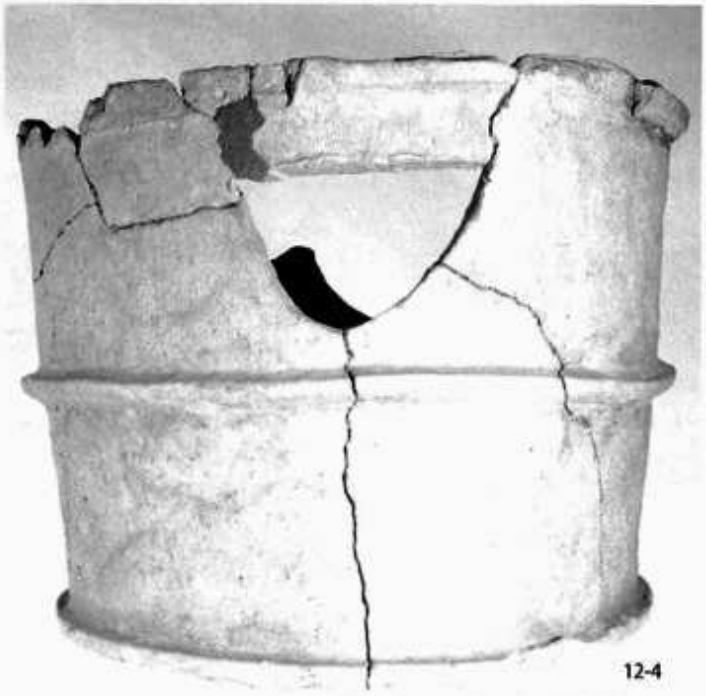
9-7

巨勢山458号墳　出土埴輪（S.≒1/4）

13-5

12-1

12-2



12-4

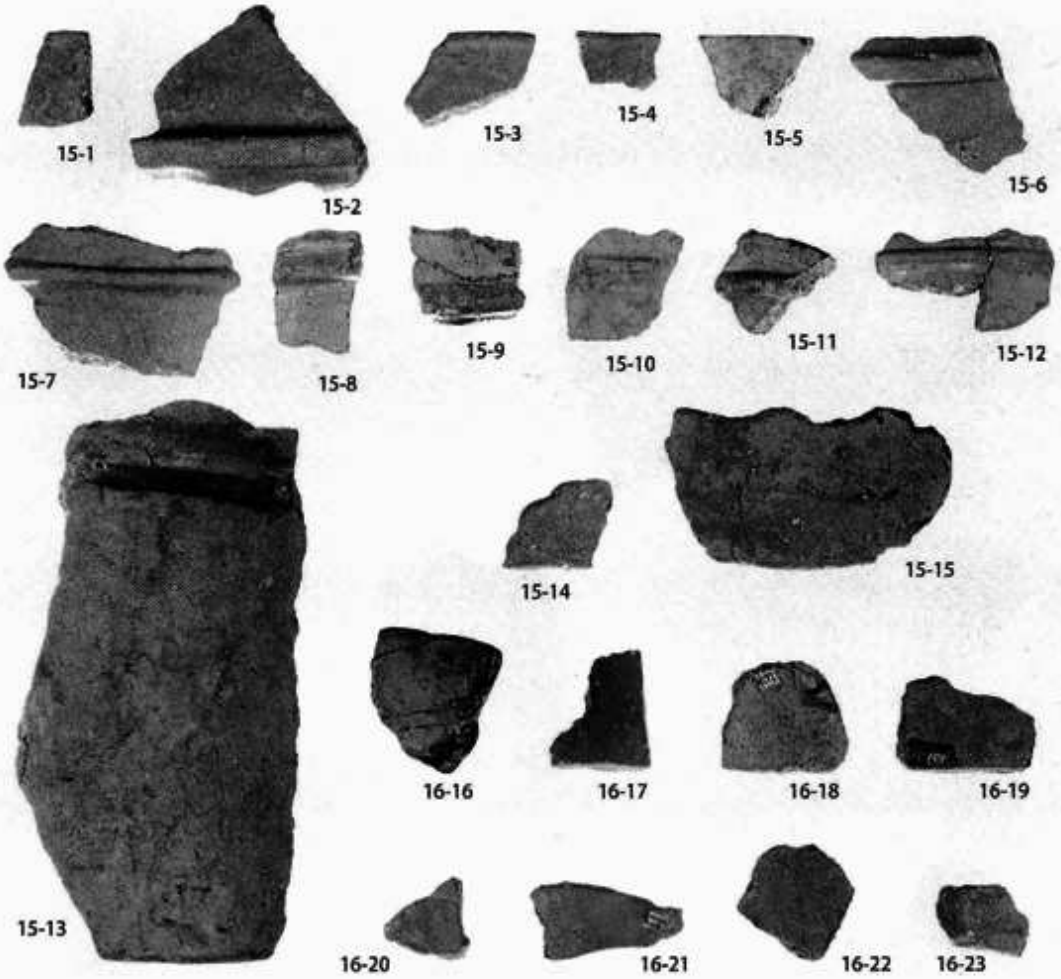
12-3

13-6

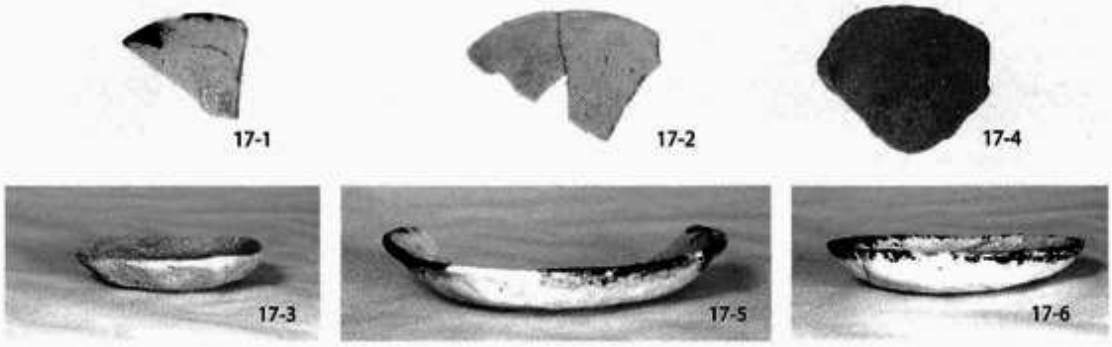
13-7

13-8　13-9

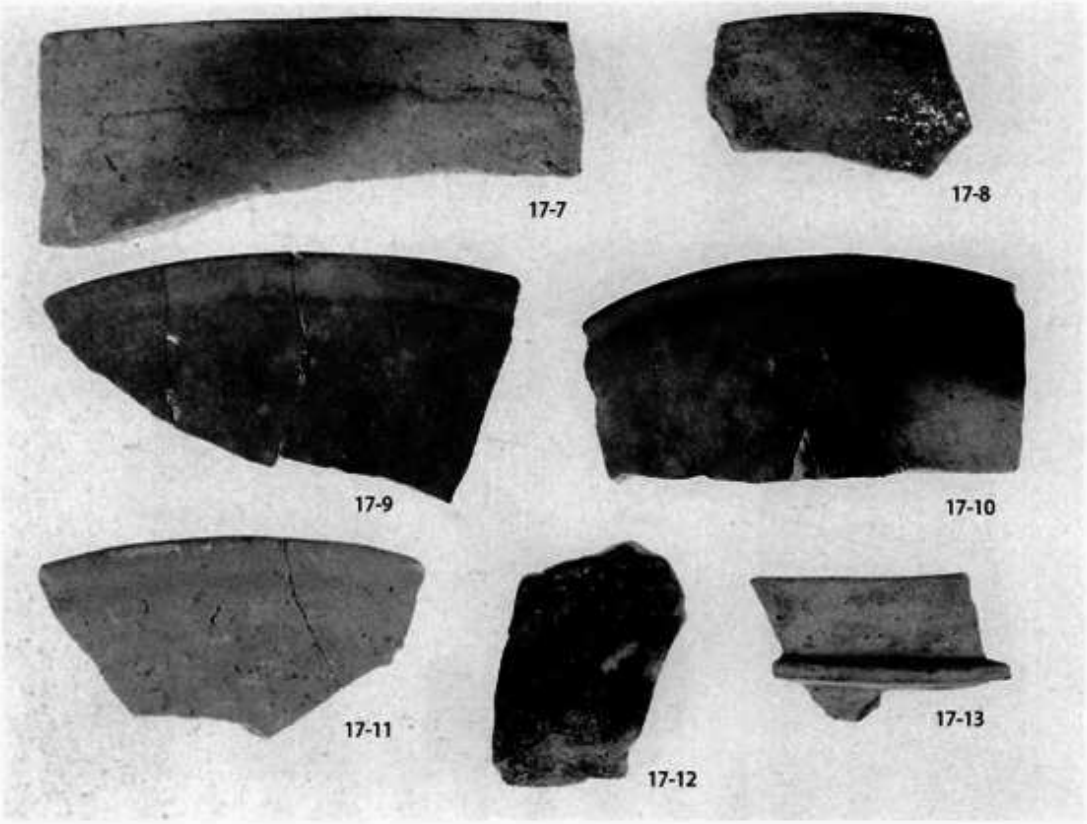
巨勢山461号墳　出土埴輪（S. ≒1/4）



巨勢山462号墳　出土埴輪（S.≒1/4）



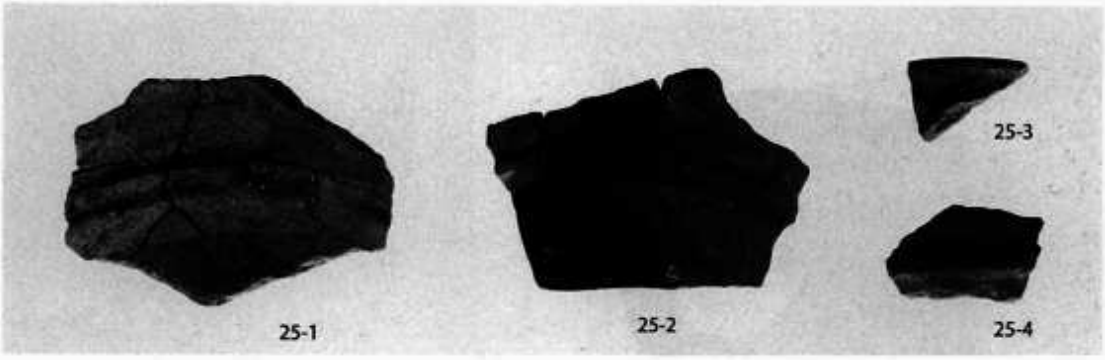
A地区　古墳時代以外の遺物１（S.≒1/3）

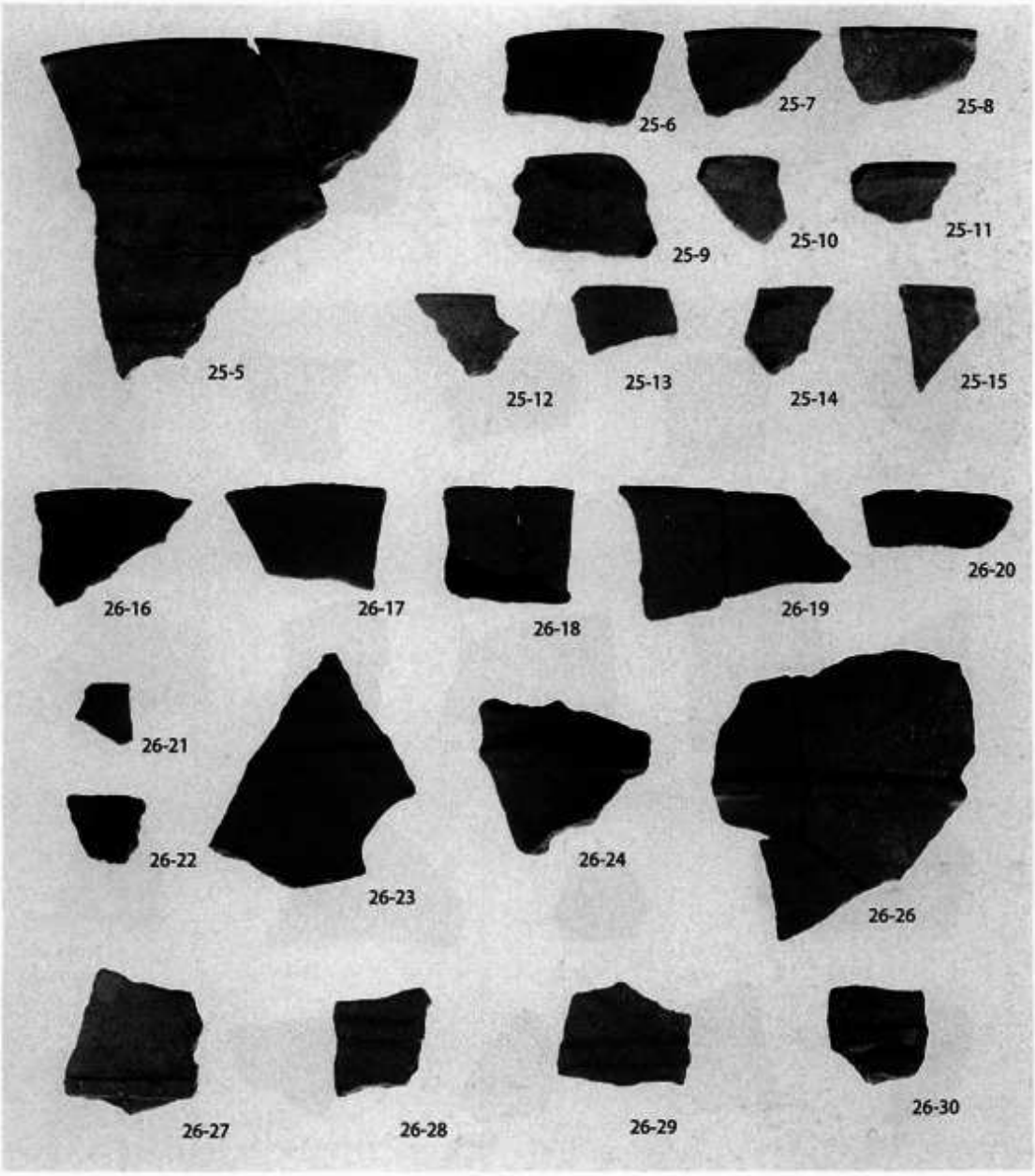


17-14

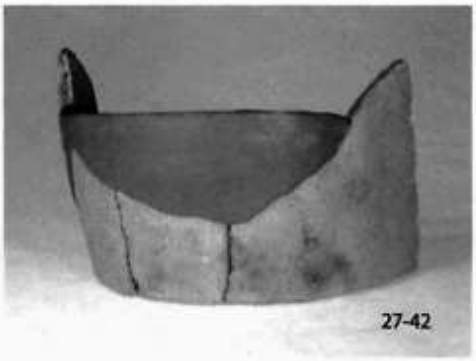
A地区　古墳時代以外の遺物２（S.≒1/3　17-14のみS.≒1/2）

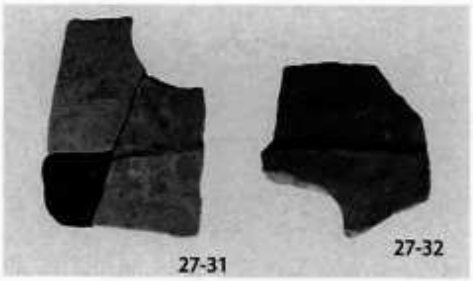
巨勢山459号墳　出土遺物（S.≒1/3）

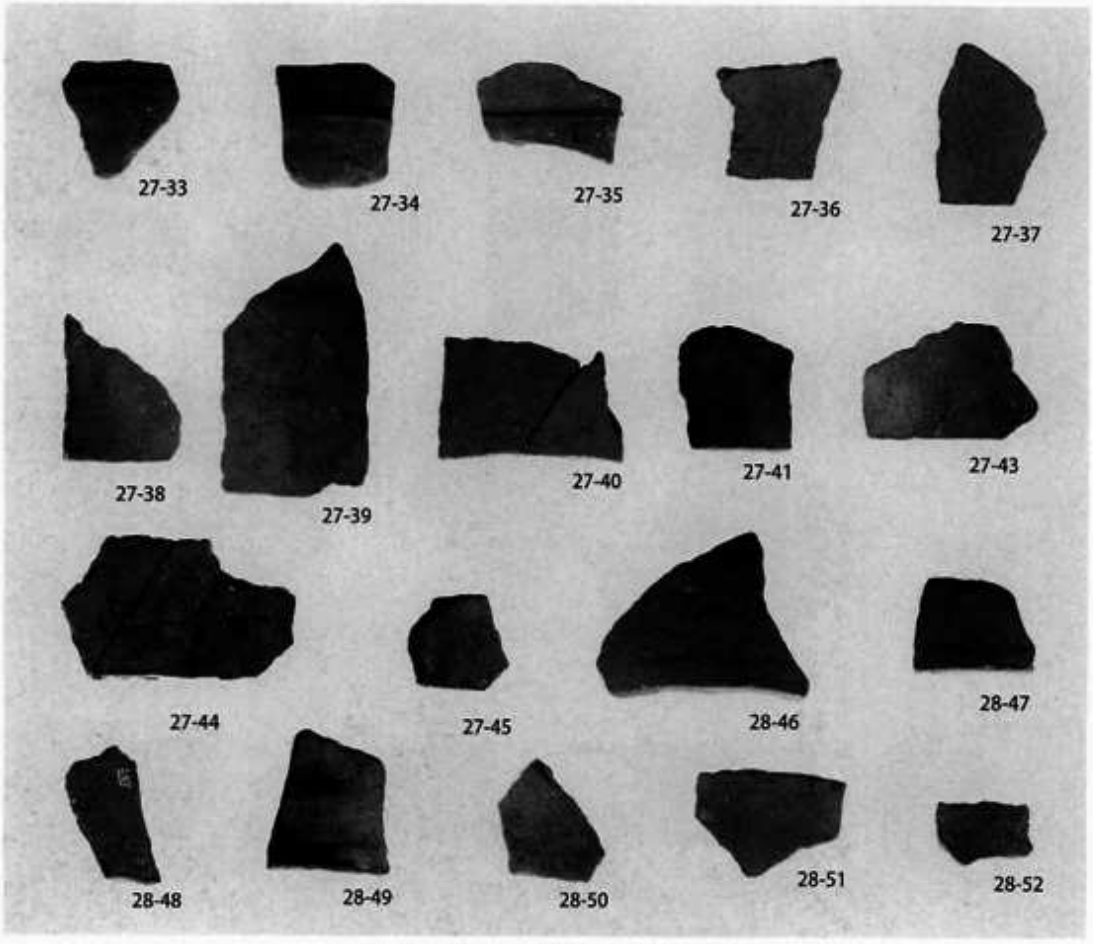




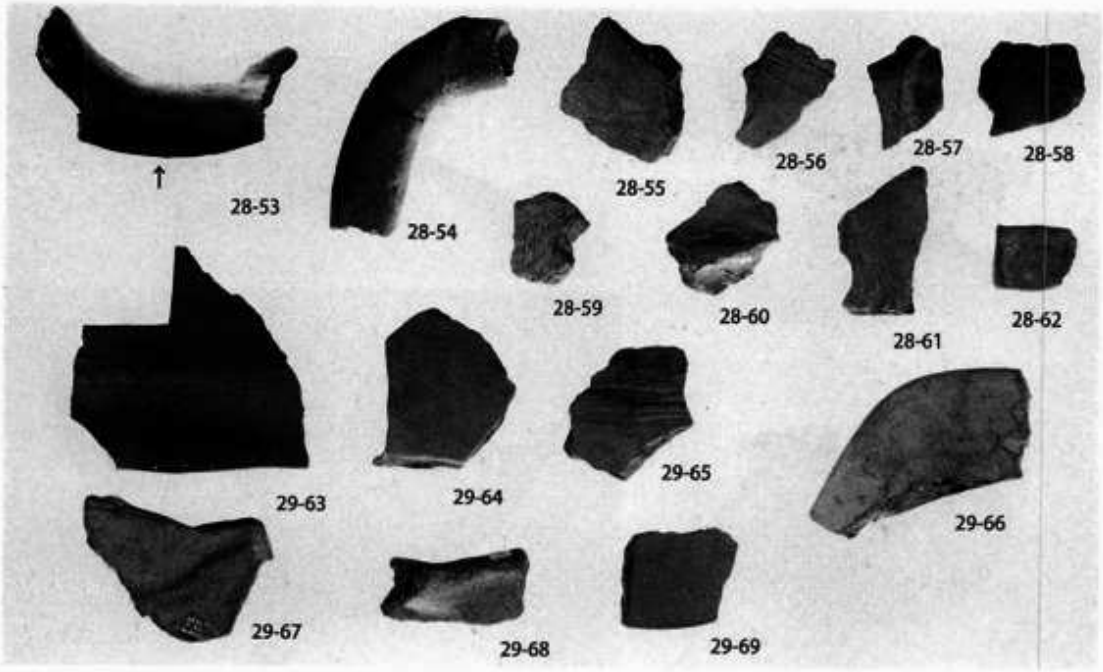
巨勢山460号墳　出土埴輪1（S.≒1/4）





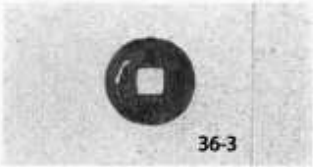


巨勢山460号墳　出土埴輪２（S.≒1/4）



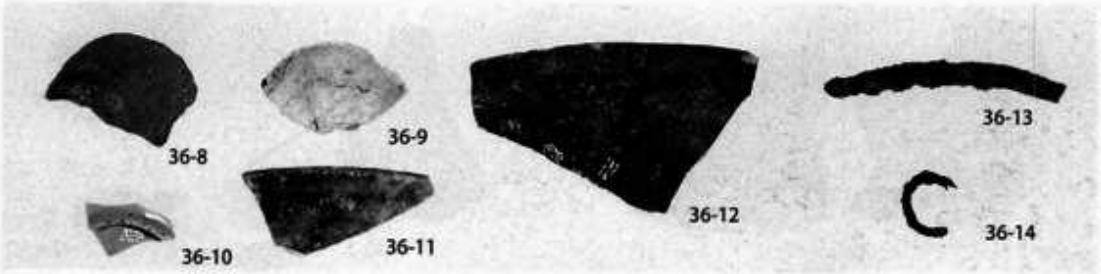
巨勢山460号墳　出土埴輪３（S.≒1/4）

B地区　土坑４東側　出土遺物（S.≒1/2）



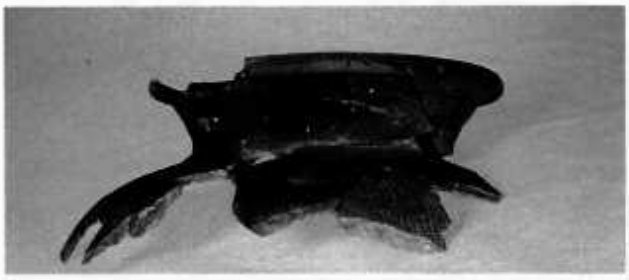
B地区　土坑７　出土遺物（S.≒1/2）

B地区　土坑７　出土遺物（S.≒1/4）



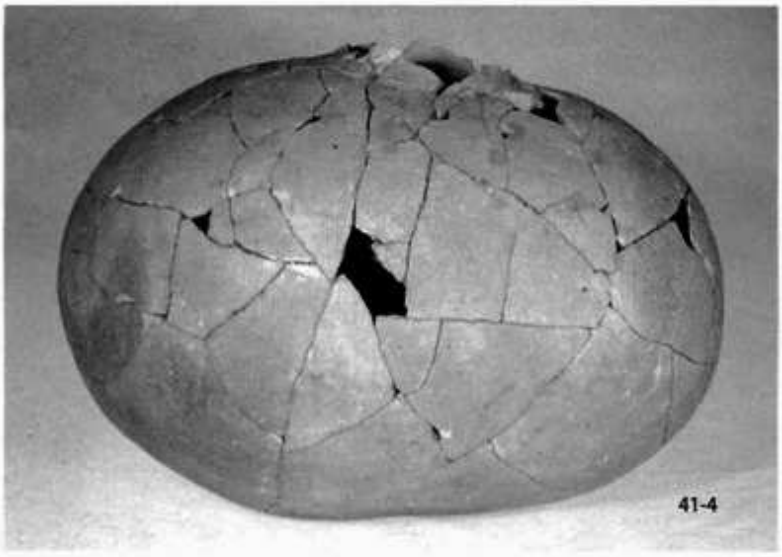
B地区　石組み遺構１　出土遺物（S.≒1/4）

41-1



41-2

41-3


41-4

巨勢山463号　墳墳頂部　出土遺物（1・2はS.≒1/3、3・4はS.≒1/4）

42-1

42-2

42-3

42-4

巨勢山463号墳　墳丘周辺　出土遺物（S.≒1/3）

46-1

46-2

46-3

46-4

47-5

47-6

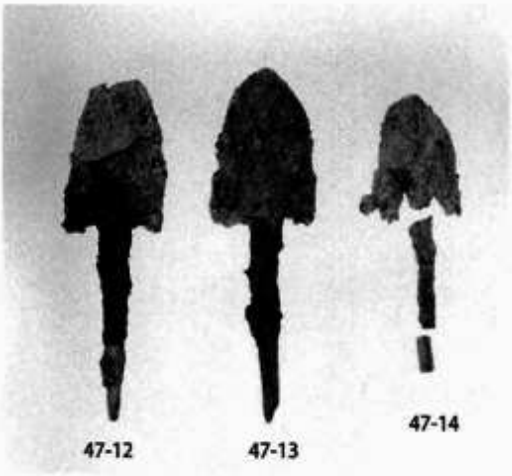
47-7

47-8

47-9

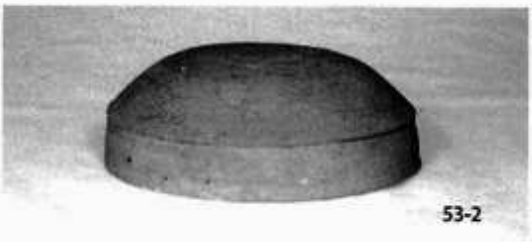
47-10

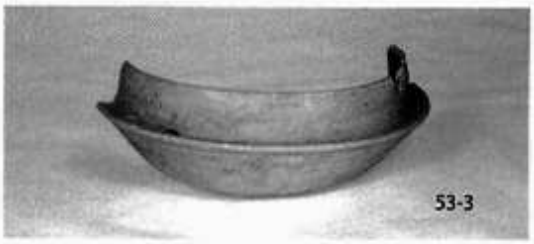
巨勢山463号墳　主体部１　出土遺物１（S.≒1/3）



巨勢山463号墳　主体部１　出土遺物２（S.≒1/3）

巨勢山464号墳　墳丘周辺出土遺物（S.≒1/3）

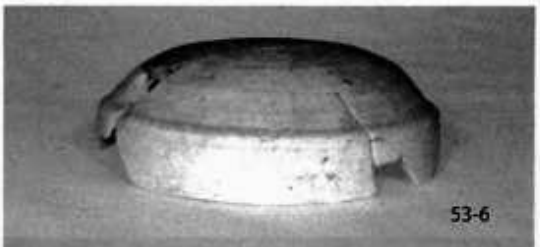




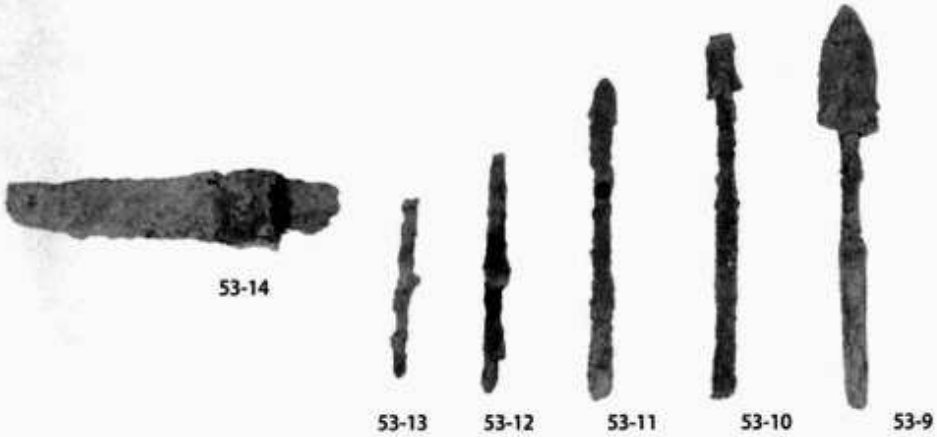
巨勢山464号墳　主体部１　出土遺物（その1）（S.≒1/3）

53-4

53-5


53-6

53-7



巨勢山464号墳　主体部１　出土遺物（その２）（S.≒1/3）

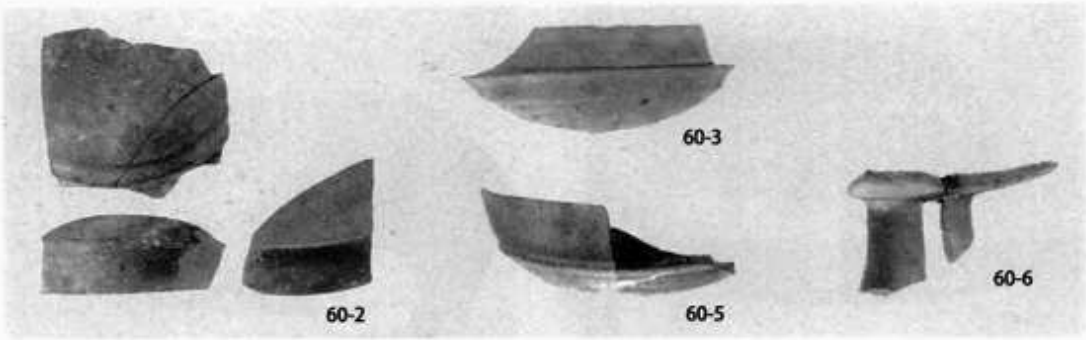
54-1

巨勢山464号墳　主体部２
出土遺物（S.≒1/3）

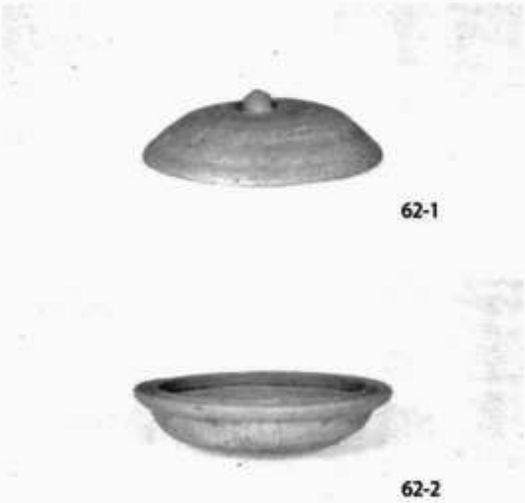
60-1

60-4

巨勢山465号墳　盗掘坑ほか　出土遺物１（S.≒1/3）

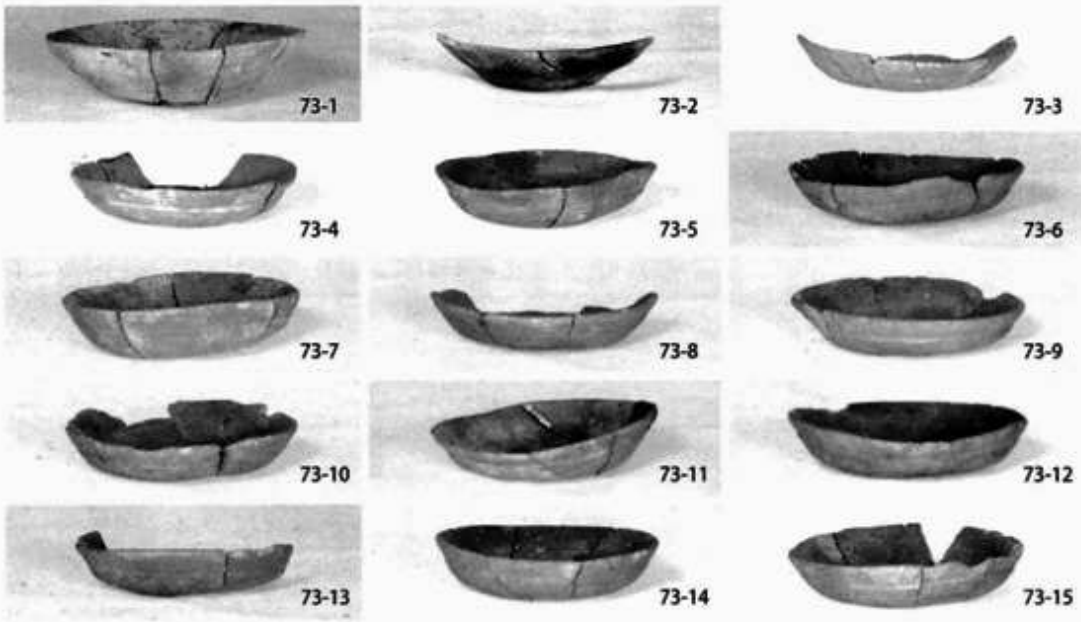


巨勢山465号墳　盗掘坑ほか　出土遺物２（S.≒1/3）

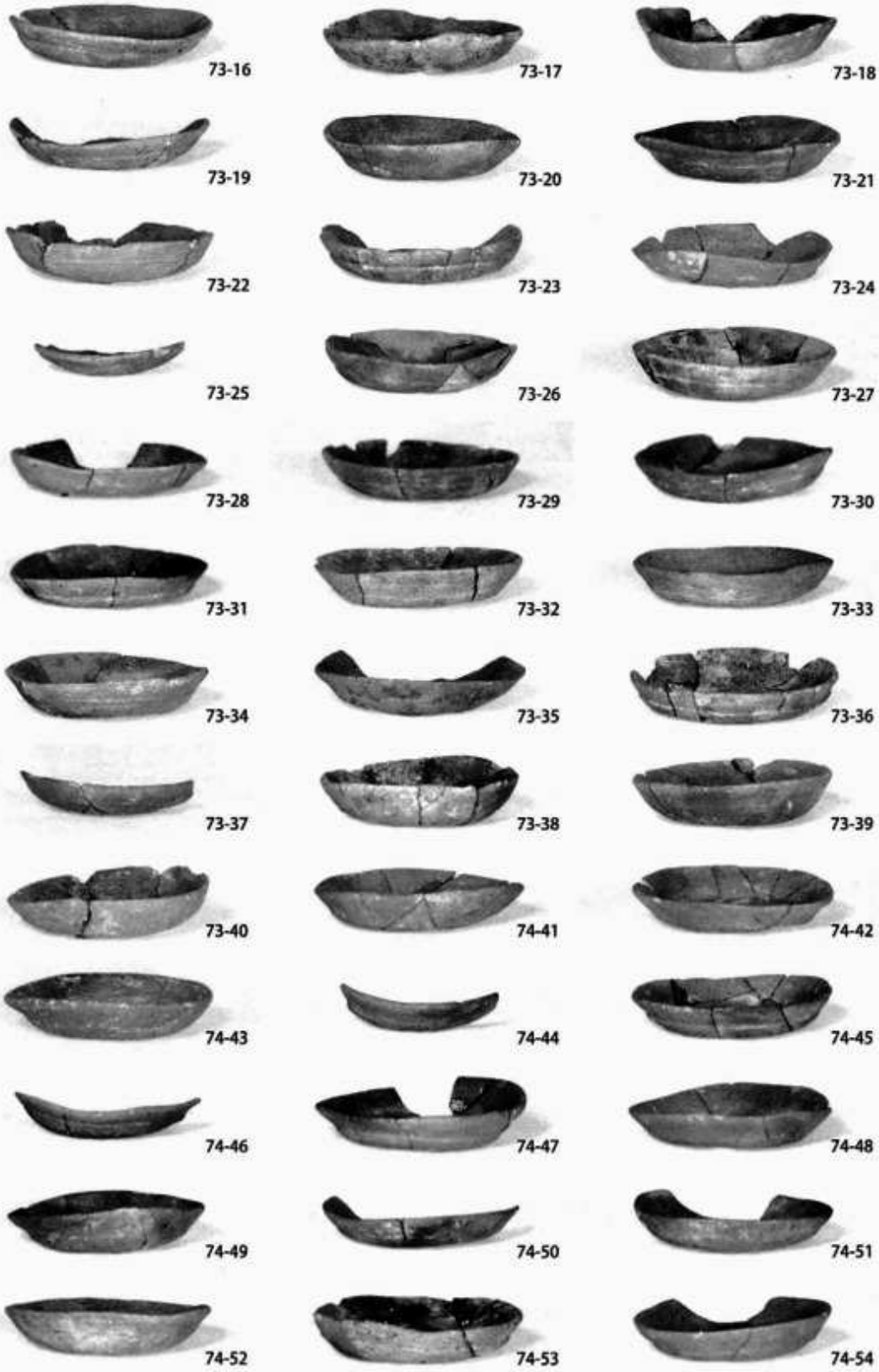


巨勢山465号墳　東裾部　土壙墓
出土遺物（S.≒1/3）

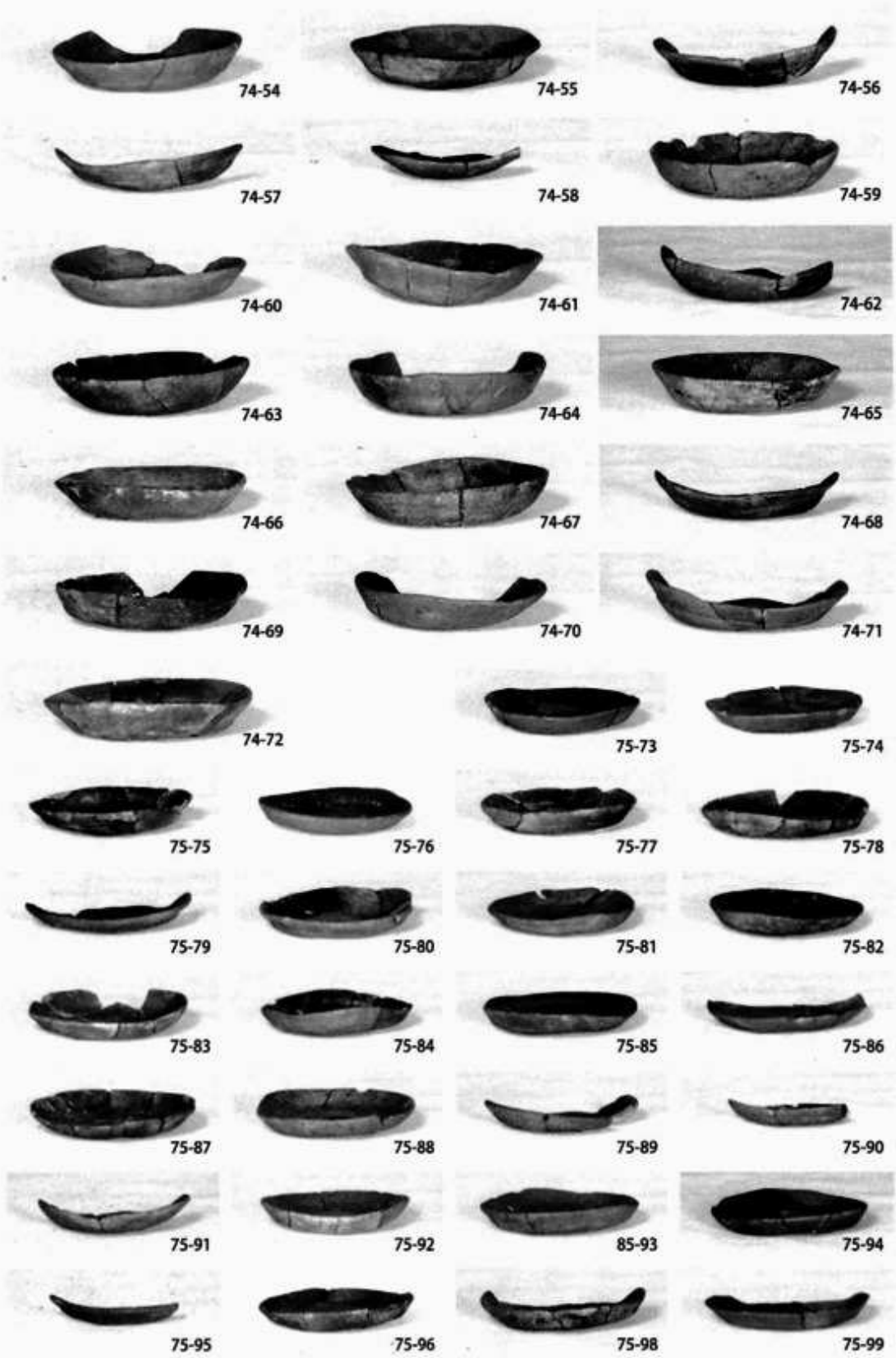
巨勢山466号墳　南周溝
出土遺物（S.≒1/3）



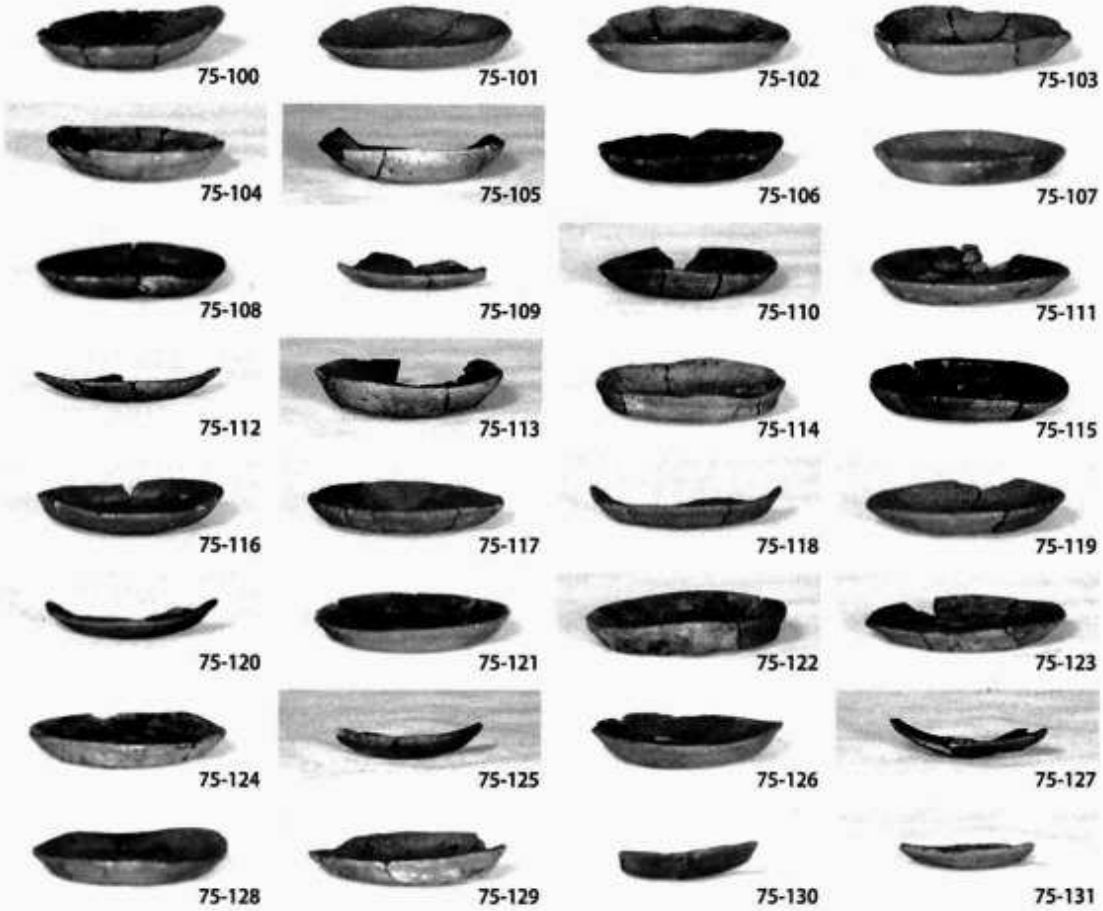
Ｃ地区　土坑１　出土遺物１（S.≒1/3）



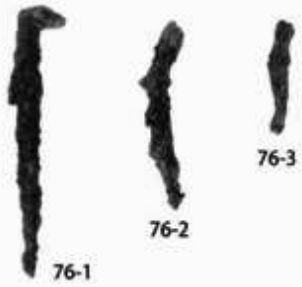
C地区　土坑1　出土遺物2（S.≒1/3）



C地区　土坑1　出土遺物3（S.≒1/3）



C地区　土坑1　出土遺物4（S.≒1/3）



C地区　土坑3　出土遺物
（S.≒1/3）

C地区　土坑4　出土遺物
（S.≒1/3）

C地区　土坑5
出土遺物（S.≒1/3）

巨勢山465号墳　南斜面流土　出土遺物（S.≒1/3）

81-4

81-5

81-8

81-9

81-10

81-11

81-16

82-46

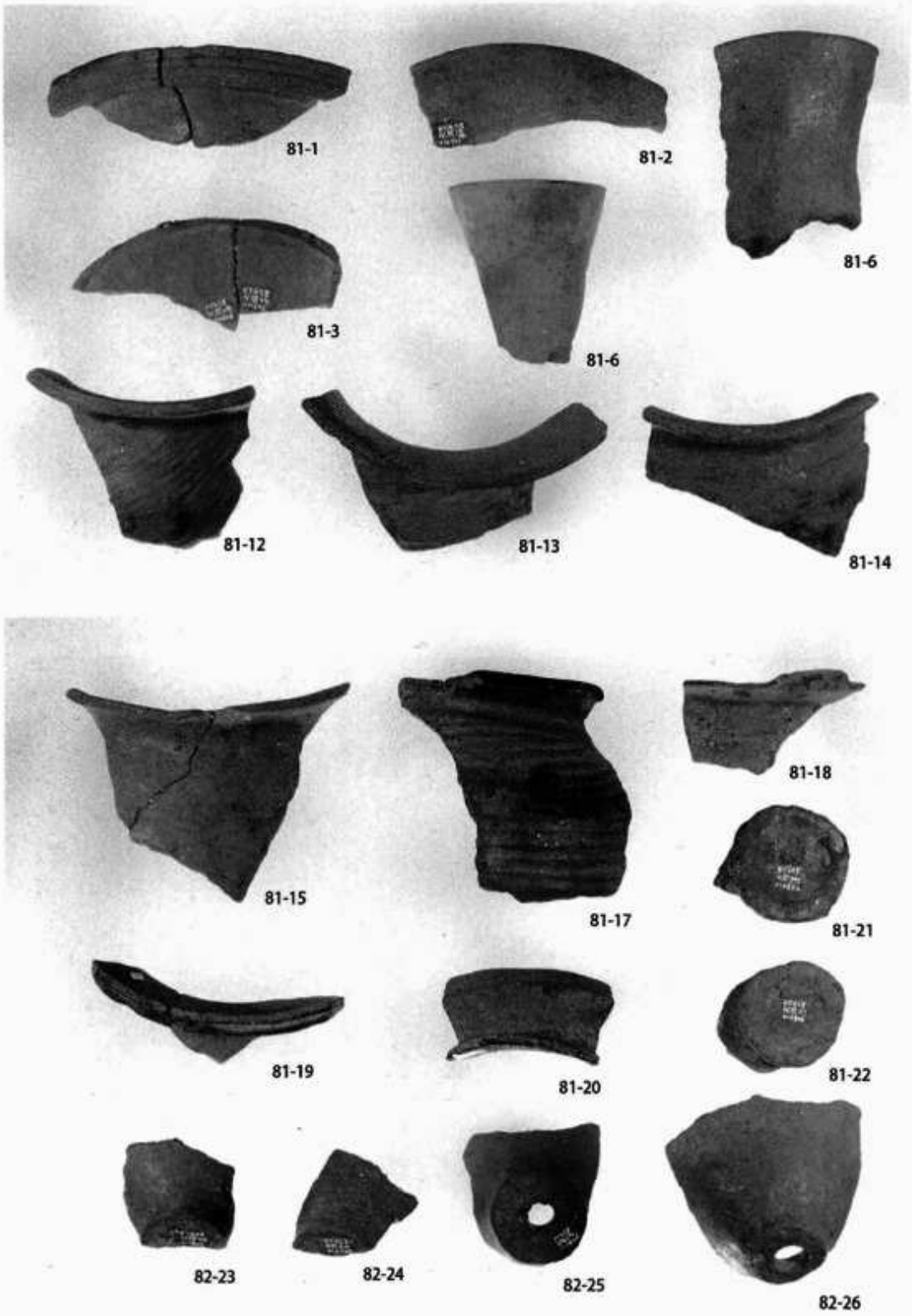
82-27

82-28

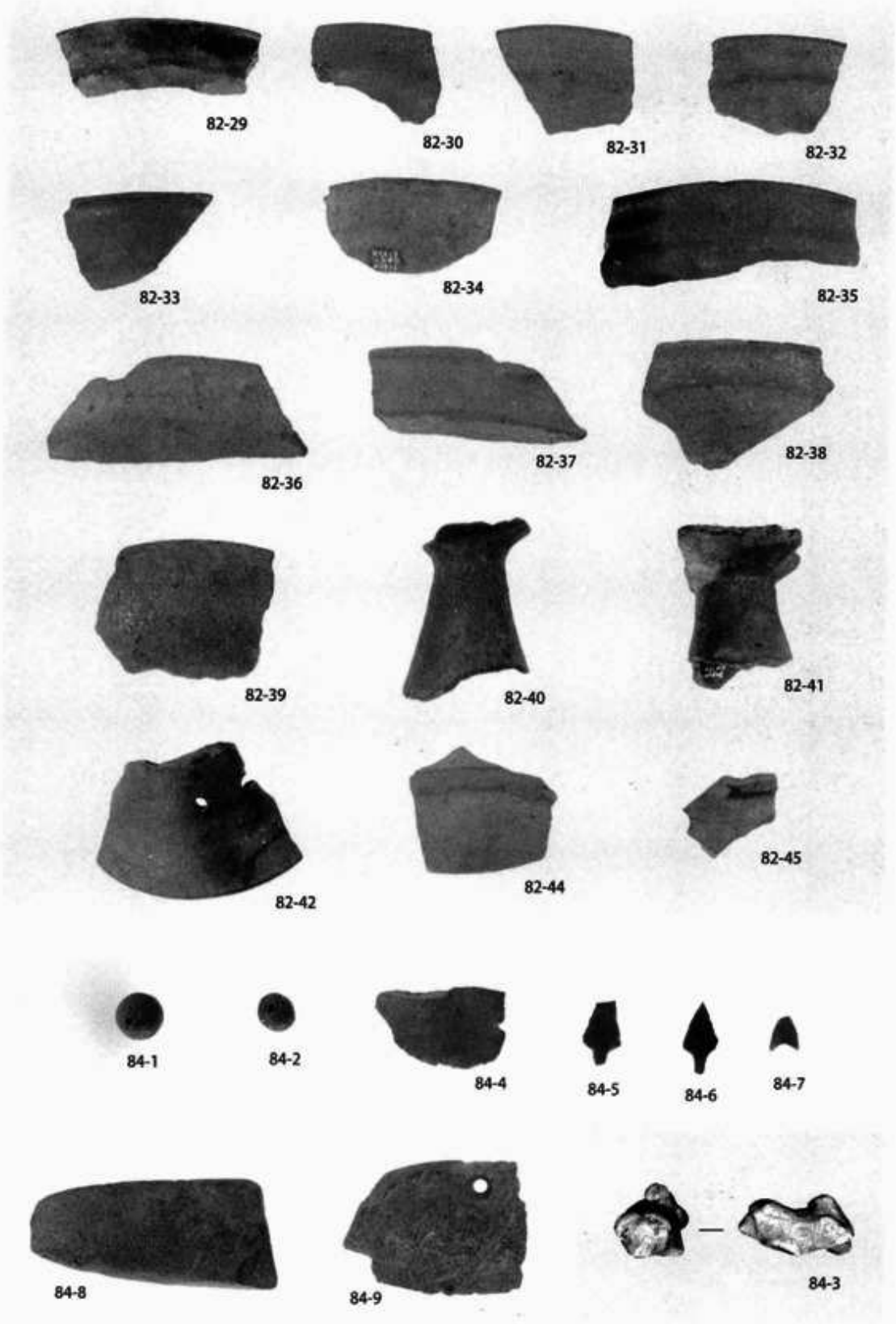
82-43

巨勢山境谷遺跡　出土遺物１（S.≒1/3）

巨勢山境谷遺跡　出土遺物２（S.≒1/4）



巨勢山境谷遺跡　出土遺物３（S.≒1/3）



巨勢山境谷遺跡　出土遺物４（S.≒1/3　84-3は1/2）

報告書抄録

ふりがな	こせやまこふんぐん6
書名	巨勢山古墳群 VI
副書名	
巻次	
シリーズ名	御所市文化財調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	木許　守・青木美香・東野茂樹
編集機関	御所市教育委員会
所在地	〒639-2298　奈良県御所市1－3　TEL 0745-62-3001
発行年月日	西暦　2007年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こせやま 巨勢山456～466号墳	ならごせ 奈良県御所市 むろ 大字室	29208		34度 26分 17秒	135度 43分 51秒	20010607 ～ 20011101 20020107 ～ 20020709	3,450 (古墳11基)	開発行為に伴う事前発掘調査
こせやまさかいだに 巨勢山境谷 遺跡	ならごせ 奈良県御所市 むろ 大字室	29208		34度 26分 17秒	135度 43分 51秒	20010607 ～ 20011101		開発行為に伴う事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
巨勢山456号墳	古墳	古墳時代後期		須恵器・鉄滓・鉄環	半壊状態での調査。
巨勢山457号墳	古墳	古墳時代			全壊に近い状態での調査。
巨勢山458号墳	古墳	古墳時代中期	周溝の一部	円筒埴輪片	境谷10号墳。副次的埋葬施設の横穴式石室は『御所市文化財調査報告書』第4集で既報告。
巨勢山459号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設（木棺直葬2基）	刀子・鉄鏃・鉄鎌・留金具・須恵器	
巨勢山460号墳	古墳	古墳時代中期	周溝の一部	円筒埴輪片・形象埴輪片	墳頂部削平状態での調査。
巨勢山461号墳	古墳	古墳時代中期	墳丘基底の一部	円筒埴輪片・形象埴輪片	半壊状態での調査。
巨勢山462号墳	古墳	古墳時代中期	周溝の一部	円筒埴輪片・形象埴輪片	全壊に近い状態での調査。
巨勢山463号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設（木棺直葬2基）	鉄鏃・刀子・鉄鎌・棒状鉄製品・須恵器・土師器	
巨勢山464号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設（木棺直葬2基）	鉄鏃・刀子・須恵器	
巨勢山465号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設（木棺直葬）	須恵器	
巨勢山466号墳	古墳	古墳時代後期		土師器	半壊状態での調査。
巨勢山境谷遺跡	集落	弥生時代後期	土坑・土器棺	弥生土器	高地性集落

奈良県御所市

巨勢山古墳群Ⅵ

御所市文化財調査報告書　第30集

平成19年(2007年) 1月31日

編集・発行　御所市教育委員会
御所市1－3
印　　刷　株式会社笹田印刷所
御所市今住16－3